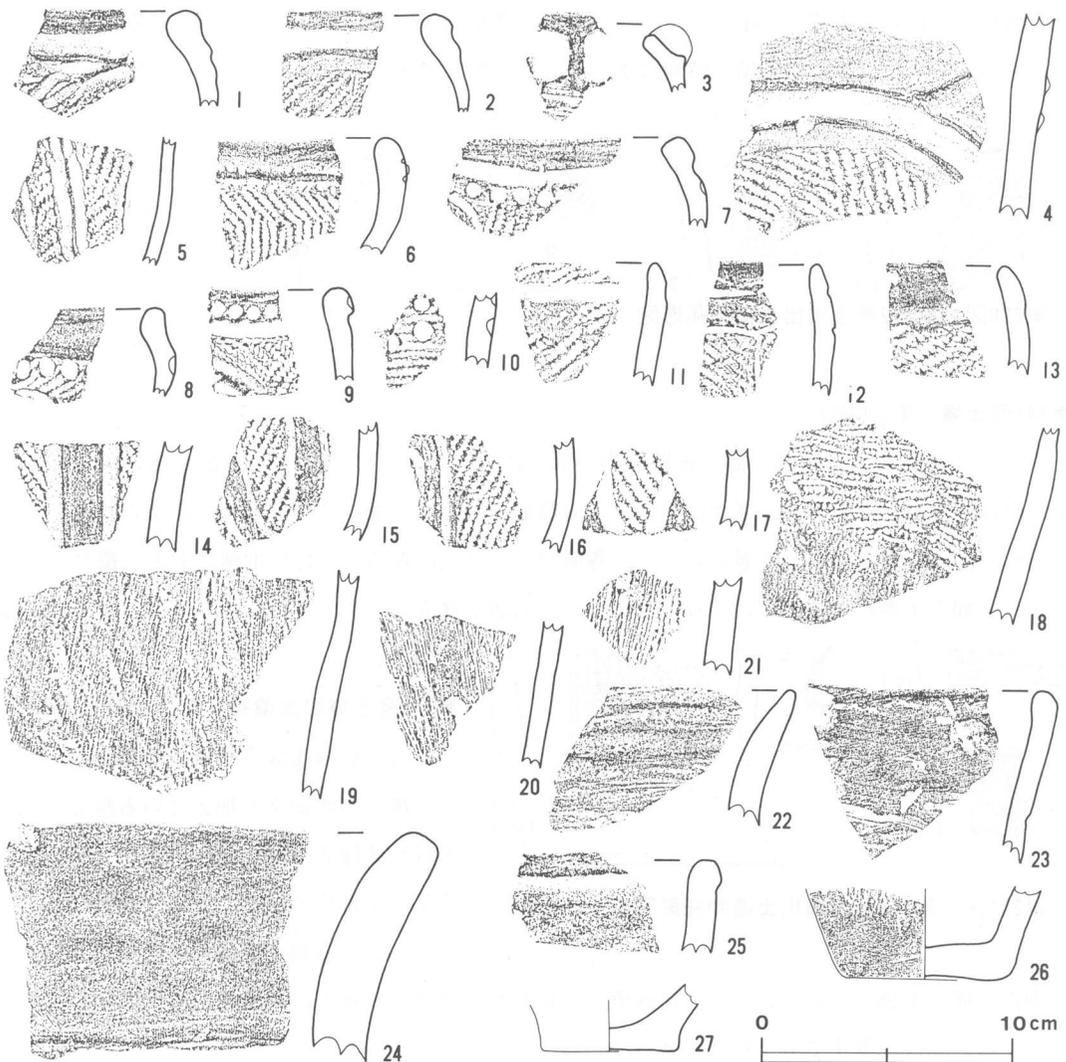


色調は褐色を呈し、一部に暗褐色を呈する部分もみられる。底径は6.8cmで、現存高は3.6cmである。

27は、本壙から出土した底部片で、外面に縦ナデが加えられている。底面の中央部には、径1.5cm程度の浅い凹みがある。内面は剥落が著しく、調整は不明である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が暗褐色を呈している。底径は5.5cmで、現存高は1.9cmである。

本壙からは166点と多くの土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。早期の条痕文系土器片が1点だけ混入している。したがって、本壙の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本壙からは、土器片錘3点、土製円板2点、有孔円板1点が出土している。



第229図 第135号土壙出土遺物実測図・拓影図

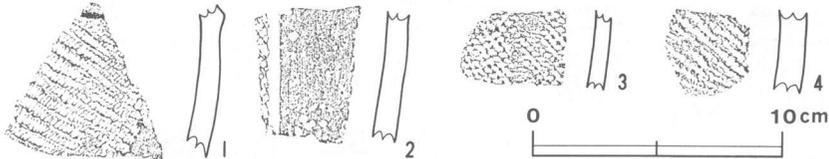
第142号土壌（第315図）

本土壌は、G5e₈区に確認され、遺跡の中央部に位置している。平面形は、径1.35mの不整円形で、南西側が外に張り出している。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、95cmである。覆土は、6層からなり、各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物は、縄文土器片が覆土から11点出土している。

第142号土壌出土土器（第230図1～4）

1～4は、いずれも胴部片である。1は、隆線による区画内に多条の縄文を施している。2は、幅の広い直線の磨消帯を有している。3・4は、縄文だけが付されている。

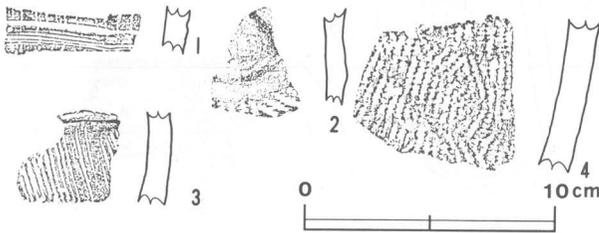
本壌からは11点の土器片が出土しており、早期の条痕文系土器片が1点混入している以外は中期のものである。以上から本壌の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。本壌からは土器片錘1点が出土している。



第230図 第142号土壌出土遺物拓影図

第144号土壌（第306図）

本土壌は、G5f₉区に確認され、遺跡の中央部に位置している。平面形は、径1.4mの円形である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で、同筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、130cmと深い土壌である。8層からなり、各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物の出土量は、縄文土器片が覆土から10点と少ないが、石皿が底面から2点出土している。



第144号土壌出土遺物（第231図）

1は、貝殻腹縁文が縦位に施文された上に横位の沈線文を加えている胴部片で、前期の興津式土器と思われる。2～4は、中期の胴部片である。2は、両側にナヅリを加えた隆線で曲線のモチーフを描き、区画内に縄文を施している。3は、口縁直下の破片で、横位の沈線下に条線文を縦位に粗く施文している。4は、厚手で縄文だけを施している。

第231図 第144号土壌出土遺物拓影図

本壌からは10点の土器片が出土しており、1以外はすべて中期のものである。また、本壌から

は2点の完形の石皿が出土しており注目される。以上から、本墳の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。

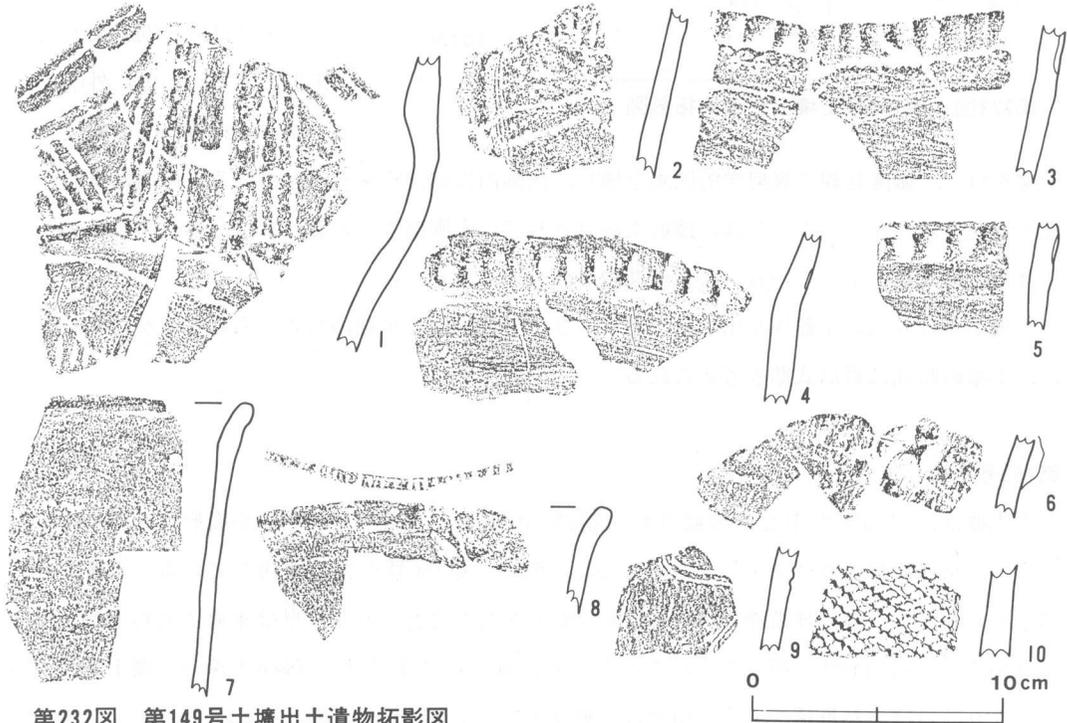
第149号土壌（第332図）

本土壌は、G5h₇区を中心に確認され、第32号住居跡の東側4mに位置している。平面形は、長径2.5m（推定）・短径1.4mの楕円形状である。長径方向は、N-50°-Eを指している。東及び北東側で第200号土壌と重複している。新旧関係は、土層などからみて本土壌が古いと考えられる。壁は垂直な立ち上がりを見せ、底面は平坦である。確認面からの深さは100mである。覆土は、9層からなり、レンズ状に堆積しているが締まりがない。中間の層には、貝層が分布している。遺物は、縄文土器片が覆土から33点出土している。

第149号土壌出土土器（第232図1～10）

1は、山形の波頂部を有する口縁部片で、波頂部からL字状、逆L字状を呈する隆帯が垂下し、口縁部文様帯を区画している。隆帯上には、軽く押圧が加えられている。口唇部には、1条の有節沈線文を付し、口縁部の区画内にも同様の手法により、有節沈線文を縦位、斜位に充填している。頸部は無文帯となり、以下にハマグリ類の腹縁による爪形文が施されている。口縁部内面には、稜を有している。胎土に長石粒、雲母片を多く含んでいる。器面全体に磨滅が進んでいる。

2は、断面三角形の隆帯を垂下させ、破片上端に爪形文を付している胴部片である。3～5は、



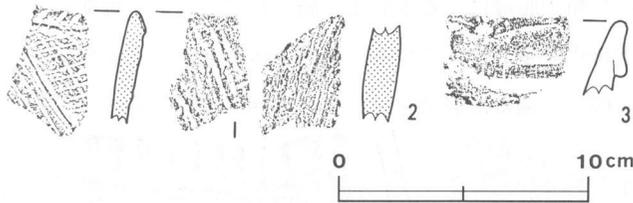
第232図 第149号土壌出土遺物拓影図

指圧による圧痕列を加えている胴部片で、4はくびれ部にあたり、横位の擦痕が認められ、3～5は同一個体と考えられる。6は、押圧を加えた太い隆線を垂下させている胴部片である。7・8は、器面が無文の口縁部片である。7は、全くの無文で、8は、口唇部に浅いキザミ目を付している。9は、有節沈線文を曲線的に施文する胴部片である。10は、加曽利E式期の胴部片で、複節縄文LRLが施文されている。

本壙からは33点の土器片が出土しており、10を除いてはすべて阿玉台Ib式期のものである。本壙からは土器片錘2点と、ハマグリ、シオフキ、オキシジミ、アカニシなどの貝類も出土している。以上の出土土器の様相から判断すれば、本壙の時期は阿玉台Ib式期と考えられる。

第150号土壙（第306図）

本土壙は、G5g₈区を中心に確認され、遺跡の中央部に位置している。平面形は、長径1.45m・短径1.2mの楕円形である。長径方向は、N-84°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は中央が皿状に凹んでいる。確認面からの深さは、72cmである。覆土は、6層からなり大部分が締まっている。遺物は、縄文土器片が覆土から6点出土している。



第233図 第150号土壙出土遺物拓影図

第150号土壙出土土器

（第233図1～3）

1・2は、早期の条痕文系土器である。1は、外削ぎ状を呈する口縁直下に斜位の刺

突文を付し、微隆起線で幾何学的区画を施し、区画内に細沈線を充填している。内面は貝殻条痕文が斜位に施されている。2は、擦痕文が付されている胴部片である。3は、無文の口縁部片で、折り返し口縁状を呈している。縄文前期後半のものと思われる。

本壙からは6点の土器片が出土しており、3以外はすべて早期のものである。1から判断すれば、本壙の時期は野島式期と考えられる。

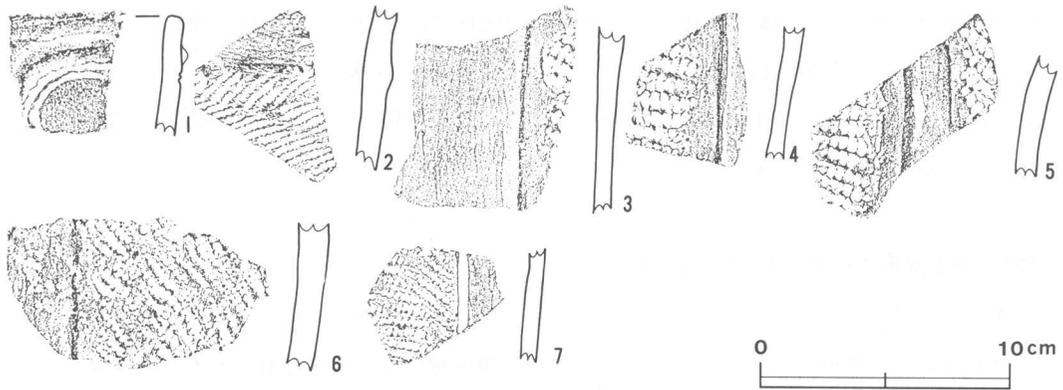
第153号土壙（第322図）

本土壙は、G5f₀区を中心に確認され、遺跡の中央部に位置している。平面形は、径1.76mの円形で、東西両側が外に突出している。なお、西側で第166号土壙と重複している。土層などの様子からみて本土壙の埋没後第166号土壙が築かれたと考えられる。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、108cmと深い。覆土は、8層からなり、ほぼ自然堆積である。遺物は、縄文土器片が覆土から45点出土している。

第153号土壌出土土器（第234図1～7）

1は、阿玉台式土器の口縁部片で、断面三角形の隆帯による楕円区画に沿って2条の有節沈線文を施している。2は、口辺部片で、1条の微隆線で口縁部無文帯を区画し、以下に縄文を施している。3～6は、胴部片で垂下する微隆線による区画外に縄文を施文している。3・4の隆線の断面は鋭い三角形を呈し、縄文も類似しているので両者は同一個体と考えられる。一方、5・6は、2と共に隆線の断面形はあまり鋭くない。7は、沈線による区画内に縄文を充填している胴部の小片である。

本墳からは45点の土器片が出土しており、その主体は加曽利EⅣ式期のものである。阿玉台式土器は1の1点だけで、混入と考えられる。以上から、本墳の時期は加曽利EⅣ式期と考えられる。



第234図 第153号土壌出土遺物拓影図

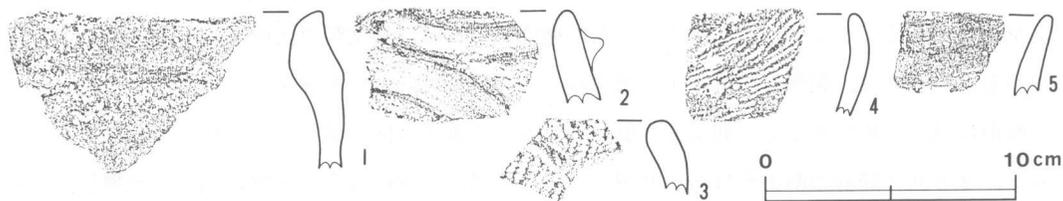
第155号土壌（第323図）

本土壌はG6h₁区に確認され、第33号住居跡の西側11mに位置している。平面形は、長径0.97m・短径0.73mの楕円形である。長径方向は、N-40°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、16cmで非常に浅い。覆土は、3層からなり、遺物は、縄文土器片が覆土から23点出土している。

第155号土壌出土土器（第235図1～5）

1は、厚手の口縁部片で、微隆線で文様を構成するものと思われる。胎土には長石、石英粒、雲母片などを含み、粗い。2は、貼付隆線により曲線的モチーフを描く口縁部片で、モチーフ内に縄文を施している。3は、縄文地文上に沈線文を施すものと思われる口縁部の小片である。4は、無節縄文が全面に施されている口縁部片であるが、磨滅が著しい。5は、無文の外反する口縁部片である。

本墳からは23点の土器片が出土しており、いずれも加曾利EⅣ式期の古い段階のものと思われる。したがって、本墳の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。



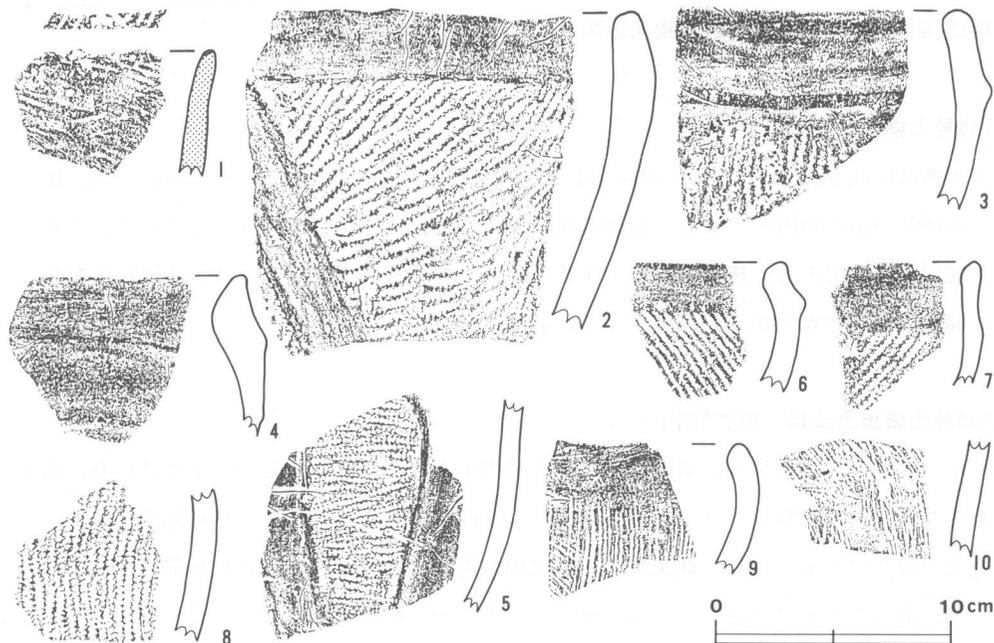
第235図 第155号土墳出土遺物拓影図

第156号土墳（第333図）

本土墳は、G6h₁区を中心に確認され、遺跡の中央部に位置している。平面形は、径1.8mの円形で、北側で第154号土墳と重複している。新旧関係は、不明である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは131mで、6区の中では4番めに深い土墳である。覆土は、9層からなり、ほぼ自然堆積をしている。遺物は、縄文土器片が覆土から58点出土している。

第156号土墳出土土器（第236図1～10）

1は、早期のもので、胎土に多量の繊維を含んでいる。口唇部に斜位のキザミ目を付し、器面には斜位の貝殻条痕文を施している。2～7は、微隆線による施文を有するもので、2～4・6



第236図 第156号土墳出土遺物拓影図

・7は口縁部片で、5は胴部片である。2は、幅の広い口縁部無文帯を有し、胴部に2本組の微隆線による磨消帯を施している。器面の整形が悪く、凹凸しており、器壁は厚く2.1cmである。

3・6・7は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文を施している。いずれも器面の磨滅が著しい。4は、厚手の口縁部片で、微隆線で文様を構成するものと思われる。第155号土壌の1と文様・胎土とも類似しており、同一個体かと思われる。5は、胴下半部片で、逆U字状の区画内に縄文が条が横走するように充填されている。8は、縄文だけの胴部片である。9・10は、条線文が付されている。9は、内湾する口縁部に無文帯を残し、以下に縦位の条線文を施している。器面に炭化物の付着が認められる。10は、胴部片で斜位・縦位に乱雑に施されている。

本墳からは58点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅣ式期の古い段階のものと思われる。早期のものは1だけで、混入と思われる。以上から、本墳の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。なお、本墳からは土製円板1点が出土している。

第162号土壌（第313図）

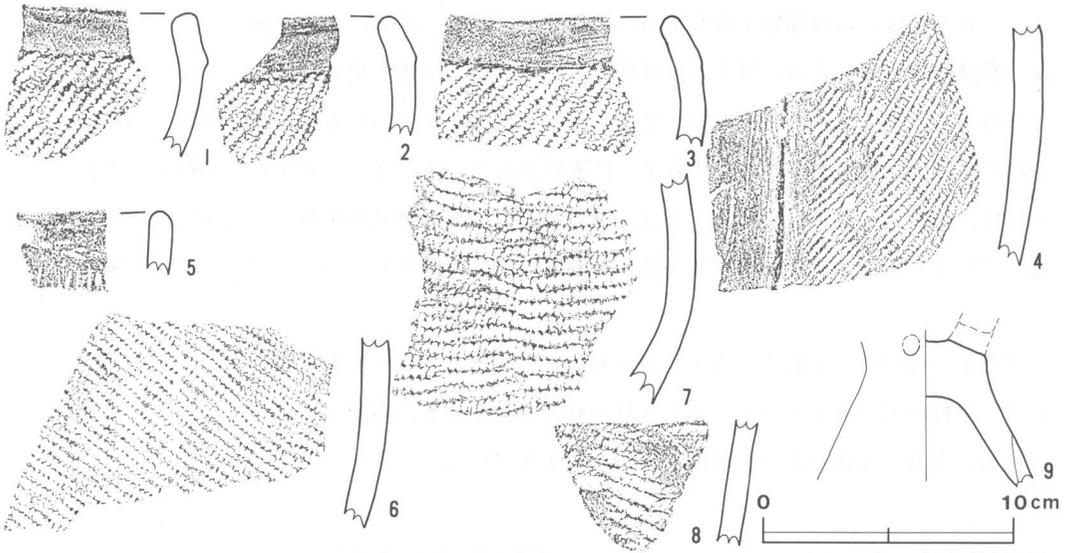
本土壌は、H5a_s区に確認され、第35号住居跡の北側5mに位置している。平面形は、径1.15mの円形で、北側で第203号土壌、東側で第202号土壌と重複している。新旧関係は、土層などからみて本土壌が第202号土壌よりも古いと考えられるが、第203号土壌とでは不明である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、90cmである。覆土は、8層からなり、攪乱されたように複雑な堆積をしている。遺物は、縄文土器片が覆土から70点出土している。

第162号土壌出土土器（第237図1～9）

1～4は、微隆線による文様を施しており、1～3は口縁部片、4は胴部片である。1～3は、同一個体で、口縁部無文帯を1条のナヅリによる微隆線で区画し、以下に縄文を施している。4は、垂下する微隆線で区画を施し、区画外に単節縄文と付加条縄文が併用されている。5は、口縁直下に無文帯を有し、縦位の条線文が施されている小片であるが、焼成が甘く、色調は灰白色を呈している。6～8は、縄文だけが施文されている胴部片である。6・7は単節、8は無節縄文である。

9は、本墳の覆土から出土した台付土器の台部片である。接合部には横から孔が4か所あけられている。全体的に磨滅しているが、外面は縦ナデが加えられている。内面は磨滅が進んでおり、調整方向は不明である。胎土には細砂や小石粒を含み、少しざらざらしている。焼成はやや不良で、色調は褐色を呈している。現存高は5.6cmである。

本壙からは70点の土器片が出土しており、加曾利EⅣ式期のものが主体を占めている。早期の条痕文土器片は2点にすぎない。以上から、本壙の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。



第237図 第162号土壙出土遺物実測図・拓影図

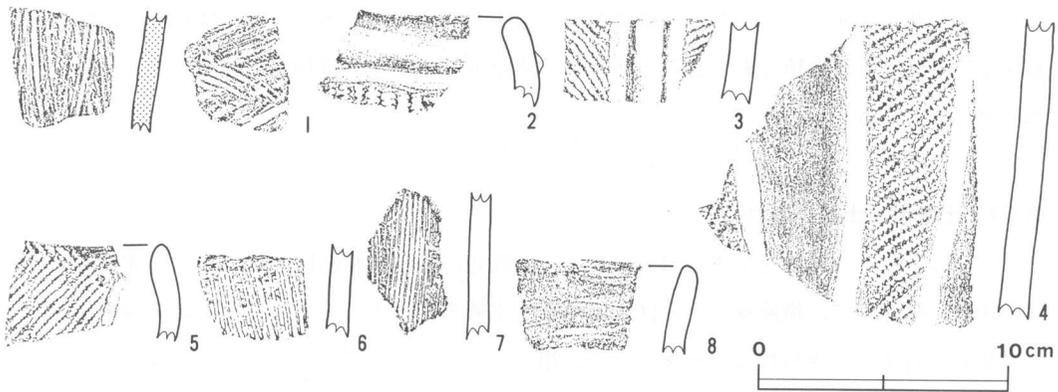
第164号土壙 (第306図)

本土壙は、G5j₇区を中心に確認され、第36号住居跡の北側4mに位置している。平面形は、径1.6mの円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、70cmである。覆土は、4層からなり、各層が交差しながらレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物は、縄文土器片が底面近くの覆土から27点出土している。

第164号土壙出土土器 (第238図1～8)

1は、早期の胴部片で、表裏面に貝殻条痕文を施文している。表面は縦位、裏面は斜位に付している。2は、口縁部文様帯を隆線で区画し、内部に縄文を施している。3は、2本組の隆線が垂下している胴部片で、炭化物が器面に付着している。4は、大形の胴部片で、直線の磨消帯を施している。胎土には長石や石英粒を多く含み、粗い、内面は剝落が著しい。5は、縄文地文上に沈線で文様を描く口縁部片である。縄文は、口縁直下の1列だけ横位回転で、以下は縦位回転である。6・7は、縦位の条線文だけの胴部片である。8は、やや外反する無文の口縁部片である。

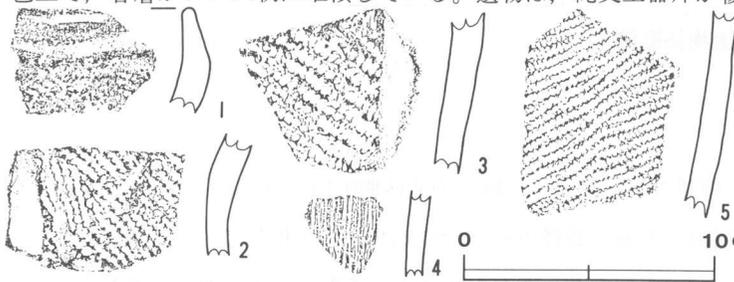
本壙からは27点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。早期のものは1の1点だけである。以上から、本壙の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。本壙からは有孔円板が2点出土している。



第238図 第164号土層出土遺物拓影図

第165号土層 (第332図)

本土層は、G5e₄区に確認され、第31号住居跡の北側11mに位置している。平面形は、径1.3mの円形で、南東側で第132号土層と重複している。新旧関係は、土層などの様子からみて本土層が、第132号土層よりも古いと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、120cmである。覆土は、3層からなり、すべて褐色土で、各層がレンズ状に堆積している。遺物は、縄文土器片が覆土から30点出土している。



第165号土層出土土器

(第239図1～5)

1は、口縁部無文帯をナゾリにより形成し、以下に縄文を施している。2・3

第239図 第165号土層出土遺物拓影図

は、隆線による区画を施している胴部片で、区画間に縄文を付している。4・5は、胴部片である。4は縦位の条線文、5は縄文だけを施文している。5は、胎土に長石、石英粒、雲母片などを多く含み、粗い。

本層からは30点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。したがって、本層の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。

第177号土層 (第313図)

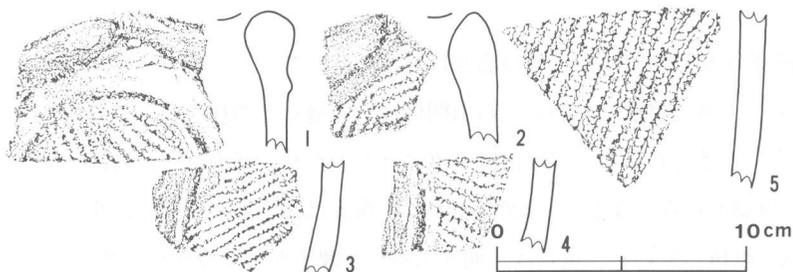
本土層は、H5a₀区に確認され、第34号住居跡の北側0.5mに位置している。平面形は、径1.06m (推定)の円形状と思われる。北側から東側にかけて第204号土層と重複している。新旧関係は、土層などの様子からみて第204号土層の埋没後、本土層が築かれたと考えられる。壁は垂直

に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、72cmである。覆土は6層からなり、上層の1～3層は自然堆積であるが、下層は不自然な堆積である。遺物は、縄文土器片が覆土から29点出土している。

第177号土壌出土土器（第240図1～5）

1・2は、緩い波状縁を呈する口縁部片で、微隆線による曲線的区画内に縄文を充填している。3・4は、胴部片で、微隆線による区画内に縄文を施している。5は、縄文だけの胴部片で、粘土に長石、石英粒と雲母片などを多く含み、粗い。

本壙からは29点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅣ式期のものが占めている。したがって、本壙の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。



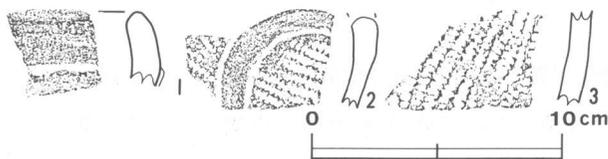
第240図 第177号土壌出土遺物拓影図

第178号土壌（第323図）

本土壌は、H5a₀区を中心に確認され、第34号住居跡の北西側0.5mに位置している。平面形は、長径1.35m・短径1.23mの楕円形である。長径方向は、N-75°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面には2か所のピットがあり、西から東にかけて坂状をなし凹凸が著しい。確認面からの深さは、最深部で50cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から14点出土している。

第178号土壌出土土器（第241図1～3）

1は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画している。2は、内湾する器形を呈する口辺部片で、破片上端部は、輪積み部から剥離している。2本組の細い沈線で逆U字状の区画を描き、区画内に縄文を施し、沈線間を磨消している。3は、縄文だけの胴部片である。



第241図 第178号土壌出土遺物拓影図

本壙からは14点の土器片が出土しているが、型式的特徴に乏しい破片が多

く時期判定がむずかしいが、1・2の微隆線および細い沈線区画から判断すれば、加曾利EⅣ式期の古い段階のものと思われる。したがって、本墳の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。

第179号土壌（第323図）

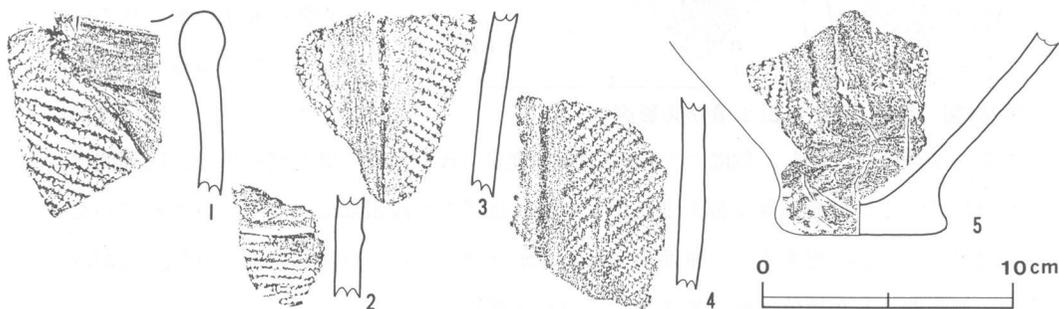
本土壌は、H5a₉区に確認され、第34号住居跡の西側2mに位置している。平面形は、長径1.63m・短径1.06mの楕円形である。長径方向は、N-72°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は緩やかに起伏している。確認面からの深さは、20cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から42点出土している。

第179号土壌出土土器（第242図1～5）

1～4は、微隆線による施文が主となるもので、1は口縁部片、2は口辺部片、3・4は胴部片である。1は、緩い波状を呈する口縁部片で、曲線的区画内に縄文を施している。2は、横位のナゾリによる微隆線で口縁部無文帯を区画し、以下に単節縄文LRを斜位回転で施文している。3・4は、垂下する微隆線の間に縄文を加えている。

5は、本墳の覆土から出土した胴下半部から底部にかけての破片である。外面に微隆線が垂下し、区画間に単節縄文RLが充填されている。底面近くは横ナデにより調整されているが、粗い。内面は縦ナデが加えられている。底部は突出している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が黄褐色で、内面が褐色を呈している。底径は6.8cmで、現存高は7.7cmである。

本墳からは42点の土器片が出土しており、そのほとんどが加曾利EⅣ式期のものである。したがって、本墳の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。

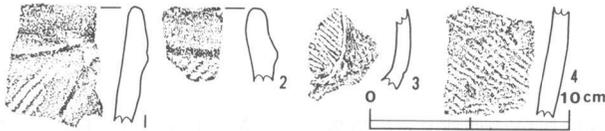


第242図 第179号土壌出土遺物実測図・拓影図

第180号土壌（第323図）

本土壌は、H5a₉区を中心に確認され、第34号住居跡の西側2mに位置している。平面形は、長径1.17m・短径0.96mの楕円形である。長径方向は、N-72°-Wを指している。壁は外傾して

立ち上がり、底面はやや凹凸している。確認面からの深さは、21cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から10点出土している。



第243図 第180号土壌出土遺物拓影図

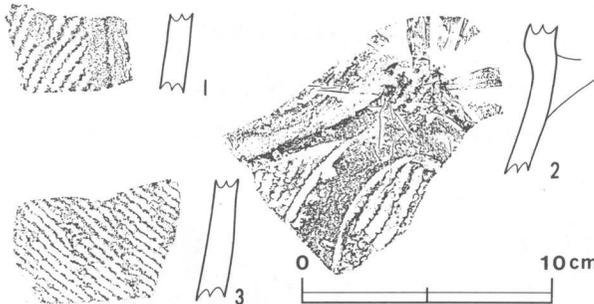
第180号土壌出土土器 (第243図1~4)

1・2は、微隆線で曲線的モチーフを構成し、モチーフ間に縄文を施している口縁部片である。1の胎土には長石、石英粒を含んでいる。2は、器面が磨滅している。3は、薄手で小形土器の胴部片で、細い沈線でU字状の区画が施され、区画内に縄文が付されている。4は、無節縄文が全面に施されている胴部片である。

本壙からは10点の土器片が出土しており、いずれも加曾利E IV式期のものである。したがって本壙の時期は加曾利E IV式期と考えられる。

第181号土壌 (第307図)

本土壌は、H5b₈区に確認され、第35号住居跡の北東側4mに位置している。平面形は、径1.55mの円形である。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、23cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から15点出土している。



第244図 第181号土壌出土遺物拓影図

第181号土壌出土土器

(第244図1~3)

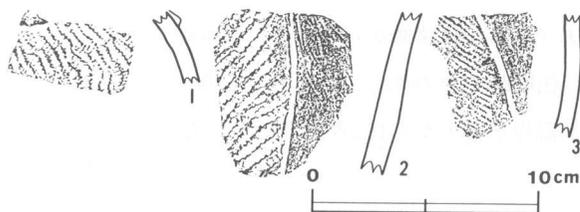
1は、胴部の小片で、微隆線が垂下し、区画間に縄文が施されている。2は、波状を呈する口縁部片であるが、波頂部を欠損している。口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、胴部に2本組の沈線で逆U字状を呈する磨消帯を施し、区画間には縄文を充填している。口縁部無文帯をまたぐように橋状把手が波頂部に向かって付されていたが、途中で欠損している。把手上には単節縄文RLが施されている。口縁部内面には鋭い稜がみられる。3は、無節縄文Lが縦位回転で施文されている胴部片である。

本壙からは15点の土器片が出土しており、その主体は加曾利E IV式期のものである。したがって、本壙の時期は加曾利E IV式期と考えられる。

第182号土壌 (第324図)

本土壌は、H5b₉区に確認され、第34号住居跡の西側2mに位置している。平面形は、長軸1.35m

・短軸0.65mの不整形である。長軸方向は、N-12°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。北側は20cm差で2段に掘りこまれている。確認面からの深さは、最深部で41cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から10点出土している。



第245図 第182号土壌出土遺物拓影図

第182号土壌出土土器

(第245図1~3)

1は、内傾する口辺部片で、破片上端に微隆線がみられ、以下に縄文を施している。

2・3は、細い沈線で曲線的モチーフが描かれる胴部片で、区画内に縄文が充填されている。

本壙からは10点の土器片が出土しており、そのほとんどは加曾利E IV式期のものと思われる。したがって、本壙の時期は加曾利E IV式期と考えられる。

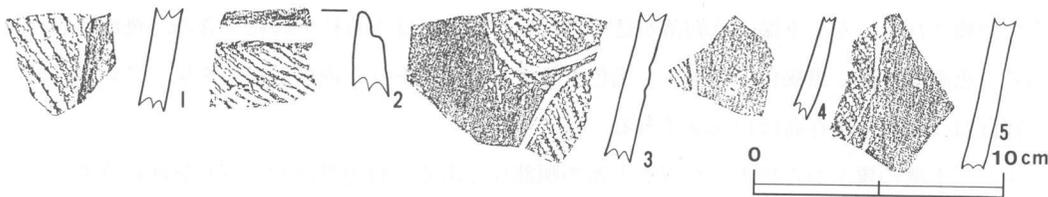
第185号土壌 (第340図)

本土壙は、H5c₉区を中心に確認され、第35号住居跡の東側2mに位置している。平面形は、長径5.7m・短径1.35mの溝状に長く掘りこまれている。長径方向はN-56°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、28cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から25点出土している。

第185号土壌出土土器 (第246図1~5)

1は、微隆線が垂下している胴部片で、区画間に縄文が付されている。2は、口唇部が極端に薄くなり、尖る口縁部片で、口縁直下に1条の沈線を巡らし、以下に無節縄文を施している。3~5は、細い沈線による曲線的モチーフ内に縄文が充填されている胴部片である。3と5は、縄文が類似しており、同一個体と思われる。

本壙からは25点の土器片が出土しており、その大半が加曾利E IV式期のものである。したがって、本壙の時期は加曾利E IV式期と考えられる。



第246図 第185号土壌出土遺物拓影図

第194号土壙（第307図）

本土壙は、G5f₄区を中心に確認され、第31号住居跡内に位置している。新旧関係は、土層から本土壙が新しいと考えられる。平面形は、長径2.05m・短径1.92mの円形に近い楕円形で、第31号住居跡の炉を壊して築かれている。長径方向はN-69°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、83cmである。覆土は、9層からなり、上層の1・2層には、第31号住居跡の炉の焼土が含まれている。3～9層は、レンズ状に自然堆積している。遺物は、縄文土器片が覆土から162点出土している。

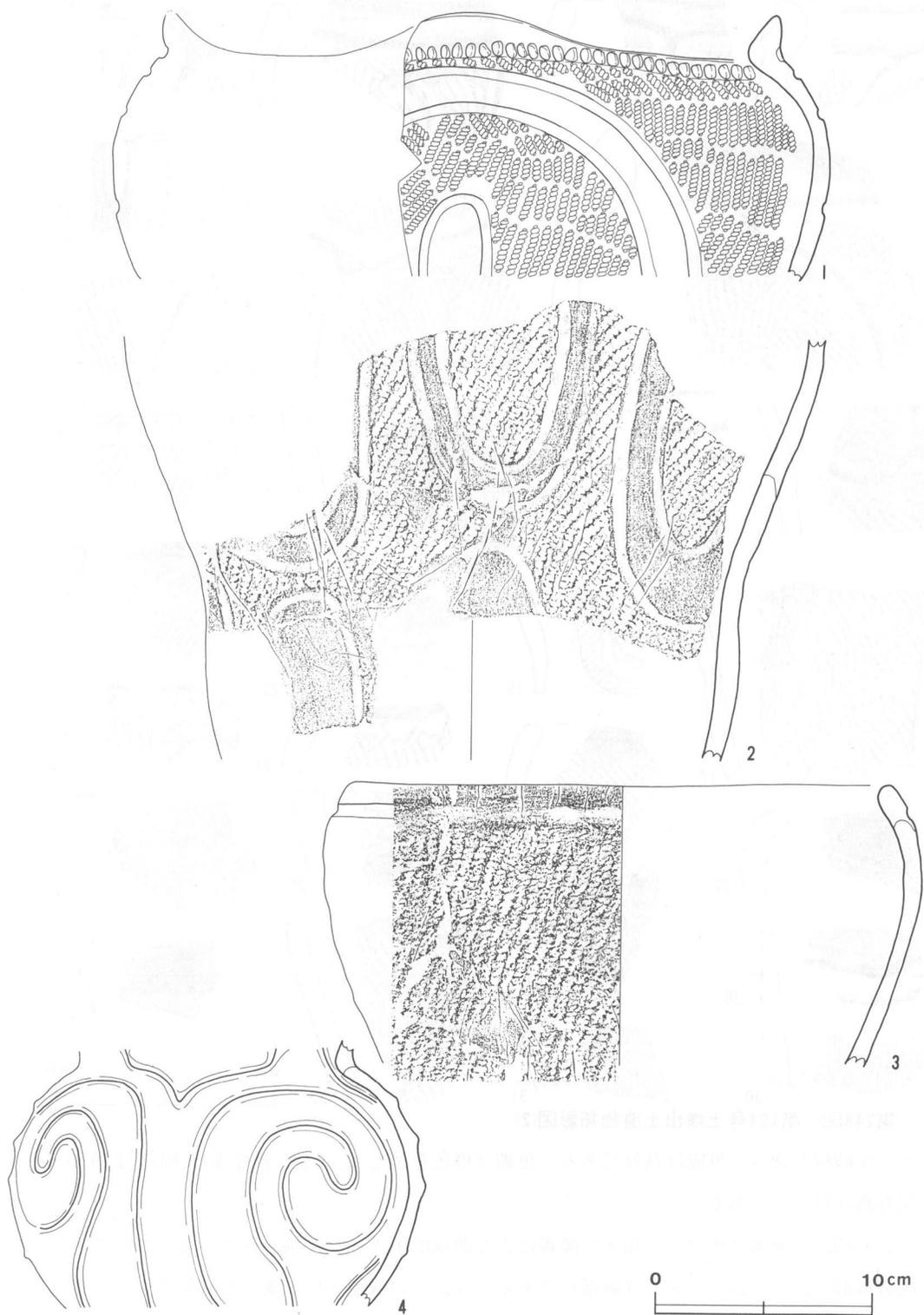
第194号土壙出土土器（第247～248図1～33）

1は、本壙の覆土から出土した緩い波状を呈する口縁部の大破片である。口縁部は強く内湾し、口唇部は内側へ肥厚し、外反している。口縁直下には刺突文列を巡らし、以下は縄文地文上に2本組の沈線で大小の逆U字状の区画を描き、沈線間を磨消している。縄文は単節RLで、横位、斜位回転で施文されている。外面に炭化物が付着している。内面は丁寧に横ナデされている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は28.0cmで、現存高は12.3cmである。

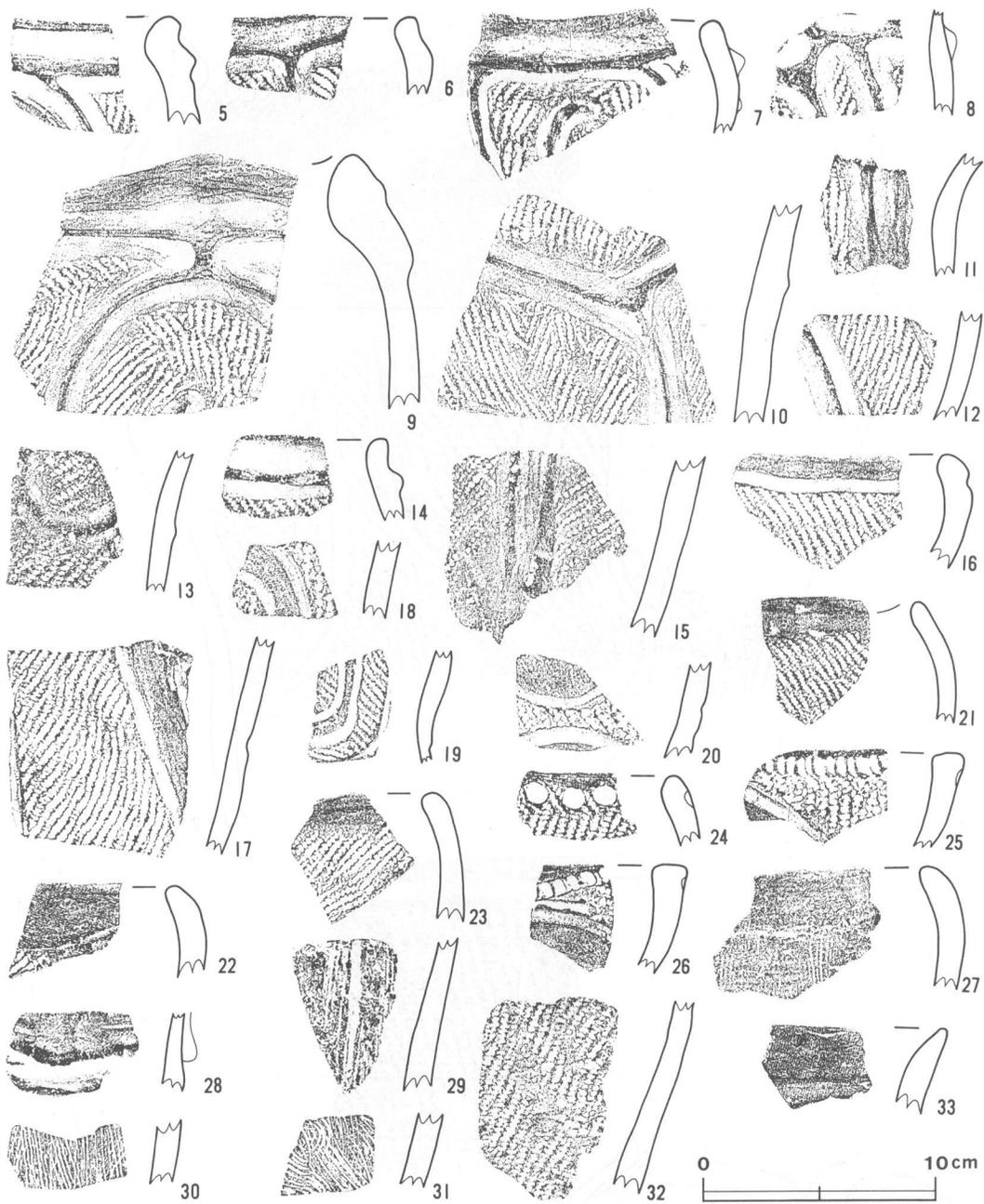
2は、本壙の覆土から出土した破片6点と、本壙と重複している第31号土壙の覆土から出土した3点の破片が接合したもので、深鉢形土器の胴上半部から下半部にかけての破片である。上半部はU字状のモチーフが2本組の沈線で描かれ、区画の内外に単節縄文RLが縦位回転で施されている。沈線間は磨消されている。下半部は逆U字状のモチーフが1本の沈線で描かれ、区画内は磨消されている。胴部中位は緩くくびれている。内面上半部は横ナデ、下半部は縦ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面は褐色を主としているが、暗褐色の部分もみられる。内面は褐色を呈している。推定最大胴径は32.4cmで、現存高は19.5cmである。

3は、本壙の覆土から出土した10数点の破片が接合し、口縁部から胴上半部にかけてだけが器形復元できたものである。口縁部が内湾し、口縁直下に1条の凹線を巡らし、以下に粗い単節縄文RLが全面に施文されている。器面は全体に磨滅している。内面上半部は横ナデ、下半部は縦ナデが施されている。下端には剥落が認められる。胎土には小石粒や砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面に黒褐色、暗褐色、褐色を呈する部分があり、内面が褐色を呈している。推定口径は24.4cmで、現存高は12.8cmである。

4は、本壙の覆土から出土した壺形土器の胴部片である。口辺部はやや直立気味に立ち上り、胴部は球形を呈し、薄手である。細隆線で時計回りと逆時計回りの渦巻文が器面に施されている。器面は丁寧に研磨され、外面の一部に黒色の付着物がみられるが、何であるかは不明である。胎



第247图 第194号土坑出土遗物实测图(1)



第248図 第194号土壌出土遺物拓影図(2)

土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色を呈している。推定最大胴径は19.0cmで、現存高は11.9cmである。

5～15は、両側にナヅリを加えた隆線により曲線的モチーフが描かれている。5～7・9・14は口縁部片、8・10～13・15は胴部片である。5は、口縁直下に1条の凹線を巡らし、以下に隆線で文様を構成している。6は、やや薄手の口縁部片である。7・9・10は、大柄な渦巻などの

曲線的モチーフが描かれている口縁部片である。7は小形土器と思われる。9・10は、緩い波状縁を呈し、器壁が厚く、モチーフ間の縄文も類似していることから同一個体と考えられる。いずれも隆線は断面三角形に近く、鋭くなっている。11～13は、隆線の断面が三角形に近くなっている。11はくびれ部片である。8・15の隆線は低くやや太めである。8は、薄手のくびれ部片で内面に炭化物の付着が著しい。15は、胴下半部片で、2条の隆線が垂下している。14は、口縁直下に1条の隆線を巡らし、以下に縄文を施している。16～20は、沈線による施文が主となるものである。16は、幅の狭い口縁部無文帯を1条の沈線で区切り、以下に縄文を施している。17は、曲線的磨消帯を有する胴部片で、磨消帯内に沈線文を加えている。18・19は、U字状のモチーフを2本組の沈線で描く胴部の小片で、沈線間は磨消され、区画間には縄文が付されている。20は、1本の沈線によるU字状、逆U字状の区画内が磨消され、区画外に縄文を施している。21～23は、口縁部無文帯を有し、以下に縄文を付している。24は、口縁直下に円形刺突文を巡らし、以下に縄文を施している。25・26は、口唇上面が平坦に作出されていて特色がある。口縁直下に刺突文列が施され、以下に太めの曲線的磨消帯が付されている。両者は共通する特徴から同一個体と思われる。27・29～31は、条線文が施されている。27は、口縁部無文帯を残し、以下に縦位の条線文が付されているが、磨減が著しい。29は、太い沈線が垂下し、縦位の条線文が施されている胴部片である。30・31も、胴部の小片で、30は縦位に密に、31は細い条線文が縦位に付されている。28・33は、無文の口縁部、口辺部片である。28は、折り返し状の口縁を呈しており、縄文前期後半のものかと思われる。33は、口唇部に向かって外反しながら器厚を減じており、口唇部は尖り気味である。32は、縄文だけの胴部片である。

本墳からは162点という大量の土器片が出土しており、その主体は1～4に器形復元できたものから判断すれば加曽利EⅢ式期の新しい段階のものと思われる。本墳からは、主体となる加曽利EⅢ式土器以外に、早期の条痕文土器片、28のような前期後半のもの、阿玉台式土器片も1～2点混在している。また、本墳からは赤彩の土器片、土器片錘5点、土製円板1点、有孔円板1点、磨石、礫器、搔器、砥石各1点も出土している。以上から、本墳の時期は、加曽利EⅢ式期と考えられる。

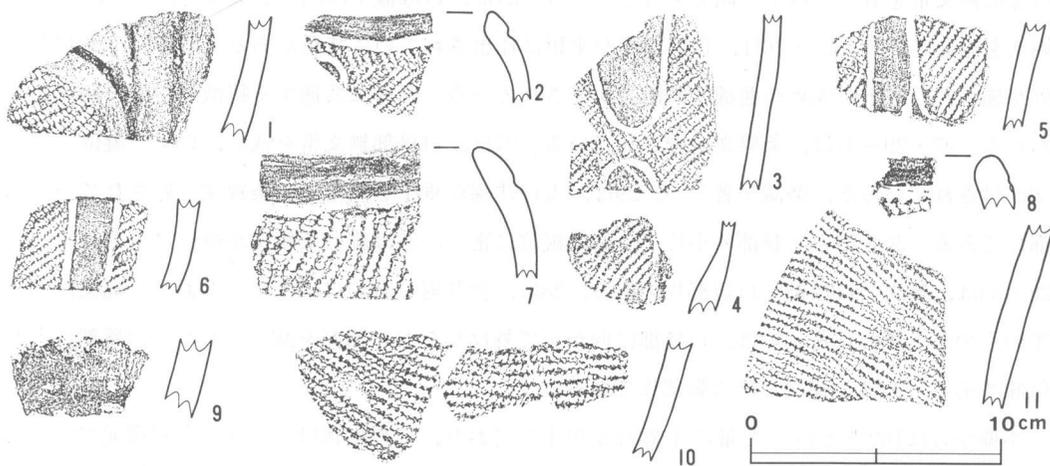
第196号土壙（第324図）

本土壙は、G5g₃区を中心に確認され、第32号住居跡内に位置している。新旧関係は土層から本土壙が新しいと考えられる。平面形は、長径2.1m・短径1.8m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は、N-25°-Wを指している。南側で第199号土壙と重複しているが、新旧関係は、不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は起伏している。確認面からの深さは、最深部で55cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から59点出土している。

第196号土壌出土土器（第249図1～11）

1は、微隆線で曲線のモチーフが描かれている胴部片で、区画内に縄文が施されている。2～6は、口縁直下に1条の沈線を巡らし、胴部にU字状、逆U字状の沈線区画を施し、区画内を磨消している。2は口縁部片で、他は胴部片である。2・3・5・6は、縄文が類似しており同一個体と思われる。7は、口縁部無文帯を1条の沈線で区切り、以下に縄文を施している。8は、口縁直下に小さな刺突文列が加えられた小片である。9は、縦位の条線文が付された後にナデが加えられている。破片の上下端とも輪積み部から剥離している。10・11は、共に単節縄文LRだけが施文されている胴部片である。

本壙からは59点の土器片が出土しているが、いずれも加曾利E III式期の新しい段階のものと思われる。したがって、本壙の時期は加曾利E III式期と考えられる。



第249図 第196号土壌出土遺物拓影図

第197号土壌（第315図）

本土壙は、H5b₇区に確認され、第36号住居跡内に位置している。新旧関係は、底面の切り合い関係から本土壙が新しいと考えられる。平面形は、長径1.54m・短径1.4mの不整楕円形である。長径方向は、N-23°-Wを指している。第36号住居跡の北壁を切って、築かれている。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、71cmである。覆土は、9層からなり、4層を除いて締まっており、レンズ状に自然堆積している。遺物は、縄文土器片が覆土から12点出土している。



第197号土壌出土土器

(第250図1~4)

1は、厚手の胴部片で、微隆線による曲線的区画

第250図 第197号土壌出土遺物拓影図

内に縄文が充填されている。破片の上下端とも、輪積み部分で剥がれている。2・3は、同一個体であるが接合はできない。口縁直下から鋭いへら状施文具による沈線が縦位に施されている。あまり類例を知らないもので注目される。4は、無節縄文が施されている胴部片である。

本壙からは12点の土器片が出土しており、すべて中期のものである。出土土器から判断すると、本壙の時期は加曾利E III式期と考えられるが、明らかでない。本壙からは土器片錘1点が出土している。

第198号土壙 (第324図)

本土壙は、H5a₀区を中心に確認され、第34号住居跡内に位置している。新旧関係は本壙の方が新しいものと思われる。平面形は、長径1.15m・短径0.94mの楕円形である。長径方向は、N-30°-Eを指している。第34号住居跡の壁を切って、袋状に掘りこまれている。壁はフラスコ状に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、133cmで、6区の中では3番めに深い土壙である。覆土は、10層からなり、堆積のしかたはやや複雑である。遺物は、縄文土器片が覆土の上層を中心に232点出土している。

第198号土壙出土土器 (第251~252図1~34)

1は、本壙の覆土から出土した10点程の破片が接合したもので、緩い波状縁を呈する深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部はかなりくびれている。口縁部無文帯を1条の波状縁に沿う微隆線により区画し、胴部には太めの沈線で、逆U字状に近い区画を施し、内部を磨消している。区画外には粗い単節縄文LRが施されている。逆U字状文は、波頂部下から両側に垂れ下る沈線により描かれ、上端はわずかに開いており、微隆線による波頂部下にあたる位置に円形刺突文が軽く付されている。口縁部無文帯と内面は、横ナデにより調整されているが、粗雑である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定口径は22.5cmで、現存高は12.5cmである。

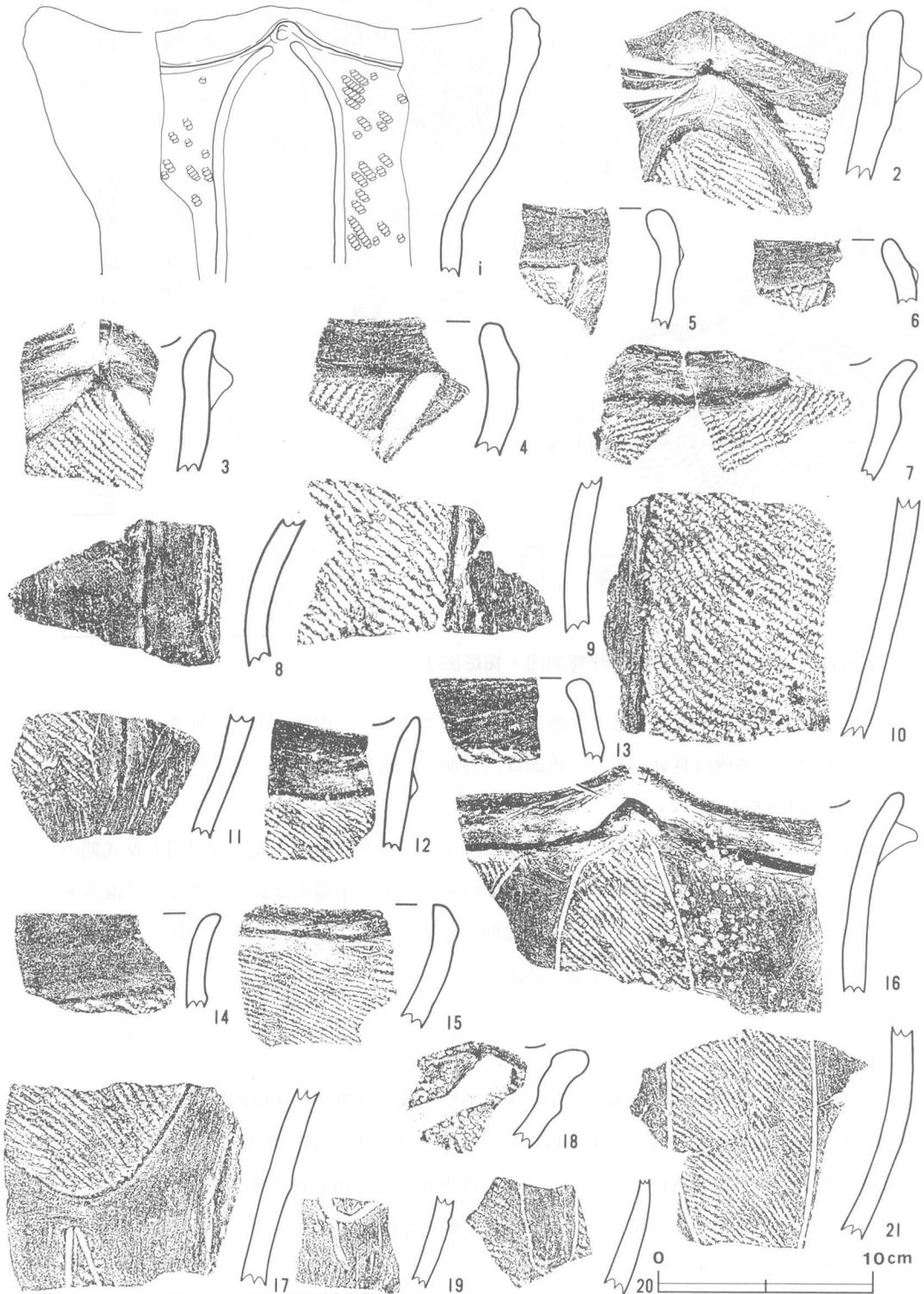
2~11は、微隆線による施文が主となるものである。2は、山形の波頂部を有する口縁部片で、微隆線による曲線的モチーフが描かれ、モチーフの内外に縄文を充填している。波頂部下の微隆線は断面三角形に突出している。緩い波状縁を呈し、微隆線による区画内に縄文を施し、波頂部下の微隆線の一部は2と同様に突出している。4~6は、微隆線による曲線的モチーフが描

かかれている口縁部片である。7は、波状縁を呈し、微隆線による曲線的区画文と縄文を施している。8～11は、胴部片で垂下する微隆線で区画を施し、区画間に縄文を付している。8はくびれ部片、11は胴下半部片である。12～15は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文を施している。12は、波状縁を呈し、微隆線は貼り付けられ、高く明瞭である。14は、外反している。15は、無文帯の幅が極端に狭い。16・21～23は、同一個体と考えられる。口縁部は波状を呈し、口縁部無文帯を1条の貼付微隆線で区切り、波頂部下の微隆線は斜め上方に向かって少し突出している。胴部には細い沈線で逆U字状の区画を施し、区画内に単節縄文LRを縦位回転で施文している。器面には剥落がみられる。17は、厚手の胴部片で、微隆線によるU字状の区画と沈線による逆V字状の区画が施され、区画内には共に縄文が充填されている。器面には炭化物の付着がわずかにみられる。16と同様に、微隆線と沈線の両方の手法が同一個体に共存している点は注目される。18は、波頂部が平坦となる波状口縁部片で、微隆線による施文がみられる。19・20は、沈線による逆U字状の区画文が施されている胴部片である。19はやや太めの沈線で区画されている。20は極細い沈線で区画され、内部は磨消されている。破片の上端部に炭化物が付着している。24は、口縁部が少し外反し、口縁直下に1条の凹線を巡らし、以下に無節縄文を施文している。25は、口縁部無文帯を1条の凹線で区切り、以下に縄文を付している。26は、緩い波状を呈する口縁部片で、幅の狭い無文帯を形成し、以下に単節縄文LRを横位、縦位、斜位回転で施文している。波頂部では口唇部にまで縄文帯が延びている。波頂部の口唇部には軽いキザミ目が付されている。破片の右側には炭化物が付着している。27は、胴部のくびれ部片で、縄文だけが施されている。器面に炭化物が付着している。28は、早期のもので、表に縦位の擦痕文と沈線文が加えられており、胎土に繊維を含んでいる。29は、条線状の粗い縦位の沈線文が付されている胴部片である。30は、無文の口縁部片である。

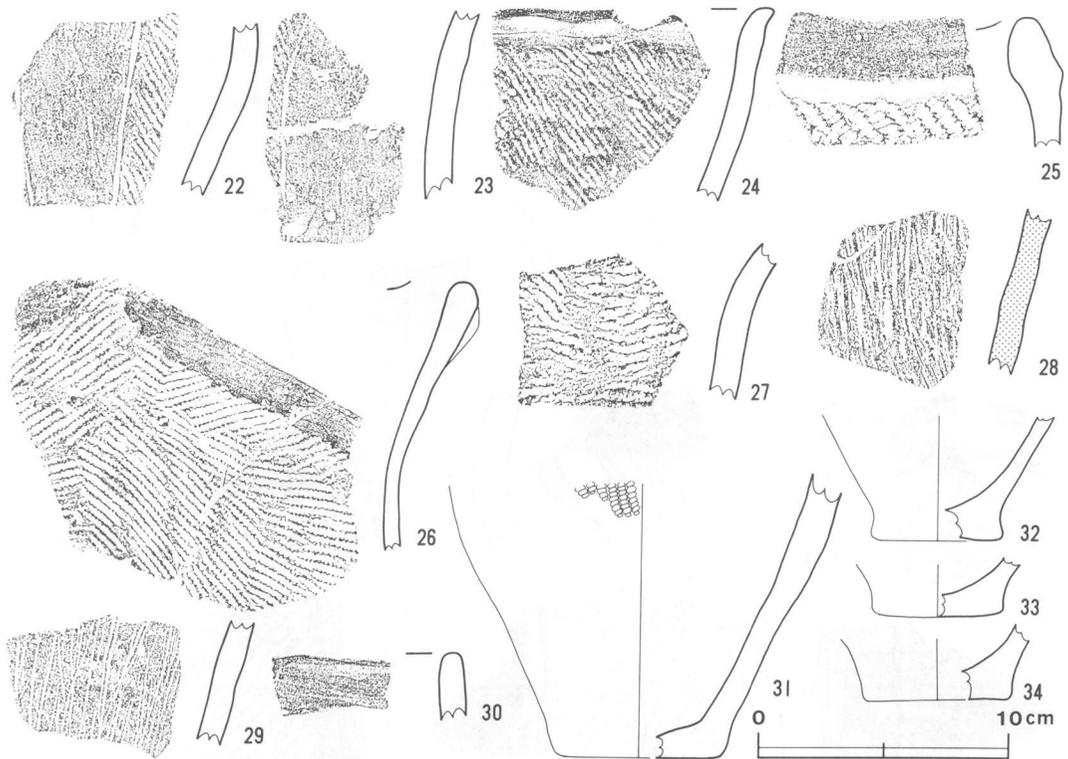
31は、本壙の覆土から出土した破片4点が接合したもので、深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面の上端部には単節縄文LRを縦位回転で施文しているが、縄文の撚りはやや緩い。以下は縦ナデを加えている。器面の整形は粗く、凹凸があり、器厚が一定していない。内面は横ナデである。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面がにぶい赤褐色、内面が褐色を呈している。推定底径は6.7cmで、現存高は11.5cmである。

32は、本壙の覆土から出土した底部片で、外面に縦ナデを加え、底面近くは横ナデにより調整されている。内面はナデを施している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面は黒褐色を呈している。推定底径は5.3cmで、現存高は5.0cmである。

33は、本壙の覆土から出土した底部片で、外面は横ナデ、内面はナデを加えている。胎土に微砂を含み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が灰褐色を呈している。推定底径は5.3cmで、現存高は2.1cmである。



第251图 第198号土壤出土遗物实测图·拓影图(1)



第252図 第198号土壌出土遺物実測図・拓影図(2)

34は、本墳の覆土から出土した底部片で、外面は横ナデ、内面はナデが施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。推定底径は6.0cmで、現存高は2.4cmである。

本墳からは232点と非常に多くの土器片が出土しており、その主体は加曽利EⅣ式期のものである。この中には赤彩土器片が2点含まれている。早期の土器片は28の1点だけで混入と思われる。以上から、本墳の時期は加曽利EⅣ式期と考えられる。なお、本墳からは土器片錘2点、土製円板1点、有孔円板1点が出土している。

第199号土壌（第324図）

本土壌は、G5h₃区を中心に確認され、第196号土壌同様第32号住居跡内に位置している。新旧関係は、土層から本墳が新しいと考えられる。平面形は、径1.3mの円形で、北側で第196号土壌と重複している。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、66cmである。覆土は、第196号土壌と同様に3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から18点出土している。

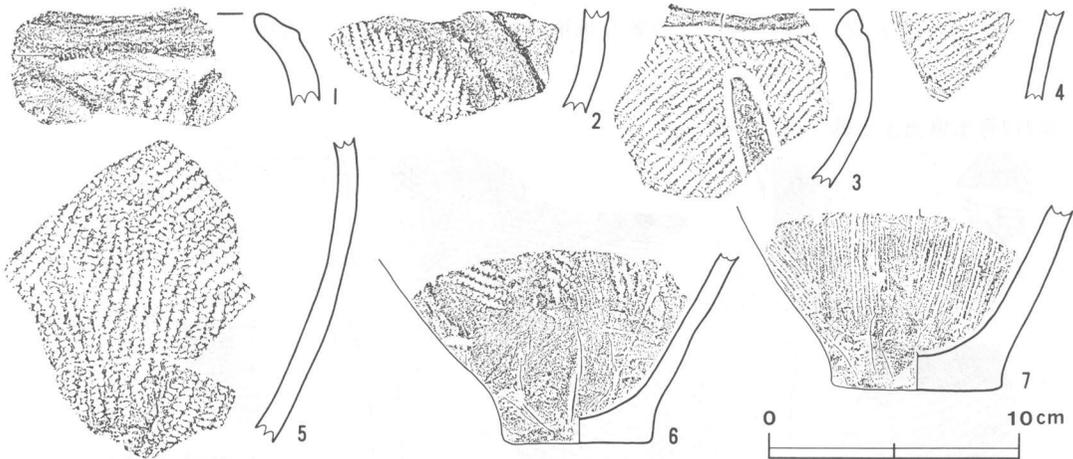
第199号土壌出土土器 (第253図1～7)

1・2は、微隆線で曲線のモチーフが描かれ、区画内に縄文が施されている。1は、内傾する口縁部片である。2は、胎土に石英粒や雲母片を含む胴部片である。3・4は、沈線による施文が主となるものである。3は、内湾する口縁部片で、幅の狭い無文帯を1条の沈線で区画し、胴部に逆U字状の沈線区画を描き、内部を磨消している。縄文は、異条の単節RLで、沈線直下は横位、以下は縦位回転で施文している。4は、U字状の区画内に縄文を充填している胴部片である。5は、縄文だけが施された胴下半部片である。

6は、本壙の北側の覆土から逆位で出土した底部片である。外面には、単節縄文LRが縦位回転で施文され、底面近くは無文となり、縦ナデの後に斜位、横位のナデが加えられている。内面は軽くナデられている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が暗灰色を呈している。底径は6.0cmで、現存高は7.5cmである。

7は、本壙の中央部の覆土から正位で出土した底部片で、上端部は丁寧に打ち欠かれており、何かに再利用するための意図的な作為が感じられる。外面には条線文が縦位に粗く施文され、底面近くは横ナデが加えられている。内面は縦ナデが丁寧に施され、光沢を発するようである。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が暗褐色を呈している。底径は6.8cmで、現存高は7.3cmである。

本壙からは18点の土器片が出土しており、主体は加曾利E III式期の新しい段階のものである。したがって、本壙の時期は加曾利E III式期と考えられる。

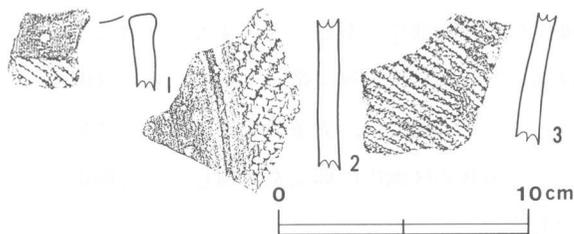


第253図 第199号土壌出土遺物実測図・拓影図

第205号土壌 (第307図)

本土壌は、H6b₁区に確認され、第34号住居跡の東側0.5mに位置している。平面形は、径0.7mの円形で、南側で第183号土壌と重複している。新旧関係は不明である。壁は外傾して立ち上が

り、底面は平坦である。確認面からの深さは、53cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から14点出土している。



第254図 第205号土壌出土遺物拓影図

第205号土壌出土土器

(第254図1～3)

1は、口縁部無文帯をナヅリによる微隆線で区画し、以下に縄文を施している。2は、微隆線が垂下し、

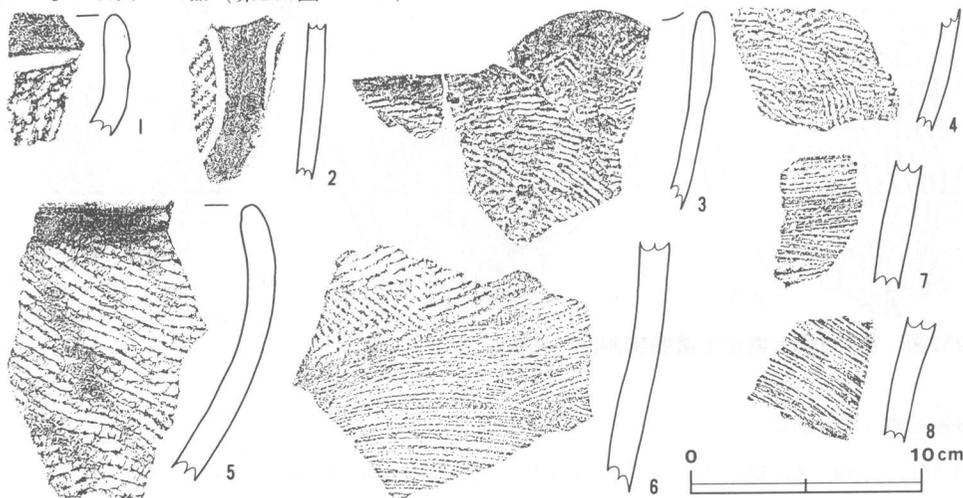
区画内に縄文が施されている胴部片で、胎土に石英粒を多く含んでいる。3は、縄文だけの胴部片で、やや薄手である。

本壙からは14点の土器片が出土しており、いずれも加曾利EⅣ式期のものと思われる。したがって、本壙の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。

第212号土壌 (第342図)

本土壙は、G4c₆区を中心に確認され、第47号住居跡内に位置している。新旧関係は、土層から本土壙が古いと考えられる。平面形は、長径4.55m・短径1.33mの不定形で、溝状に長くなっている。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で、北西側・西側で15cm差で2段に掘りこまれている。確認面からの深さは、最深部で40cmである。覆土は、6層からなり、1・5・6層は締まっている。各層が交互に入りこんだ複雑な堆積のしかたをしている。遺物は、縄文土器片が覆土から40点出土している。

第212号土壌出土土器 (第255図1～8)



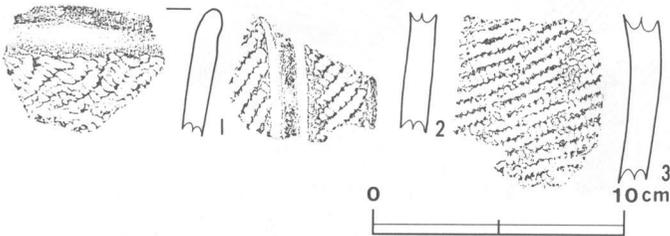
第255図 第212号土壌出土遺物拓影図

1は、口縁部無文帯を1条の沈線で区切り、以下に縄文を施している。2は、曲線的な沈線区画内に縄文を充填している胴部片である。3と4は、同一個体と思われる。3は、口縁部に丸い弁状の突起を付し、幅の狭い無文帯を残し、以下は全面に無節縄文Lを斜位、縦位回転で施文している。外面には炭化物の付着がみられる。5は、口縁部無文帯を有し、以下に無節縄文Lを縦位回転で施文している。6は、胴部片で、破片上半部に無節縄文がみられ、下半部に横位の弧状を呈する条線文が付されている。6～8も、器壁の厚さや施文の類似から同一個体と考えられる。7・8も胴部片で、条線文を密に横位・斜位に施文している。

本墳からは40点の土器片が出土しており、その主体は加曽利EⅢ式期のものである。出土土器のなかに1点の灰釉陶器片が混入している。以上から、本墳の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。なお、本墳からは土器片錘、土製円板各1点が出土している。

第215号土壌（第336図）

本土壌は、G4e₄区を中心に確認され、第47号住居跡の南東側3mに位置している。平面形は、長径4.9m・短径1.66mの不整長楕円形である。長径方向は、N-43°-Eを指している。壁は西壁で凹凸がみられるが、他は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。確認面からの深さは、25cmである。覆土は、5層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から32点出土している。



第256図 第215号土壌出土遺物拓影図

第215号土壌出土土器

（第256図1～3）

1は、口縁部に浅い1条の凹線を巡らし、以下に縄文を付している。2は、低い隆線が垂下

している胴部片で、区画間に縄文を施している。3は、縄文だけの胴部片である。

本墳からは32点の土器片が出土しており、その主体は加曽利EⅢ式期のものである。したがって、本墳の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。なお、本墳からは土器片錘1点が出土している。

第226号土壌（第308図）

本土壌は、H4g₆区に確認され、第54号住居跡と第50号住居跡の重複部に位置している。平面形は、径0.8mの円形である。本土壌は、土層の様子からみて両住居跡の廃絶後に築かれたと考えられる。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、37cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から15点出土している。

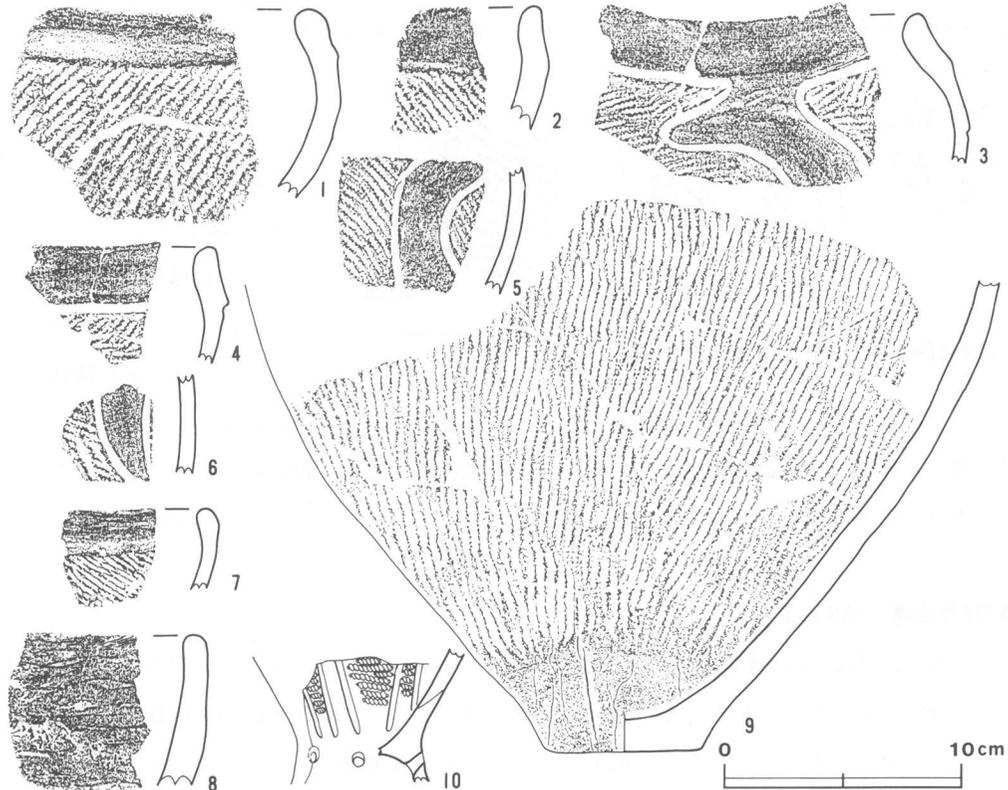
第231号土壙 (第325図)

本土壙は、H4f₇区を中心に確認され、第46号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径1.5m・短径1.24mの楕円形である。長径方向は、N-65°-Wを指している。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、64cmである。覆土は、3層からなり、各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物は、縄文土器片が南壁近くの覆土から78点出土している。

第231号土壙出土土器 (第257図1~10)

1・2は、口縁部無文帯を1条のナヅリによる微隆線で区切り、以下に縄文を施している。1は、器面が磨滅している。3~6は、口縁部無文帯を有し、胴部に曲線的磨消帯を施し、区画外には縄文を加えている。3~6は、施文の特徴から判断して同一個体と考えられる。7は、口縁部無文帯を1条の凹線で区画し、以下に無節縄文を施している。8は、無文の口縁部片で、器面に横ナデが粗く加えられている。

9は、本壙の覆土から出土した。破片14点が接合したもので、深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面には単節縄文R Lが斜位回転により施文され、底面の近くは丁寧な



第257図 第231号土壙出土遺物実測図・拓影図

横ナデが加えられ、無文となっている。内面は横ナデが施されている。胎土には長石、石英粒、雲母片などを多く含んでおり、粗雑である。焼成は良好で、色調は内外面とも褐色を呈している。底径は6.6cmで、現存高は19.8cmである。

10は、本墳の覆土から出土した台付土器の破片である。胴下半部には縦位の沈線が2本単位で施され、沈線間は磨消帯と縄文の充填部分が交互にくりかえされている。縄文は単節RLで斜位回転により条が横走している。接合部はナデ調整され、接合部の底面は非常に薄く、3mm程度である。接合部には、横から小孔があげられ、孔は6か所と推定される。内面はナデ調整である。台部上端は内湾している。胎土には細砂を含み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が暗褐色を呈している。現存高は5.4cmである。

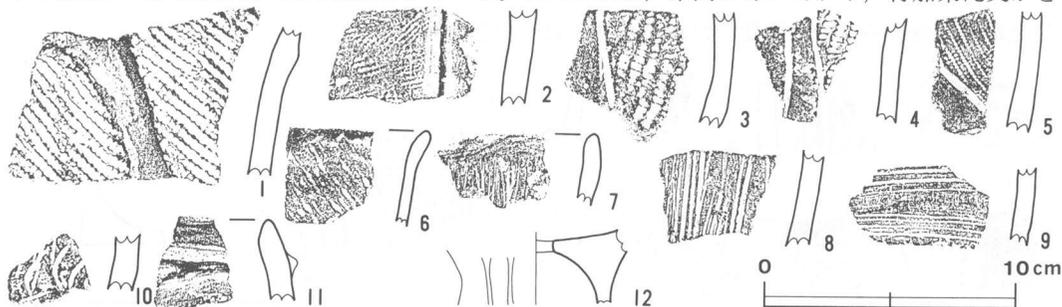
本墳からは78点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期の新しい段階のものである。したがって、本墳の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本墳からは土器片錘2点が出土している。

第249号土壙（第337図）

本土壙は、G4i₈区を中心に確認され、第48号住居跡の北側3mに位置している。南側で第250号土壙と重複している。新旧関係は、不明である。平面形は、長径2.61m・短径1.71mの不整楕円形である。長径方向は、N-75°Wを指している。確認面からの深さは、最深部で27cmである。壁は外傾して立ち上がり、底面には4か所のピットがあり、凹凸がみられる。覆土は、6層からなり、1～5層は締まっている。また、2層には焼土が含まれ、4・5層は粘性がある。遺物は、縄文土器片が覆土から81点出土している。

第249号土壙出土土器（第258図1～12）

1・2は、微隆線による施文がみられる胴部片である。1は、区画内に縄文が充填されており、2は、垂下する微隆線間に細かい縄文が施されている。3～5は、沈線で曲線的モチーフを構成する胴部片で、区画内に縄文を施文している。5の縄文は、条間があいており、付加条縄文かと



第258図 第249号土壙出土遺物実測図・拓影図

思われる。6は、極薄手の口縁部片で、全面に無節縄文が施され、口縁部が少し外反している。7は、小形土器で口縁部無文帯をわずかに残し、以下縦位に条線文を施している。8は、条線状の沈線文が縦位に施されている胴部片である。9は、胴部片で条線文が横位に付されている。10は、爪形状の刺突文が付されている胴部の小片である。11は、隆線で文様を描く口縁部片である。

12は、本墳の覆土から出土した台付土器の接合部の破片である。上部の底面は丁寧にナデられており、周囲はきれいに打ち欠かされている。外面には強い縦ナデにより稜線状をなす部分も認められる。台部の内面は横ナデが加えられている。なお、底面の中央部には楕円形を呈する小孔が焼成後にあけられ、孔の周囲には剥離がみられる。胎土には小石粒、砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。現存高は2.1cmである。

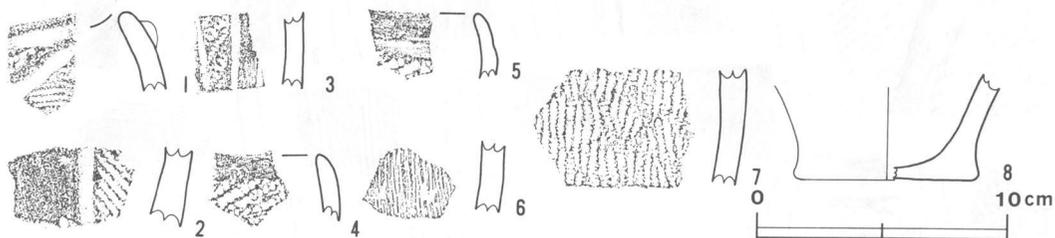
本墳からは81点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅢ式期の新しい段階のものである。したがって、本墳の時期は加曾利EⅢ式期の新しい段階と考えられる。なお、本墳からは焼けた粘土塊が出土している。

第251号土壌（第308図）

本土壌は、G4j_a区を中心に確認され、第48号住居跡の北西側1mに位置している。平面形は、径1.62mの円形である。壁は外傾して立ち上がり、底面は南東壁際にピットが掘られているほかは平坦である。確認面からの深さは、最深部で75cmである。覆土は、5層からなり、各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物は、縄文土器片が覆土から76点出土している。

第251号土壌出土土器（第259図1～8）

1は、隆線による区画内に縄文が施されている口縁部片である。2・3は、直線的磨消帯がみられる胴部片である。2はやや厚手で、磨消帯の幅が広い。3は薄手で、幅が狭い。4・5は、口縁部無文帯を有し、以下は縄文が施されている。5は、口縁部無文帯が1条の凹線で区画されている。6は、縦位の密な条線文が付されている胴部片である。7は、縄文だけの胴部片で、破片上端部に輪積み部分の強化のためのキザミ目が付されている。



第259図 第251号土壌出土遺物実測図・拓影図

8は、本墳の覆土から出土した底部片で、底部は突出している。外面には縦ナデ、底面の近くは横ナデにより調整されている。底面の中央部は、器壁が薄く、ごくわずかに凹んでいる。内面もナデが加えられている。胎土には小石粒や砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は7.4cmで、現存高は3.7cmである。

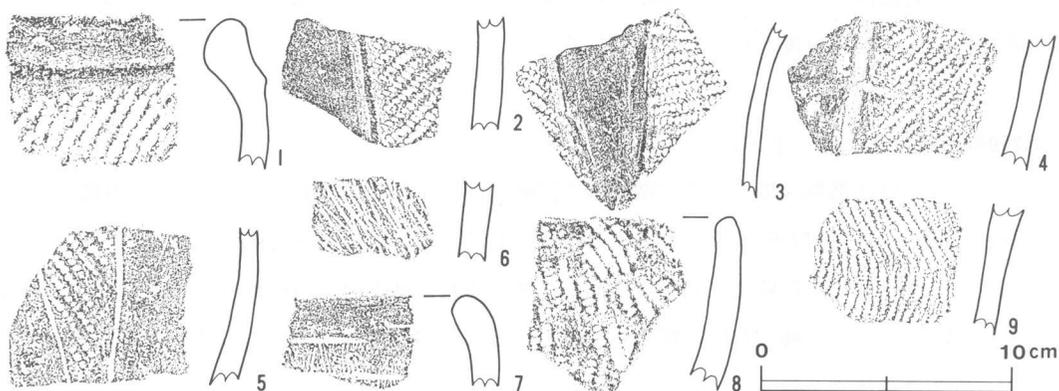
本墳からは76点の土器片が出土しているが、小破片が多く詳しい時期判定はむずかしいが、加曾利EⅢ式期のものと思われる。したがって、本墳の時期も加曾利EⅢ式期と考えられる。

第252号土壌（第326図）

本土壌は、G4j7区を中心に確認され、第48号住居跡の西側2mに位置している。平面形は、長径1.88m・短径1.48mの楕円形である。長径方向は、N-55°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は中央に1か所のピットが掘られているほかは平坦である。確認面からの深さは、最深部のピット部分を測ると57cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から81点出土している。

第252号土壌出土土器（第260図1～9）

1～3は、微隆線による施文を主としている。1は、口縁部が肥厚し、無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文を施している。胎土に多くの石英粒、雲母片を含んでいる。2・3は、胴部片で、3はくびれ部片で薄手である。4・5は、沈線による曲線的区画内に縄文を施している胴部片である。4の沈線は太く浅めで、胎土には多くの石英粒、雲母片を含んでいる。5の沈線は細く鋭い。6・7は、条線文が付されている。6は、胴部片で乱雑な条線文が斜位に施されている。7は、口縁部無文帯を有し、以下は縦位に施文している。8・9は、縄文だけが施文されている。8は、器面全体に粗い縄文が付されている口縁部片で、9は胴部片である。

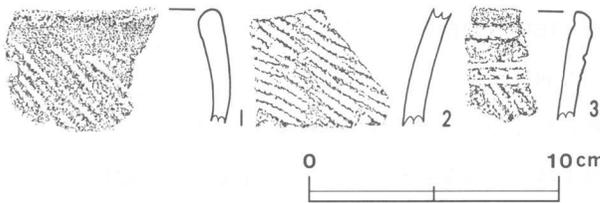


第260図 第252号土壌出土遺物拓影図

本墳からは81点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅣ式期のものである。この中に1点だけ早期の条痕文土器片が混入している。以上から、本墳の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。

第257号土墳（第316図）

本土墳は、G4j₀区を中心に確認され、第48号住居跡の北東側3mに位置している。平面形は、長径0.98m・短径0.85mの不整楕円形で、北西側が内側にへこんでいる。長径方向は、N-33°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、19cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から16点出土している。



第257号土墳出土土器（第261図1～3）

1・2は、中期のものである。1は、口縁部に若干の無文帯を残し、以下に縄文を施しており、器面が少し磨滅している。2は、単節縄文LRが縦位回転で付されている胴部片である。3は、後期前半の口縁部片で、口縁直下に1条の細い隆線を巡らし、以下に単節RLを横位回転で施文し、上端に2条の沈線を加えている。口縁部内面にも1条の沈線を巡らしている。

本墳からは16点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。後期の土器片は3の1点だけである。以上から、本墳の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。

第260号土墳（第308図）

本土墳は、G5i₂区を中心に確認され、第49号住居跡の北側0.5mに位置している。平面形は、長径1.4m・短径1.2mの楕円形である。長径方向は、N-86°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、40cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から27点出土している。

第260号土墳出土土器（第262図1～7）

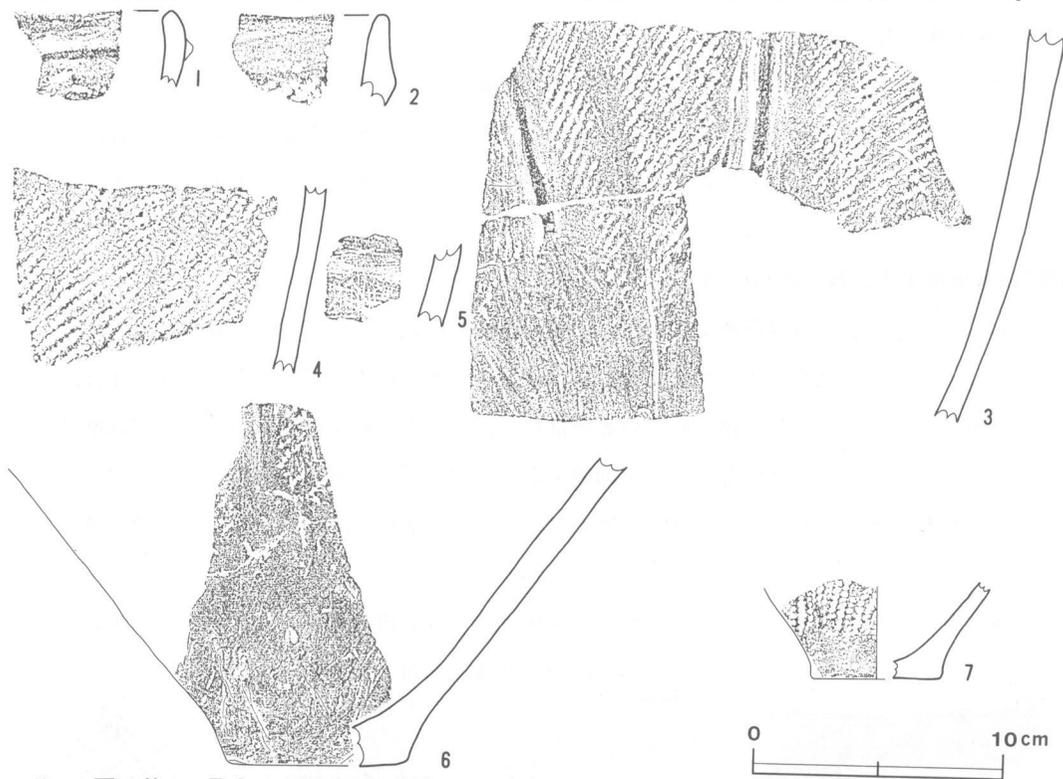
1・2は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文を施している。1の微隆線は貼付により、2の微隆線はナゾリにより作出されている。3は、貼付隆線が垂下している胴下半部片で、区画間に単節縄文RLが縦位回転で施文され、底部近くは縦ナデが加えられて、無文となっている。4は、縄文だけの胴部片である。5は、口辺部片で、上端に浅い1条の凹線を巡らし、以下に条線文を格子目状に施文している。

6は、本墳の覆土から出土した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面の

上端部にわずかに縄文が施されているが、縄文の上を含めて胴下半部には縦ナデが施されているために縄文の捻りの方向は不明である。胴下半部は無文となり、底面の近くは横ナデにより調整されている。内面は軽いナデである。胎土には微砂を含み、焼成は良好である。色調は外面が黄褐色、内面が灰褐色を呈している。推定底径は7.2cmで、現存高11.9cmである。

7は、本壙の覆土から出土した底部片である。外面には単節縄文RLが斜位回転で施文され、底面の近くは横ナデが加えられ、内面はナデである。胎土には砂粒を混入し、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が黒褐色を呈している。推定底径は5.2cmで、現存高は3.6cmである。

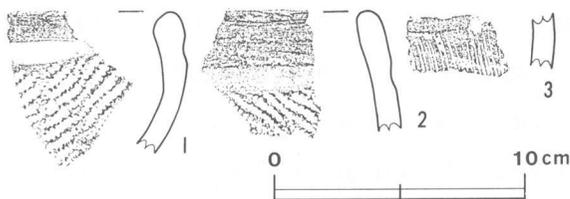
本壙からは27点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅣ式期のものである。したがって、本壙の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。なお、本壙からは土器片錘1点が出土している。



第262図 第260号土壙出土遺物実測図・拓影図

第267号土壙 (第323図)

本土壙は、H5a₂区に確認され、第49号号住居跡の南側0.5mに位置している。平面形は、長径0.98m・短径0.85m楕円形である。長径方向は、N-33°-Eを指している。壁は直線的に外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、34cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から31点出土している。



第263図 第267号土壌出土遺物拓影図

第267号土壌出土土器 (第263図1~3)

1・2は、口縁部無文帯を1条の浅い沈線で区画し、以下に縄文を施している。口縁部は、1は内湾し、内面の剥落が著しい。2は内傾している。3は、口辺部片で、破片上端に1条の沈線を巡らし、以下に縦位の条線文を付している。

本壙からは31点の土器片が出土しており、主体は加曽利EⅢ式期のものである。したがって、本壙の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。

第268号土壌 (第309図)

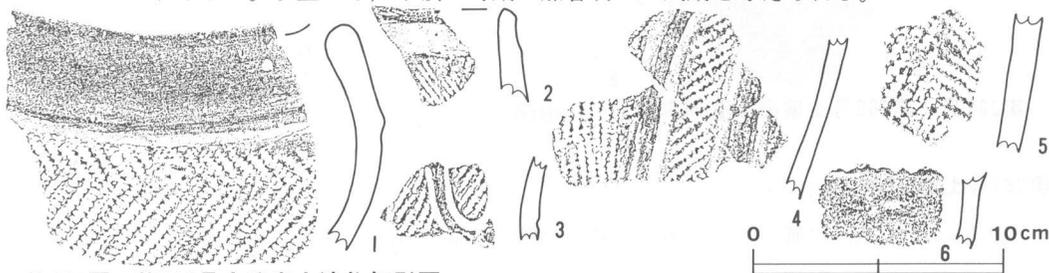
第268号土壌 (第309図)

本土壌は、H5a₂区に確認され、第51号住居跡の北側1.5mに位置している。平面形は、径0.86mの円形である。壁は垂直に立ち上がり、底面はやや起伏している。確認面からの深さは、47cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から26点出土している。

第268号土壌出土土器 (第264図1~6)

1は、やや幅の広い口縁部無文帯を低い1条の隆線で区画し、以下に単節縄文RLを施している。2は、口縁部無文帯をナヅリにより形成し、以下に無節縄文を付している。3・4は、2本組の沈線で曲線的モチーフが描かれている胴部片で、区画内に縄文を充填し、沈線間は磨消されている。5は、縄文だけの胴部片で、単節縄文LRと複節縄文LRLが縦位の羽状を呈するように、縦位回転で施文されている。6は、阿玉台式土器の胴部片で、破片上端に波状沈線文が施されている。

本壙からは26点の土器片が出土しており、主体は加曽利EⅢ式期のものである。阿玉台式土器は6の1点にすぎない。以上から、本壙の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。



第264図 第268号土壌出土遺物拓影図

第272号土壌 (第327図)

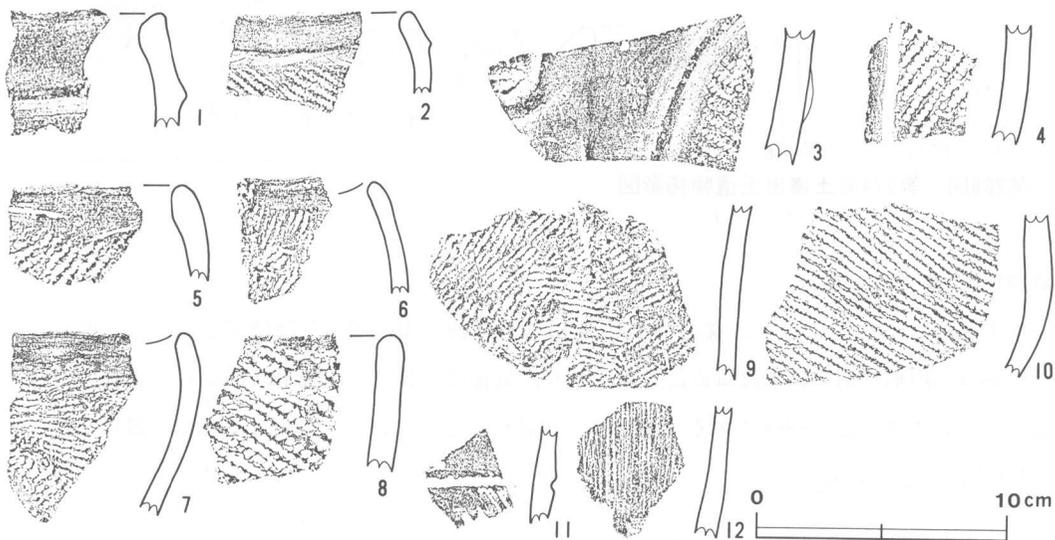
本土壌は、H5d₅区を中心に確認され、第52号住居跡の南東側4mに位置している。平面形は、

長径1.36m・短径1.0mの楕円形である。長径方向は、N-36°-Wを指している。壁は垂直に立ち上がり、底面は中央から北にかけて30cm差で2段に掘りこまれている。確認面からの深さは、最深部で46cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から82点出土している。

第272号土壌出土土器（第265図1～12）

1～3は、微隆線による施文が主となっている。1・2は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区切り、以下に縄文を施している。3は、貼付の微隆線で曲線的モチーフを描き、区画内に縄文を充填している。4は、直線の磨消帯を有する胴部片である。5は、口縁部無文帯を有し、以下に縄文を施している。6・7・9は、口縁部にわずかの無文帯を残し、以下は全面に無節縄文を多方向から回転施文している。これら3点は、無節縄文が共通することから同一個体と考えられるが接合はできない。6・7は口縁部片、9は胴部片である。8・10は、単節縄文が付されているもので、8は口縁部片、10は胴部片である。11は、口辺部片で、口縁部無文帯を1条の沈線で区画し、以下に曲線状の条線文を付している。12は、密な縦位の条線文を施している胴部片である。

本墳からは82点の土器片が出土しており、主体は加曽利EⅢ式期の新しい段階のものである。したがって、本墳の時期は加曽利EⅢ式期の新しい段階と考えられる。なお、本墳からは土器片錘1点が出土している。



第265図 第272号土壌出土遺物拓影図

第274号土壌（第313図）

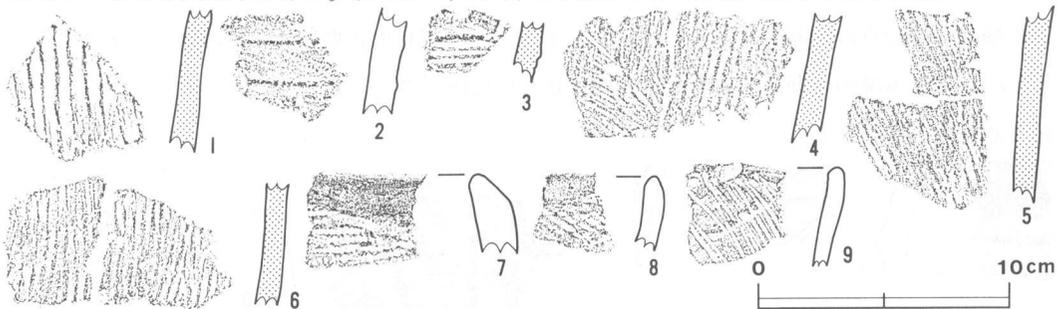
本土壌は、H5d₆区を中心に確認され、第37号住居跡の西側6mに位置している。平面形は、径0.58m（推定）の円形で、北側で第292号土壌と重複している。本土壌は、292号土壌の底面を

掘りこんで築かれているので、本土壙の方が新しいと考えられる。壁はほとんど垂直で、底面は凹凸がみられる。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から27点出土している。

第274号土壙出土土器（第266図1～9）

1～6は、早期の胴部片で、1～3は、微隆起線による装飾が主となっている。1は、微隆起線が数条垂下しており、裏面は貝殻条痕文が横位に付されている。2は、2条の微隆起線が横走しているもので、2だけは胎土に繊維の混入がみられない。3は、微隆起線による区画内に細沈線を充填している。4～6は、表面に貝殻条痕文が縦位を主に施文されており、6の裏面は無文である。4・5の裏面は剥落が著しく、調整は不明である。7・8は、中期後半のもので、口縁部無文帯を有し、以下に縄文を施している。7は厚手で、8は薄手である。9は、後期の口縁部片で、斜位の沈線文が施されている。

本壙からは27点の土器片が出土しており、主体は早期の条痕文系土器片である。中・後期のものは7～9の3点だけである。以上から、本壙の時期は早期の野島式期と考えられる。



第266図 第274号土壙出土遺物拓影図

第281号土壙（第309図）

本土壙は、H5e区を中心に確認され、第37号住居跡の南西側6mに位置している。平面形は、径1.38mの円形である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、88cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から138点出土している。

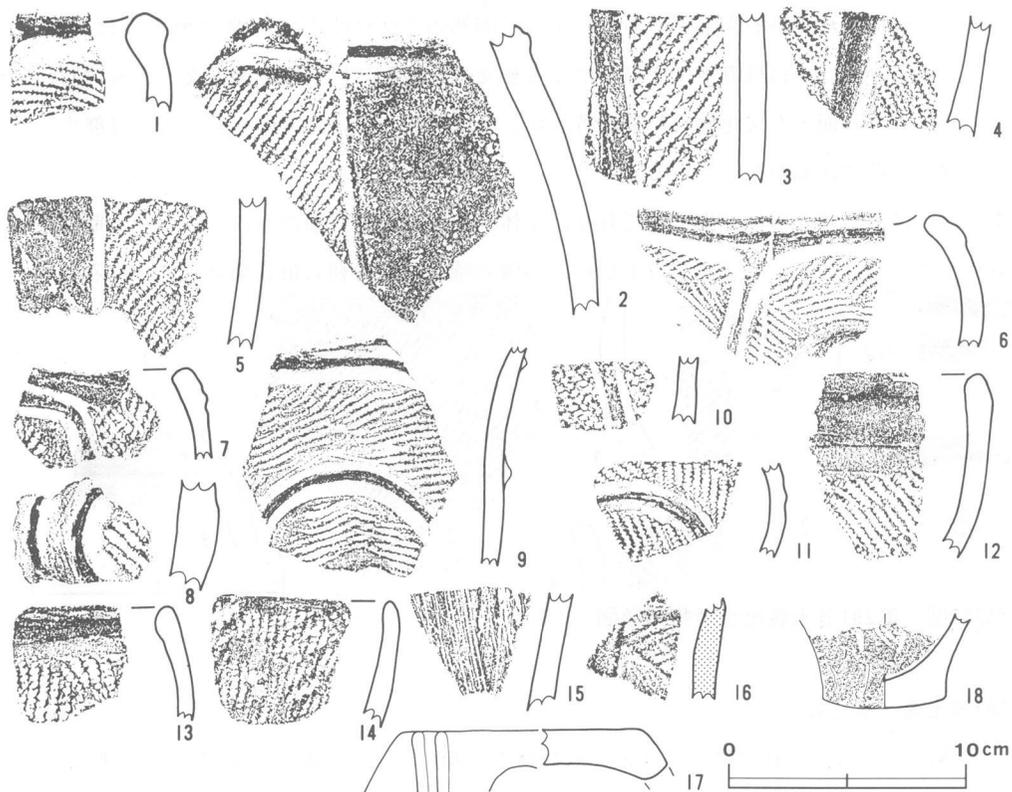
第281号土壙出土土器（第267図1～18）

1は、波状縁を呈し、太く浅い沈線で口縁部文様帯を区画し、区画内に縄文を施している。2は、口縁部文様帯を隆線で区画し、胴部に幅の広い直線的磨消帯を垂下させている。3～5は、直線的磨消帯を有する胴部片で、3・4の幅は狭く、5の幅は広い。区画間の縄文は、3・5が

単節，4が複節である。6～9・11は，隆線で曲線的モチーフを描くものである。6・7は口縁部片，8・9・11は胴部片である。いずれもモチーフ間に縄文を充填している。8は厚手で，その他はやや薄手である。9は，くびれ部片で，器面に炭化物の付着がみられる。10は，幅の狭い曲線的磨消帯を有する胴部の小片で，地文の縄文は複節である。12・13は，口縁部無文帯を1条の凹線で区画し，以下に縄文を施している。14は，全面に縄文が付されている口縁部片である。15は，縦位の条線文を付している胴部片である。16は，早期の野島式土器の胴部片で，微隆起線による幾何学的区画内に同様の微隆起線を充填している。

17は，本壙の覆土から出土した器台形土器の破片である。受け面は平坦で，丁寧に調整されている。外面には，2本1組の太い沈線が垂下している。孔は現存部で2か所認められるが，破片のため本来の数や配列は不明である。内面は横ナデにより調整されているが粗い。胎土には細砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。受け面の推定径は10.0cmで，現存高は2.6cmである。

18は，本壙の覆土から出土した底部片である。底面は平坦ではなく，やや丸味を帯びている。外面には，沈線による懸垂文と縄文がわずかに認められ，磨消懸垂文を有していたものと思われる。底面の近くは縦ナデ，内面はナデが加えられ，底面は丁寧に調整されている。胎土には砂粒を含



第267図 第281号土壙出土遺物実測図・拓影図

み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が暗灰色を呈している。底径は5.2cmで、現高は3.7cmである。

本壙からは138点と多くの土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。野島式土器、阿玉台式土器片が各1点ずつ混入している。以上から、本壙の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本壙からは土器片錘3点、土製円板、有孔円板各1点が出土している。

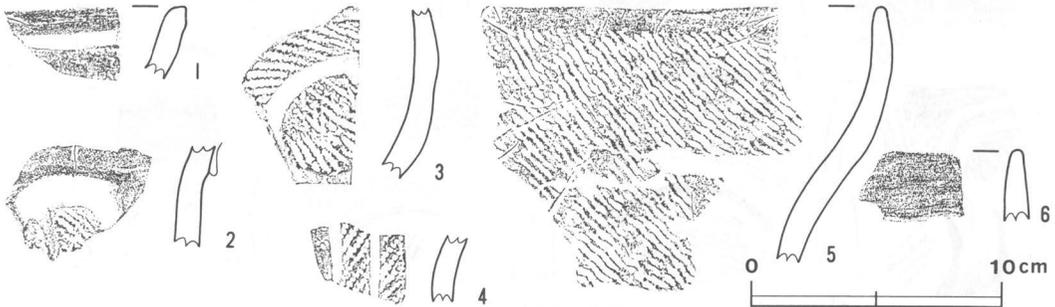
第291号土壙（第323図）

本土壙は、H5f₇区を中心に確認され、第38号住居跡の南西側3mに位置している。平面形は、径1.65mの円形である。壁はフラスコ状に立ち上がり、袋状の掘りこみである。底面は起伏が著しい。確認面からの深さは、最深部で105cmである。覆土は、1層だけなので、埋め戻された土層と考えられる。遺物は、縄文土器片が覆土から44点出土している。

第291号土壙出土土器（第268図1～6）

1は、口縁部の小片で、口縁直下に1条の沈線を巡らしている。2は、口辺部片で、隆線で口縁部文様帯が区画され、区画内に縄文を充填している。3は、縄文地文上に太めの沈線で曲線的モチーフが描かれている胴部片である。4は、胴部のくびれ部片で、縄文地文上に沈線文が垂下している。5は、口縁直下にナゾリによる無文帯を残し、以下に無節縄文Lが縦位回転で付されている。内外面とも炭化物の付着が著しい。6は、幅の広い無文帯を有する口縁部片で、破片の下端に1条の沈線が巡っている。

本壙からは44点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。早期の条痕文土器片が1～2点混入している。以上から、本壙の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。



第268図 第291号土壙出土遺物拓影図

第303号土壙（第328図）

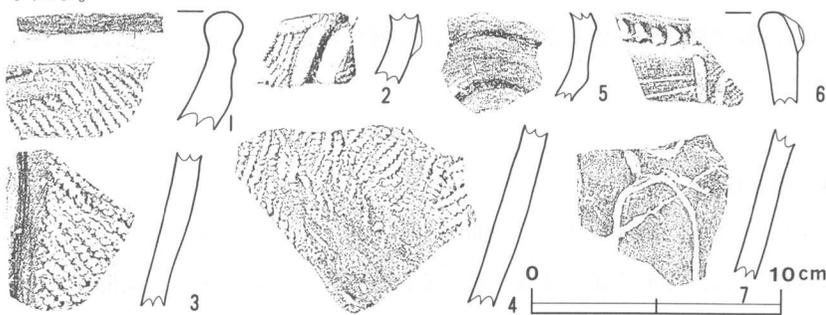
本土壙は、H5d₃区に確認され、第52号住居跡の南西側5mに位置している。平面形は、長径1.31m・短径1.05mの楕円形である。長径方向は、N-38°-Wを指している。壁は垂直に立ち上

がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、51cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から34点出土している。

第303号土壌出土土器（第269図1～7）

1は、口縁部文様帯が太めの沈線で楕円形に区画され、区画内に縄文を充填している。2は、隆線で曲線的モチーフを描くもので、口辺部片と思われる。3は、垂下する隆線間に複節縄文を施している胴部片である。4は、縄文だけが付されている胴下半部片で、破片の下半部は縦ナデにより無文となっている。5は、薄手の胴部片で、微隆線で曲線的モチーフが描かれている。6は、後期末の安行II式期の粗製土器の口縁部片である。口唇部が肥厚し、口縁直下に刺突を加えた1条の紐線が貼付され、以下の沈線区画内に縄文が充填されている。7は、細めの沈線で対向するU字状と逆U字のモチーフが描かれている胴部片で、地文は無文である。

本墳からは34点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅢ式期のものである。この中に1～2点、早期や後期の土器片が混入している。以上から、本墳の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。



第269図 第303号土壌出土遺物拓影図

第308号土壌（第337図）

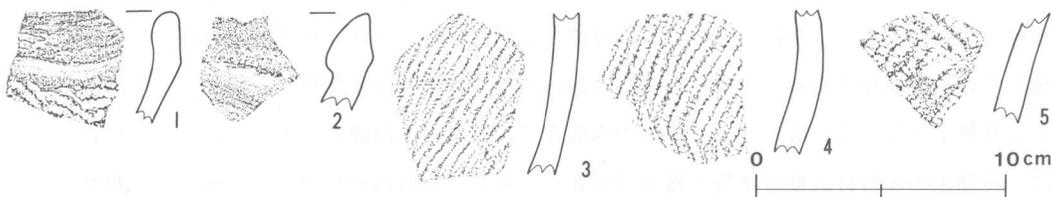
本土壌は、H4c₀区を中心に確認され、第52号住居跡の南西側5mに位置している。平面形は、長径2.13m・短径1.28mの不整楕円形である。長径方向は、N-67°-Wを指している。壁は垂直に立ち上がり、底面は中央から東側にかけて40cm差で2段に掘りこまれている。確認面からの深さは、最深部で74cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から22点出土している。

第308号土壌出土土器（第270図1～5）

1・2は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画しており、1は微隆線下に縄文を施しているが、2は無文のままで、丁寧にナデられている。3～5は、縄文だけの胴部片である。4・5は、縄

文の回転方向を途中で変え、羽状ないしは羽状に類似する効果をあげている。4の左端部には穿孔した痕跡が残されている。

本墳からは22点の土器片が出土しており、その主体は加曾利E IV式期のものである。早期の条痕文土器片も1点混入している。以上から、本墳の時期は加曾利E IV式期と考えられる。なお、本墳からは半穴の管状土製品が1点、有孔円板1点が出土している。



第270図 第308号土墳出土遺物拓影図

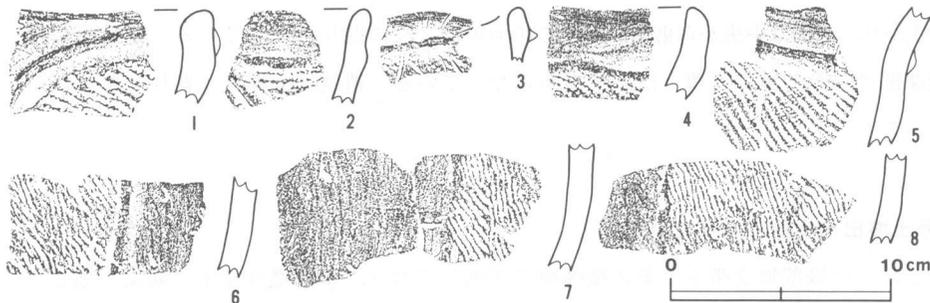
第309号土墳（第309図）

本土墳は、H4c₀区に確認され、第53号住居跡の南側0.5mに位置している。平面形は、径1.26mの不整円形で、北西がやや内側にへこんでいる。壁はほぼ垂直で、底面はやや起伏している。確認面からの深さは、最深部で50cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から49点出土している。

第309号土墳出土土器（第271図1～8）

1・2は、両側にナヅリを加えた微隆線により、曲線のモチーフを描く口縁部片で、2は口縁部に無文帯を有している。3は、小形の緩い波状を呈する口縁部片で、幅の狭い無文帯をやや高めめの1条の貼付微隆線で区画し、胴部には縄文地上に逆V字状の沈線区画を描き、区画内を磨消している。4・5は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文を施している。5は、口唇部を欠損した口辺部片である。6～8は、同一個体と考えられる胴部片であるが、接合はできない。微隆線を垂下させて幅の広い磨消帯を形成し、区画間に無節縄文が施文されている。

本墳からは49点の土器片が出土しており、そのほとんどが加曾利E IV式期のものである。した

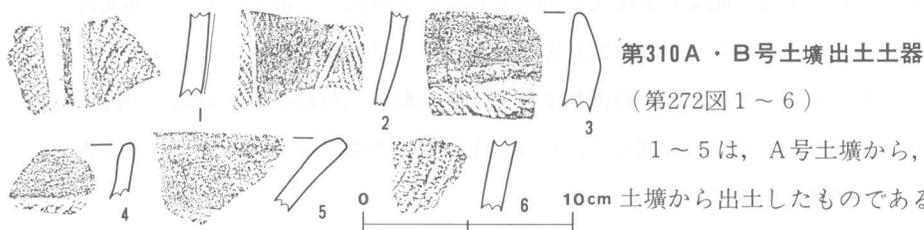


第271図 第309号土墳出土遺物拓影図

がって、本墳の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。なお、本墳からは磨石2点、軽石製品1点が出土している。

第310号土壌（第309・310図）

本土壌は、H4b₀区に確認され、第53号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。A・Bに分かれ、A号土壌の方は、長径1.31m・短径1.18mの楕円形である。長径方向はN-53°-Wを指している。B号土壌は径1.16mの円形である。どちらも壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、A号土壌が33cm・B号土壌が23cmである。なお、A号土壌には、中央に1か所のピットが掘られている。B号土壌は西側で、第338号土壌と重複している。新旧関係は、不明である。覆土は、A号土壌が5層、B号土壌が3層からなっている。遺物は、縄文土器片が両方の覆土から合わせて65点出土している。



第272図 第310A・B号土壌出土遺物拓影図

第310A・B号土壌出土土器

(第272図1～6)

1～5は、A号土壌から、6は、B号土壌から出土したものである。1は、隆線が垂下している胴部片で、縄文が地文として施されている。2は、薄手の胴部片で、細い沈線による曲線の区画が施され、区画内に縄文が充填されている。3・4は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区切り、以下に縄文が施されている。3は、無節縄文が施され、器面に炭化物が付着している。4は、小形土器である。5は、無文の口縁部片で、口唇部は平坦に作出されている。内面に稜を有している。横位の擦痕がみられる阿玉台式期の浅鉢形土器と思われる。6は、縄文だけの胴部片である。

A号土壌からは59点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅣ式期のものである。この中に5の阿玉台式土器片が1点混入している。以上から、本墳の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。なお、本墳からは土器片錘1点が出土している。

B号土壌からは6点の土器片が出土しているが、いずれも縄文だけのもので詳しい時期は不明である。この中に1点の赤彩された土器片が含まれている。

第312号土壌（第311図）

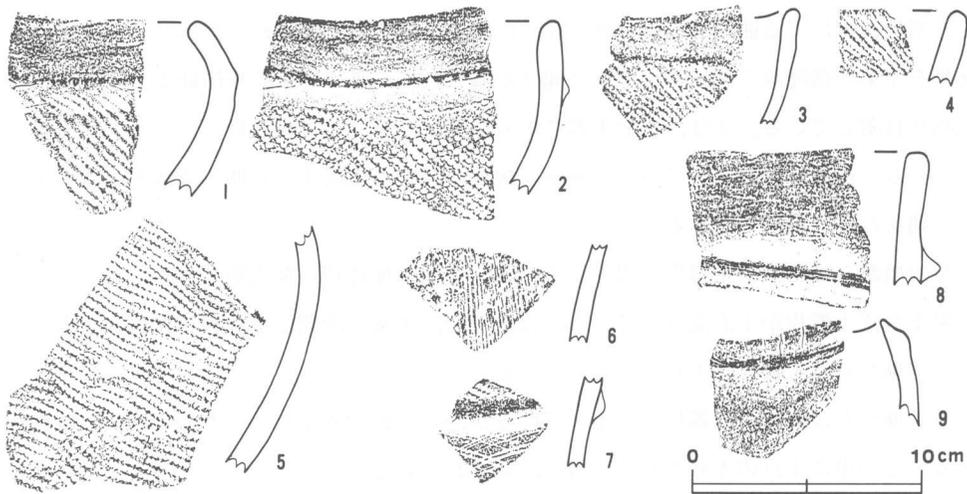
本土壌は、G5j₂区に確認され、第49号住居跡内に位置している。新旧関係は、住居跡の炉が本墳の壁を壊しているため、本墳が古いと考えられる。平面形は、長径1.24m・短径0.84mの楕

円形である。長径方向は、N-80°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は皿状に中央が凹んでいる。確認面からの深さは、96cmである。また、第49号住居跡の炉によって重複をうけ、炉による加熱が本土壌の覆土に達している。覆土は、5層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から34点出土している。

第312号土壌出土土器（第273図1～9）

1は、内湾の著しい口縁部片で、口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文を施しているが、器面の磨滅が目立つ。2は、口縁部無文帯を1条の断面三角形を呈する貼付微隆線で区画し、以下に縄文を付している。3は、波状を呈する薄手の口縁部片で、口縁部無文帯を1条の微隆線で区切り、以下に縄文を施しているが、器面の磨滅が著しい。5は、胴部片で拓本の右端に微隆線がみられ、他の部分には縄文が施文されている。4は、全面に無節縄文が施されている口縁部片である。6・7は、縄文と条線文が併用されている胴部片である。6は、縄文地文上に縦位の条線文が重ねられている。7は、貼付隆線を境に、上半に縄文、下半に条線文を斜格子目状に施文している。8は、幅の広い口縁部無文帯を1条の断面三角形を呈する高めの隆線で区画している。9は、内傾する波状口縁部片で、口縁直下に1条の微隆線を巡らし、以下を無文のままとするもので、特異なものである。

本壌からは34点の土器片が出土しており、主体は加曽利EⅣ式期のものである。したがって、本壌の時期は加曽利EⅣ式期と考えられる。



第273図 第312号土壌出土遺物拓影図

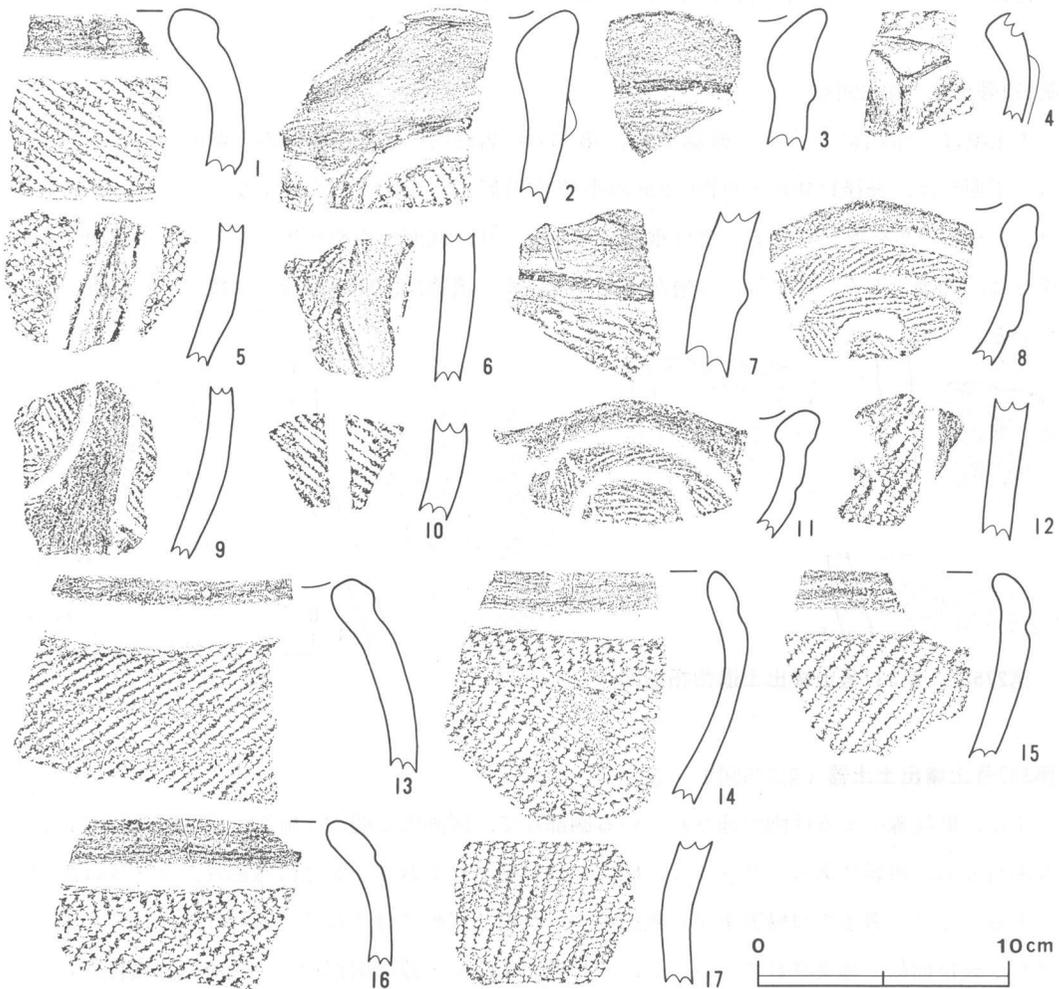
第333号土壌（第310図）

本土壌は、H4ds区を中心に確認され、第52号住居跡の北側10mに位置している。平面形は、長径1.03m・短径0.89mの楕円形である。長径方向は、N-54°-Eを指している。50cm差の2段

掘りこみで、壁は床面から垂直に立ち上がった後、外傾して立ち上がっている。底面は北東から南西にかけて坂状をなしている。確認面からの深さは、最深部で74cmである。覆土は、4層からなり、各層が交互に入りこんだ複雑な堆積をしている。遺物は、縄文土器片が覆土から22点出土している。

第333号土壌出土土器 (第274図 1～17)

1は、口縁部文様帯を沈線で楕円形に区画し、区画内に異条の単節縄文RLを横位回転で充填している。2～7は、隆線で曲線的モチーフを構成したり、区画を施しているもので、2～4・7は口縁部、口辺部片、5・6は胴部片である。2・3は、緩い波状縁を呈し、口縁部文様帯を隆線で区画し、2の区画内には縄文を施している。4は、薄手である。5・6は、2条単位の微隆線で直線的、曲線的区画を施し、区画内に縄文を施している。5は、内面の剝落が著しい。7は、内面の剝落が著しい。7



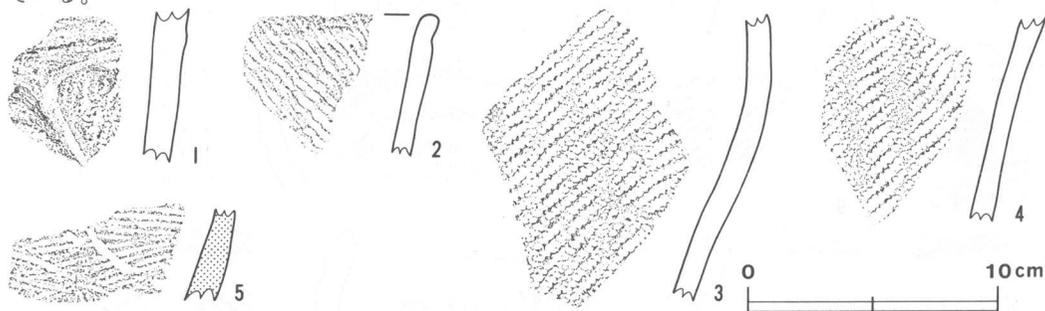
第274図 第333号土壌出土遺物拓影図

は、口縁部無文帯を1条の微隆線で区切り、以下に縄文を施している。8・11は、同一個体と思われるが接合はできない。緩い波状縁を呈し、沈線で渦巻状のモチーフを描き、モチーフ内に縄文を充填している。11は、器面がやや磨滅している。9・10・12は、沈線による施文が主となる胴部片である。9は、胴下半部片で、曲線的区画内に縄文を充填している。10は、縄文地文上に太めの沈線が1条垂下している。12は、直線的磨消帯を有しているが、器面の削落が著しい。13～16は、口縁部無文帯を1条の浅い凹線で区切り、以下に縄文を施している。13は、無文帯の幅が狭く、波状縁を呈するものと思われる。14・16は、縄文が類似しており、同一個体と思われる。17は、縄文だけの胴部のくびれ部片である。

本墳からは、22点の土器片が出土しており、そのほとんどが加曾利EⅢ式期のものである。したがって、本墳の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本墳からは土器片錘1点と若干の炭化材が出土しているが、材質は不明である。

第337号土壌（第329図）

本土壌は、H5d₁区を中心に確認され、第53号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径1.46m・短径0.9mの不整楕円形で、南側がやや狭くなっている。長径方向は、N-23°-Eを指している。壁は垂直に立ち上がり、底面はやや起伏している。確認面からの深さは、40cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から49点出土している。



第275図 第337号土壌出土遺物拓影図

第337号土壌出土土器（第275図1～5）

1は、低隆線による区画が施されている胴部片で、区画内に縄文が施されている。胎土には石英粒が目立ち、粗雑である。2～4は、縄文だけが施されており、2は口縁部片、3・4は胴部片である。2は、薄手で口縁直下から無節縄文Lが縦位回転で付されている。3・4は、単節縄文RLが縦位回転で施文されている。5は、早期の条痕文土器の胴部片で、表表面に横位に貝殻条痕文が付され、胎土に繊維の混入が著しい。

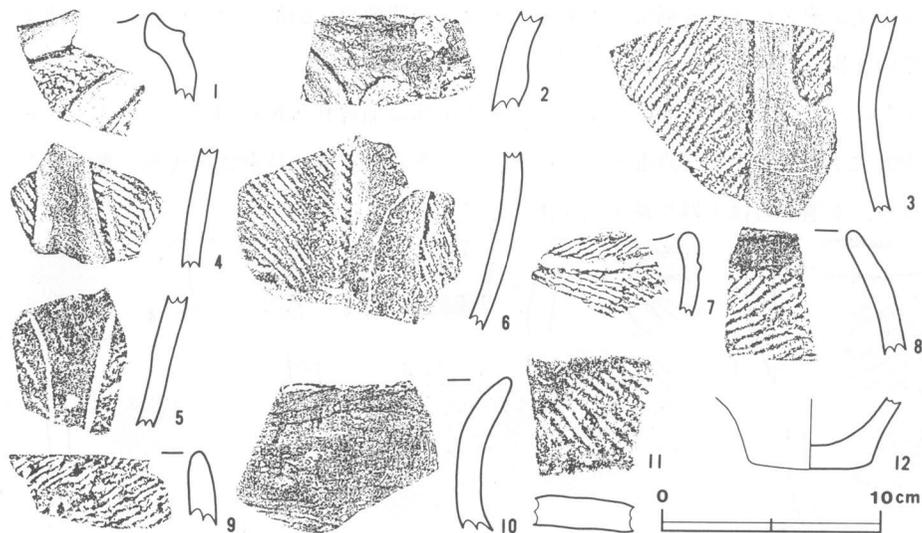
本墳からは49点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅢ式期のもので、早期の土器片は5の1点だけにすぎない。以上から、本墳の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本墳からは土器片錘1点が出土している。

第338号土墳（第333図）

本土墳は、H4b₀区に確認され、第53号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径0.7m（推定）・短径0.47m（推定）の楕円形と思われ、長径方向はN-43°-Eを指している。東側で第310B号土墳と重複している。壁は垂直に立ち上がり、墳底は平坦である。確認面からの深さは、52cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から47点出土している。

第338号土墳出土土器（第276図1～12）

1～4・6は、微隆線による施文が主となるもので、1は口縁部片、2～4・6は胴部片である。1は、波状を呈する口縁部片で、微隆線による曲線的区画内に縄文を充填している。2は、微隆線による区画だけが施され、現存部には縄文はみられない。3・4・6は、微隆線による曲線的区画内に縄文を施している。3は、くびれ部片である。5は、曲線的な沈線区画内に縄文が充填されている胴部片であるが、器面の磨滅が著しい。7は、口縁直下の1条の沈線を境に縄文の施文方向を変えている口縁部片である。全体的に整形が悪い。8は、内傾する口縁部片で、口縁部無文帯を有し、以下に縄文を付している。9は、全面に縄文が施されている。10は、無文の口縁部片で、全体的に強く外反し、口唇部は薄く尖り気味になっている。11は、縄文が施された



第276図 第338号土墳出土遺物実測図・拓影図

橋状把手の破片である。

12は、本壙の覆土から出土した底部片である。外面は斜位のナデ、底面の近くは横ナデが加えられている。内面は粗雑なナデが施されている。胎土に小石粒や細砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は5.6cmで、現存高は3.2cmである。

本壙からは47点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅣ式期のものである。したがって、本壙の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。なお、本壙からは土製円板1点が出土している。

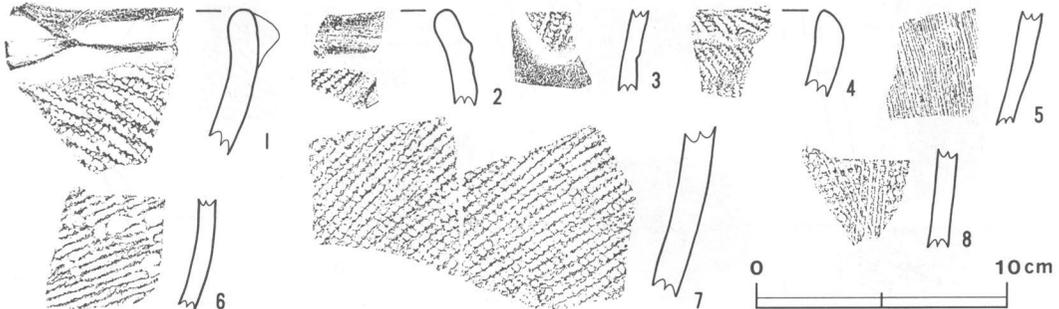
第346号土壙（第342図）

本土壙は、H4e₇区に確認され、第46号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径1.88m・短径1.71m（推定）の不定形と思われ、長径方向は、N-38°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、75cmである。覆土は、4層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から90点出土している。

第346号土壙出土土器（第277図1～8）

1・2は、微隆線による施文が主となる口縁部片である。1は、幅の狭い口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、以下に縄文を付している。無文帯の一部は、左右からの微隆線のせり上りにより突出している。2は、口縁部無文帯を有し、胴部にも微隆線による施文が認められる。3は、曲線的な沈線区画内に縄文を充填している胴部の小片である。4・6・7は、縄文だけが施文されており、4は、全面に施されている口縁部片である。6は、薄手の胴部片で、無節縄文が付されているが、内外面とも剥落が著しい。7は、拓本の右側に炭化物が付着している。5は、縦位の密な条線文が施されている胴部片である。8は、後期前半の胴部片で、粗い縄文の地文上に縦位、斜位の沈線文が付されている。

本壙からは90点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅣ式期のものである。8の他に早期の条痕文土器片も1～2点混入している。以上から、本壙の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。なお、本壙からは土器片錘1点が出土している。



第277図 第346号土壙出土遺物拓影図

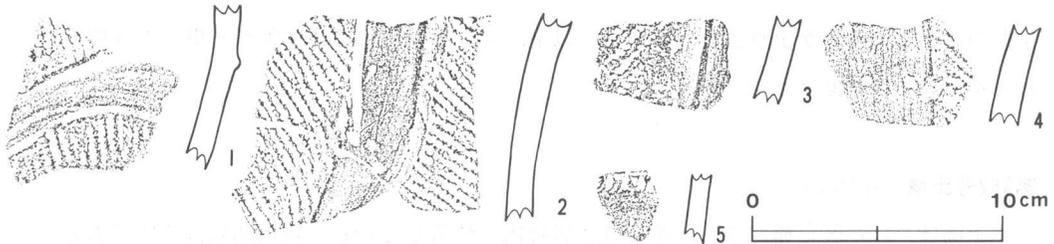
第354号土壙（第310図）

本土壙は、H5f₂区を中心に確認され、第62号住居跡の北側7mに位置している。平面形は、径1.5mの円形である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、100cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から28点出土している。

第354号土壙出土土器（第278図1～5）

1～4は、いずれも微隆線による曲線的区画内に縄文を充填している胴部片である。5は、薄手の胴部片で、破片の上端に爪形状の刺突文を付している。阿玉台式土器片である。

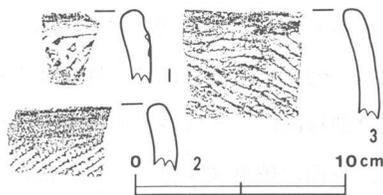
本壙からは28点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅣ式期のものである。5の他に土師器の細片も混入している。以上から、本壙の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。なお、本壙からは搔器1点が出土している。



第278図 第354号土壙出土遺物拓影図

第355号土壙（第342図）

本土壙は、H4f₇区を中心に確認され、第46号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径0.95m・短径0.58mの不定形である。長径方向は、N-0°を指している。壁は外傾して立ち上がり、底面にはピット1か所を有しており、凹凸がある。確認面からの深さは、最深部で51cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から13点出土している。



第279図 第355号土壙出土遺物拓影図

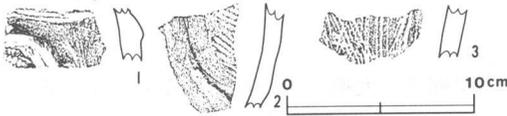
第355号土壙出土土器（第279図1～3）

1は、口縁部に大形の爪形文を1列付している。
2・3は、口縁部に無文帯を残し、以下に縄文を施している。2は単節、3は無節縄文である。

本壙からは13点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。したがって、本壙の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。

第361号土壌（第330図）

本土壌は、H5j₃区に確認され、第77号住居跡と接して位置している。平面形は、長径2.14m・短径1.18mの楕円形である。長径方向は、N-44°-Eを指している。壁は外傾しているが、垂直に近い立ち上がりである。底面には3か所のピットがみられ、凹凸している。確認面からの深さは、最深部で40cmである。覆土は、4層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から11点出土している。



第361号土壌出土土器（第280図1～3）

1は、口辺部片で、隆線で口縁部文様帯を楕円形に区画し、区画内に縄文を施している。2は、微隆線による曲線の区画内に縄文を充填している胴部片である。3は、条線文が縦位、斜位に施文されている胴部片である。

本壌からは11点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ～Ⅳ式期のものである。この中に早期の条痕文土器片が1点出土している。以上から、本壌の時期は加曾利EⅢ～Ⅳ式期と考えられるが、詳しい時期は不明である。

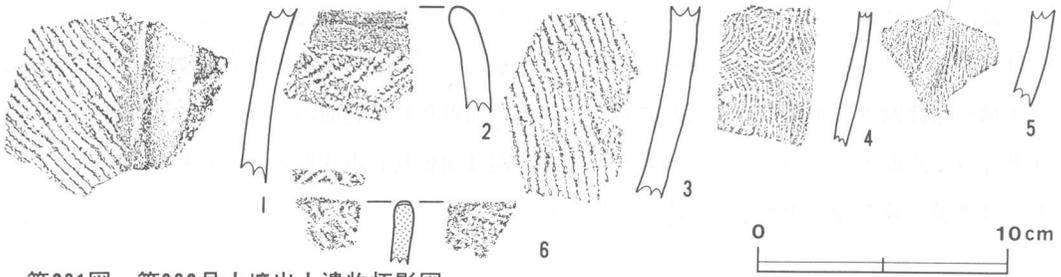
第362号土壌（第343図）

本土壌は、H5i₂区に確認され、第77号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径2.95m・短径1.75m（推定）の不整楕円形状と思われる。北西側が外側に突出した形をしている。長径方向は、N-45°-Eを指している。壁は垂直に立ち上がり、底面には多数のピットがあり凹凸が著しい。確認面からの深さは、最深部で42cmである。覆土は、13層からなり、大部分の層は締まっている。7・8・10・11層には、焼土が含まれており各層が交互に入りこんだ複雑な堆積をしている。遺物は、縄文土器片が覆土から50点出土している。

第362号土壌出土土器（第281図1～6）

1は、微隆線による区画内に縄文を施している胴部片で、胎土には石英粒や雲母片の混入が多い。2は、口縁部無文帯を有し、以下に縄文を施している。3は、縄文だけの胴部で、焼成は不良である。4・5は、条線文が付されている胴部片である。4は曲線的に、5は浅く密に施文されている。6は、早期の口縁部片で、表面に斜位の貝殻条痕文、裏面に擦痕文を付し、口唇部にキザミ目を方向を変えて施している。胎土に繊維を含んでいる。

本壌からは50点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅣ式期のものである。早期のものは6の1点だけである。以上から、本壌の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。



第281図 第362号土壌出土遺物拓影図

第363号土壌 (第334図)

本土壌は、I5a₃区を中心に確認され、第77号住居跡の東側3mに位置している。遺構の $\frac{1}{4}$ ほどが農道下に広がっているため、全体が調査できなかった遺構である。平面形は、長径2.13m(推定)・短径1.73mの楕円形状と思われる。長径方向は、N-9°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面はわずかに起伏している。確認面からの深さは、32cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から17点出土している。



第282図 第363号土壌出土遺物拓影図

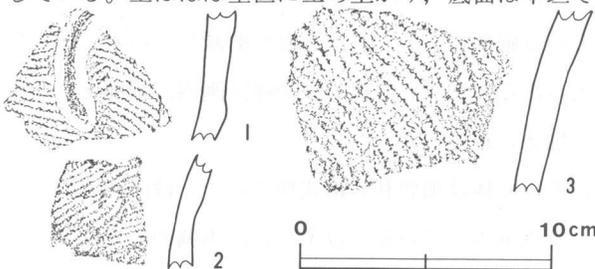
第363号土壌出土土器 (第282図1~3)

1は、太く浅い沈線で弧状の区画を施し、区画内を磨消し、区画外に縄文を施している胴部片である。2は、直線的磨消帯を有する胴部片である。3は、縄文地文上に1本の隆帯を貼付し、隆帯上に斜位のキザミ目を付している。類例の少ない資料と思われる。

本壌からは17点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。早期の条痕文土器片が1点混入している。以上から、本壌の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。

第364号土壌 (第343図)

本土壌は、I5a₂区を中心に確認され、第77号住居跡の南側1mに位置している。平面形は、長径2.43m・短径2.11mの不整楕円形で、北側が外に突出している。長径方向は、N-90°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、29cmである。



第283図 第364号土壌出土遺物拓影図

覆土は、4層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から24点出土している。

第364号土壌出土土器

(第283図1~3)

1は、両側にナズリを加えた隆線により曲線的モチーフを描く胴部片である。2・3は、縄文だけの胴部片である。2は、くびれ部片で縄文は細かい。3は、厚手で粗い縄文が付されている。

本壙からは24点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。早期の条痕文土器片も1点混入している。以上から、本壙の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本壙からは土器片錘1点が出土している。

第365号土壙（第331図）

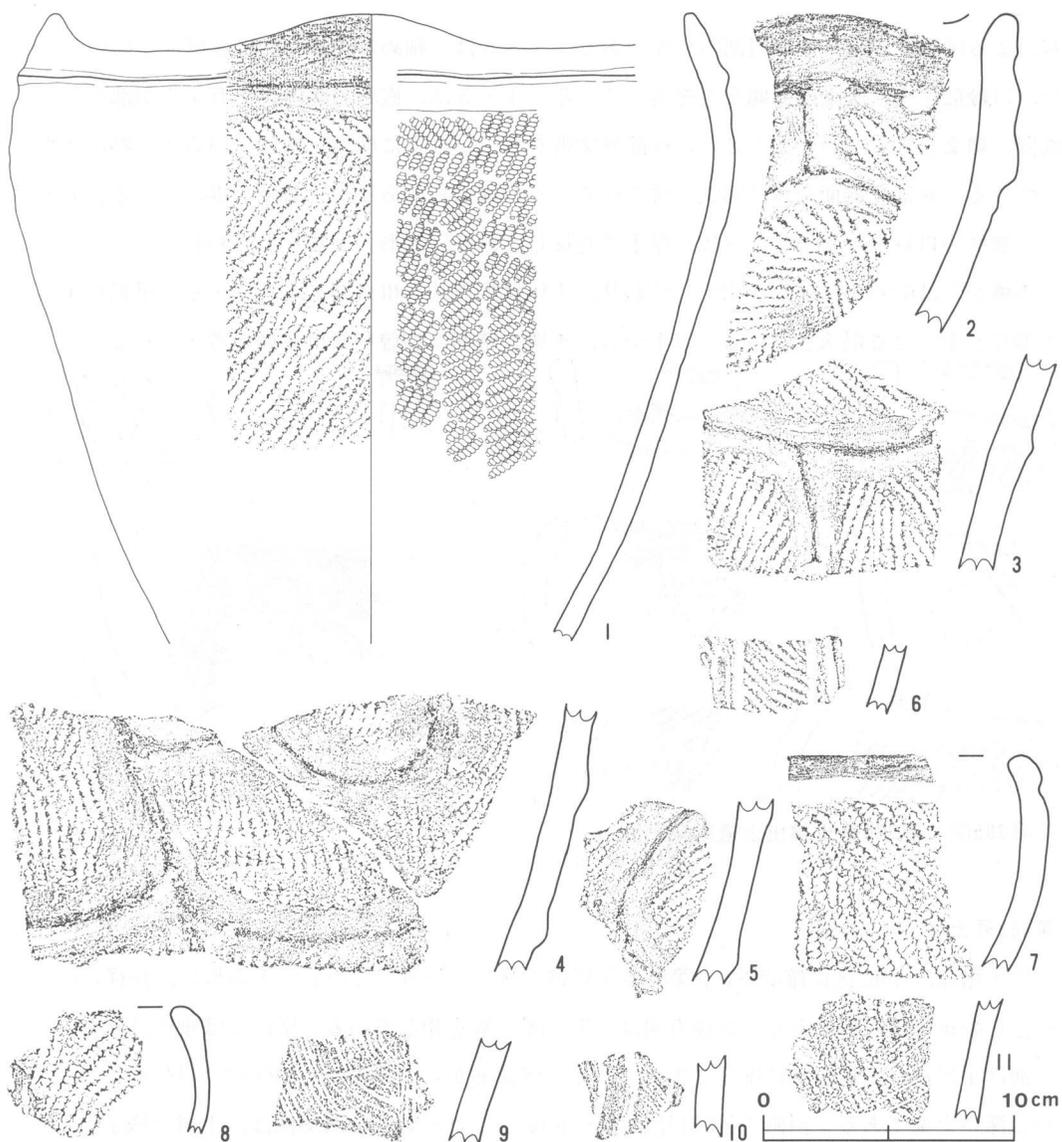
本土壙は、H5j₂区を中心に確認され、第77号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径1.95m・短径1.2mの楕円形である。長径方向は、N-60°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は80cm差で2段に掘りこまれ、中央から北にかけて60cm程深くなっている。確認面からの深さは、最深部で93cmである。覆土は、4層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から58点出土している。

第365号土壙出土土器（第284図1～11）

1は、本壙の覆土から出土した4単位の緩い波状縁を呈する深鉢形土器で、胴下半部以下を欠損している。口縁部無文帯を1条のナズリを加えた微隆線で区画し、以下に単節縄文RLを全面に付している。微隆線の直下は約1cmほどの無文部を残している。縄文は縦位回転を主とし、口縁直下の一部は横位、胴下半部は斜位回転されている。現存部の下半部には炭化物の付着がみられる。内面は横ナデが施されているが、剥落や磨滅がみられ、明瞭ではない。胎土には小石粒や砂粒を含み、少しざらざらしている。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈している。胴下半部の一部は、2次加熱のためか褐色を呈している。推定口径は25.2cmで、現存高は25.1cmである。

2～5は、両側にナズリが加えられ、断面が三角形に近い形状を呈する隆線により、器面全体に大柄な曲線的モチーフが描かれ、モチーフ間には縄文が充填されている。2は、緩い波状を呈する口縁部片で、他は胴部片である。6は、幅の狭い直線的磨消帯が垂下する胴部片で、内面には炭化物の付着が著しい。7は、口縁部無文帯を1条の沈線を巡らして区画し、以下に縄文を施している。8は、口唇部が肥厚する薄手の口縁部片で、縄文地文上に太めの沈線文が加えられている。9は、条線文が曲線的に施文されている胴部片であるが、器面が磨滅している。10・11は、後期の胴部片で、本壙への混入品と考えられる。10は、曲線的な沈線区画内に細縄文を充填している。11は、粗い縄文地文上に斜沈線が加えられている。

本壙からは58点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅢ式期の新しい段階のものである。10・11の他に早期の条痕文土器片も1～2点混入している。以上から、本壙の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本壙からは土器片錘4点、土製円板2点が出土している。



第284図 第365号土壙出土遺物実測図・拓影図

第370号土壙 (第313図)

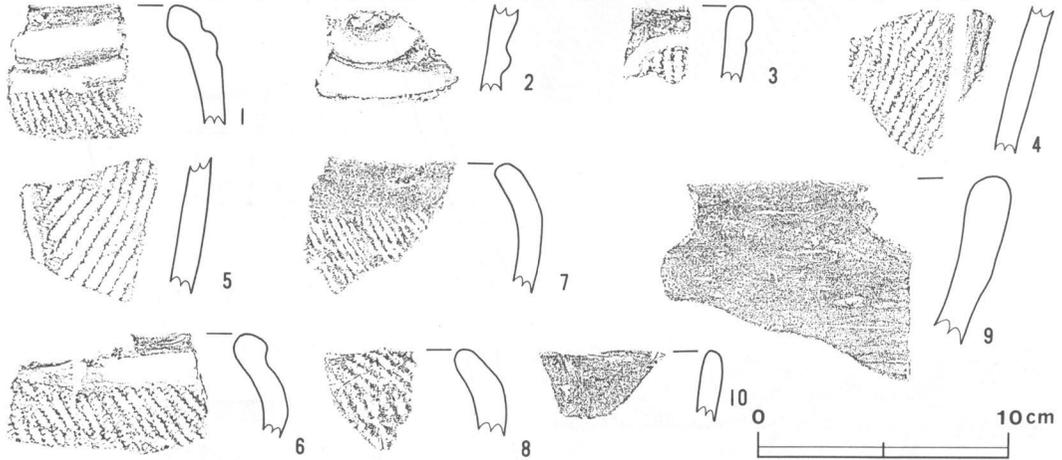
本土壙は、H5j₃区に確認され、第77号住居跡の南東側2 mに位置している。平面形は、径1.28 m (推定)の円形状と思われる。北側で第360号土壙と、南側で第363号土壙と重複している。新旧関係は、不明である。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、61 cmである。覆土は、4層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から63点出土している。

第370号土壙出土土器 (第285図1~10)

1・6は、口縁部様帯をための沈線で楕円形に区画し、区画内に縄文を施している。2は、隆

線による区画がみられる口辺部の小片である。3～5は、細めの沈線で文様を構成している。3は、口縁部片で、区画内に縄文を充填している。4・5は、直線的磨消帯を有する胴部片で、区画間に縄文を施している。7は、口縁部無文帯を有し、以下に縄文を施しているが、器面が磨滅している。8は、器面全体に縄文が付されている口縁部片であるが、磨滅が進んでいる。9・10は、無文の口縁部片である。9は、厚手で外反しており、大形の土器片と思われる。

本墳からは63点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。早期の条痕文土器片が1～2点混入している。以上から、本墳の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。



第285図 第370号土墳出土遺物拓影図

第383号土墳 (第311図)

本土墳は、H4h₀区に確認され、第56号住居跡と接して位置している。平面形は、長径1.58m・短径1.42mの楕円形である。長径方向は、N-18°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、136cmで6区の中では2番めに深い土墳である。西側で第384号土墳と重複しているが、新旧関係は、土層の様子からみて本土墳が新しいと考えられる。覆土は、4層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から67点出土している。

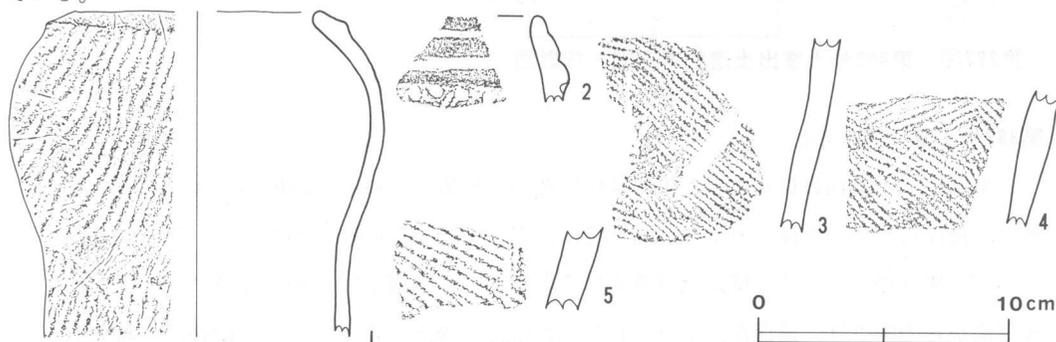
第383号土墳出土土器 (第286図1～5)

1は、本墳の覆土から出土した小形深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部が強く内湾し、頸部でくびれて胴下半部に至る器形を呈している。口縁部の幅の狭い無文帯を1条の微隆線で区画し、以下は単節縄文RLを縦位回転で全面に施文している。外面のくびれ部から下半部にかけては剥落や磨滅がみられ、わずかに炭化物も付着している。内面上半部は横ナデを施しているが、下半部は磨滅や剥落が著しく、整形方向は不明である。胎土に小石粒や砂粒

を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は9.8cmで現存高は13.0cmである。

2は、内傾する口縁部片で、口縁部に2条の沈線を巡らし、直下に円形刺突文を一系列並べ、以下に縄文を施している。3は、縄文地文上に浅い凹線が斜位に付されている胴部片である。4・5は、縄文だけを施している胴部片である。4は、縄文の走向を変え、一部は羽状に施している。破片の上端は肥厚しており、輪積み部分で剥がれている。5は、厚手である。

本壙からは67点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものであるが、磨滅したり、剥落した破片が目立ち、図示できないものが多い。早期の条痕文土器片も2～3点混入している。以上から、本壙の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本壙からは土器片錘1点が出土している。



第286図 第383号土壙出土遺物実測図・拓影図

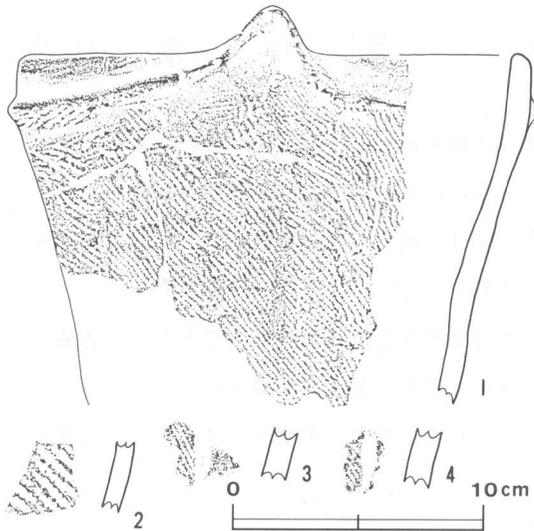
第388号土壙 (第342図)

本土壙は、H4i_s区を中心に確認され、第70号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径1.42m・短径1.15mの不定形である。長径方向は、N-52°-Wを指している。確認面からの深さは、18cmである。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、5層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から12点出土し、接合の結果、深鉢形土器が復元されている。

第388号土壙出土土器 (第287図1～4)

1は、本壙の覆土から出土した破片5点が接合したもので、山形の突起部を有する深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。幅の狭い口縁部無文帯を貼り付けによる断面三角形を呈する隆線で区切り、以下に無節縄文Lを縦位回転を主に施している。内面上半部は横ナデ、下半部は縦ナデを施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は19.8cmである。

2～4は、胴部の小片である。2は、縄文だけが施され、器面に炭化物が付着している。3・



第287図 第388号土壌出土遺物実測図・拓影図

4は、太めの沈線区画内に細縄文が充填されている。胎土には大粒の石英粒を多量に含み、両者は同一個体と考えられる。

本墳からは12点の土器片が出土しているが、細片で図示できないものが多い。しかし、器形復元できた1から判断すれば、本墳の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。

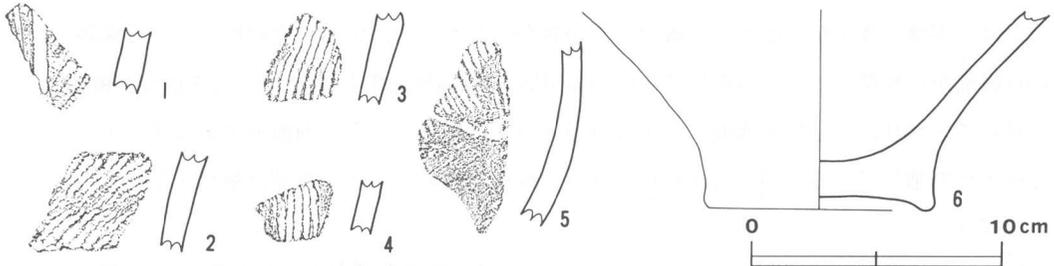
第389号土壌（第343図）

本土壌は、H4j_s区に確認され、第70号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径1.52m・短径1.01m・0.58mで、円形と方形を合わせた形をしている。長径方向は、N-60°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は20cm差で2段に掘りこまれている。確認面からの深さは、最深部で30cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から52点出土している。

第389号土壌出土土器（第288図1～6）

1～5は、いずれも胴部の小片である。1は、直線的磨消帯を有し、区画間に縄文を付している。2は、縄文だけが施されている。3～5は、無節縄文が施されており、同一個体と考えられるが接合はできない。5は、胴下半部片で、破片の下半部は無文となっている。

6は、本墳の覆土から出土した底部片である。外面は、縦、斜方向のナデ、底面の近くは横ナデが加えられているだけで無文である。内面は軽いナデが施されている。底面は周縁を除いて凹み、ナデにより調整されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈して



第288図 第389号土壌出土遺物実測図・拓影図

いる。底径は9.2cmで、現存高は7.8cmである。

本墳からは52点の土器片が出土しているが、加曾利EⅢ式期のものと称名寺式期のものが混出しており、本墳の時期は不明である。なお、本墳から磨製石斧1点が出土している。

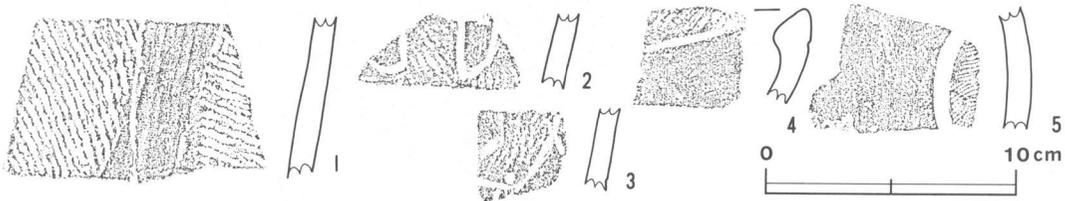
第390号土壌（第311図）

本土壌は、H4j_s区に確認され、第70号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、径0.6mの円形である。壁は外傾して立ち上がり、墳底は皿状に中央が凹んでいる。確認面からの深さは、21cmで浅い。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から29点出土している。

第390号土壌出土土器（第289図1～5）

1は、直線的磨消帯を有する胴部片で、区画間に縄文を施している。沈線区画はなされていない。2・3は、曲線的な沈線区画を施している胴部片で、2はV字状の区画内を磨り消し、3は区画内に縄文を施している。これら3点は中期のもので、4・5は、後期の称名寺式期のものである。4は、口唇部が内側に肥厚する口縁部片で、細めの沈線区画内に縄文を施している。5は、太めの沈線区画内に縄文を充填している胴部片である。

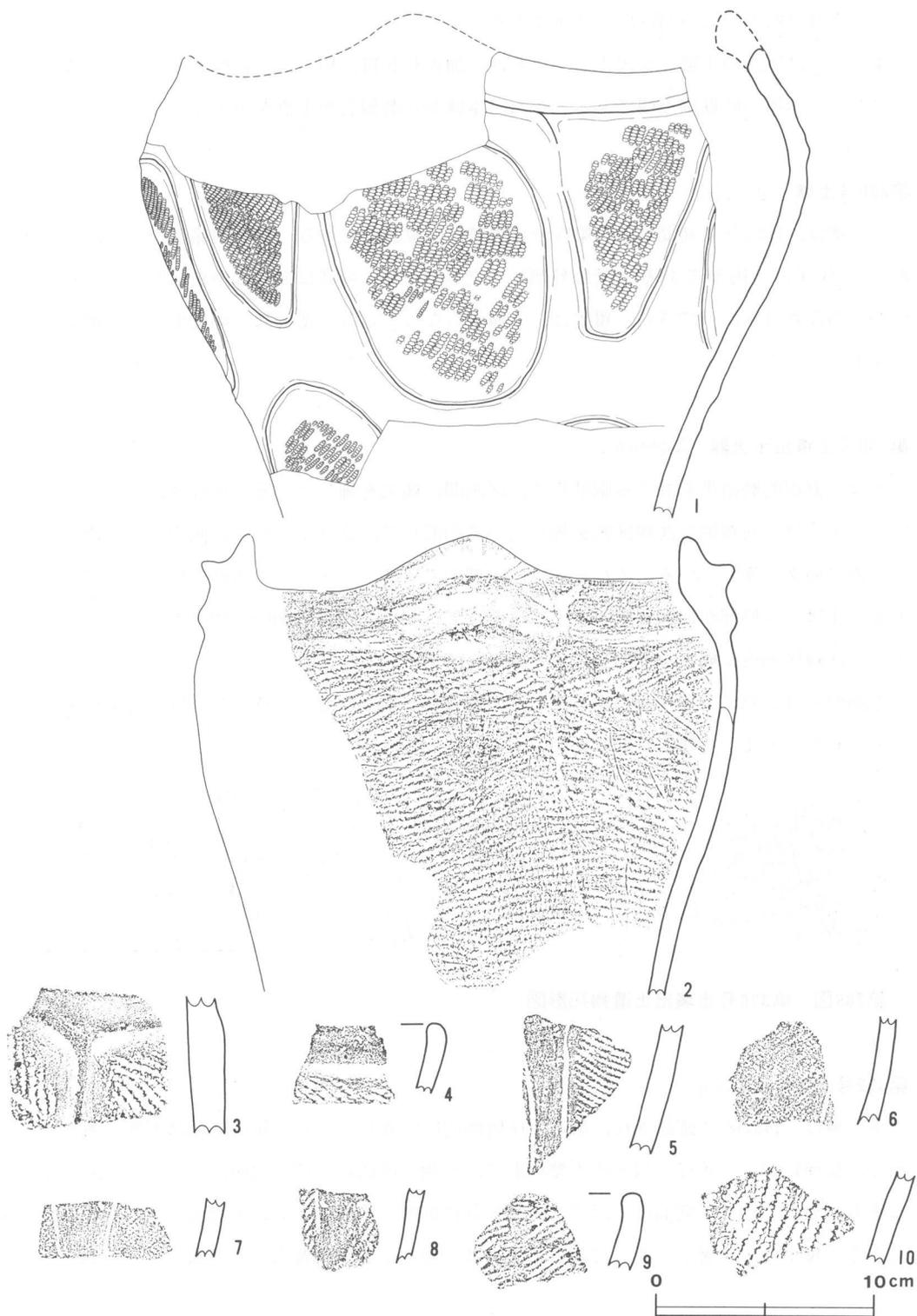
本墳からは29点の土器片が出土しており、加曾利E式期のものと称名寺式期のものが混在している。したがって、本墳の時期は不明である。



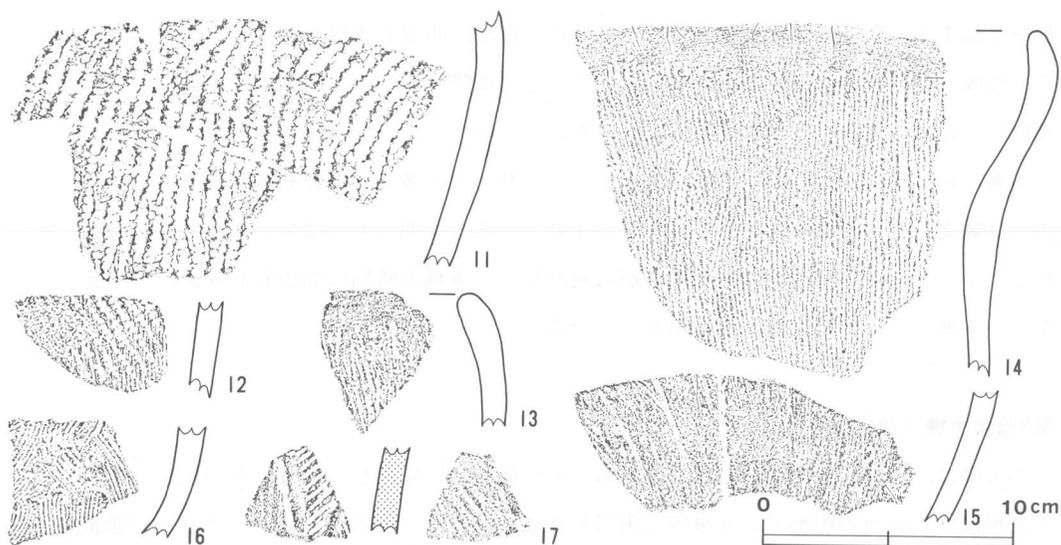
第289図 第390号土壌出土遺物拓影図

第392号土壌（第313図）

本土壌は、I4a_s区に確認され、第71号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径1.26m・短径0.74mの不整円形で、北西・南西の一部が内側にへこんでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で、円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは、84cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から多量に出土し147点を数える。



第290图 第392号土壤出土遺物実測図・拓影図 (1)



第291図 第392号土壌出土遺物拓影図(2)

第392号土壌出土土器 (第290～291図 1～17)

1は、本壙の中央部および南側の覆土下位、底面から10cmほど浮いた状態で正位で出土した大破片2点が接合したもので、4単位の波状口縁を呈する深鉢形土器である。口縁部無文帯を微隆線で区画し、胴部に微隆線による曲線的モチーフを描き、モチーフ内に単節縄文RLを縦位回転で施文している。モチーフ外の部分がH字状を呈するようにみられる点は注目される。器面の内外に剥落が認められ、特に内面は激しい。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内外面とも暗褐色を呈している。推定口径は26.7cmで、現存高は21.5cmである。

2は、本壙の東側の覆土から一括して出土した破片が接合したもので、緩い4単位の波状口縁を呈し、口縁部が緩く内湾し、胴部に向けてすぼまっている。波頂部下には舌状の突起が大小2個上下に付されている。口縁部無文帯を1条の浅い凹線で区切り、以下全面に単節縄文LRが斜位回転で、条が横走するように施文されている。器面の磨滅が認められる。内面は横ナデにより整形されている。胎土には細砂を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は20.2cmで、現存高は20.9cmである。

3は、隆線による区画間に縄文が施されている胴部片である。4は、口縁部無文帯を1条の沈線で区切り、以下に縄文を施している。5～8は、細い沈線で曲線的モチーフが描かれ、区画内に縄文を充填している。9～11は、縄文だけが施されている。9は、全面に無節縄文が施されている口縁部片で、10・11は、単節縄文が付されている胴部片である。12は、縄文と縦位の条線文が併用されている胴部片である。13～16は、条線文だけが施されている。13・14は、施文が共通し、同一個体と考えられる。口縁部に幅の狭い無文帯を有し、以下に縦位の条線文を付している深鉢形土器で、口縁部が内湾し、頸部がくびれ、胴部が若干張り出す器形を呈している。15は、

胴下半部片で、密な縦位の条線文を付している。16は、曲線的条線文が施されている胴部片である。17は、早期のもので胎土に繊維を含んでいる。微隆起線による区画内に細沈線を斜行させて充填している。裏面には斜位の条痕文が付されている。

本墳からは147点と多くの土器片が出土しており、その多くは加曾利EⅣ式期のもので、この中には縄文が施された橋状把手の破片も含まれている。早期のものは17の1点だけで混入と思われる。1・2およびその他の出土土器から判断して、本墳の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。なお、本墳からは土器片錘2点が出土している。

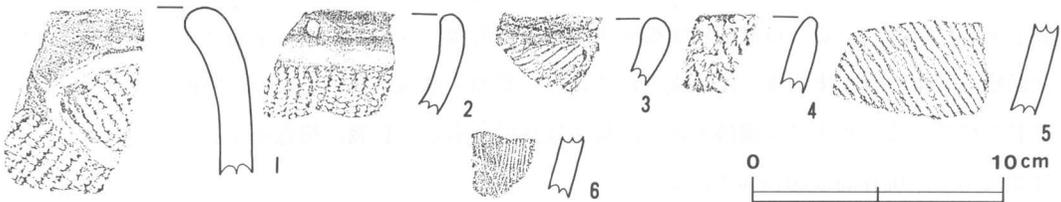
第393号土壌（第313図）

本土壌は、I4a7区を中心に確認され、第73号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は径1.28mの円形で、北東側で第71号住居跡のピットと接している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、50cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から45点出土している。

第393号土壌出土土器（第292図1～6）

1は、口縁部文様帯を沈線で楕円形に区画し、区画内外に縄文を充填している。2は、口縁部無文帯を1条の沈線で区切り、以下に条が縦走る縄文が施されている。3～5は、無節縄文を施しており、3・4は口縁部片、5は胴部片である。3は、口縁部無文帯をわずかに残し、4は全面に施文されている。6は、縦位の条線文を付している胴部の小片である。

本墳からは45点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。したがって、本墳の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。



第292図 第393号土壌出土遺物拓影図

第394号土壌（第338図）

本土壌は、I4a7区に確認され、第71号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径1.15m・短径0.9mの不整楕円形である。長径方向は、N-75°-Wを指している。壁はフラスコ状に立ち上がり、袋状の掘りこみである。底面は、やや皿状に中央が凹んでいる。確認面からの深さは、70cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から

100点出土している。

第394号土壇出土土器 (第293図 1~16)

1は、本壇の覆土から出土したもので、緩く内湾する口縁部を有し、頸部がややくびれる器形を呈している。口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し、その直下に円形刺突文を並べている。以下全面に単節縄文LRを斜位回転を主に施文しているが、部分的に横位や縦位の箇所もみられる。内面は横ナデされている。胎土に小石粒、砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が暗褐色を呈している。推定口径は22.6cmで、現存高は17.5cmである。

2は、低隆線が垂下し、隆線外に縄文を施している胴部片である。胎土には石英粒や雲母片の混入が多く、色調は灰黄褐色を呈している。3は、口縁直下にわずかの無文帯を有し、以下に逆U字状の磨消帯を施している。4・5・7は、口縁部無文帯を1条の浅い凹線で区画し、以下に



第293図 第394号土壇出土遺物実測図・拓影図

縄文を施している。4・5は、共通する内湾する形状と縄文を有しており、同一個体と思われる。7は、内湾せずやや外反している。6は、沈線による磨消帯を有する薄手の胴部片である。8～10は、口縁部無文帯を有し、以下に縄文を施している。9は、やや内湾する器形を呈し、8・10は、やや外反している。8・9の縄文は単節、10は無節である。11・12は、縄文だけの胴部片である。12は、大形深鉢形土器の胴下半部片で、破片の上半には大粒の単節縄文L Rが斜位回転で施文され、下半は無文となっている。13・14は、条線文が付されている胴部片である。13は、胴下半部の湾曲する部分の破片で、逆U字状の沈線区画内に縦位の粗い条線文を充填している。14は、条線文が曲線的に施文されている。

15は、本墳の覆土から出土した底部片で、外面は横ナデ、内面はナデが施されている。胎土には小石粒や砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が暗褐色を呈している。底径は5.9cmで、現存高は3.6cmである。

16は、本墳の覆土から出土した底部片で、外面は縦ナデ、底面の近くは横ナデにより調整されている。内面および底面は剥落が著しい。器壁は薄い。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は6.0cmで、現存高は4.9cmである。

本墳からは100点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。したがって、本墳の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本墳からは土器片錘6点が出土している。

第398号土壙（第331図）

本土壙は、I4b区に確認され、第61号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径0.75m・短径0.54mの楕円形である。長径方向は、N-42°-Eを指している。北西側で第399号土壙と重複している。新旧関係は、不明である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、54cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から61点出土している。

第398号土壙出土土器（第294図1～9）

1は、本墳の覆土からまとめて出土した破片5点が接合したもので、深鉢形土器の胴部片で、くびれはやや緩い。胴下半部には太めの沈線で逆U字状のモチーフが描かれ、内部に単節縄文R Lが縦位回転で充填されている。破片の上端にも沈線文が認められるので、胴上半部にもU字状の区画が施されていたものと思われる。区画外の無文部は縦ナデが加えられ、内面上半部は横ナデ、下半部は縦ナデが施されている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は、外面が黒褐色を主としているが、灰褐色の部分もみられる。内面は褐色を呈している。推定最大胴径は32.8cmで、現存高は18.2cmである。



第294図 第398号土壇出土遺物実測図・拓影図

2は、本壇の覆土から出土した4点の破片が接合したもので、口縁部が内湾する小形深鉢形土器である。口縁直下に1条の凹線を巡らし、以下は無節縄文Lを縦位回転で施文している。器壁は6mm程度と薄手である。外面には剥落が認められる。内面は横ナデにより整形されている。胎土には細砂を含み、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定口径は13.8cmで、現存高は8.9cmである。

3は、両側に強いナヅリが加えられた隆線で大柄な曲線文を描く胴部片である。4は、幅の広い口縁部無文帯を有し、以下に縄文を付している。5・6は、同一個体と思われる胴部片で、全面に縄文が施されている。5の外面にはとほところ剥落があり、拓本の左端は特に著しい。7～9は、縄文だけが施されている、胴部の小片である。7は粗い縄文を付し、8は薄手である。9は胴下半部片で、破片の下端は無文となっている。

本壇からは61点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅢ式期のものである。したがって、本壇の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本壇からは土器片錘1点が出土している。

第402号土壇（第311図）

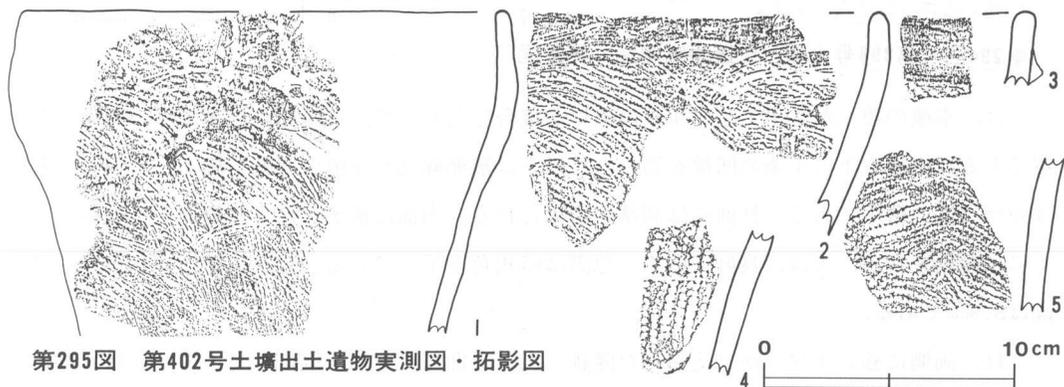
本土壇は、I4b₉区に確認され、第68号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、径1.09mの円形である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、54cmである。覆土は、2層からなっているが、1層が主で、2層は壁の一部がくずれたものと考えられる。遺物は、縄文土器片が覆土から24点出土している。

第402号土壇出土土器（第295図1～5）

1は、本壇の覆土から一括して出土した破片10数点が接合したもので、深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。全体に整形が悪く、内外面共に凹凸が激しい。口縁部には無節縄文が施され、その上から粗い条線文が弧状を呈するように乱雑に加えられている。胴部には縄文は付されていない。内面には縦ナデが雑に施されている。胎土には細砂を含み、焼成は不良である。色調は暗褐色を呈している。推定口径は18.9cmで、現存高は13.0cmである。

2は、1と同一個体と思われるが接合はしない。3は、口縁部無文帯を1条の貼付隆線で区画し、以下に縄文を付している。4は、曲線的な沈線区画内に縄文を施している胴部片である。5は、縄文だけが施された胴部片である。

本壇からは24点の土器片が出土しており、その主体は加曽利EⅢ式期のものである。早期の条痕文土器片も1点混入している。以上から、本壇の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。なお、本壇からは土器片錘1点が出土している。



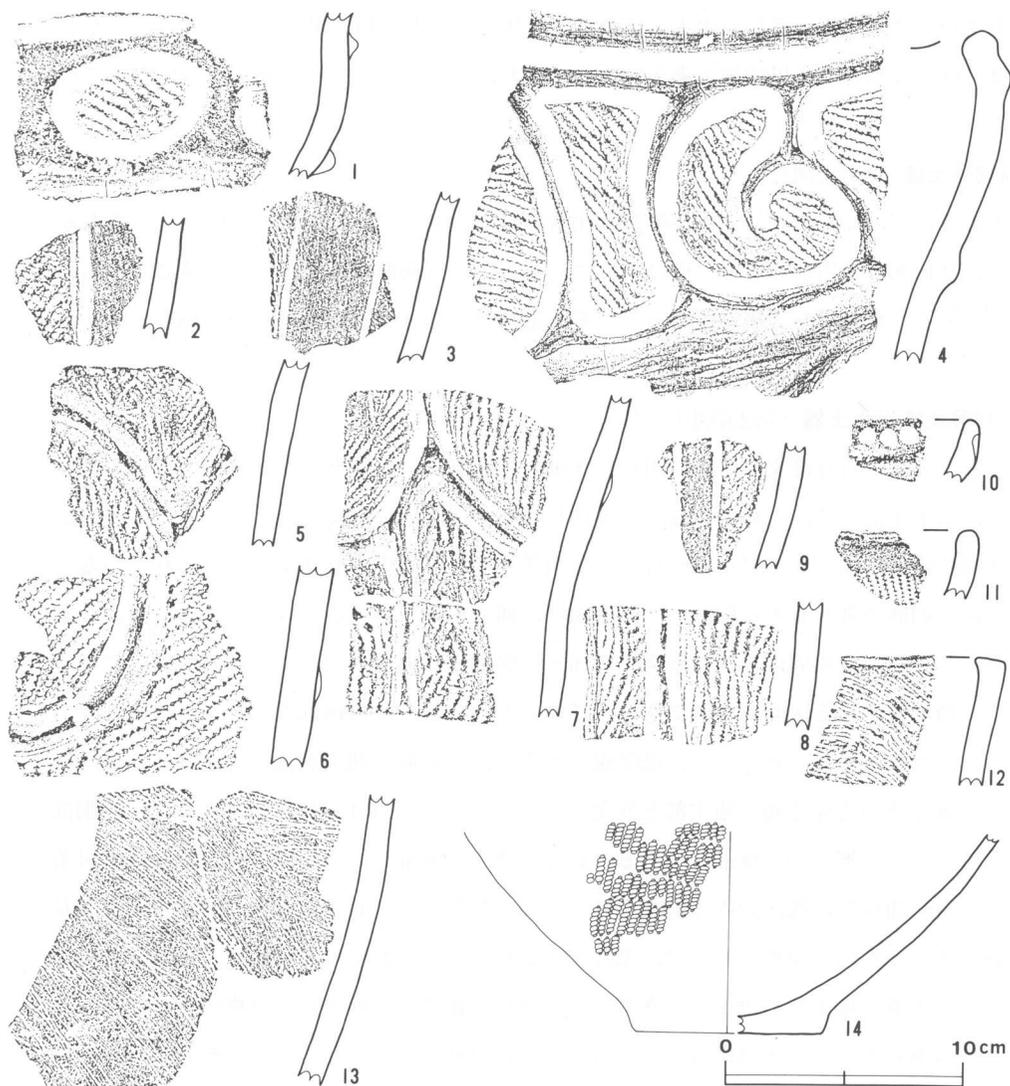
第412号土壇（第312図）

本土壇は、I4d₇区を中心に確認され、第80号住居跡の北側3mに位置している。平面形は、長径1.45m・短径1.29mの楕円形である。長径方向は、N-27°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は中央から北東にかけて30cm差で2段に掘りこまれている。確認面からの深さは、最深部で70cmである。覆土は、5層からなり、各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物

は、縄文土器片が覆土から60点出土している。

第412号土壌出土土器 (第296図1~14)

1は、隆線で口縁部文様帯を楕円形に区画し、区画内に縄文を充填している口辺部片で、器面は磨滅しているが、一部に赤彩された痕跡を残している。2・3・9は、直線的磨消帯を有する胴部片で、区画間に縄文を施している。2・3の磨消帯は幅が広く、9は幅が狭い。4~8は、両側にナゾリを加えた隆線により大柄な曲線のモチーフが構成されるもので、モチーフ間に縄文が充填されている。4は、波状縁を呈する大形土器片で、渦巻状と縦長の区画文を組みあわせて1単位とする文様が構成されるものと思われ、頸部に無文帯を有している点に特徴がみられる。



第296図 第412号土壌出土遺物実測図・拓影図

充填されている縄文は単節LRである。5・7・8は、器壁の厚さや縄文の施文の手法が共通し、同一個体と思われる胴部片である。6は、やや厚手の胴部片である。10は、口縁部の小片で、口縁直下に円形刺突文を付している。刺突文は下から突き上げるように施されている。11は、口縁部に無文帯を残し、以下に縄文を施している。12は、口唇部が平坦でやや外削ぎ状に作出された口縁部片で、器面全体に反撚りの縄文が付されている。13は、乱雑な斜位の条線文が施された胴部片である。

14は、本壙の覆土から出土した底部片で、外面には単節縄文RLが斜位回転で施文されている。底面の近くは横ナデ、内面は縦ナデを丁寧に加えている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈している。推定底径は7.9cmで、現存高は8.5cmである。

本壙からは60点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅢ式期のものである。したがって、本壙の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本壙からは土器片錘1点が出土している。

第416号土壙（第312図）

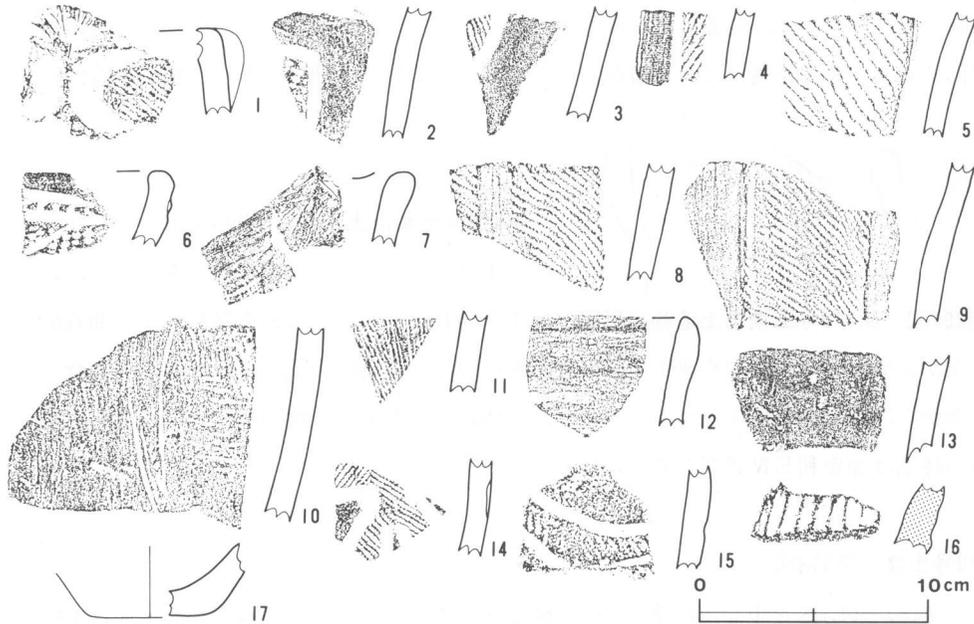
本土壙は、I4e₉区に確認され、第74号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、径1.06mの円形である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、40cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から48点出土している。

第416号土壙出土土器（第297図1～17）

1は、隆線で口縁部文様帯を楕円形に区画し、区画内に細縄文を充填している口辺部片である。2は、胴下半部片で、太めの沈線による逆U字状の区画内に縄文を施している。3・14は、太めの沈線で幾何学的モチーフが描かれている胴部片で、区画内に細縄文が充填されている。4・5は、直線的磨消帯を有する胴部片で、区画間に縄文を施している。6は、口縁直下に2条の沈線を巡らし、この沈線間に小さな刺突文を加え、胴部には縄文地文上に沈線文を施している。7～9は、微隆線による区画内に縄文を施しているもので、7は口縁部片、8・9は胴部片である。7は、波状縁を呈し、8・9は、微隆線が垂下し、区画間に縄文を施している。10は、胴下半部片で、雑な浅い沈線で縄文施文部と無文部を分けている。11は、縦位の条線文だけの胴部の小片である。12は、無文の口縁部片である。13は、無文の胴部片で、内面に炭化物が厚く付着している。15は、曲線の沈線区画内に縄文を施している胴部片で、胎土には大粒の石英粒を多量に含み、粗雑である。16は、早期のもので、微隆起線が縦位に施されている胴部片である。

17は、本壙の覆土から出土した底部片で、整形が雑で、底面の近くは横ナデが加えられている。胎土には微砂を含み、焼成は良好である。色調は暗灰褐色を呈している。推定底径は5.6cmで、現存高は2.0cmである。

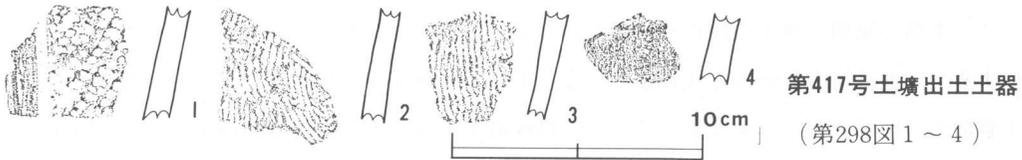
本壙からは48点の土器片が出土しているが、加曾利EⅢ、Ⅳ式期および称名寺式期のものが混在しており、早期の条痕文土器片も1点出土している。したがって、本壙の時期は不明である。なお、本壙からは土器片錘2点が出土している。



第297図 第416号土壙出土遺物実測図・拓影図

第417号土壙 (第314図)

本土壙は、I4d₇区に確認され、第74号住居跡内に位置している。新旧関係は、本壙の方が古い。平面形は、径1.01m (推定) の円形状と思われる。第74号住居跡のピットによって西側を壊されている。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、15cmである。覆土は、2層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から24点出土している。



第298図 第417土壙出土遺物拓影図

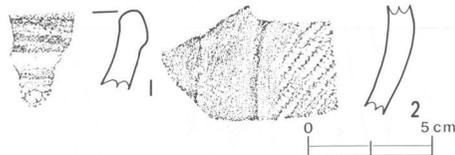
第417号土壙出土土器
(第298図1~4)

1は、直線的磨消帯を有し、区画間に粗い縄文を施している胴部片である。2・3は、細かな無節縄文が施されている胴部片で同一個体と思われる。4は、無文の胴部の小片で、縦位の擦痕文がみられる。

本壙からは24点の土器片が出土しており、その主体は加曾利EⅢ式期のものである。したがって、本壙の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。なお、本壙からは土器片錘1点が出土している。

第419号土壌 (第331図)

本土壌は、H4i₃区を中心に確認され、第82号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径1.29m・短径1.03mの楕円形である。長径方向は、N-37°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面には2か所のピットがあり、起伏が著しい。確認面からの深さは、最深部で36cmである。覆土は、4層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から22点出土している。



第419号土壌出土土器 (第299図1~2)

1は、口縁直下に1条の沈線を巡らし、以下に縄文を施している。2は、微隆線による曲線的区画内に縄文が充填されているやや薄手の胴部片である。胎土には細かい長石や石英粒を多く含んでいる。

第299図 第419号土壌出土遺物拓影図

本壌からは22点の土器片が出土しており、主体は加曾利EⅣ式期のものである。したがって、本壌の時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。

第420号土壌 (第318図)

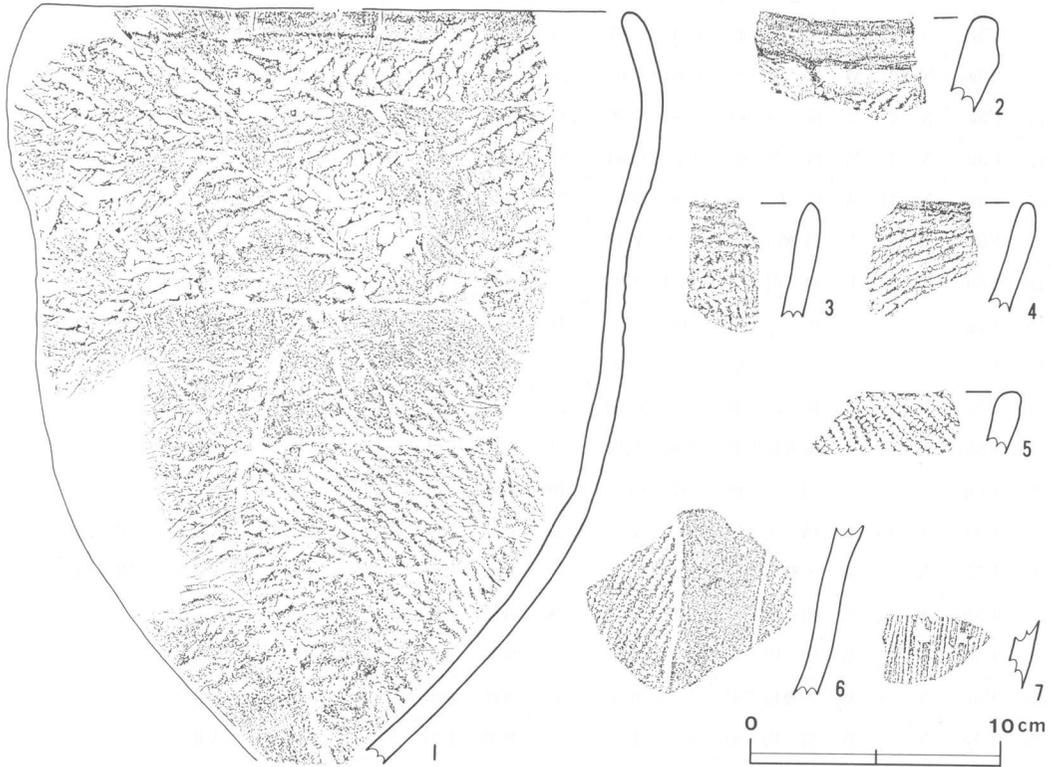
本土壌は、H4i₃区を中心に確認され、第82号住居跡内に位置している。新旧関係は不明である。平面形は、長径1.41m・短径1.26mの不整楕円形で、南西の一部が内側に凹んでいる。長径方向は、N-15°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、57cmである。覆土は、3層からなっている。遺物は、縄文土器片が覆土から35点出土している。

第420号土壌出土土器 (第300図1~7)

1は、本壌の東側の覆土上面の確認面から一括して出土した土器片が接合したもので、底部を欠損するが、他は縦半分弱ほど残存している。平縁で口縁部は少し内湾し、頸部は若干くびれ、以下胴部から底部に向けてすぼまっている。口縁直下に浅いナデによる凹線を巡らし、以下は全体に太く粗い無節縄文Lを施文している。胴下半部は、縦ナデが加えられ無文となっている。内面上半部は横ナデ、下半部は縦ナデを加えている。胎土には細砂を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は23.6cmで、現存高は30.0cmである。

2は、微隆線による文様が主となる口縁部片で、区画内に縄文を施している。3~5は、全面に縄文が施されている口縁部片である。3・4は、口縁部にわずかに無文帯を残している。3・5は単節、4は無節縄文である。6は、細い沈線の曲線的モチーフ内に縄文を充填している胴部片である。7は、縦位の条線文が施されている胴部の小片である。

本墳からは35点の土器片が出土しており、その主体は加曾利E IV式期のものである。したがって、本墳の時期は加曾利E IV式期と考えられる。なお、本墳からは土器片錘1点出土しており、この土器片錘は同一個体の断欠2点からなっているが、接合はできない。



第300図 第420号土壌出土遺物実測図・拓影図

表2 土 壌 一 覧 表 (6区)

(1)

番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物 (点)	形態分類	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)							
1	G6b ₉	N-64°-W	楕円形	3.87×2.02	64	外傾	皿状	9	-	(20)	AⅢ2b	
2	E5i ₅	N-78°-W	不整円形	1.60×1.35	55	外傾	平坦	3	-		AⅡ2b	
3	E5i ₆		円形	径 0.60	24	外傾	平坦	4	-		AⅠ1b	
4	E5i ₆		円形	径 0.74	17	外傾	平坦	3	-		AⅠ1b	
5	E5j ₆		円形	径 0.89	30	外傾	平坦	3	-		AⅠ1b	
6	E5h ₈	N-72°-E	楕円形	2.02×1.46	113	垂直	起伏	8	-		BⅢ3b	
7	E5i ₇		円形	径 0.81	26	外傾	平坦	3	-		AⅠ1b	
8	E5i ₇	N-40°-E	楕円形	1.17×0.90	27	外傾	平坦	5	-		AⅢ1b	
9	F5e ₅	N-6°-W	楕円形	2.34×1.30	30	外傾	平坦	6	-		AⅢ1b	
10	F5f ₆	N-21°-W	長楕円形	2.70×1.10	20	外傾	平坦	3	-		AⅢ1b	

(2)

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ビット数	出土遺物 (点)	形態分類	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
11	F5f7		円形	径 0.70	20	外傾	平坦	4	—		A I 1b	
12	F5g7	N-57°-W	楕円形	0.92×0.67	15	外傾	平坦	5	—		A I 1b	
13	F5g6	N-61°-W	楕円形	0.84×0.62	28	外傾	平坦	3	—		A I 1b	
14	F5g7	N-47°-W	楕円形	0.94×0.70	23	垂直	平坦	3	—		B I 1b	
15	F5g7	N-45°-W	楕円形	1.22×0.84	30	外傾	平坦	3	—		A II 1b	
16	F5g7	N-44°-W	楕円形	0.95×0.75	27	外傾	平坦	3	—		A I 1b	
17	F5f9	N-35°-E	長楕円形	2.50×1.17	37	外傾	平坦	2	—		A III 1b	
18	F5d9	N-63°-E	楕円形	1.01×0.83	25	外傾	平坦	3	—		A II 1b	
19	F5g9		円形	径 1.25	31	外傾	平坦	5	—	(1)	A II 1b	
20	F5i8		円形	径 0.92	19	外傾	平坦	2	—		A I 1b	
21	F5i0	N-54°-W	楕円形	1.19×0.99	21	外傾	平坦	2	—		A II 1b	
22	F6h1	N-37°-W	隅丸長方形	2.65×1.00	71	垂直	平坦	5	—	第346図 1 (9)	E III 2b	
23	F6g2		円形	径 0.95	19	外傾	平坦	2	—		A I 1b	
24	F5a7	N-18°-E	楕円形	1.21×1.10	26	外傾	平坦	7	—		A II 1b	SK-25と隣接
25	F5i7	N-45°-W	不整楕円形	1.49×1.02	29	外傾	平坦	7	—		A II 1b	SK-24と隣接
26	F5b6	N-50°-E	楕円形	0.98×0.78	28	外傾	平坦	4	—		A I 1b	
27	F5c7	N-35°-W	楕円形	2.24×1.48	27	外傾	平坦	2	—		A III 1b	
28	F5e6	N-16°-W	不整楕円形	1.15×0.67	30	外傾	平坦	3	—		A II 1b	
29	F5e6	N-3°-W	楕円形	1.28×1.05	32	外傾	平坦	4	—		A II 1b	
30	F5f7	N-26°-W	楕円形	1.05×0.84	25	外傾	平坦	3	—		A II 1b	
31	F5d4		円形	径 2.30	27	外傾	平坦	3	—		A III 1b	
32	F5e2	N-51°-E	不整楕円形	1.40×1.12	20	外傾	平坦	4	—		A II 1b	
33	F5f1		円形	径 0.83	18	外傾	平坦	2	—		A I 1b	
34	F4f0		不整円形	径 1.62	20	外傾	平坦	4	—		A II 1b	
35	F4f0		不整円形	径 1.02	21	外傾	平坦	2	—		A II 1b	
36	F4g0	N-12°-W	楕円形	0.87×0.76	23	外傾	平坦	3	—		A I 1b	
37	F4g0	N-17°-E	楕円形	0.78×0.70	29	外傾	平坦	3	—	第346図 2~3 (3)	A I 1b	
38	F4g0		円形	径 0.87	22	外傾	平坦	2	—	第346図 4~5 (2)	A I 1b	
39	F5f5		(円形)	径 (1.10)	45	外傾	平坦	—	—		A II 1b	SK-40と重複
40	F5f5		(円形)	径 (1.93)	48	外傾	平坦	6	—		A II 1b	SK-39と重複
41	F5g6		円形	径 1.14	25	外傾	平坦	2	—		A II 1b	
42	F5j5	N-28°-W	不整楕円形	1.49×0.85	70	垂直	平坦	3	—	第346図 6~7 (5)	B II 2b	
43	F5j6		円形	径 1.30	12	外傾	平坦	2	1		A II 1a	
44	F5j7	N-58°-W	楕円形	1.10×1.00	18	外傾	平坦	3	—		A II 1b	
45	F5j7	N-50°-W	不整楕円形	1.94×1.62	23	外傾	平坦	4	—		A II 1b	

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物(点)	形態分類	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
46	F5f ₈	N-75°-E	楕円形	1.22×0.97	30	外傾	平坦	4	—	第346図 8~9 (5)	AⅡ1b	
47	F5j ₈	N-59°-W	楕円形	0.96×0.84	25	外傾	平坦	3	—		AⅠ1b	
48	F5j ₉	N-65°-W	楕円形	1.16×0.93	21	外傾	平坦	5	—	(3)	AⅡ1b	
49	F5j ₉	N-37°-W	楕円形	1.40×1.15	24	外傾	平坦	3	—		AⅡ1b	
50	E5j ₀	N-48°-W	楕円形	1.00×0.90	10	外傾	平坦	3	—		AⅡ1b	
51	F6j ₁	N-15°-W	長楕円形	2.25×0.90	13	外傾	平坦	1	—		AⅢ1b	
52	F5i ₉	N-33°-W	楕円形	1.95×1.48	37	外傾	平坦	4	—		AⅡ1b	
53	F4j ₈		(円形)	径 (1.31)	32	外傾	平坦	5	2		AⅡ1a	SK-54と重複
54	F4j ₈		(円形)	径 (1.05)	37	外傾	凹凸	3	—	第346図 10-12(6)	AⅡ1b	SK-53と重複
55	F4j ₈	N-9°-E	楕円形	0.86×0.75	22	外傾	平坦	3	—		AⅠ1b	
56	F4i ₈		円形	径 1.65	33	外傾	平坦	4	—		AⅡ1b	
57	F4j ₆	N-85°-W	不定形	2.01×1.53	42	外傾	起伏	4	—	(21)	EⅢ1b	
58	F4j ₇		円形	径 1.22	22	外傾	平坦	2	—	第346図 13 (8)	AⅡ1b	
59	F6i ₄	N-85°-E	楕円形	1.00×0.86	25	外傾	平坦	2	1		AⅠ1a	
60	F6g ₃		円形	径 1.09	20	外傾	平坦	2	—		AⅡ1b	
61	F5b ₉	N-58°-W	楕円形	A1.75×1.30 B1.20×1.12	A82 B73	垂直	平坦	9	—	(9) (46)	EⅡ1b	
62	F6c ₁	N-15°-W	楕円形	1.03×0.90	22	外傾	平坦	2	—		AⅡ1b	
63	F6c ₁		円形	径 1.20	23	外傾	平坦	3	—	(25)	AⅡ1b	
64	F6d ₁	N-37°-E	楕円形	0.86×0.79	36	外傾	平坦	4	—		AⅠ1b	
65	F6d ₁		円形	径 0.86	30	外傾	平坦	2	—		AⅠ1b	
66	F6d ₁	N-31°-W	楕円形	0.90×0.76	17	外傾	平坦	2	—	第346図 14 (3)	AⅠ1b	
67	F6e ₂	N-78°-E	楕円形	1.14×1.02	27	外傾	平坦	6	—	第346図 15-16(5)	AⅡ1b	
68	F6e ₂	N-68°-E	楕円形	0.80×0.64	25	外傾	平坦	3	—		AⅠ1b	
69	F6d ₃		円形	径 1.38	104	垂直	平坦	5	—	(69)	BⅡ3b	
70	F6e ₄		円形	1.55×1.49	46	外傾	平坦	4	—	第346図 17-18(3)	AⅡ1b	
71	F6f ₃	N-51°-E	不整楕円形	1.08×0.77	24	外傾	平坦	3	—		AⅡ1b	
72	F6f ₄	N-29°-W	不整楕円形	1.31×1.07	50	外傾	平坦	3	—		AⅡ2b	
73	F6h ₅		(円形)	径 (0.87)	22	外傾	平坦	2	—	(4)	AⅠ1b	
74	F6h ₅	N-83°-W	楕円形	2.20×0.80 A3.00×1.90	20 A17	外傾	起伏 平坦	7 5	—	(27)	EⅢ1b EⅢ1b	
75	G5c ₈	N-0°	不整方形	辺 1.37	19	外傾	平坦	2	—		AⅡ1b	
76	F5j ₄	N-56°-W	不整楕円形	1.80×1.51	73	外傾	平坦	5	—	第346図 19-20(14)	AⅡ2b	SK-118と重複
77	F6g ₆	N-57°-E	不定形	2.53×1.56	20	外傾	平坦	2	—		EⅢ1b	
78	F6i ₈	N-22°-W	楕円形	1.57×1.32	72	外傾	平坦	6	—	(24)	AⅡ2b	
79	F6i ₇		円形	径 0.82	66	垂直	平坦	4	—	(20)	BⅠ2b	
80	F6i ₈	N-66°-E	不整楕円形	1.40×0.78	25	外傾	平坦	3	—		AⅡ1b	

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物 (点)	形態分類	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
81	F6i ₉		円形	径 1.10	60	垂直	平坦	1	—		BⅡ ₂ b	
82	F6j ₀	N-18°-W	(不定形)	1.43×(1.25)	33	外傾	平坦	5	—	第346図 21 (4)	EⅡ ₁ b	SK-83と重複
83	F6i ₀		(不定形)	1.30×(1.25)	31	外傾	平坦	7	—		EⅡ ₁ b	SK-82と重複
84	F6j ₀	N-55°-W	楕円形	1.25×1.10	24	外傾	皿状	3	—	(2)	AⅡ ₁ b	
85	F6j ₀		円形	径 1.20	26	外傾	平坦	4	—	(2)	AⅡ ₁ b	
86	炉穴											
87	G6a ₀	N-42°-W	楕円形	0.90×0.80	15	外傾	平坦	3	—	(5)	AⅠ ₁ b	
88	炉穴											
89	G6a ₅	N-33°-W	楕円形	1.04×0.87	17	外傾	平坦	4	1		AⅡ ₁ a	
90	G6a ₅	N-47°-W	不整楕円形	1.56×0.90	92	垂直	平坦	5	—	(5)	BⅡ ₂ b	
91	G5e ₄	N-40°-W	(楕円形)	1.65×(0.85)	42	外傾	平坦	5	—		AⅡ ₁ b	SK-132と重複
92	F6j ₄		不整円形	径 1.35	23	外傾	平坦	2	—	第346図 22 (7)	AⅡ ₁ b	
93	G6a ₅	N-30°-E	楕円形	0.83×0.73	15	外傾	平坦	5	1	第346図 23-24(2)	AⅠ ₁ a	
94	G6b ₅	N-63°-E	楕円形	1.60×1.45	17	外傾	平坦	5	—		AⅡ ₁ b	
95	G6d ₆	N-52°-E	楕円形	1.12×0.98	13	外傾	平坦	2	—	第346図 25-26(3)	AⅡ ₁ b	
96	G6e ₆	N-48°-W	楕円形	1.16×0.95	34	外傾	平坦	4	—	第346図 27-28(4)	AⅡ ₁ b	
97	G6c ₄	N-43°-E	隅丸方形	1.34×0.91	25	外傾	平坦	2	—	第346図 29-30(7)	DⅡ ₁ b	SK-98と重複
98	G6d ₄	N-43°-E	(長方形)	(2.33)×0.84	12	外傾	平坦	4	—		DⅢ ₁ b	SK-97と重複
99	H6e ₄	N-40°-E	不整楕円形	1.42×1.18	53	外傾	平坦	4	—	第346図 31 (7)	AⅡ ₂ b	
100	G6f ₄	N-18°-E	楕円形	1.32×1.18	52	外傾	平坦	4	—	第346図 32-33(6)	AⅡ ₂ b	
101	G6c ₂	N-17°-W	不整楕円形	1.48×1.15	16	外傾	平坦	5	4	第346図 34-35(3)	AⅡ ₁ a	
102	G6c ₂	N-48°-E	不整楕円形	1.16×1.10	13	外傾	平坦	3	—		AⅡ ₁ b	
103	G6d ₁	N-50°-W	楕円形	0.97×0.73	10	外傾	平坦	5	—		AⅠ ₁ b	
104	G6c ₁	N-36°-E	隅丸方形	1.03×0.82	17	外傾	平坦	2	—		DⅡ ₁ b	
105	G6b ₁	N-42°-W	楕円形	1.32×1.05	19	外傾	平坦	2	—		AⅡ ₁ b	
106	G5a ₀		円形	径 0.67	15	外傾	平坦	2	—		AⅠ ₁ b	
107	G5a ₉	N-56°-W	楕円形	1.07×0.70	13	外傾	平坦	2	—		AⅡ ₁ b	
108	G5b ₉	N-23°-W	楕円形	1.12×1.02	17	外傾	平坦	3	—		AⅡ ₁ b	
109	G5a ₈	N-12°-W	楕円形	0.57×0.47	14	外傾	平坦	3	—		AⅠ ₁ b	
110	G5b ₉	N-52°-W	楕円形	1.20×0.98	17	外傾	平坦	3	—		AⅡ ₁ b	
111	G5c ₇	N-51°-W	楕円形	1.38×1.10	21	外傾	平坦	4	3		AⅡ ₁ a	
112	G6g ₃	N-37°-W	楕円形	1.30×1.07	22	外傾	平坦	4	1	第346図 36 (2)	AⅡ ₁ b	
113	G6h ₃		円形	径 1.00	18	外傾	平坦	3	—	第346図 37-38(3)	AⅡ ₁ b	
114	G6i ₄	N-49°-W	楕円形	1.26×1.07	17	外傾	平坦	3	—	(13)	AⅡ ₁ b	
115	炉穴											

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物(点)	形態分類	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
116	G6h3	N-40°-E	楕円形	0.82×0.72	14	外傾	平坦	3	-	第346区 39 (3)	A I 1b	
117	G5g0	N-50°-W	不整長方形	1.42×0.53	30	外傾	平坦	3	-		D II 1b	
118	F5j4		(円形)	径 (0.70)	33	垂直	平坦	2	-	第346区 40 (6)	B I 1b	SI-22内 SK-76と重複
119	G4a0		(円形)	径 (0.80)	25	外傾	平坦	2	-		A I 1b	
120	F5c0		(円形)	径 (0.74)	17	外傾	平坦	2	-		A I 1b	SI-24P2と重複
121	G5c6	N-41°-W	隅丸長方形	1.90×1.10	36	外傾	平坦	2	-		E II 1b	
122	F4i8		円形	径 0.98	23	外傾	平坦	1	-	(4)	A I 1b	SK-123と重複
123	F4j8	N-46°-W	(不定形)	0.67×(0.62)	26	外傾	平坦	3	-		E I 1b	SK-122と重複
124	G5a4	N-60°-W	楕円形	2.65×1.73	75	垂直	皿状	3	-	(68)	B III 2b	
125	G5c5	A N-70°-W B N-47°-E	A (楕円形) B 楕円形	A (2.00)×1.20 B 1.03×0.83	A 15 B 40	A 外傾 B 垂直	平坦	2	-	第346区 41-43(12)	A III 1b B II 1b	
126	G5d4	N-4°-W	楕円形	1.35×1.20	30	外傾	平坦	3	-		A II 1b	
127	G5d4	N-19°-E	不整楕円形	1.62×1.45	58	外傾	平坦	3	-	第346区 44-45(10)	A II 2b	
128	G5d2		円形	径 1.48	30	外傾	平坦	3	-	第346区 46 (3)	A II 1b	
129	G5e2	N-54°-E	(楕円形)	1.51×(1.02)	20	外傾	平坦	2	-	第346区 47 (3)	A II 1b	SK-161と重複
130	G5f1	N-17°-E	不整楕円形	1.15×0.86	35	外傾	平坦	-	-	第346区48 第347区1-2(10)	A II 1b	
131	G5e2		円形	径 0.91	19	外傾	平坦	12	-	第347区 3-5 (18)	A I 1b	
132	G5e4	N-45°-W	(長方形)	(2.00)×1.10	107	垂直	平坦	5	-	第347区 6-8 (25)	D III 3b	SK-91・165と 重複
133	H5a9		円形	径 1.04	20	外傾	平坦	13	4		A II 1a	
134	G5f5		円形	径 1.88	13	外傾	平坦	2	-	(1)	A II 1b	
135	G5g4	N-35°-E	楕円形	1.40×1.28	105	垂直	平坦	9	-	(166)	B II 3b	
136	G5h5		円形	径 1.02	30	外傾	平坦	13	-	第347区 9 (8)	A II 1b	
137	G5h5		円形	径 1.02	20	外傾	平坦	2	2		A II 1a	
138	G5f6		円形	径 1.33	35	外傾	平坦	3	-		A II 1b	
139	G5f8		円形	径 1.80	20	外傾	平坦	2	-		A II 1b	SK-167と重複
140	G5f7		(円形)	1.37×(1.17)	20	外傾	平坦	3	-		A II 1b	SK-167と重複
141	G5e9	N-34°-E	楕円形	0.83×0.64	14	外傾	平坦	2	-		A I 1b	
142	G5e8		不整円形	径 1.35	95	垂直	平坦	6	-	(11)	B II 2b	
143	G5e8	N-51°-E	楕円形	0.87×0.70	20	外傾	平坦	3	-		A I 1b	
144	G5f9		円形	径 1.40	130	垂直	平坦	8	-	右皿2点 (10)	B II 3b	
145	G5f8	N-28°-W	楕円形	1.09×0.95	18	外傾	平坦	2	-		A II 1b	
146	G5g8	N-36°-W	楕円形	0.95×0.75	30	外傾	平坦	3	-		A I 1b	
147	G5g7	N-53°-E	楕円形	1.20×1.02	30	外傾	平坦	3	-		A II 1b	
148	G5g7		(円形)	径 (1.17)	29	外傾	平坦	3	-		A II 1b	SK-168と重複
149	G5h7	N-50°-E	(楕円形)	(2.50)×1.40	100	垂直	平坦	9	-	(33)	B III 3b	SK-200と重複
150	G5g8	N-84°-E	楕円形	1.45×1.20	72	外傾	皿状	6	-	(6)	A II 2b	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物 (点)	形態分類	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
151	G5g ₄	N-55°-E	楕円形	1.66×1.26	60	外傾	平坦	4	1		AⅡ2a	
152	G5g ₈		不整形円形	径 1.47	50	垂直	平坦	5	1		BⅡ2a	
153	G5f ₀		円形	径 1.76	108	垂直	平坦	8	-	(45)	BⅡ3b	SK-166と重複
154	G6h ₁		(円形)	(1.10)×0.98	50	垂直	平坦	7	-		BⅡ2b	SK-156と重複
155	G6h ₁	N-40°-W	楕円形	0.97×0.73	16	外傾	平坦	3	-	(23)	AⅠ1b	
156	G6h ₁		(円形)	径 (1.80)	131	垂直	平坦	9	-	(58)	BⅡ3b	SK-154と重複
157	G6i ₁	N-57°-W	楕円形	1.02×0.83	13	外傾	平坦	2	-		AⅡ1b	
158	G5i ₀	N-42°-E	長方形	1.40×0.75	36	外傾	平坦	2	1	第347図 10 (6)	DⅡ1a	
159	G5j ₉	N-19°-W	不整形円形	1.01×0.92	20	外傾	平坦	2	1	第347図 11 (3)	AⅡ1a	
160	G5j ₉		円形	径 0.94	17	外傾	平坦	4	-	第347図 12 (1)	AⅠ1b	
161	G5e ₂	N-25°-E	楕円形	0.80×0.67	30	外傾	平坦	2	-		AⅠ1b	SK-129と重複
162	H5a ₈		(円形)	1.15×(1.10)	90	垂直	平坦	8	-	(70)	BⅡ2b	SK-202・203と重複
163	H5a ₇	N-51°-W	楕円形	1.10×0.90	67	外傾	平坦	3	-	第347図 13 (15)	AⅡ2b	
164	G5j ₇		円形	径 1.60	70	外傾	平坦	4	-	(27)	AⅡ2b	
165	G5e ₄		円形	径 1.30	120	垂直	平坦	3	-	(30)	BⅡ3b	SK-132と重複
166	G5f ₉	N-30°-W	(楕円形)	0.93×(0.34)	60	垂直	平坦	8	-	第347図 14~15(2)	BⅠ2b	SK-153と重複
167	G5f ₇	N-40°-W	長方形	1.40×1.10	71	内湾	平坦	3	-		EⅡ2b	SK-139・140と重複
168	G5f ₆	N-50°-W	長楕円形	8.87×0.45	40	外傾	平坦	2	-	(7)	EⅢ1b	SK-148と重複
169	F6c ₂	N-38°-E	楕円形	2.10×1.23	50	外傾	平坦	6	-		AⅢ2b	SI-15内
170	H5a ₇	N-44°-W	不整形長方形	3.70×1.00	25	外傾	起伏	2	1		DⅢ1a	
171	G6j ₃	N-13°-W	楕円形	0.70×0.60	25	外傾	平坦	2	-		AⅠ1b	
172	G6j ₃	N-17°-W	不整形楕円形	0.80×0.64	40	外傾	平坦	3	1		AⅠ1a	
173	G6j ₃	N-0°	不整形楕円形	0.95×0.80	28	外傾	平坦	2	1		AⅠ1a	
174	H6a ₃		円形	径 0.98	23	外傾	平坦	3	-	第347図 16~17(5)	AⅠ1b	
175	H6a ₂	N-51°-W	楕円形	0.78×0.75	12	外傾	平坦	2	-		AⅠ1b	
176	H6a ₁	N-55°-W	長方形	1.62×0.75	42	垂直	平坦	3	-	第347図 18~20(6)	BⅡ1b	
177	H5a ₀		(円形)	径(1.06)	72	垂直	平坦	6	-	(29)	BⅡ2b	SK-204と重複
178	H5a ₀	N-75°-W	楕円形	1.35×1.23	35	外傾	凹凸	2	2	(14)	AⅡ1a	
179	H5a ₉	N-72°-W	楕円形	1.63×1.06	20	外傾	起伏	2	-	(42)	AⅡ1b	
180	H5a ₉	N-72°-W	楕円形	1.17×0.96	21	外傾	凹凸	3	-	(10)	AⅡ1b	
181	H5b ₈		円形	径 1.55	23	外傾	平坦	3	-	(15)	AⅡ1b	
182	H5b ₉	N-12°-E	不整形方形	1.35×0.65	41	外傾	平坦	3	-	(10)	EⅡ1b	
183	H6b ₁	N-24°-W	楕円形	0.97×0.85	23	外傾	起伏	2	-	第347図 21~22(7)	AⅠ1b	SK-205と重複
184	H6b ₁		円形	径 0.94	48	外傾	皿状	2	-		AⅠ1b	
185	H5c ₉	N-56°-W	長楕円形	5.70×1.35	28	外傾	平坦	3	-	(25)	EⅢ1b	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物 (点)	形態分類	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
186	H5c9		不整円形	径 0.93	32	外傾	平坦	2	—		A I ₁ b	
187	H5c9		不整円形	径 1.00	25	外傾	平坦	3	—		A II ₁ b	
188	H5c9		円 形	径 1.19	23	外傾	平坦	2	1		A II ₁ a	
189	H5c8		円 形	径 1.94	16	外傾	平坦	2	—	第347図 23-25(8)	A II ₁ b	
190	H5d7	N-32 ^o -E	楕 円 形	2.23×2.12	16	外傾	平坦	3	—		A III ₁ b	
191	H5c7	N-63 ^o -W	楕 円 形	1.35×1.02	30	垂直	平坦	4	1		B II ₁ a	
192	H5a8		不整円形	径 1.30	25	外傾	平坦	2	—	第347図 26-27(4)	A II ₁ b	
193	G5j ₄	N-41 ^o -W	方 形	1.10×0.84	90	フラス コ状	平坦	3	—	第347図 28-30(13)	D II ₂ b	
194	G5f ₄		円 形	2.06×1.92	83	垂直	起伏	9	—	(162)	B III ₂ b	
195	G5h ₃	N-81 ^o -W	楕 円 形	0.90×0.76	11	外傾	平坦	2	—		A I ₁ b	
196	G5g ₃	N-25 ^o -W	(楕円形)	2.10×(1.80)	55	外傾	起伏	3	—	(59)	A III ₂ b	SK-199と重複
197	H5b ₇	N-23 ^o -W	楕 円 形	1.54×1.40	71	外傾	平坦	9	—	(12)	A II ₂ b	
198	H5a ₀	N-30 ^o -E	楕 円 形	1.15×0.94	133	フラス コ状	平坦	10	—	(232)	C II ₃ b	
199	G5h ₃		円 形	径 1.30	66	外傾	平坦	3	—	(18)	A II ₂ b	SK-196と重複 SI-32内
200	G5h ₇	N-70 ^o -E	楕 円 形	1.20×0.70	24	外傾	平坦	—	—		A II ₁ b	SK-149・150 と重複
201	H5d ₈		円 形	径 0.98	59	外傾	平坦	7	—	第347図 31-32(6)	A I ₂ b	SI-37内
202	H5a ₈	N-60 ^o -E	(楕円形)	1.75×(1.07)	22	外傾	平坦	1	—		A II ₁ b	SK-203・162 と重複
203	H5a ₈	N-68 ^o -W	不 定 形	1.60×0.88	70	垂直	平坦	—	—		E II ₂ b	SK-202・162 と重複
204	H5a ₀	N-33 ^o -W	(楕円形)	1.43×(1.02)	72	なだ らか	平坦	2	—		A II ₂ b	SK-177と重複
205	H6b ₁		円 形	径 0.70	53	外傾	平坦	3	—	(14)	A I ₂ b	SK-183と重複
206	G4a ₄		円 形	径 1.40	43	外傾	平坦	3	—		A II ₁ b	
207	G4a ₅	N-66 ^o -E	隅丸長方形	2.40×1.11	27	垂直	平坦	4	—	(2)	D III ₁ b	
208	G4b ₅	N-48 ^o -E	不整楕円形	1.20×0.96	22	外傾	平坦	2	1	(1)	A II ₁ a	SK-209と重複
209	G4b ₅	N-44 ^o -W	楕 円 形	2.90×0.84	25	外傾	平坦	5	—	第347図 33-35(14)	A III ₁ b	SK-208と重複
210	G4c ₅	N-72 ^o -W	楕 円 形	2.24×1.22	40	垂直	平坦	5	—	第347図 36-37(10)	B III ₁ b	SK-211と重複
211	G4c ₅	N-27 ^o -E	(楕円形)	3.30×(1.86)	37	外傾	平坦	5	—	第347図 38-40(2)	A III ₁ b	SK-210と隣接
212	G4c ₆	N-49 ^o -E	不 定 形	4.55×1.33	40	垂直	起伏	6	—	(40)	E III ₁ b	
213	G4d ₂	N-71 ^o -E	楕 円 形	1.50×1.21	33	外傾	平坦	2	—	第347図 41-42(4)	A II ₁ b	
214	G4b ₄		円 形	径 1.50	31	外傾	平坦	5	1	(1)	A II ₁ a	
215	G4e ₄	N-43 ^o -E	不整長楕円形	4.90×1.66	25	外傾	平坦	5	—	(32)	A III ₁ b	
216	攪乱穴										F	
217	G4g ₂	N-86 ^o -E	不整楕円形	2.30×1.90	43	外傾	平坦	4	—	(13)	A III ₁ b	
218	G4g ₂		円 形	径 1.06	43	外傾	平坦	4	—		A II ₁ b	
219	G4g ₄		円 形	径 1.37	33	外傾	平坦	3	—	第347図 43-45(6)	A II ₁ b	
220	G4e ₃	N-48 ^o -W	楕 円 形	0.96×0.74	31	外傾	平坦	4	—		A I ₁ b	

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物(点)	形態分類	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
221	G4f ₅	N-30°-E	楕円形	1.61×1.21	36	外傾	平坦	3	—	第347図 46 (7)	A I ₁ b	
222	G4e ₅	N-30°-E	不整楕円形	2.47×1.34	20	外傾	平坦	4	—	第347図 47-52(26)	A III ₁ b	
223	H4h ₅		円形	径 1.05	66	垂直	平坦	4	—	第347図53(13) 第348図1-3	B II ₂ b	
224	G4g ₆	N-46°-E	不整楕円形	3.22×2.20	37	外傾	平坦	6	—	第348図 4-6 (21)	A III ₁ b	
225	G4f ₇	N-8°-W	不整楕円形	3.51×2.16	38	外傾	起伏	7	—	第348図 7-13 (44)	A III ₁ b	
226	H4g ₆		円形	径 0.80	37	垂直	平坦	2	—	第348図 14-15(15)	B I ₁ b	SI-50内
227	攪乱穴										F	
228	G4i ₅		円形	径 0.90	46	外傾	平坦	5	—		A I ₁ b	
229	G4g ₁		不整円形	径 1.05	24	外傾	平坦	3	—		A II ₁ b	
230	G4h ₇	N-13°-W	楕円形	1.95×1.11	24	外傾	平坦	5	—	第348図 16-17(3)	A II ₁ b	
231	H4f ₇	N-65°-W	楕円形	1.50×1.24	60	垂直	平坦	3	—	(78)	B II ₂ b	SI-46内
232	G4i ₇	N-74°-E	楕円形	1.77×1.39	45	外傾	平坦	5	1	第348図 18-20(17)	A II ₁ a	
233	G4h ₉	N-3°-W	楕円形	0.82×0.71	19	外傾	平坦	2	—	第348図 21-23(9)	A I ₁ b	
234	G4h ₉	N-51°-E	不整形	1.03×0.91	31	外傾	平坦	2	—	第348図 24-25(5)	D II ₁ b	
235	G4i ₂	N-36°-E	楕円形	1.19×0.80	21	外傾	平坦	3	—		A II ₁ b	
236	G4i ₈		円形	径 1.30	40	外傾	平坦	2	—	第348図 26-27(9)	A II ₁ b	
237	H4a ₃	N-40°-W	長楕円形	3.52×1.54	34	外傾	平坦	6	—	第348図 28-29(4)	A III ₁ b	
238	G4i ₅	N-2°-E	楕円形	1.80×1.63	37	垂直	平坦	5	—	第348図 30-31(2)	B II ₁ b	
239	G4i ₆	N-58°-E	楕円形	1.23×0.88	51	垂直	平坦	4	—	(1)	B II ₂ b	
240	G4j ₆	N-44°-E	隅丸長方形	1.71×0.97	42	外傾	平坦	4	4	第348図 32 (6)	D II ₁ a	
241	G4j ₆		不整円形	径 1.01	29	外傾	皿状	2	—	第348図 33 (8)	D II ₁ b	
242	攪乱穴										F	
243	攪乱穴										F	
244	攪乱穴										F	
245	攪乱穴										F	
246	攪乱穴										F	
247	G4j ₇	N-53°-W	楕円形	1.06×0.88	39	垂直	平坦	3	—	(3)	B II ₁ b	
248	G4i ₇	N-28°-W	不整楕円形	1.80×1.42	48	垂直	平坦	5	—	第348図 34-39(21)	B II ₁ b	
249	G4i ₈	N-75°-W	不整楕円形	2.16×1.71	27	外傾	平坦	6	4	(81)	A III ₁ a	SK-250と重複
250	G4j ₈	N-23°-E	楕円形	1.26×0.94	42	外傾	平坦	3	—	第348図 40-42(14)	A II ₁ b	SK-249と重複
251	G4j ₈		円形	径 1.62	75	外傾	平坦	5	1	(76)	A II ₂ a	
252	G4j ₇	N-55°-E	楕円形	1.88×1.48	57	外傾	平坦	3	1	(81)	A II ₂ a	
253	G4i ₀		不整円形	径 0.81	31	外傾	平坦	3	—		A I ₁ b	
254	攪乱穴										F	
255	G4j ₀	N-41°-W	楕円形	1.50×0.66	43	外傾	平坦	3	—	第348図 43 (3)	A II ₁ b	

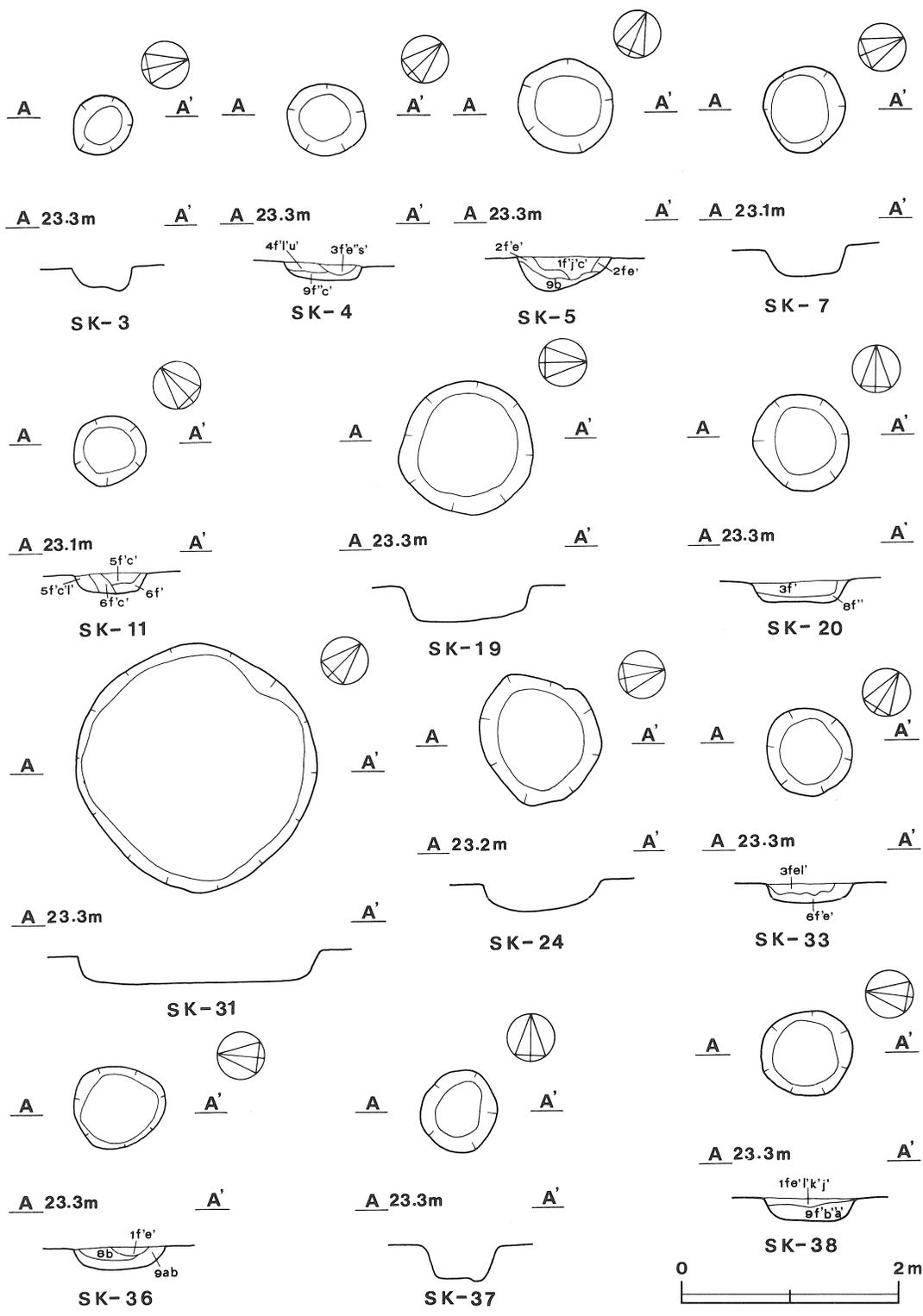
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物 (点)	形態分類	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
256	G4j0	N-63°-E	楕円形	1.47×1.08	42	外傾	平坦	3	2	第348区 44-45(6)	AⅡ1a	
257	G4j0	N-33°-E	不整楕円形	1.98×0.85	39	外傾	平坦	3	—	(16)	AⅡ1b	
258	G4j0	N-75°-W	長楕円形	2.37×0.98	59	外傾	平坦	4	2	第348区 46-49(24)	AⅢ2a	
259	H4a9	N-65°-W	長楕円形	1.84×0.83	29	垂直	平坦	4	1	第348区 50-52(12)	BⅡ1a	
260	G5i2	N-86°-E	楕円形	1.40×1.20	40	外傾	平坦	2	—	(27)	AⅡ1b	
261	G4g7	N-11°-E	不定形	3.44×1.58	36	外傾	平坦	—	—		EⅢ1b	
262	G4g7	N-64°-E	楕円形	2.16×0.72	50	垂直	皿状	—	—		BⅢ2b	
263	G4g7	N-34°-W	楕円形	1.30×0.50	32	垂直	平坦	—	—		BⅡ1b	
264	炉 穴											
265	H5c3	N-41°-E	楕円形	0.73×0.53	20	外傾	平坦	3	1		AⅠ1a	
266	H5d3		円形	0.83×0.76	57	垂直	平坦	2	—		BⅠ2b	
267	H5a2	N-33°-E	不整円形	0.98×0.85	34	外傾	平坦	3	—	(31)	AⅠ1b	
268	H5a2		円形	径 0.86	47	垂直	平坦	2	—	(26)	BⅠ1b	
269	H5a1	N-29°-E	不整楕円形	0.66×0.51	48	垂直	平坦	3	—		BⅠ1b	
270	H5c4	N-43°-E	楕円形	1.51×0.87	37	垂直	平坦	3	1	第348区 51-53(4)	BⅡ1a	
271	H5d5	N-22°-E	楕円形	0.69×0.57	29	垂直	平坦	3	—		BⅠ1b	
272	H5d5	N-36°-W	楕円形	1.36×1.00	46	垂直	平坦	2	—	(82)	BⅡ1b	
273	H5d5	N-12°-E	楕円形	1.12×0.92	23	外傾	平坦	2	—	(1)	AⅡ1b	
274	H5d6		円形	径 0.58	29	垂直	凹凸	3	—	(27)	CⅠ1b	
275	H5e6	N-52°-E	楕円形	1.10×0.77	15	外傾	凹凸	3	—		AⅡ1b	
276	H5d6	N-64°-E	(楕円形)	(1.09)×0.88	17	外傾	凹凸	2	1	(2)	AⅡ1a	
277	H5e6	N-0°	楕円形	1.31×0.81	18	外傾	凹凸	2	—	第348区 54 (4)	AⅡ1b	
278	H5e7	N-33°-W	(楕円形)	1.35×(0.64)	14	外傾	凹凸	3	—		AⅡ1b	
279	H5e7	N-76°-E	楕円形	1.46×0.93	28	外傾	凹凸	3	—		AⅡ1b	
280	H5e6	N-70°-E	楕円形	1.14×0.80	21	垂直	起伏	2	1	第348区 55-56(4)	BⅡ1b	
281	H5e6		円形	径 1.38	88	垂直	平坦	2	—	(138)	BⅡ2b	
282	H5f6		楕円形	0.91×0.72	38	垂直	凹凸	3	1	第349区 1-6・9(25)	AⅠ1a	
283	攪乱穴										F	
284	H5e3		不整円形	径 1.60	64	垂直	平坦	4	—	第349区 7-8・10-12(9)	BⅡ2b	
285	H5e5	N-20°-W	楕円形	1.19×0.88	17	外傾	平坦	2	—		AⅡ1b	
286	炉 穴											
287	H5f6		円形	径 1.27	24	外傾	平坦	3	2		AⅡ1a	
288	H5f6	N-48°-W	不整楕円形	1.70×1.26	33	外傾	平坦	4	1	第349区 14-16(10)	AⅡ1a	
289	H5f6	N-18°-W	楕円形	1.08×0.80	32	外傾	平坦	2	—		AⅡ1b	
290	H5f7	N-54°-E	不定形	2.16×1.78	15	外傾	平坦	2	1	第349区 17-18(10)	EⅢ1a	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物 (点)	形態分類	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
291	H5f7		不整円形	径 1.65	105	フラスコ状	起伏	1	—	(44)	CⅡ3b	
292	H5d6	N-51°-E	(円形)	径 (0.69)	50	外傾	平坦	2	—		AⅠ2b	
293	H5g8	N-62°-W	不整円形	0.91×0.73	15	外傾	平坦	2	—		AⅠ1b	
294	H5g7	N-30°-W	楕円形	1.39×1.12	12	外傾	平坦	2	3	第349図 19 (8)	AⅡ1a	
295	H5g7	N-37°-W	楕円形	0.73×0.58	15	外傾	平坦	2	2		AⅠ1a	
296	H5g6		円形	径 1.32	24	垂直	平坦	2	2	第349図 20~22(3)	BⅡ1a	
297	H5g6	N-73°-E	不整楕円形	2.21×1.75	18	外傾	平坦	2	3		AⅢ1a	
298	H5g6		円形	径 0.87	71	垂直	平坦	3	—		BⅠ2b	
299	H5g5	N-36°-E	楕円形	1.19×0.95	22	垂直	平坦	4	2		BⅡ1a	
300	H5g5	N-61°-E	楕円形	0.78×0.55	48	垂直	平坦	3	—		BⅠ1b	
301	H5g6	N-61°-E	不整楕円形	1.85×1.21	34	外傾	平坦	3	—	第349図 23~24(5)	AⅡ1b	
302	H5h6	N-50°-W	不定形	2.33×1.50	23	外傾	平坦	3	1	第349図 25 (7)	EⅢ1a	
303	H5d3	N-38°-W	楕円形	1.31×1.05	51	垂直	平坦	2	—	(34)	BⅡ2b	
304	H5d1	N-70°-E	不整楕円形	2.27×1.30	31	外傾	平坦	1	—	第349図 26~28(7)	AⅢ1b	
305	H4d0	N-19°-W	楕円形	1.94×1.27	24	垂直	平坦	3	5	第349図 29 (2)	BⅡ1a	
306	H4d9	N-54°-E	楕円形	1.70×0.91	24	外傾	平坦	3	—		AⅡ1b	
307	H4d0		円形	径 0.70	40	外傾	平坦	2	1	第349図 30 (1)	AⅠ1a	
308	H4c0	N-67°-W	不整楕円形	2.13×1.28	74	垂直	平坦	3	—	(22)	BⅢ2b	
309	H4c0		円形	径 1.26	50	垂直	平坦	2	—	(49)	BⅡ2b	
310	A H4c0 B H4b0	N-53°-W	楕円形 円形	1.31×1.18 径1.16	33 23	垂直	平坦	5 3	1 —	(59) (6)	AⅡ1a AⅡ1b	SK-338と重複
311	G4g9	N-49°-W	楕円形	1.28×0.69	157	垂直	凹凸	3	1	第349図 31~32(3)	AⅡ3a	SI-42内
312	G5j2	N-80°-E	楕円形	1.24×0.84	96	垂直	皿状	5		(34)	BⅡ2b	
313	攪乱穴										F	
314	攪乱穴										F	
315	攪乱穴										F	
316	H4a6		不整円形	径 1.23	35	外傾	平坦	2	—		AⅡ1b	
317	H4a6		円形	径 1.25	20	外傾	平坦	3	1		AⅡ1a	
318	攪乱穴									第349図 33~34	F	
319	H4b7		不整円形	1.81×1.54	34	外傾	平坦	3	1	第349図 35 (6)	AⅡ1a	
320	H4b8	N-18°-W	楕円形	1.77×1.11	30	垂直	平坦	2	1	第349図 36~37(3)	BⅡ1a	
321	H4b8	N-62°-W	楕円形	1.64×1.43	34	外傾	平坦	2	—	第349図 38~39(4)	AⅡ1b	
322	H4b9		円形	径 1.72	43	外傾	平坦	2	—	第349図 40~43(9)	AⅡ1b	
323	H4d8	N-34°-W	楕円形	2.50×1.53	35	外傾	平坦	2	2	第349図 44~45(4)	AⅢ1a	
324	H4a5		円形	径 1.82	34	垂直	平坦	3	1		BⅡ1a	
325	攪乱穴										F	

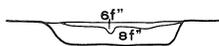
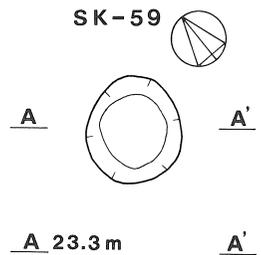
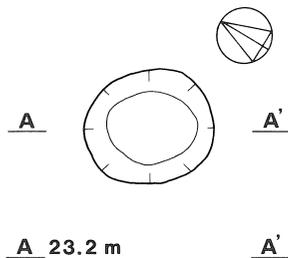
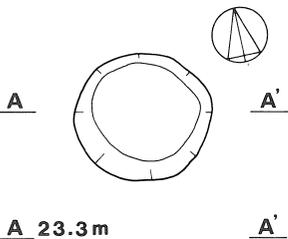
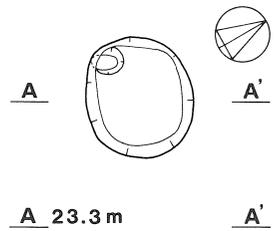
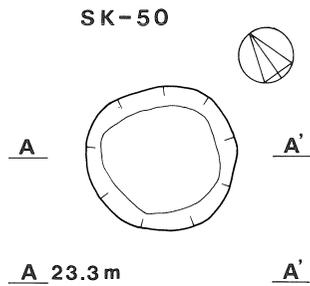
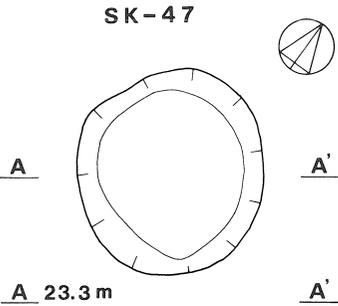
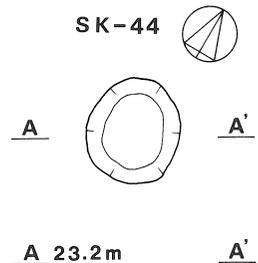
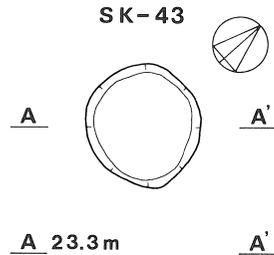
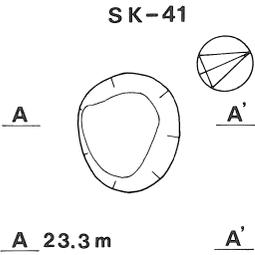
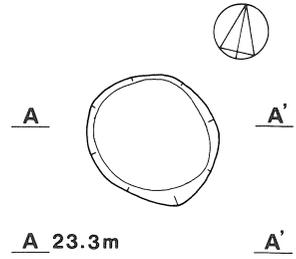
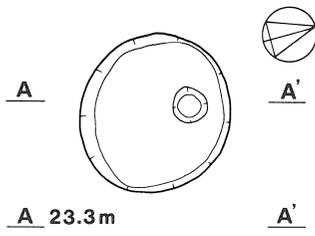
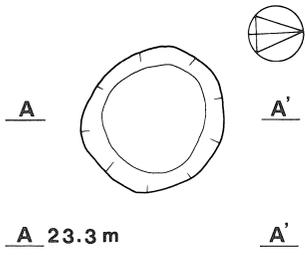
番号	位 置	長 径 方 向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物 (点)	形態分類	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
326	H4c5	N-31°-E	不整楕円形	1.25×0.75	25	垂直	平坦	3	—		BⅡ1b	
327	攪乱穴										F	
328	H4f5	N-40°-W	隅丸長方形	1.88×0.71	17	外傾	平坦	2	3	第349図 46-47(6)	EⅡ1a	
329	攪乱穴										F	
330	H4f5	N-17°-W	不 定 形	1.71×1.07	54	垂直	平坦	3	—	第349図 48-50(16)	FⅡ2b	SK-331と隣接
331	H4f5	N-53°-W	楕 円 形	1.27×0.95	22	外傾	平坦	3	1		AⅡ1a	SK-330と隣接
332	H4f5		不 整 円 形	径 1.30	84	垂直	平坦	4	—	第349図 51-52(16)	BⅡ2b	
333	H4d5	N-58°-E	楕 円 形	1.03×0.89	74	垂直	平坦	4	1	(22)	BⅡ2a	
334	H4e2	N-61°-E	不整楕円形	1.31×1.11	45	垂直	平坦	3	—		BⅡ1b	
335	H4b2		円 形	径 1.17	40	垂直	平坦	2	—		BⅡ1b	
336	H4b1	N-49°-W	楕 円 形	1.25×1.08	30	垂直	平坦	2	—	第350図 1 (6)	BⅡ1b	
337	H5b1	N-23°-E	楕 円 形	1.46×0.90	40	垂直	起伏	3	—	(49)	BⅡ1b	
338	H4b0	N-43°-E	(楕円形)	(0.70)×0.47	52	垂直	平坦	—	—	(47)	BⅠ2b	SK-310と重複
339	H4b0	N-60°-W	不整楕円形	1.30×1.10	38	外傾	平坦	4	—	第350図 2~3 (5)	AⅡ1b	
340	H5c1	N-90°-E	楕 円 形	1.53×1.22	29	垂直	平坦	4	1	第350図 4~5 (5)	BⅡ1a	
341	H4e8	N-43°-E	隅丸長方形	2.00×1.36	31	垂直	平坦	2	1	第350図 6~7 (8)	BⅢ1a	
342	H4f8	N-44°-E	不整楕円形	1.36×1.07	34	垂直	傾斜	2	—	第350図 8-10 (9)	BⅡ1b	
343	H4f8	N-64°-W	不整楕円形	1.40×1.10	29	外傾	平坦	3	1	第350図 11-12(6)	AⅡ1a	
344	H4e8	N-90°-W	楕 円 形	1.30×0.95	44	垂直	平坦	3	—	第350図 13-15(8)	BⅡ1b	
345	H4d8		不 整 円 形	径 1.50	76	垂直	平坦	1	—	第350図 16-18(17)	BⅡ2b	
346	H4e7	N-38°-E	(不定形)	1.88×(1.71)	75	外傾	平坦	4	—	(90)	EⅡ2b	
347	H4e7	N-0°	(楕円形)	(1.10)×0.82	44	外傾	平坦	4	—	第350図 19-21(6)	AⅡ1b	
348	H4e6		不 整 円 形	径 2.50	18	外傾	平坦	2	—	第350図 22-24(6)	AⅢ1b	
349	攪乱穴									第350図 25-26	F	
350	H5b3		円 形	径 1.19	25	外傾	平坦	2	—		AⅡ1b	
351	H4d7		円 形	径 0.69	32	垂直	平坦	4	1		BⅠ1a	
352	H5f3		円 形	径 1.24	20	外傾	平坦	3	1		AⅡ1a	
353	H5f3	N-90°-W	不定楕円形	1.36×1.05	15	垂直	平坦	3	—		BⅡ1b	
354	H5f1		円 形	径 1.50	100	垂直	平坦	2	—	(28)	BⅡ3b	
355	H4f7	N-0°	不 定 形	0.95×0.58	51	外傾	起伏	2	1	(13)	EⅠ2a	
356	H5h3	N-37°-E	楕 円 形	1.05×0.75	22	外傾	平坦	3	—		AⅡ1b	
357	H5h3	N-69°-W	不整楕円形	1.42×0.88	23	外傾	平坦	3	1	第350図 27-28(13)	AⅡ1a	
358	H5h3	N-63°-E	楕 円 形	2.05×1.03	29	垂直	平坦	3	—	第350図 29-31(3)	BⅢ1b	SK-371・372 と重複
359	H5j4		円 形	径 2.07	30	外傾	平坦	4	2	第350図 32-33(35)	AⅢ1a	
360	H5j3	N-58°-W	楕 円 形	1.10×0.98	27	垂直	平坦	4	1	第350図 34 (9)	BⅡ1a	SK-370と重複

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物(点)	形態分類	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
361	H5j ₃	N-44°E	楕円形	2.14×1.18	40	垂直	平坦	4	3	(11)	BⅢ1a	
362	H5i ₂	N-45°E	(不定形)	2.95×(1.75)	42	垂直	凹凸	13	2	(50)	BⅢ1a	
363	I5a ₃	N-9°E	(楕円形)	(2.13)×1.73	32	外傾	起伏	3	—	(17)	AⅢ1b	SK-370と重複
364	I5a ₂	N-90°E	不整楕円形	2.43×2.11	29	垂直	平坦	4	—	(24)	BⅢ1b	
365	H5j ₂	N-60°E	楕円形	1.95×1.20	93	垂直	平坦	4	—	(58)	BⅡ2b	
366	H5h ₁	N-36°W	不定形	1.50×1.25	18	垂直	平坦	3	5		EⅡ1a	
367	H5g ₂	N-19°E	楕円形	1.55×0.69	20	外傾	平坦	2	5	第350区 35 (6)	AⅡ1a	SI-62内
368	H5h ₂	N-63°E	楕円形	0.76×0.60	28	垂直	平坦	2	2	第350区 36 (13)	BⅠ1a	SK-369と隣接
369	H5h ₂	N-29°W	隅丸方形	0.76×0.72	14	内湾	平坦	2	2	第350区 37-38(3)	EⅠ1a	SK-368と隣接
370	H5j ₃		(円形)	径 (1.28)	61	垂直	平坦	4	—	(63)	BⅡ2b	SK-360・363 と重複
371	H5h ₃	N-47°W	楕円形	1.36×1.10	22	垂直	平坦	4	2	第350区 39-41(15)	BⅡ1a	SK-358と重複
372	H5h ₃		(円形)	径 (1.25)	28	外傾	平坦	2	3	第350区 42-44(10)	AⅡ1a	SK-358と重複
373	H5h ₁		円形	径 0.95	14	外傾	平坦	3	1		AⅠ1a	
374	H5i ₁		円形	径 1.05	45	外傾	平坦	3	—	第350区 45-46(3)	AⅡ1b	
375	H5j ₁	N-66°W	不整楕円形	1.42×0.89	55	外傾	平坦	5	1	第351区 1~2 (5)	AⅡ2a	SK-376と重複
376	H4i ₀	N-67°W	(楕円形)	(0.80)×0.72	60	垂直	平坦	2	—	(5)	BⅠ2b	SK-375と重複
377	H4i ₀	N-90°W	楕円形	0.78×0.63	31	垂直	平坦	4	2		BⅠ1a	
378	H4i ₉		円形	径 0.96	65	垂直	平坦	1	—	第351区 3~4 (4)	BⅠ2b	
379	H4h ₉		円形	径 1.00	27	外傾	平坦	3	—	第351区 5 (1)	AⅡ1b	
380	H4h ₀		不整円形	径 0.97	61	垂直	平坦	12	—	第351区 6~9 (12)	BⅠ2b	
381	H4i ₀	N-13°E	(楕円形)	0.79×(0.50)	23	垂直	平坦	2	1		BⅠ1a	SK-382と重複
382	H4i ₀	N-61°W	不定形	1.05×0.85	24	外傾	平坦	1	1		EⅡ1a	SK-381と重複
383	H4h ₀	N-18°W	楕円形	1.58×1.42	136	垂直	平坦	4	1	(67)	BⅡ3a	SK-384と重複
384	H4h ₀		円形	径 0.47	36	垂直	平坦	5	—		BⅠ1b	SK-383と重複
385	H4i ₉		円形	径 0.67	29	外傾	皿状	—	—	第351区 10 (4)	AⅠ1b	SK-386と隣接
386	H4i ₉	N-69.5°W	楕円形	0.80×0.55	19	垂直	平坦	—	—	第351区 11 (4)	BⅠ1b	SK-385と隣接
387	H4i ₀	N-14.5°W	不整楕円形	0.70×0.35	30	外傾	平坦	—	—	第351区 12 (3)	AⅠ1b	
388	H4i ₈	N-52°E	不定形	1.42×1.15	18	垂直	平坦	5	—	(12)	EⅡ1b	
389	H4j ₈	N-60°W	不定形	1.52×1.01	30	垂直	平坦	2	—	(52)	EⅡ1b	
390	H4j ₈		円形	径 0.60	21	外傾	皿状	—	—	(29)	AⅠ1b	
391	H4j ₇		不整円形	径 0.55	18	外傾	皿状	1	—		AⅠ1b	
392	I4a ₈		不整円形	1.26×0.74	84	垂直	平坦	3	—	(147)	BⅡ2b	
393	I4a ₇		円形	径 1.28	50	垂直	平坦	3	—	(45)	BⅡ2b	
394	I4a ₇	N-75°W	不整楕円形	1.15×0.90	70	フラスコ状	平坦	3	—	(100)	CⅡ2b	
395	I4b ₇		(円形)	径 (1.34)	30	外傾	起伏	—	—	第351区 13 (5)	AⅡ1b	SI-73炉と重複

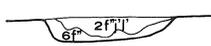
番号	位 置	長 径 方 向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物 (点)	形態分類	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
396	I4c8	N-33°E	楕円形	1.08×0.68	20	外傾	平坦	3	2	第351図 14(2)	AⅡ1a	
397	I4c8	N-33°E	楕円形	1.02×0.70	14	外傾	凹凸	3	—		AⅡ1b	
398	I4b8	N-41°E	楕円形	0.75×0.54	54	垂直	平坦	2	—	(61)	BⅡ2b	SK-399と重複
399	I4b8	N-17°E	(楕円形)	0.75×(0.57)	12	外傾	平坦	1	—		AⅡ1b	SK-398と重複
400	I4b7	N-7°E	不整楕円形	0.85×0.39	40	垂直	平坦	—	—	第351図 15-16(10)	BⅡ1b	
401	I4a8	N-18°E	不整楕円形	0.80×0.50	20	外傾	皿状	—	1		AⅡ1a	
402	I4b9		円形	径 1.09	54	垂直	平坦	2	—	(24)	BⅡ2b	
403	H4j9		(円形)	径 (0.51)	33	垂直	平坦	4	1	第351図 17(2)	BⅡ1a	
404	H4j9	N-41°E	不定形	0.60×0.57	46	外傾	平坦	1	—		EⅡ1b	
405	H4j9	N-50°E	楕円形	1.20×0.60	47	垂直	平坦	3	2	第351図 18-19(2)	BⅡ1a	
406	H4j0	N-11°E	不定形	1.09×1.00	29	外傾	平坦	2	2	第351図 20(5)	EⅡ1a	SK-423と重複
407	H4j9	N-17°W	不定形	1.04×0.65	15	外傾	平坦	2	2	第351図 21-22(4)	EⅡ1a	
408	H4j9	N-44°E	楕円形	0.84×0.48	26	垂直	平坦	4	1		BⅡ1a	
409	I4a9	N-11°E	楕円形	1.64×1.26	64	垂直	平坦	4	—		BⅡ2b	SI-57内
410	I4b9	N-3°W	楕円形	1.30×1.12	64	外傾	起伏	2	—		AⅡ2b	SI-69内
411	I4a7		不整円形	1.52×1.45	83	垂直	平坦	5	—		AⅡ2b	SI-71内
412	I4a7	N-27°E	楕円形	1.45×1.29	70	外傾	平坦	4	—	(12)	AⅡ2b	
413	攪乱穴									第351図 23	F	
414	攪乱穴									第351図 24-25	F	
415	I4e9		(円形)	径 (1.68)	21	外傾	平坦	—	—	第351図 26-28(4)	AⅡ1b	SI-74炉と重複
416	I4e9		円形	径 1.06	40	垂直	平坦	3	—	(48)	BⅡ1b	
417	I4d9		(円形)	径 (1.01)	15	外傾	平坦	3	—	(24)	AⅡ1b	SI-71P ₂ と重複
418	I4e0	N-55°W	不定形	0.91×0.68	60	外傾	平坦	3	—	第351図 29-30(2)	FⅡ2b	
419	H4i3	N-37°E	楕円形	1.29×1.03	36	外傾	平坦	4	—	(22)	AⅡ1b	SI-82内
420	H4j3	N-15°W	不整楕円形	1.41×1.26	57	垂直	平坦	3	—	(35)	BⅡ2b	
421	I4b4		円形	径 1.23	53	外傾	平坦	6	—	第351図 31-32(6)	AⅡ2b	
422	攪乱穴										F	
423	H4j0	N-49°W	不定形	1.06×(0.86)	50	外傾	平坦	—	1		EⅡ2a	SK-406と重複



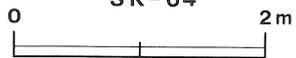
第301図 土壤実測図 (1)



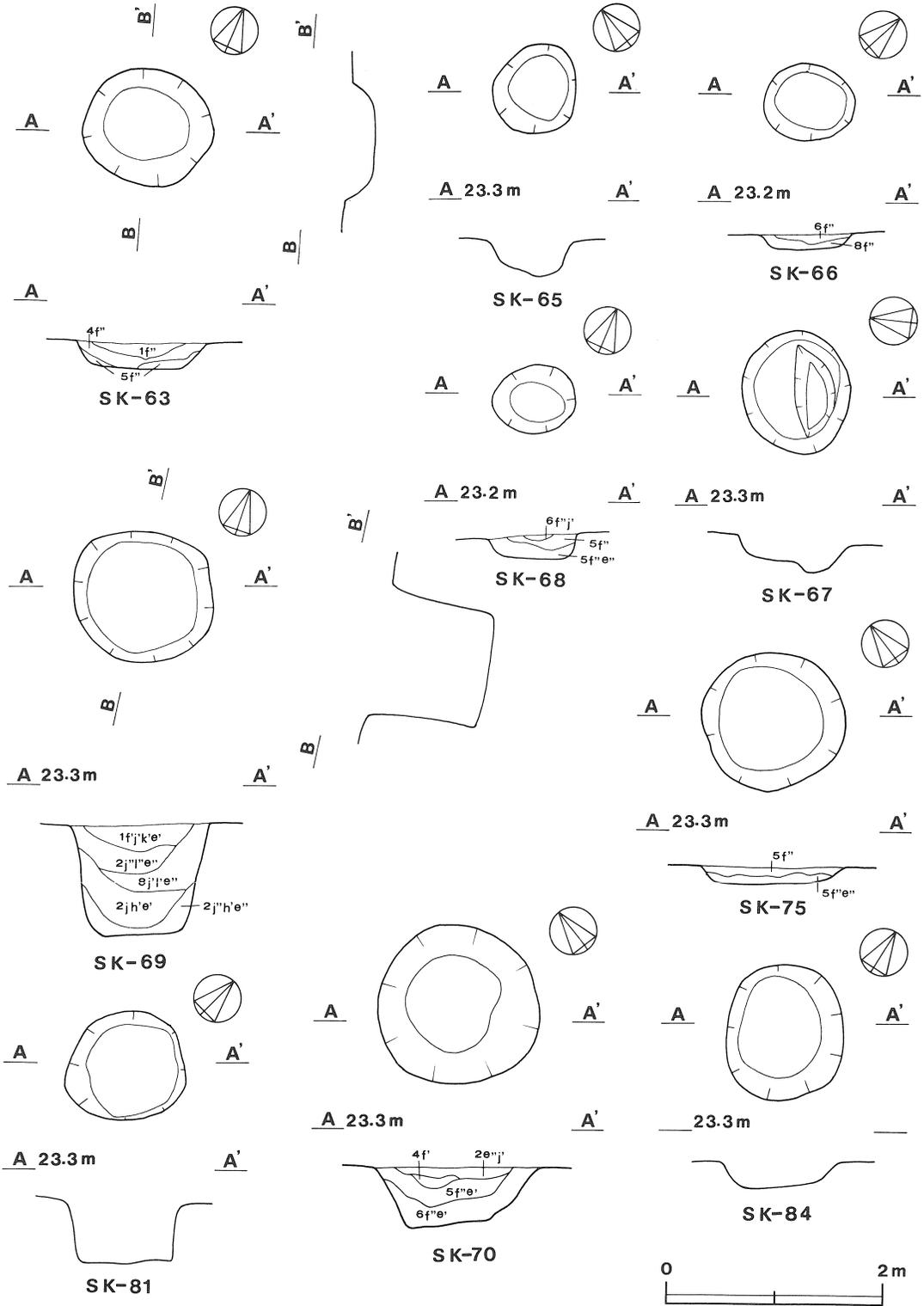
SK-60



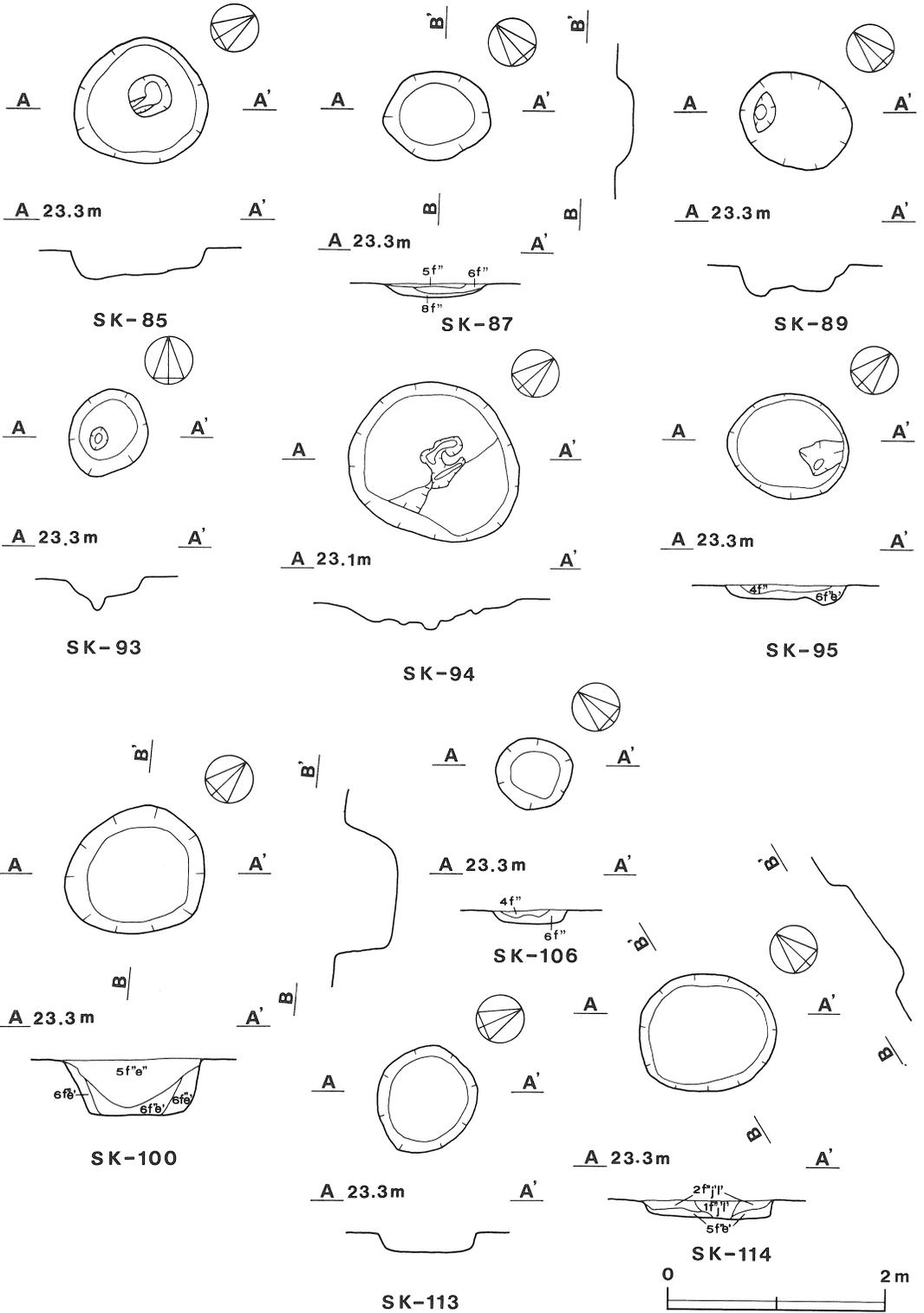
SK-62



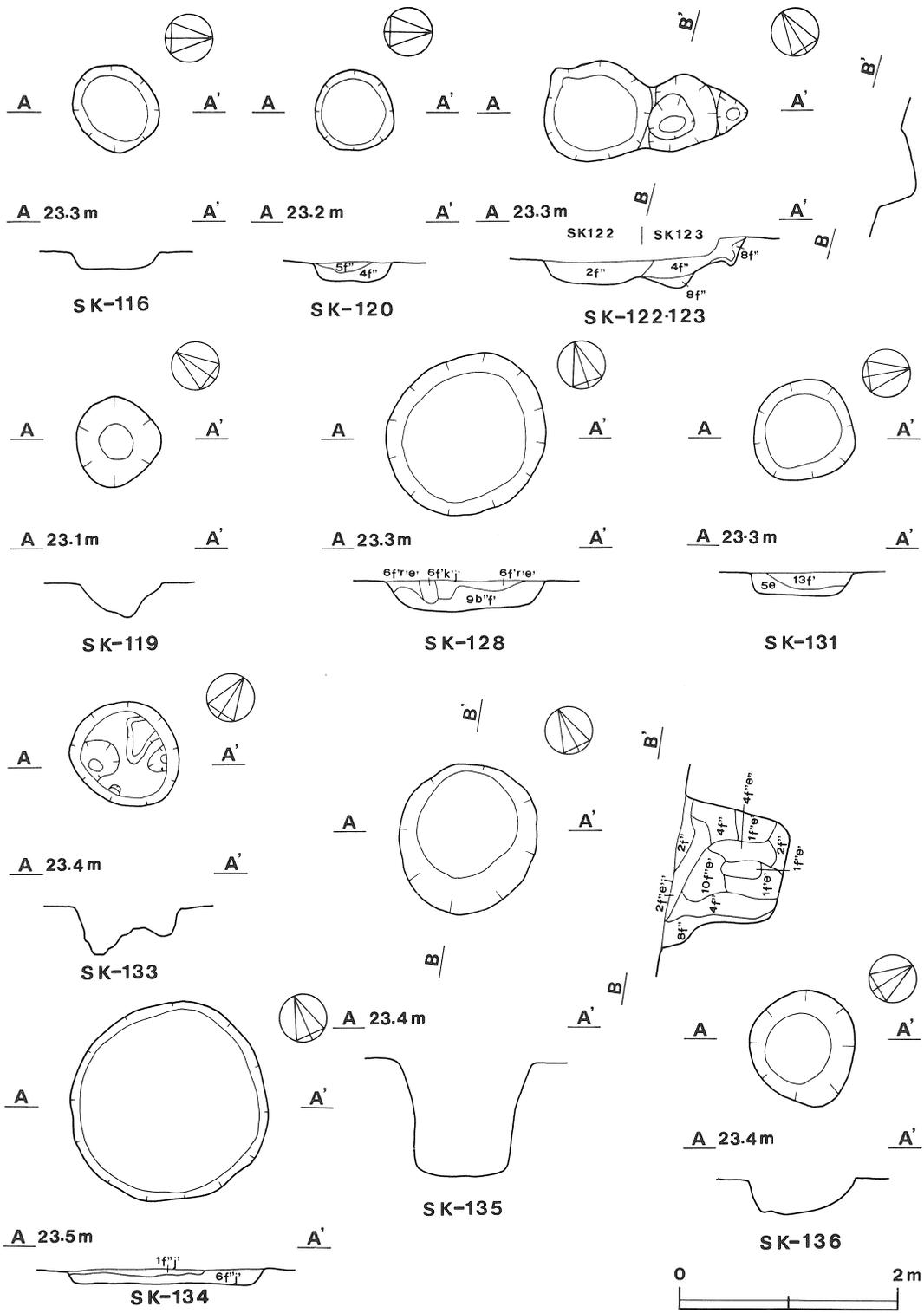
SK-64



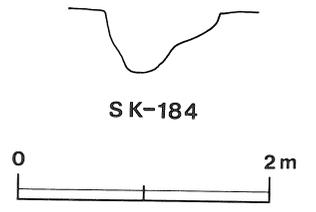
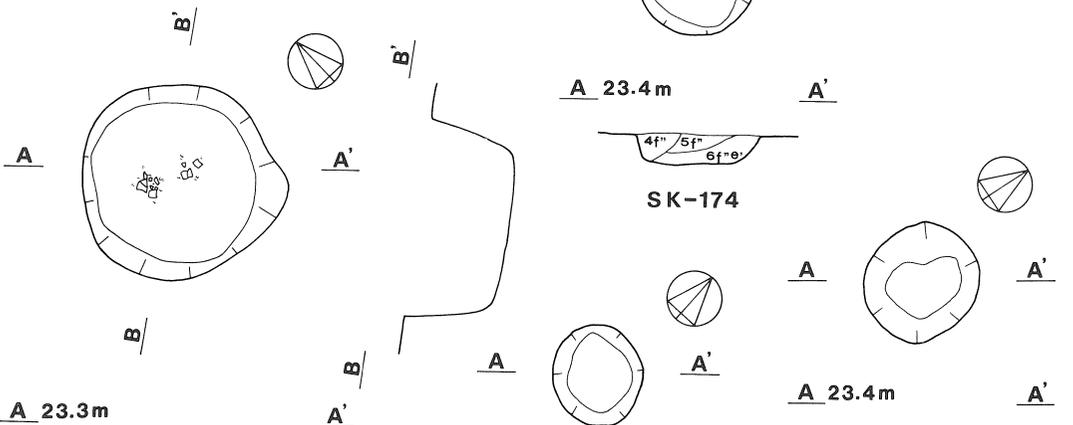
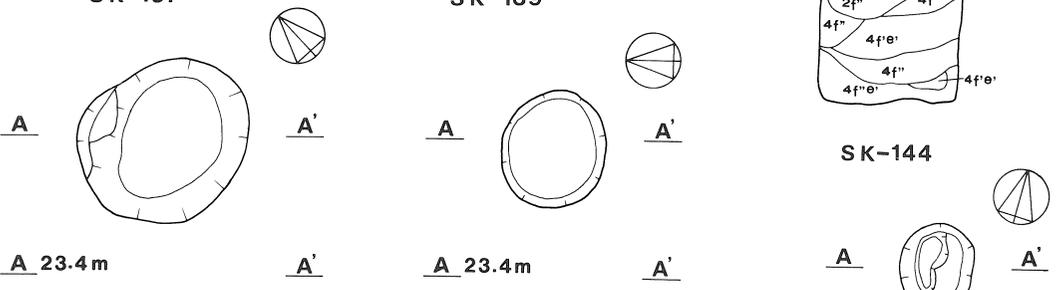
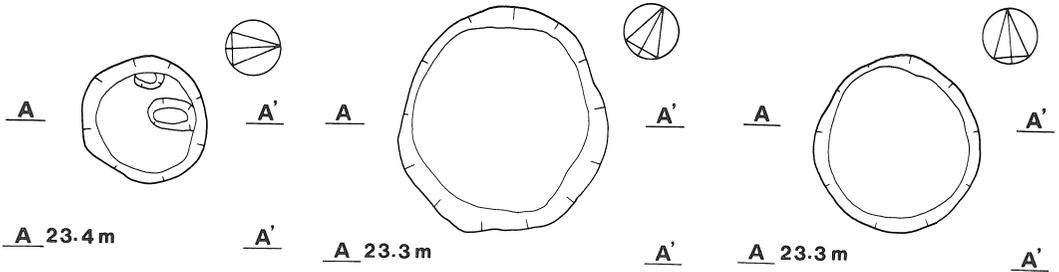
第303図 土壤実測図 (3)



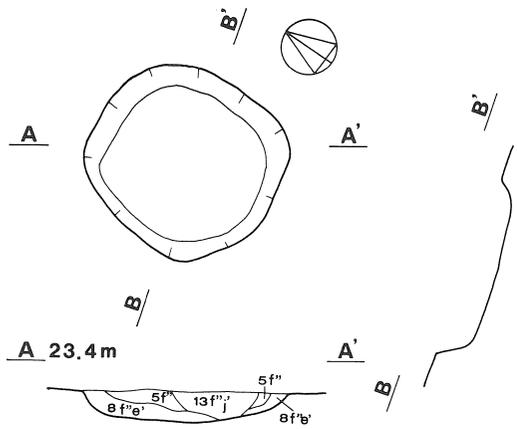
第304図 土壤実測図 (4)



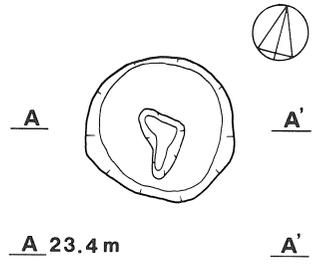
第305图 土壤実測図 (5)



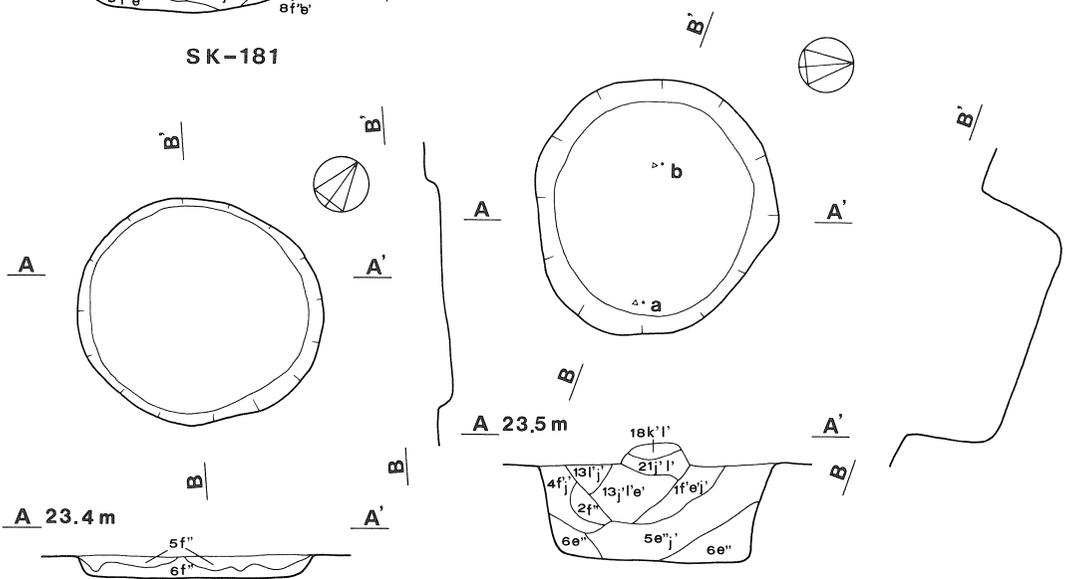
第306図 土壤実測図 (6)



SK-181

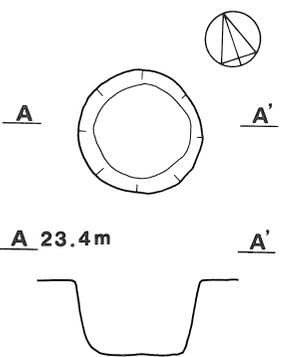


SK-188

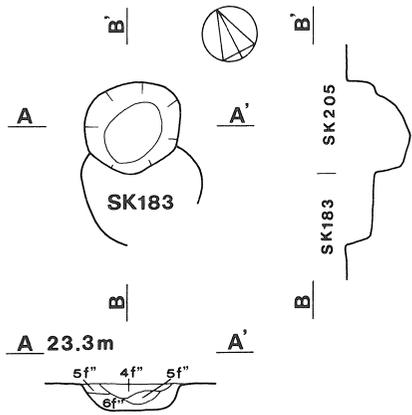


SK-189

SK-194

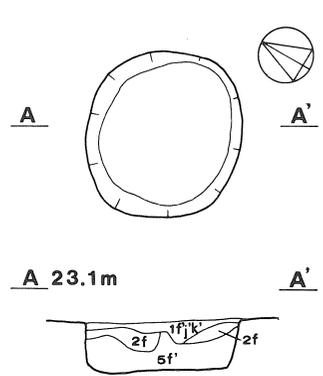


SK-201



SK183

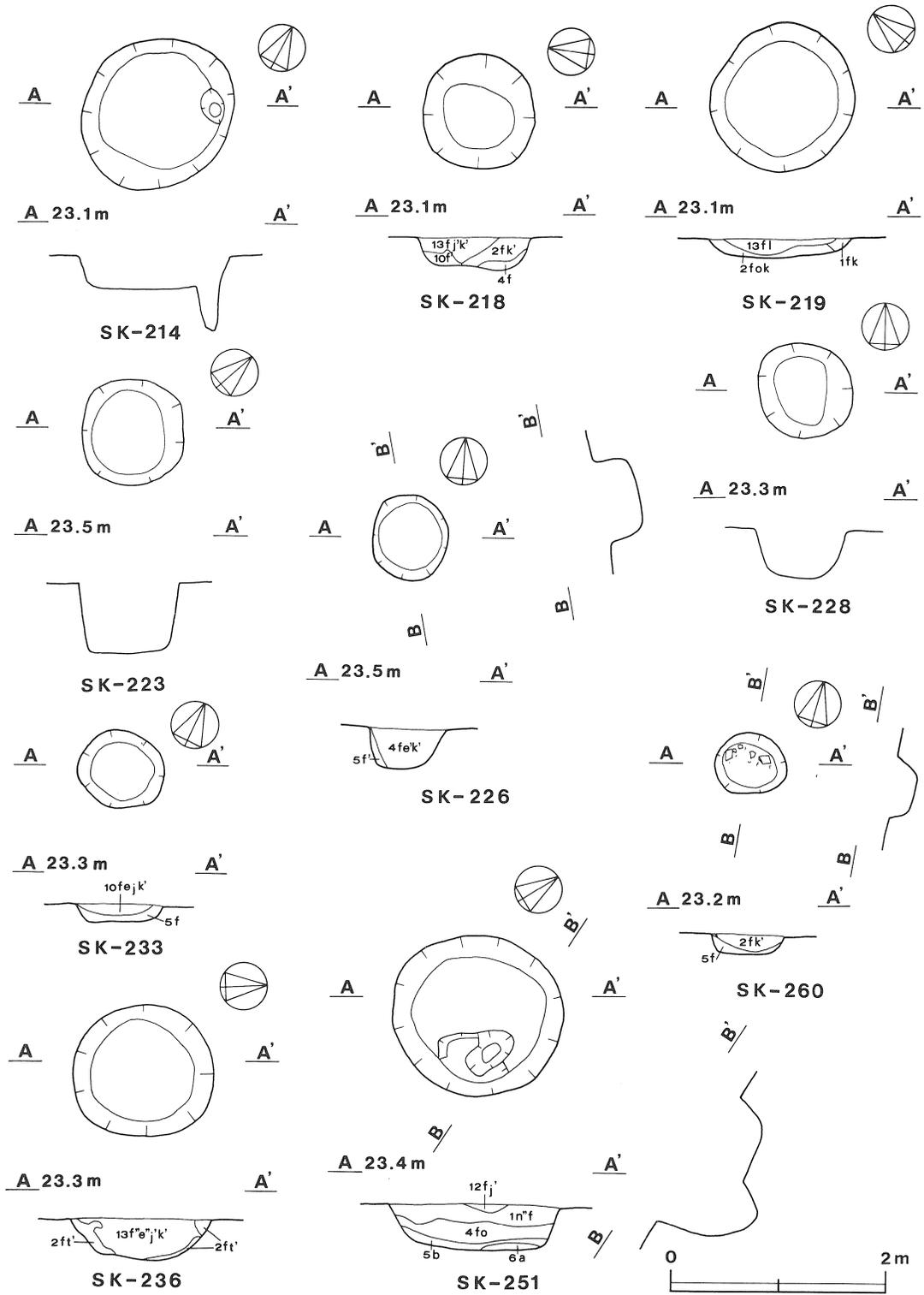
SK-205



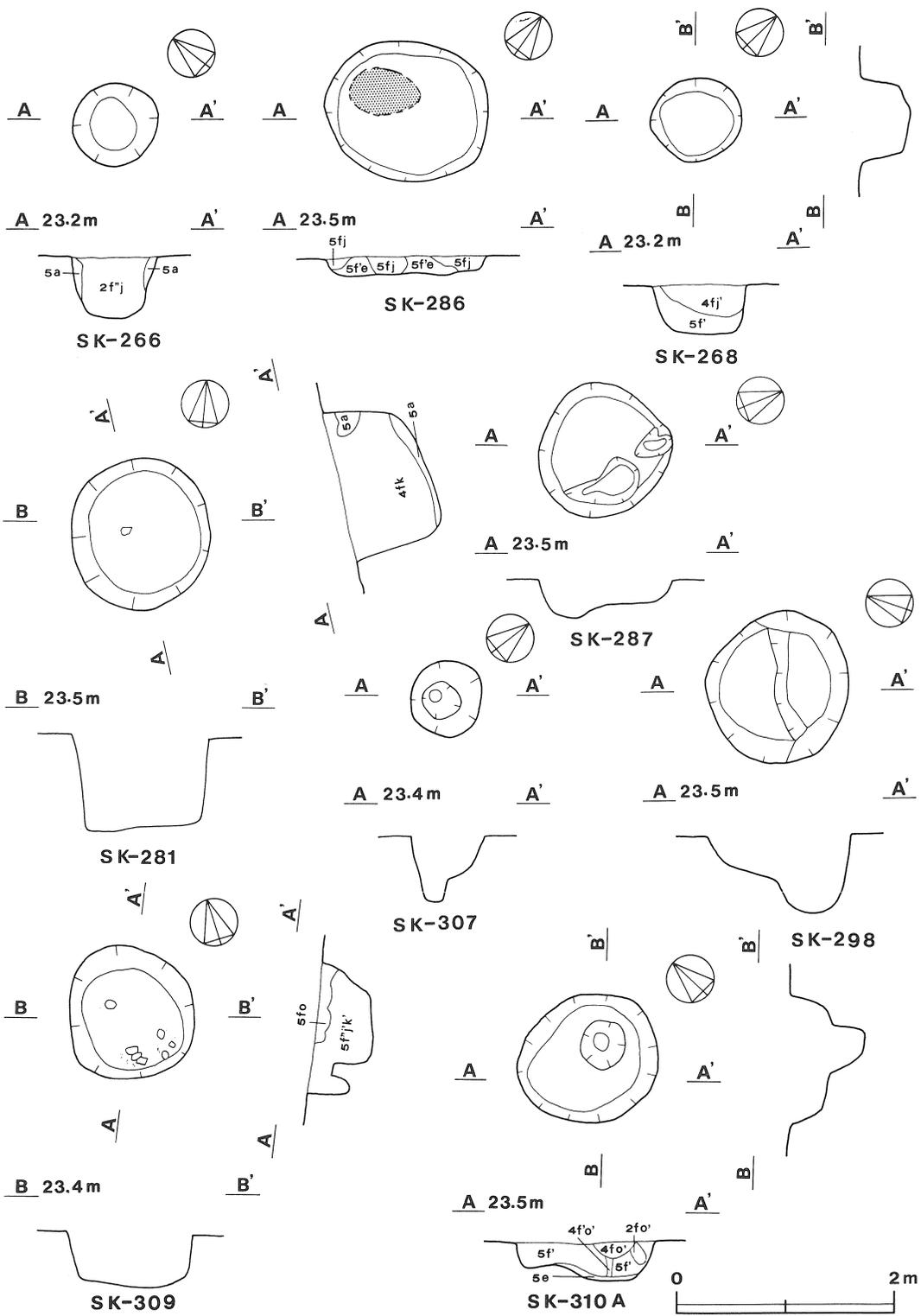
SK-206



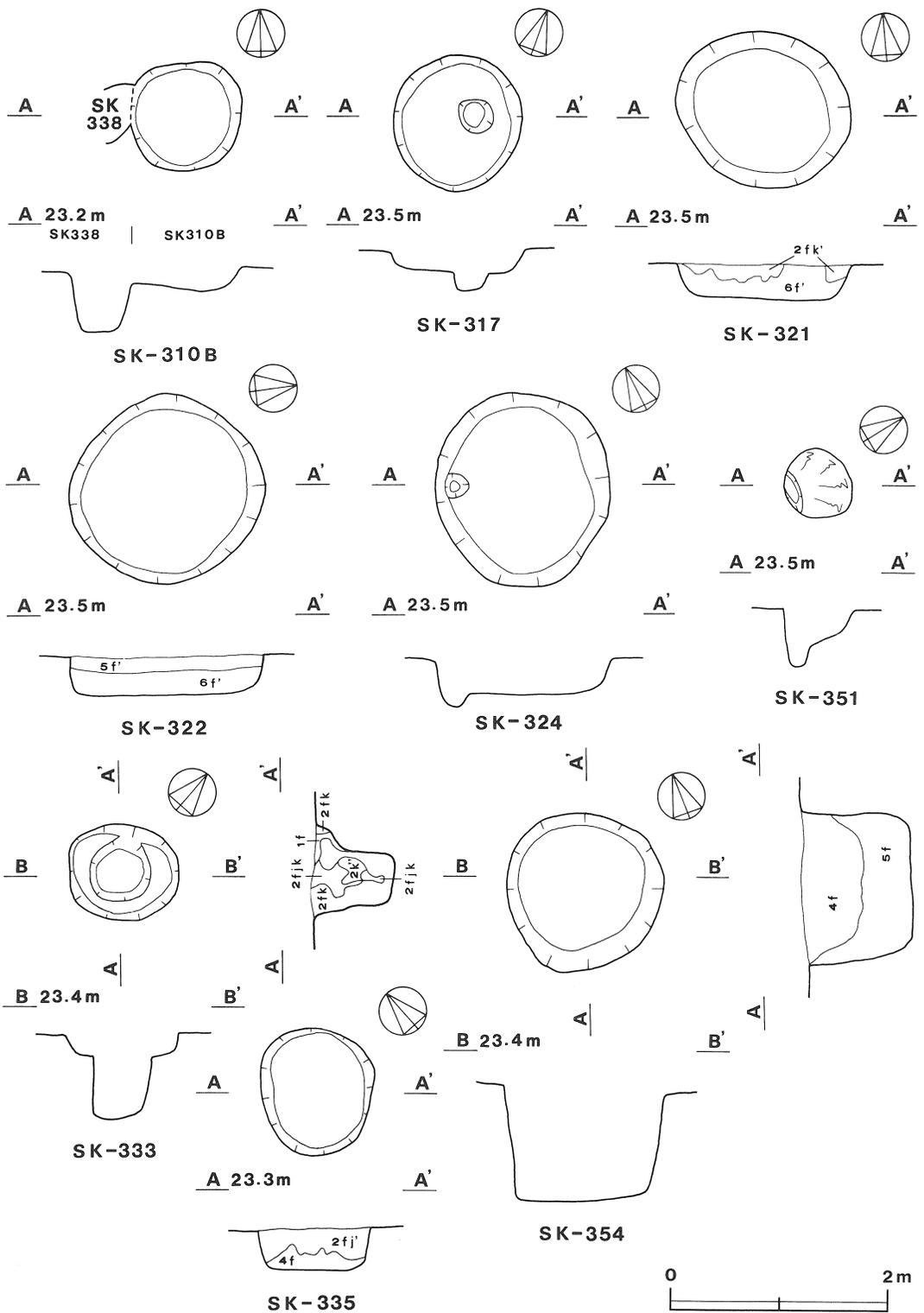
第307図 土壤実測図 (7)



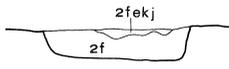
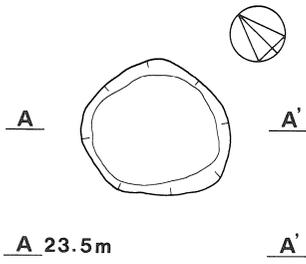
第308图 土壤実測図 (8)



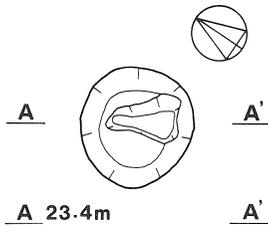
第309図 土壤実測図 (9)



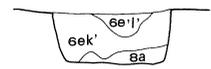
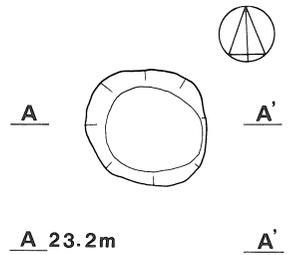
第310図 土壤実測図 (10)



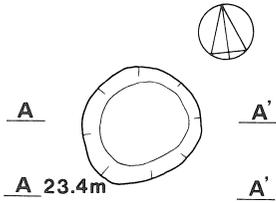
SK-350



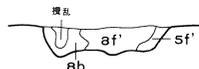
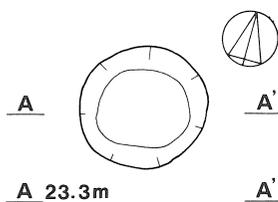
SK-373



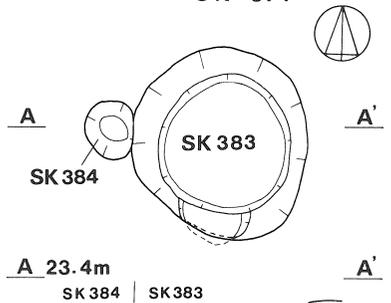
SK-374



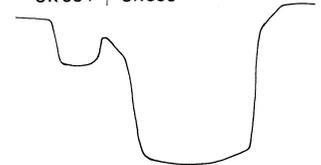
SK-378



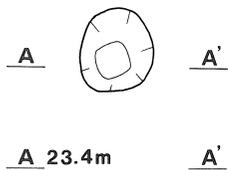
SK-379



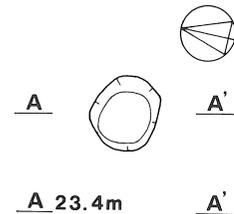
SK 384 | SK 383



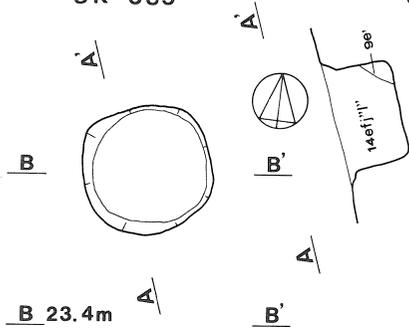
SK-383 · 384



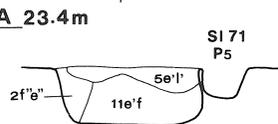
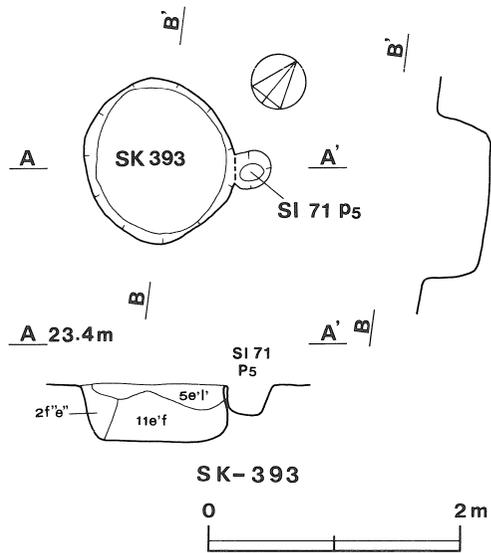
SK-385



SK-390



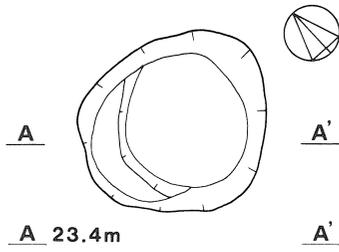
SK-402



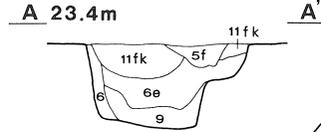
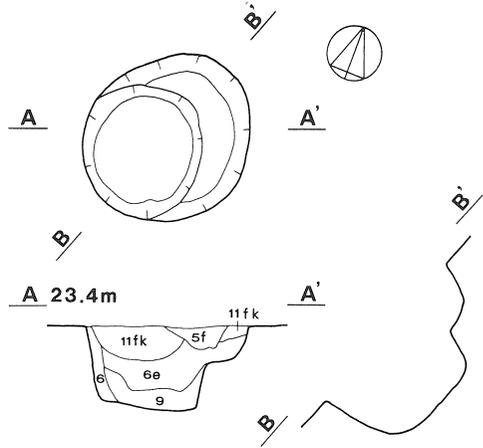
SK-393



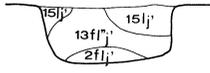
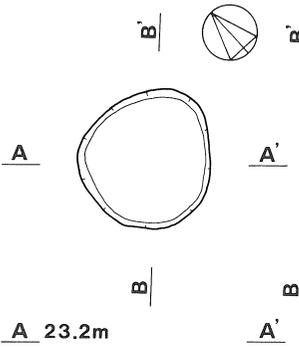
第311図 土壤実測図 (11)



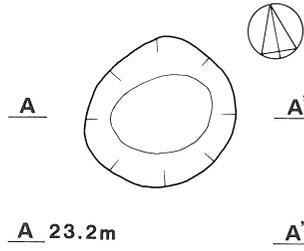
SK-411



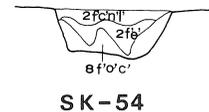
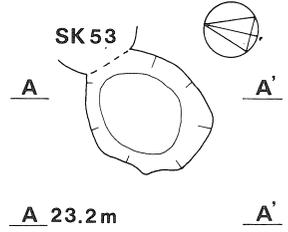
SK-412



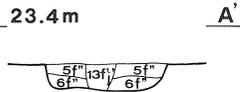
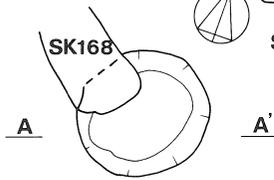
SK-416



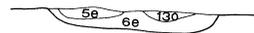
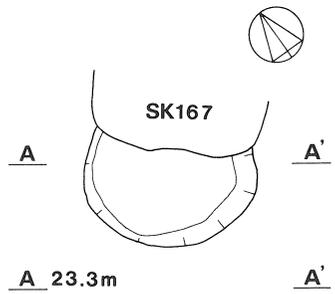
SK-421



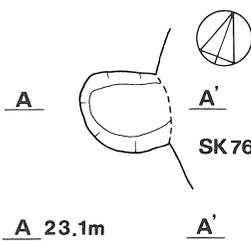
SK-54



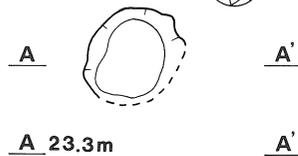
SK-148



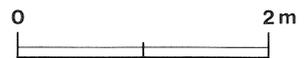
SK-140



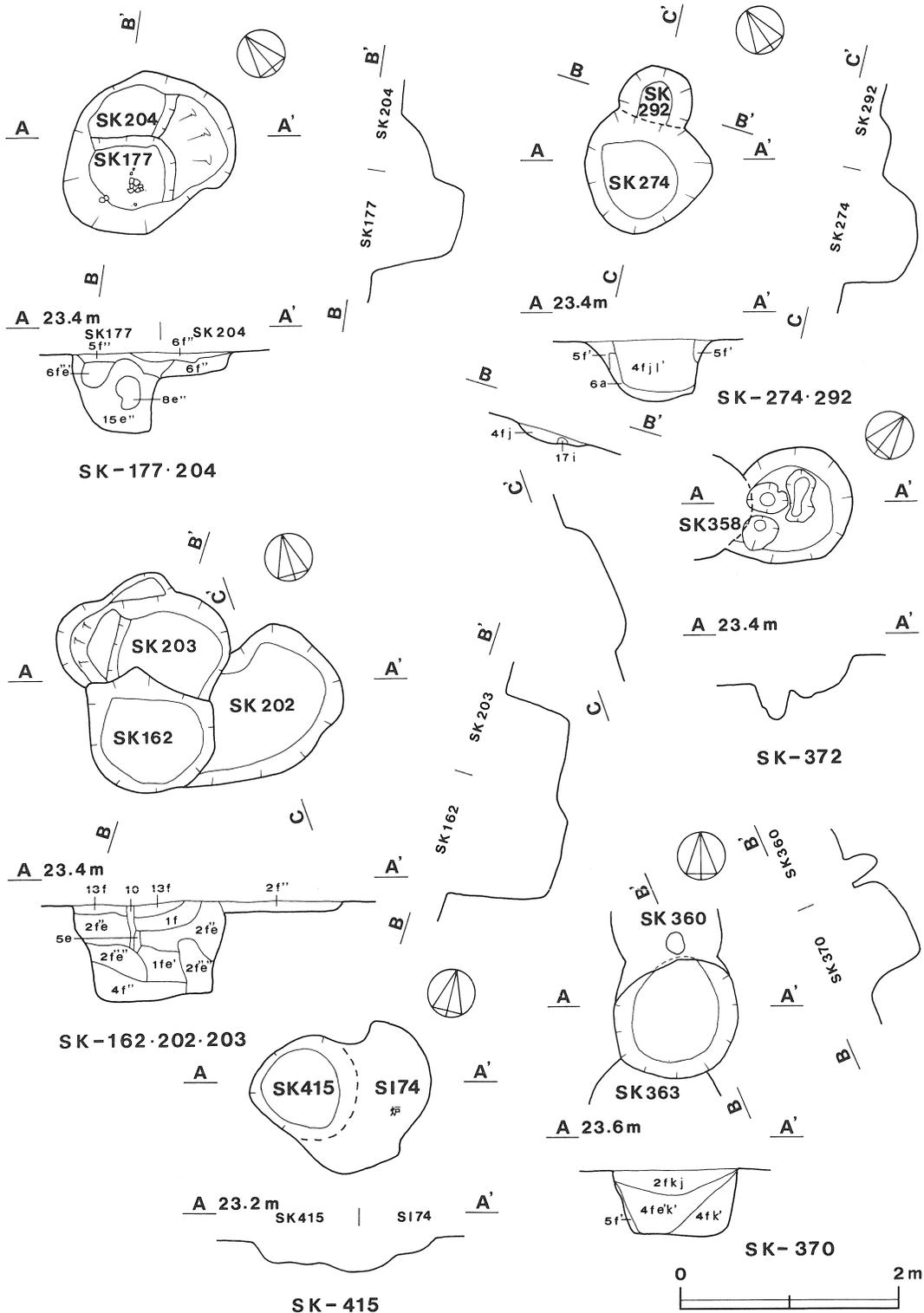
SK-118



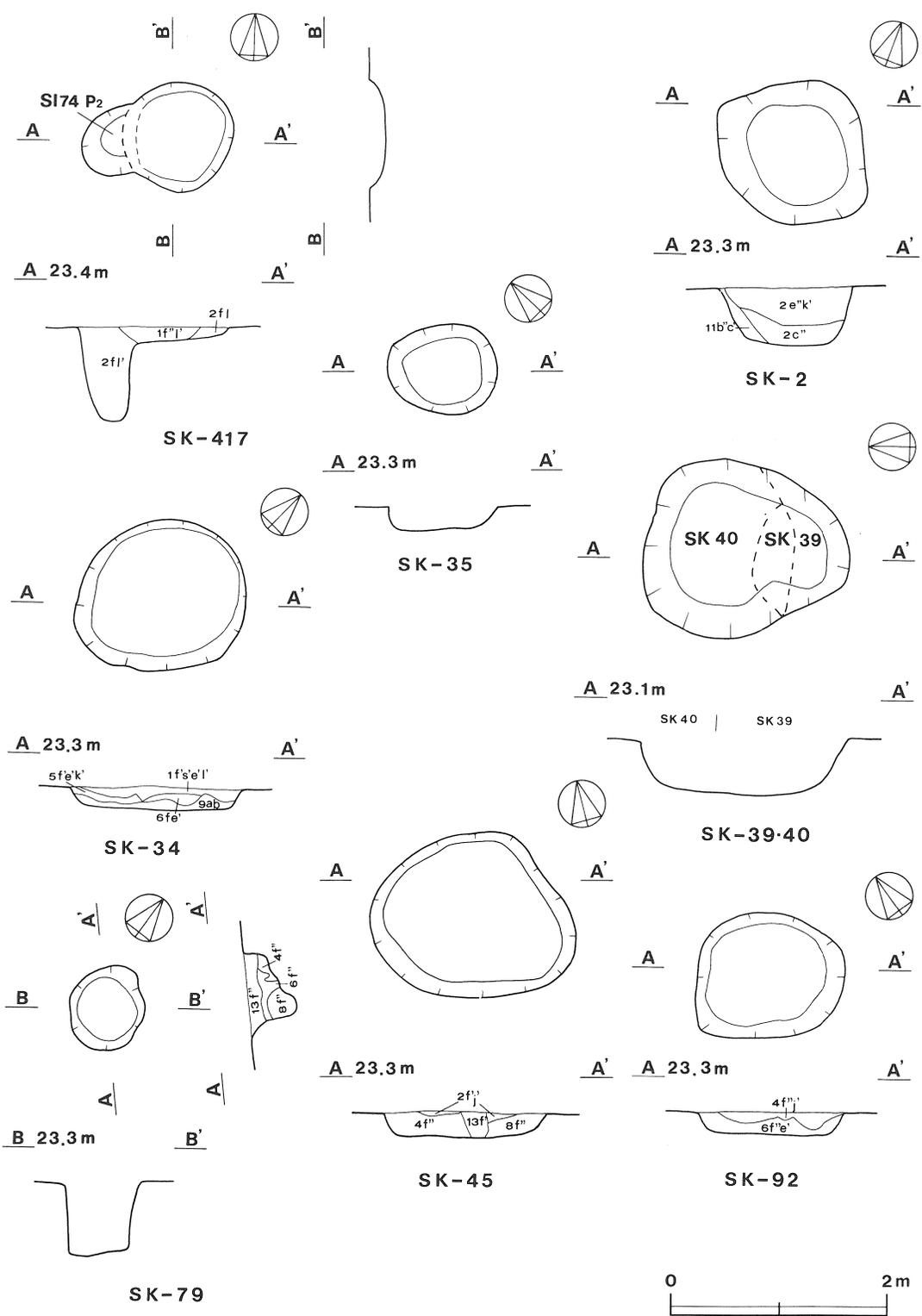
SK-73



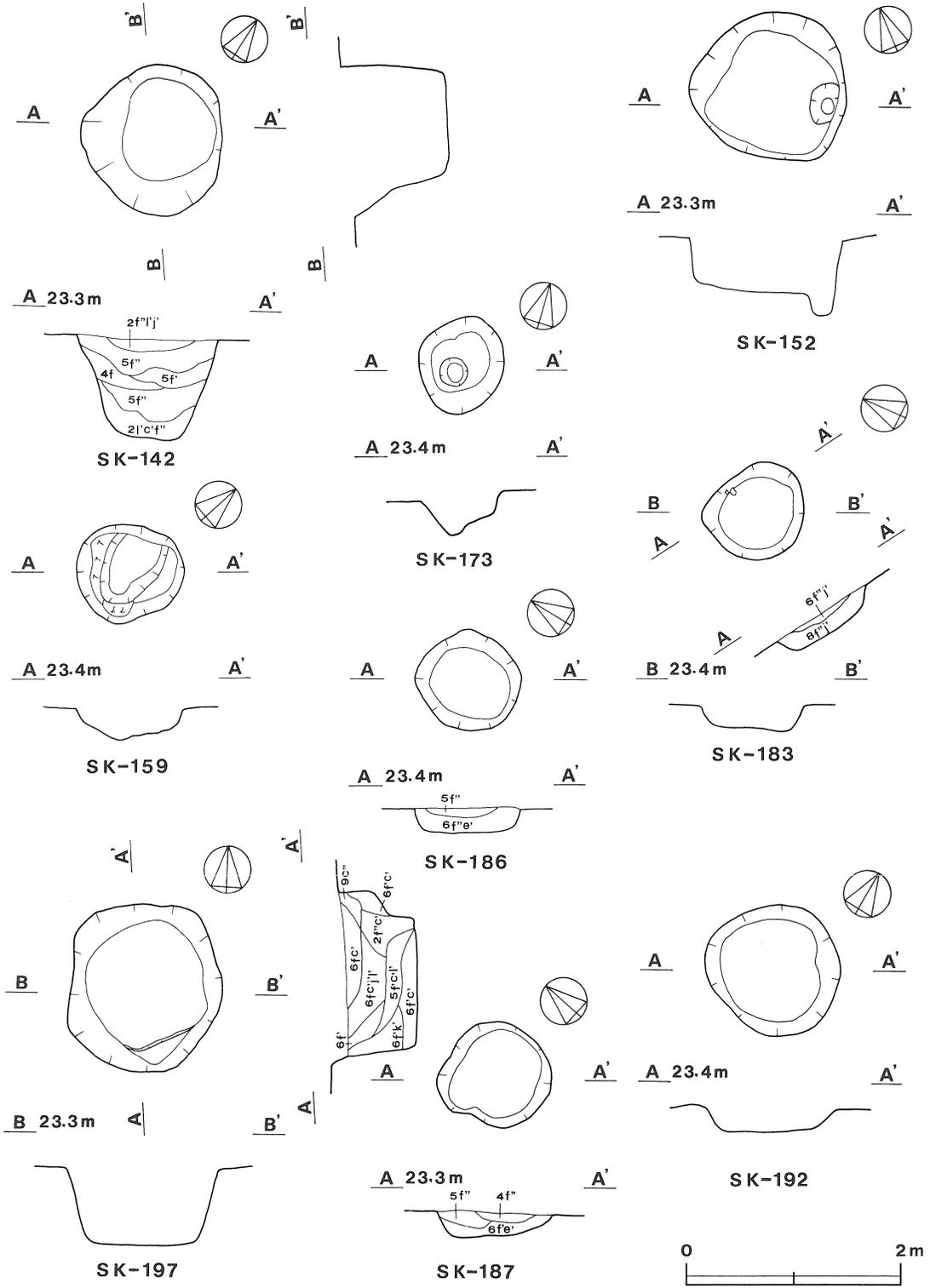
第312图 土壤実測图 (12)



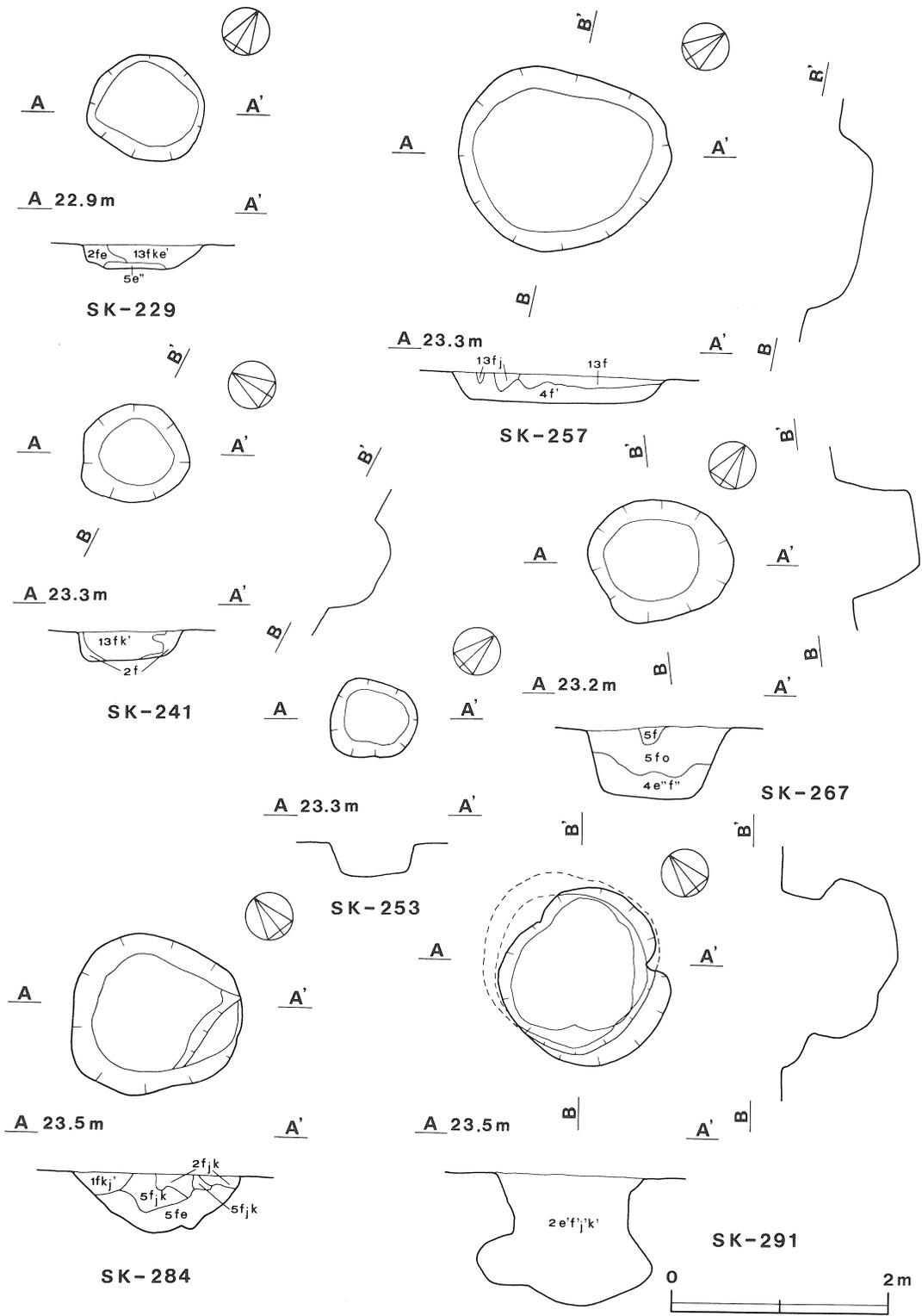
第313図 土壤実測図 (13)



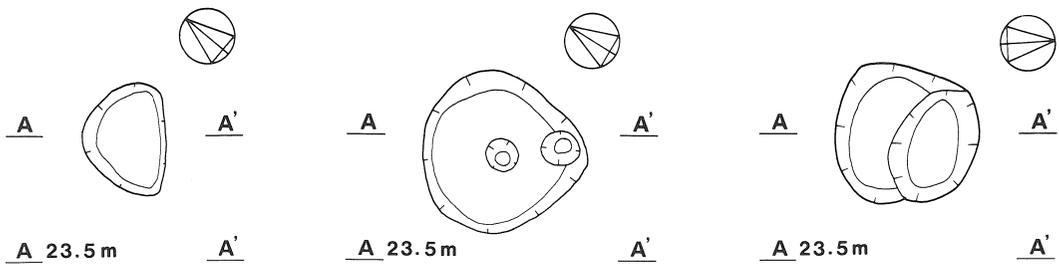
第314図 土壤実測図 (14)



第315图 土壤実測図 (15)



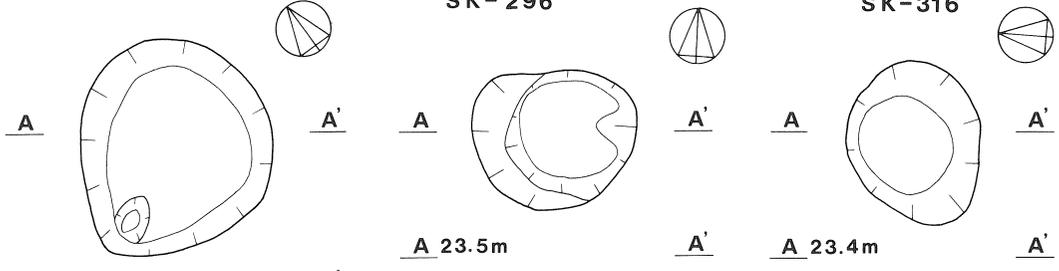
第316图 土壤実測図 (16)



SK-293

SK-296

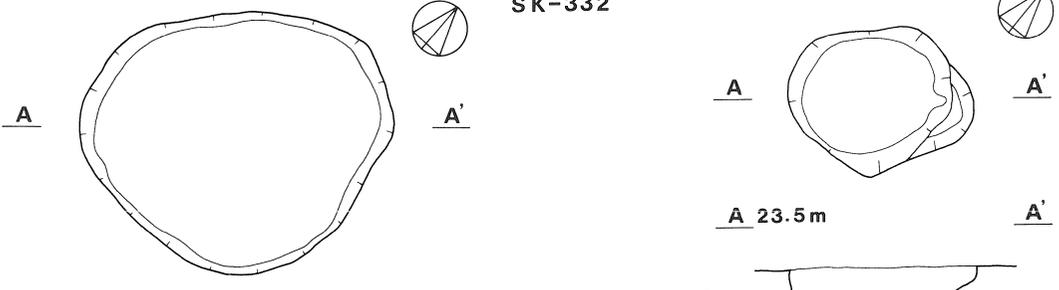
SK-316



SK-319

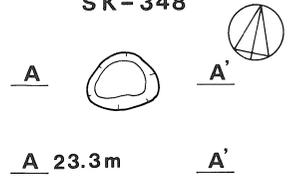
SK-332

SK-334

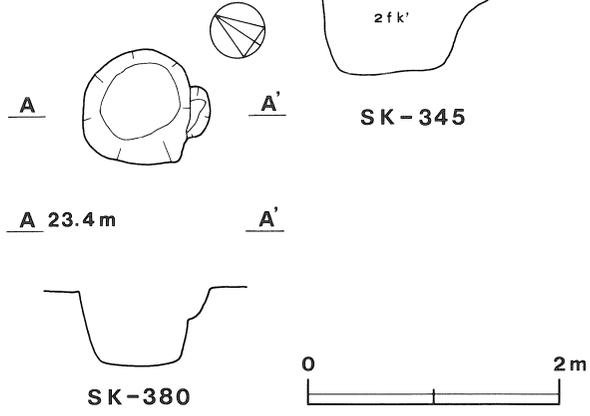


SK-348

SK-345

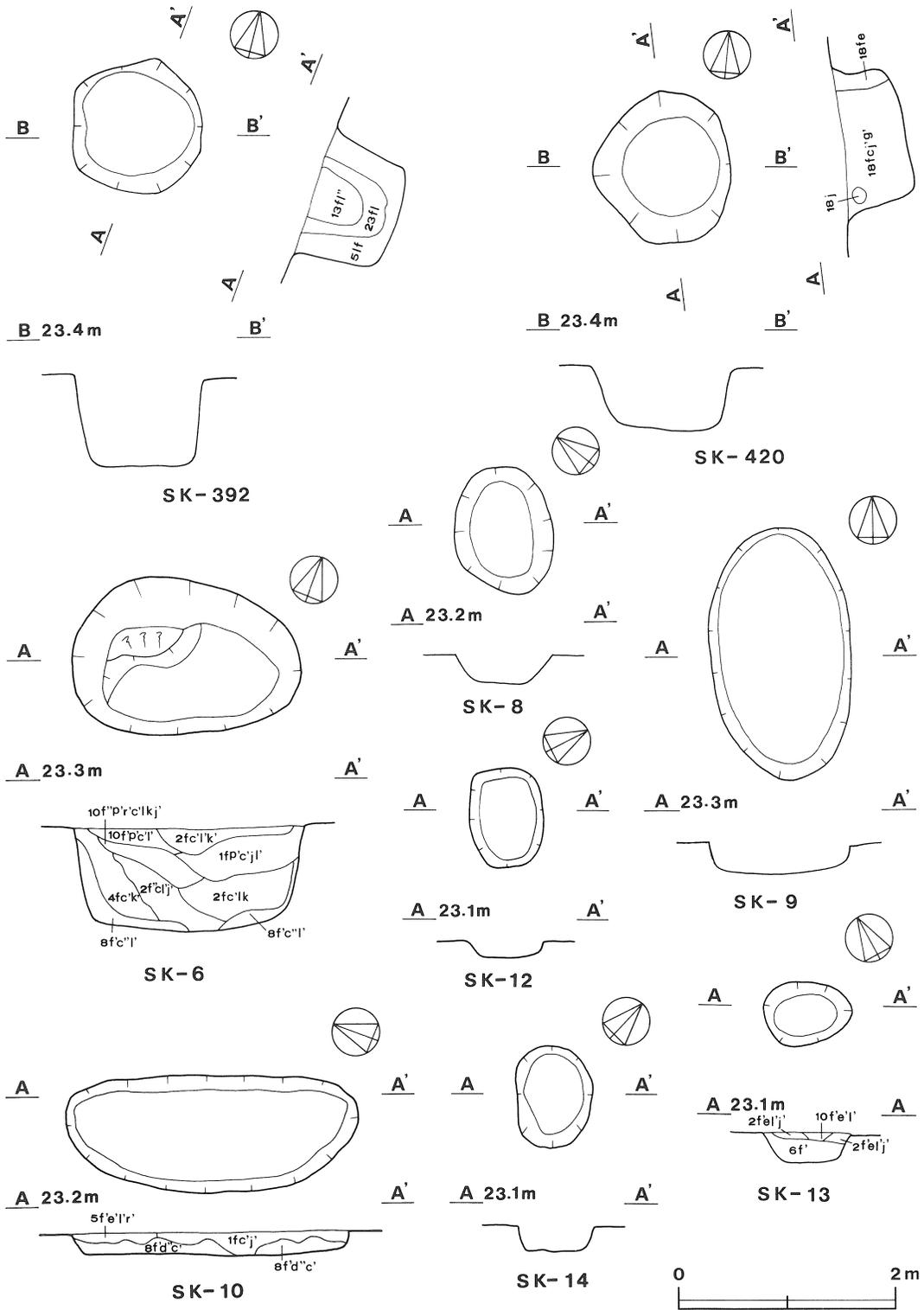


SK-391

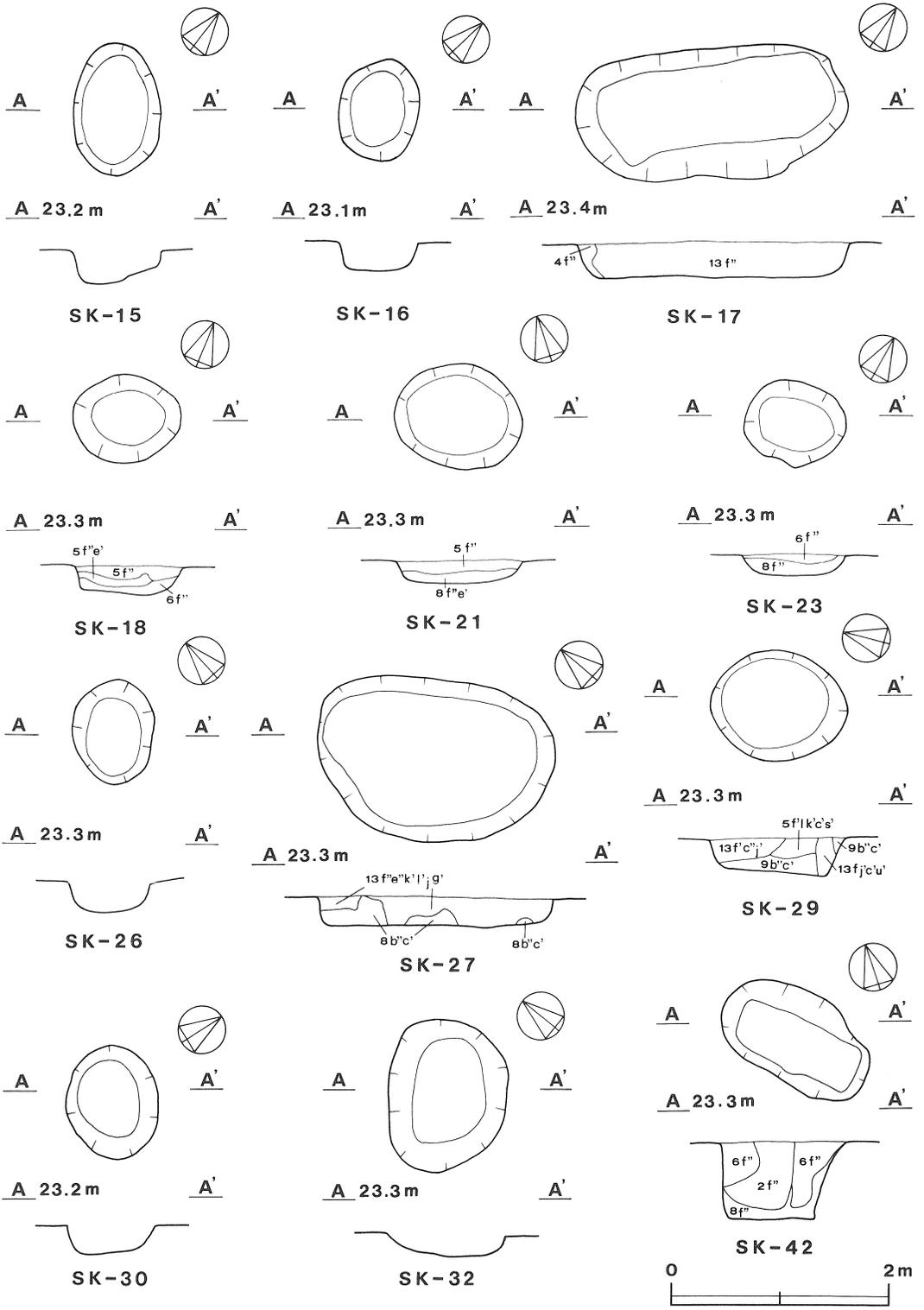


SK-380

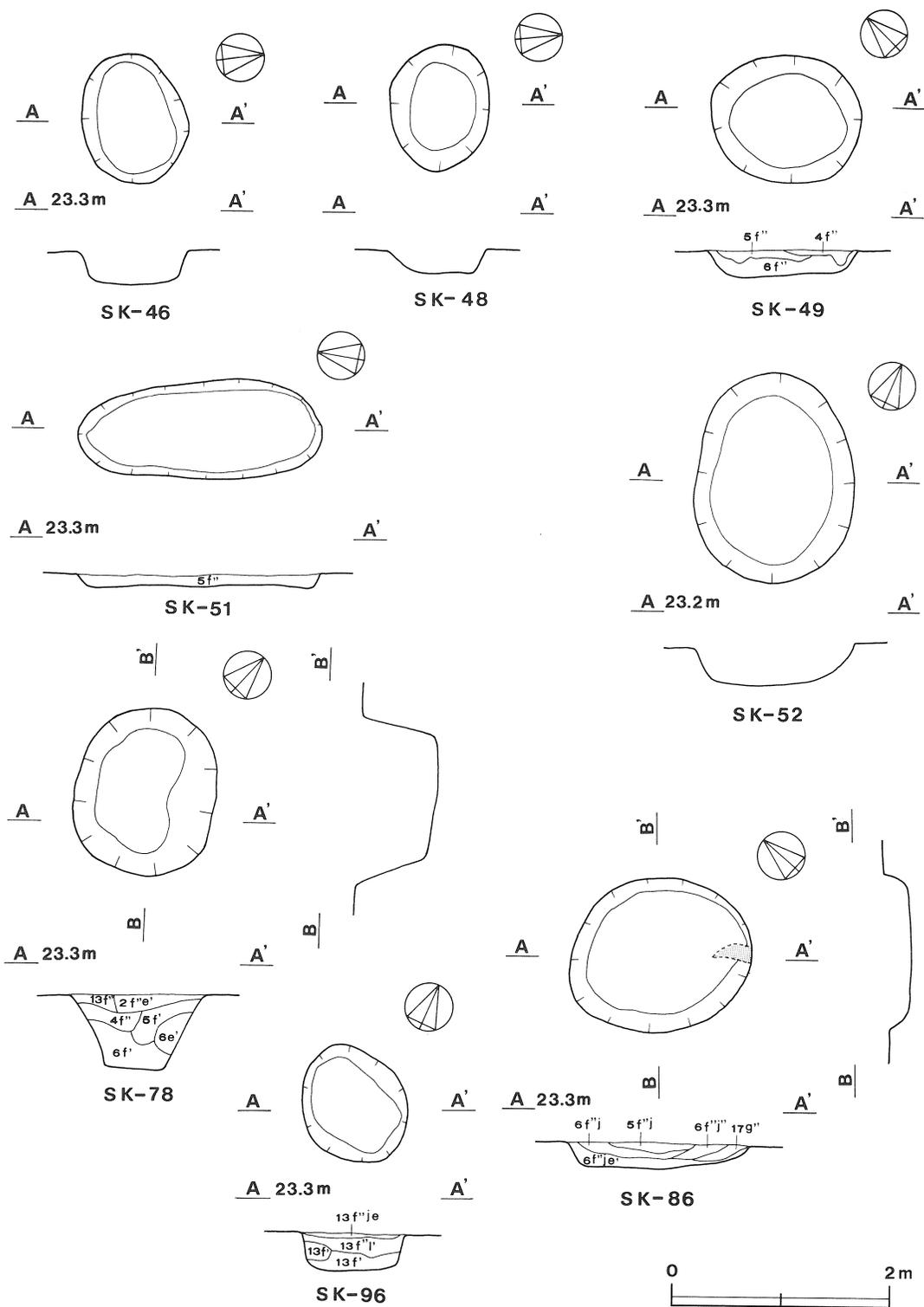
第317図 土壤実測図 (17)



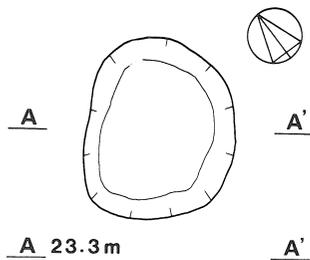
第318图 土壤実測図 (18)



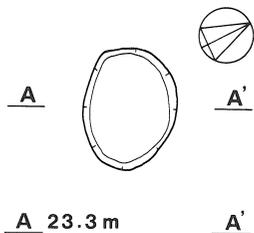
第319図 土壤実測図 (19)



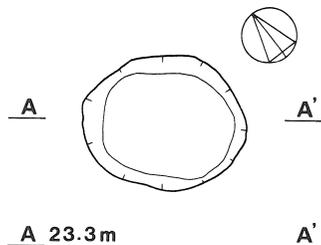
第320図 土壤実測図 (20)



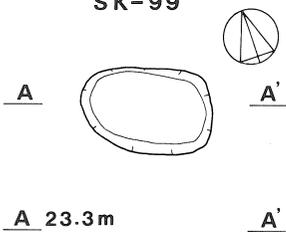
SK-99



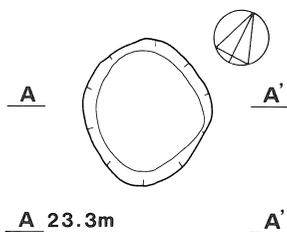
SK-103



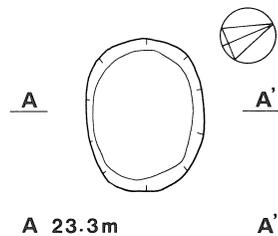
SK-105



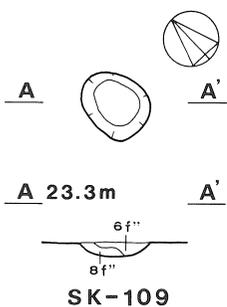
SK-107



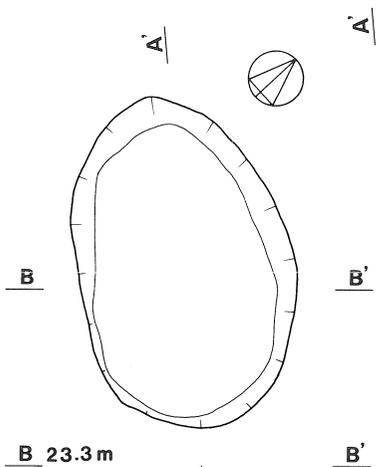
SK-108



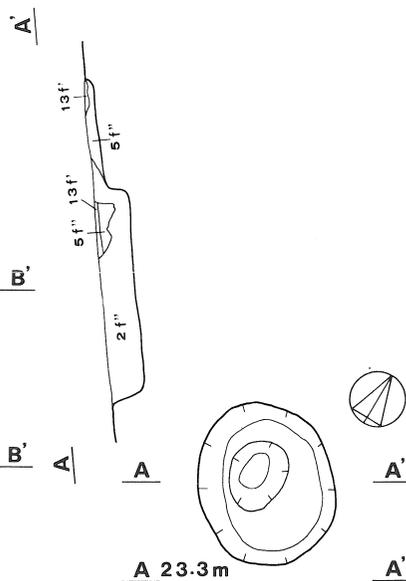
SK-110



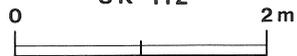
SK-109



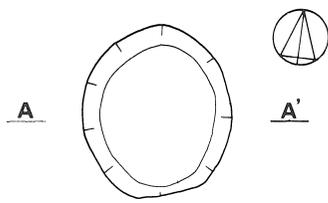
SK-124



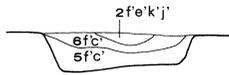
SK-112



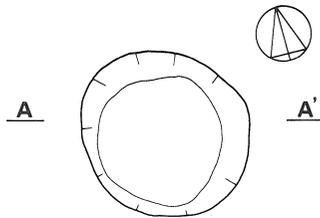
第321図 土壤実測図 (21)



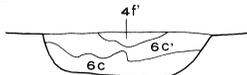
A 23.3m A'



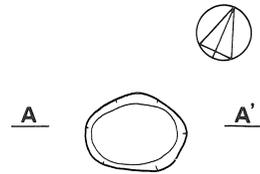
SK-126



A 23.4m A'



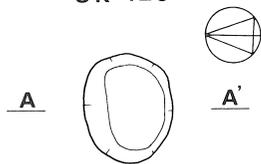
SK-138



A 23.3m A'



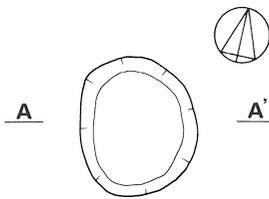
SK-141



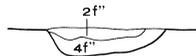
A 23.3m A'



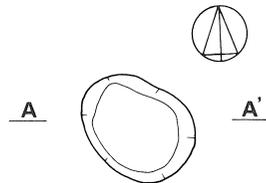
SK-143



A 23.3m A'



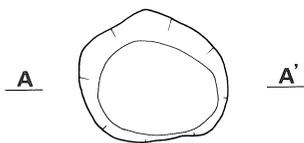
SK-145



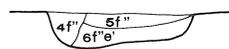
A 23.4m A'



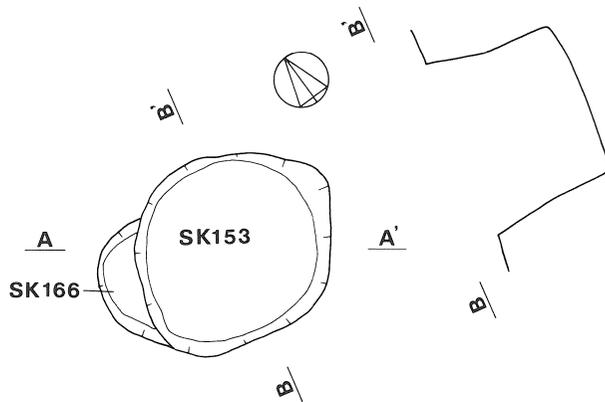
SK-146



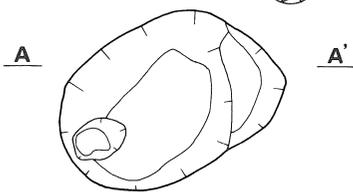
A 23.4m A'



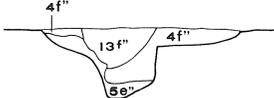
SK-147



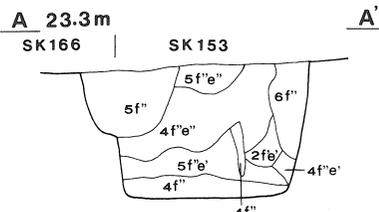
A SK166 SK153 A'



A 23.3m A'



SK-151

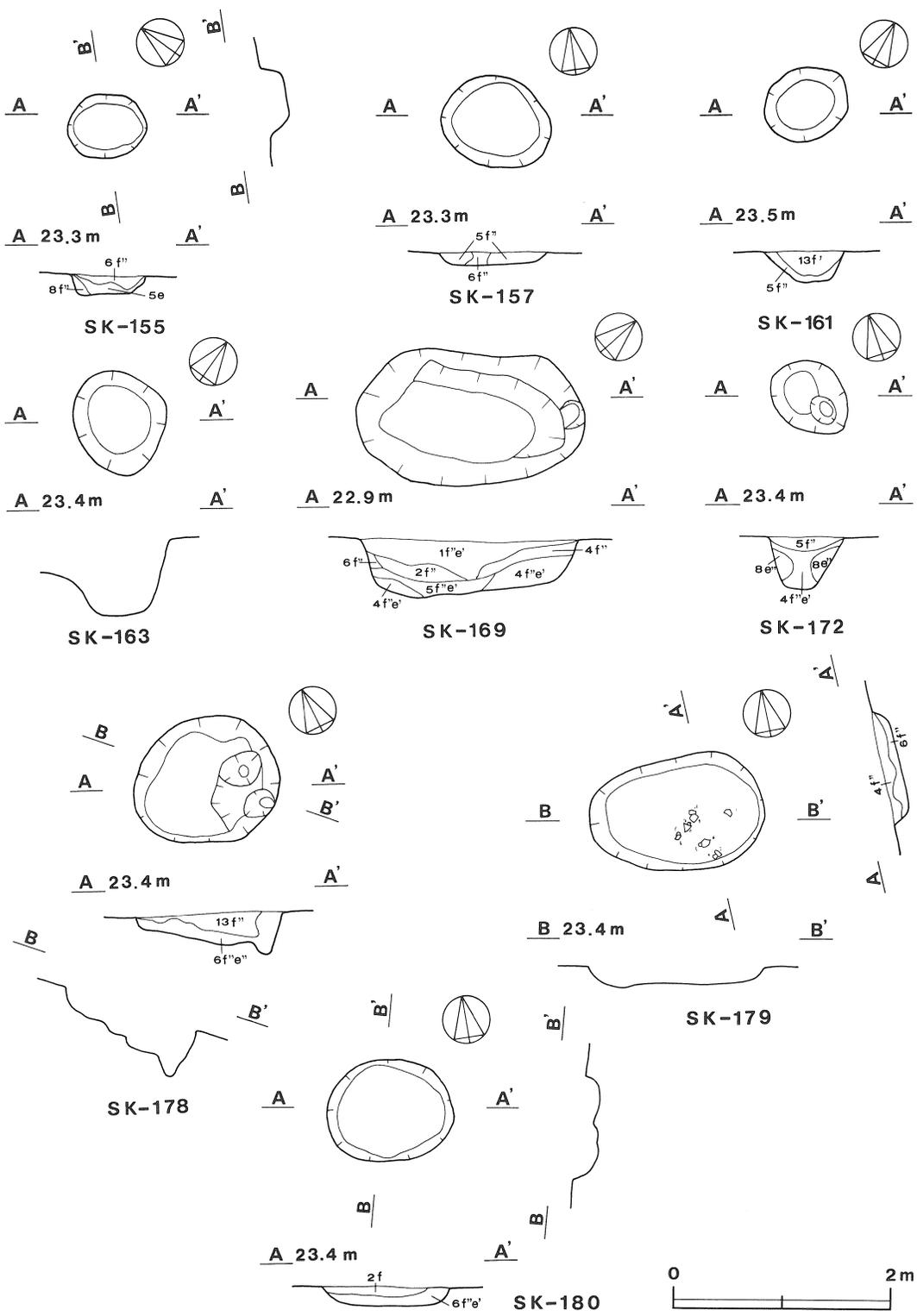


A 23.3m SK166 SK153 A'

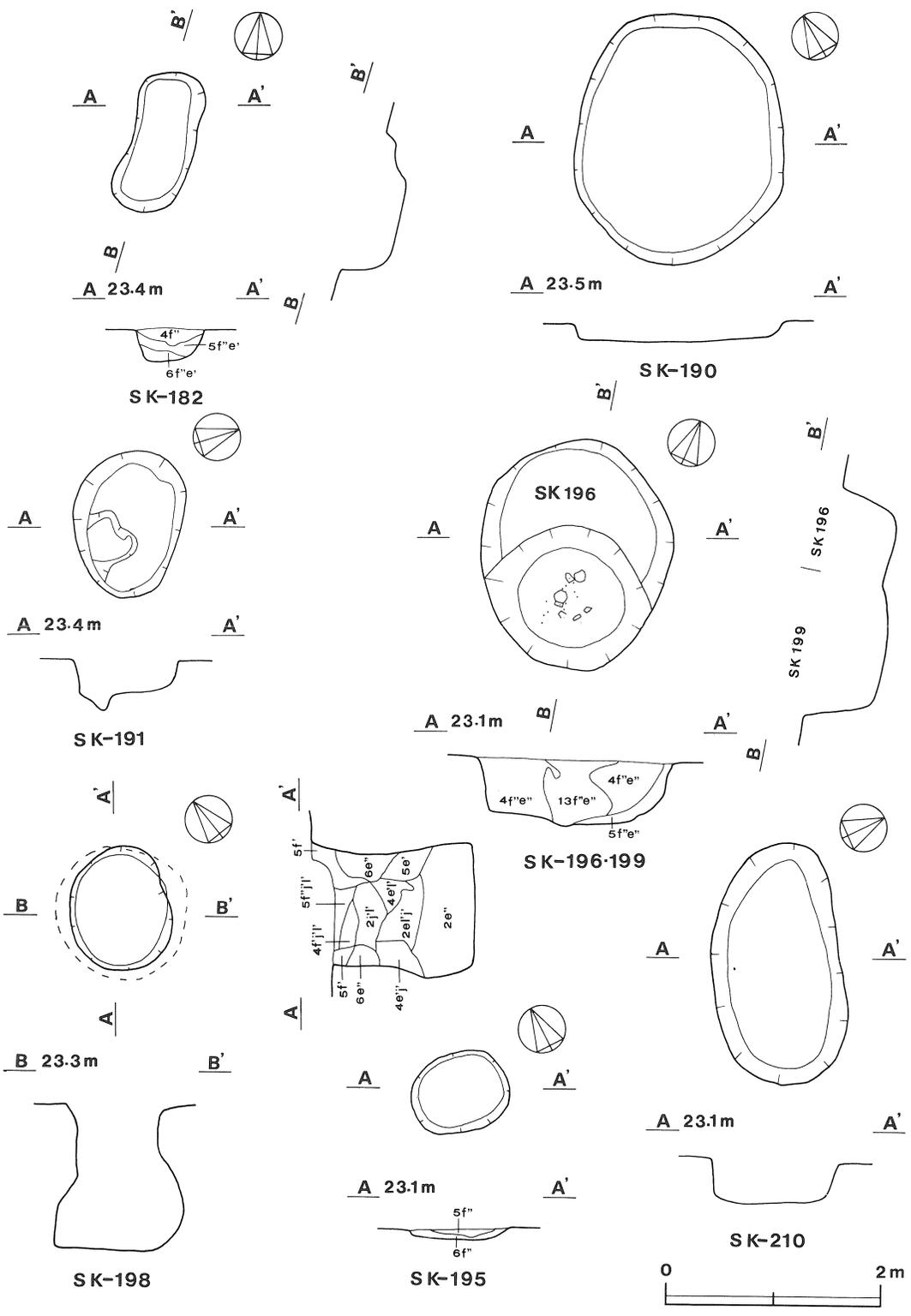
SK-153-166



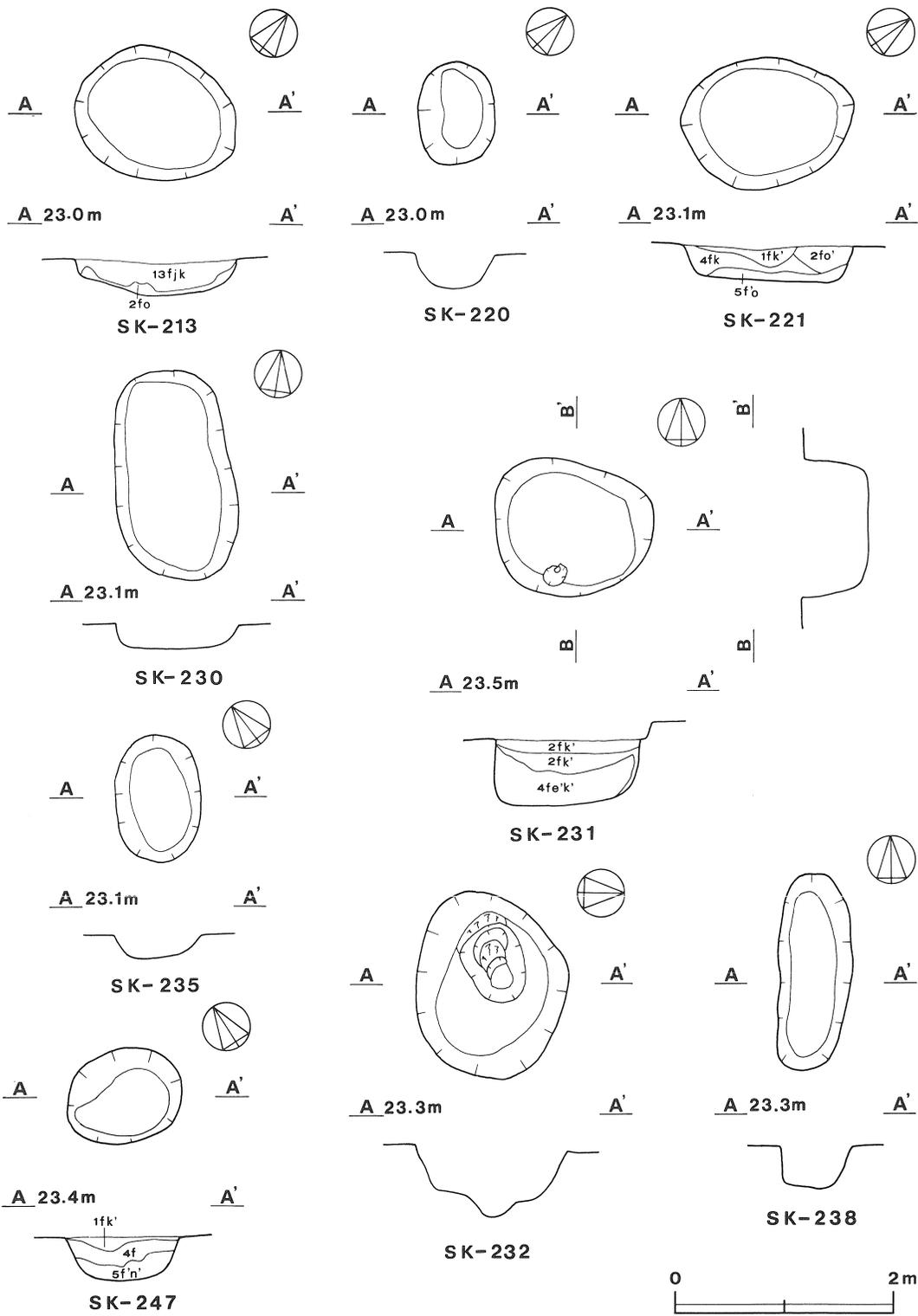
第322图 土壤実測図 (2)



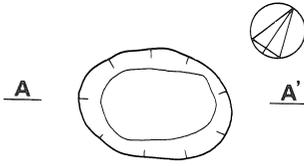
第323図 土壤実測図 (23)



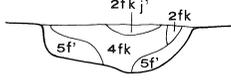
第324图 土壤実測図 (24)



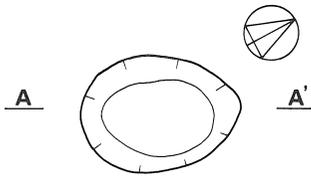
第325図 土壤実測図 (25)



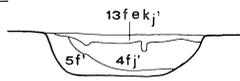
A 23.3m A'



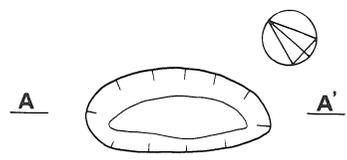
SK-239



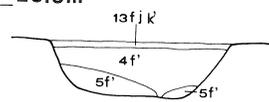
A 23.3m A'



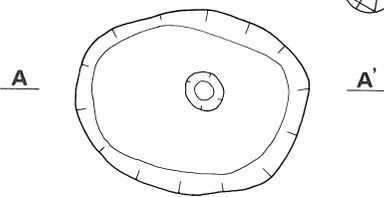
SK-250



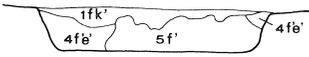
A 23.3m A'



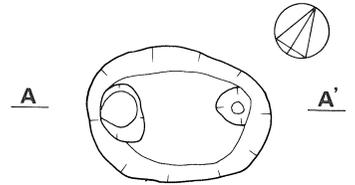
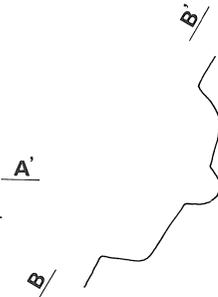
SK-255



A 23.4m A'



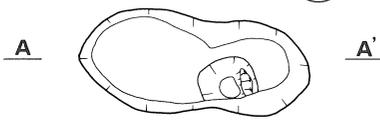
SK-252



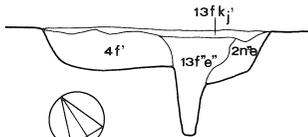
A 23.3m A'



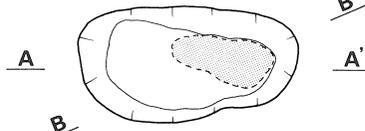
SK-256



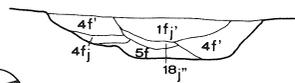
A 23.4m A'



SK-259



A 23.4m A'



SK-264



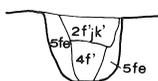
A 23.2m A'



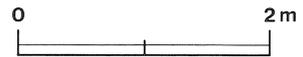
SK-265



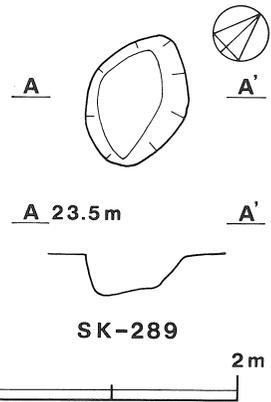
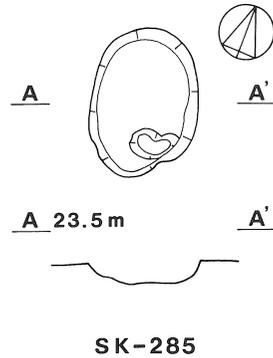
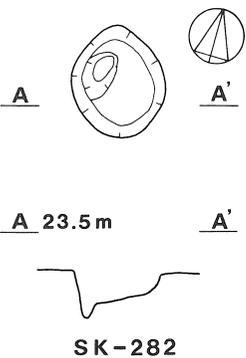
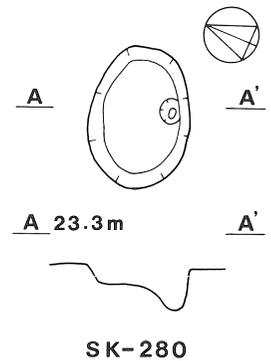
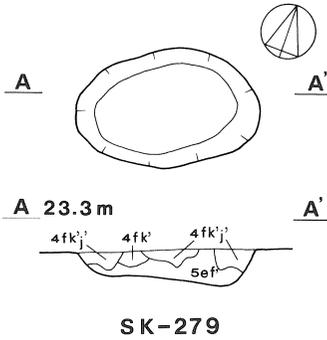
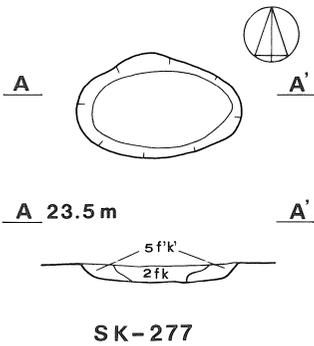
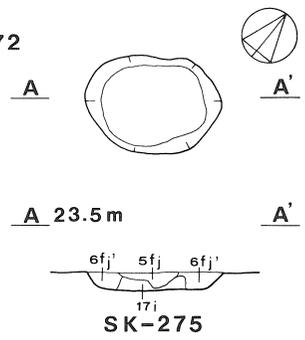
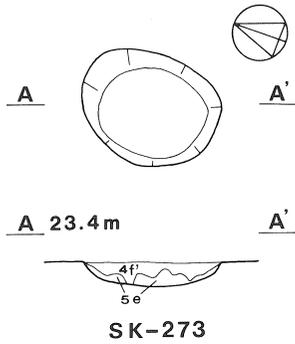
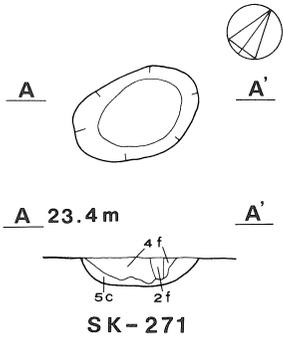
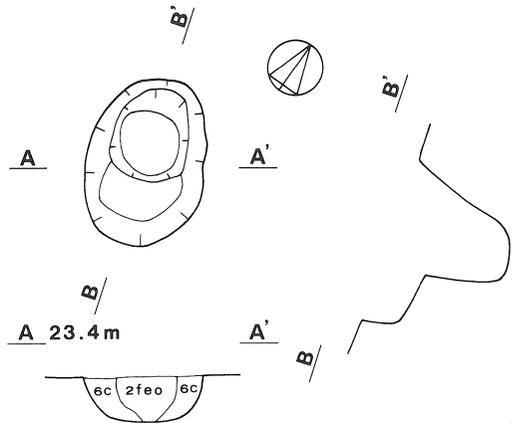
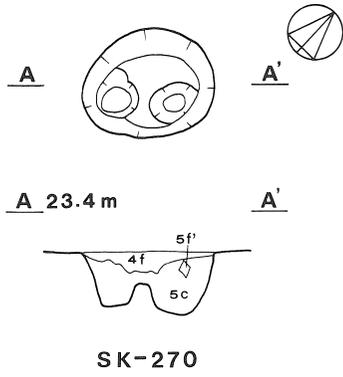
A 23.2m A'



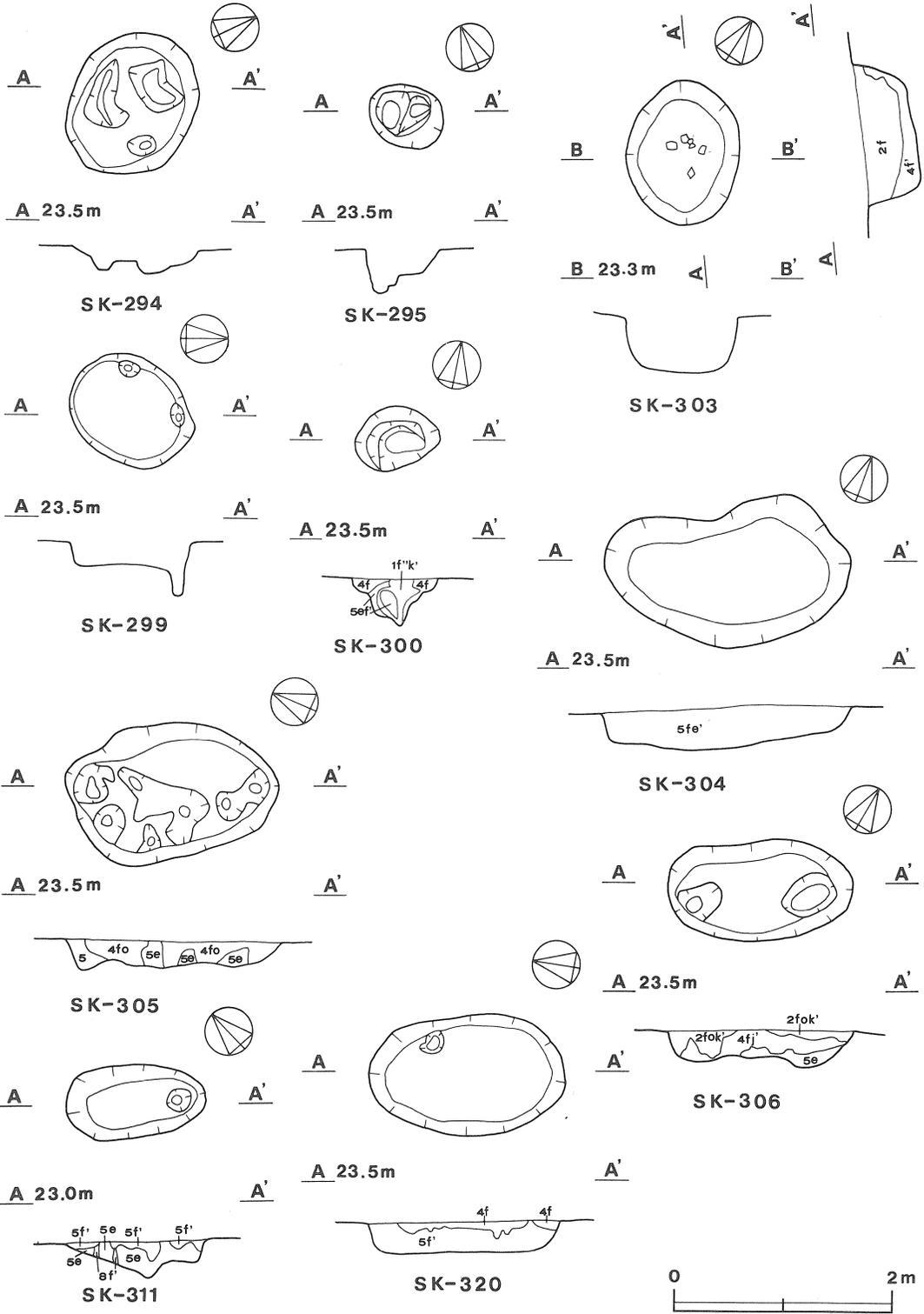
SK-269



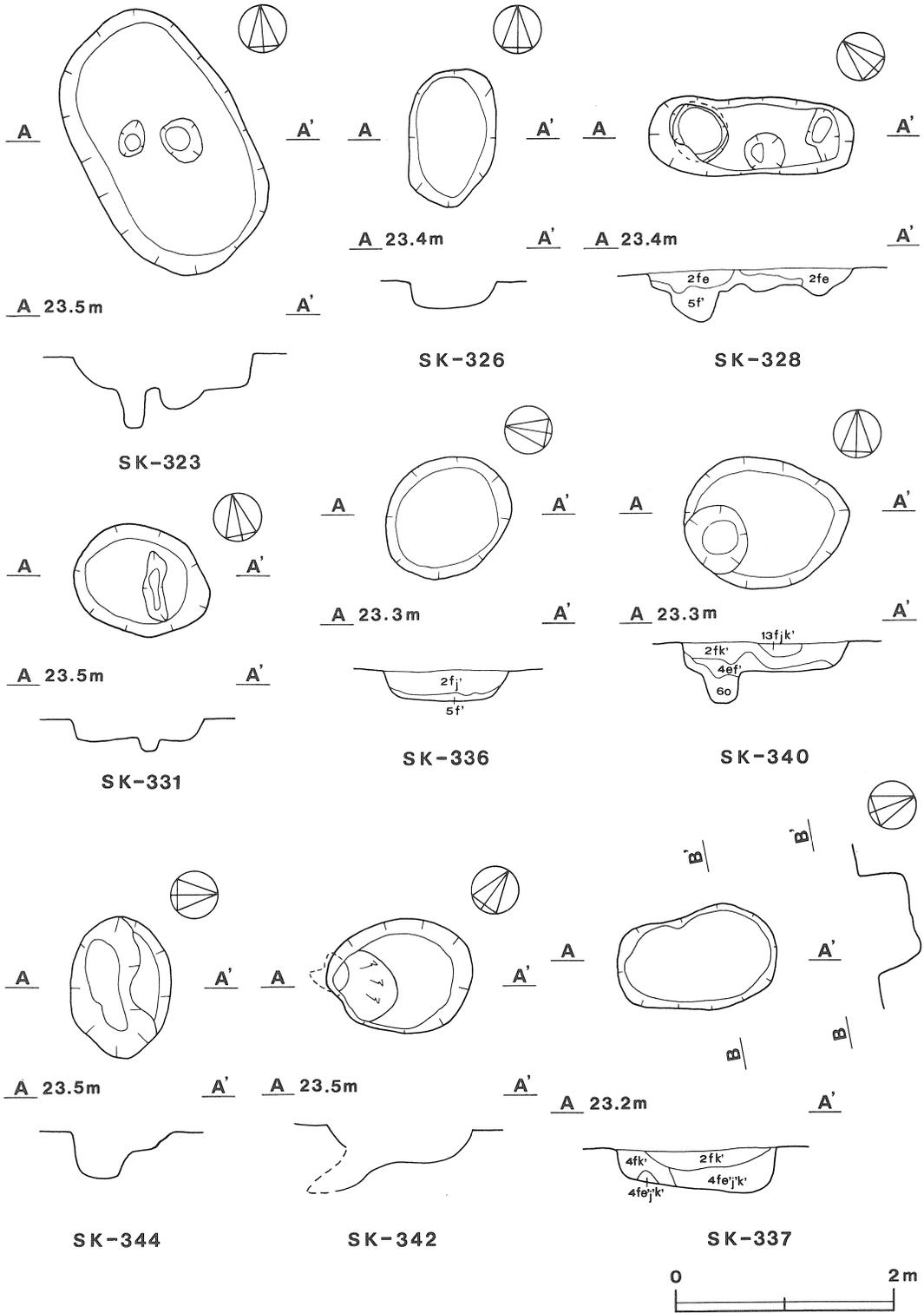
第326图 土壤実測図 (26)



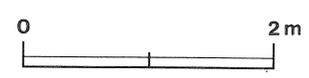
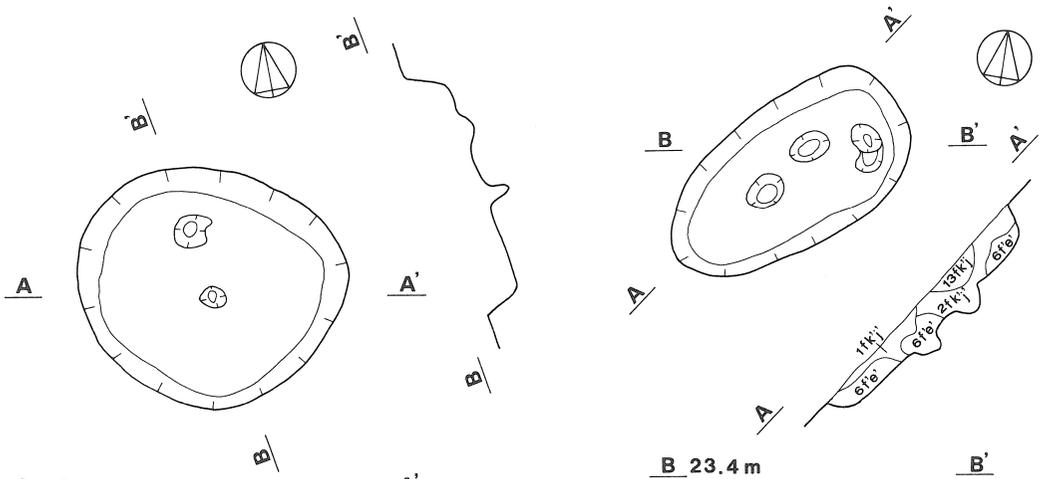
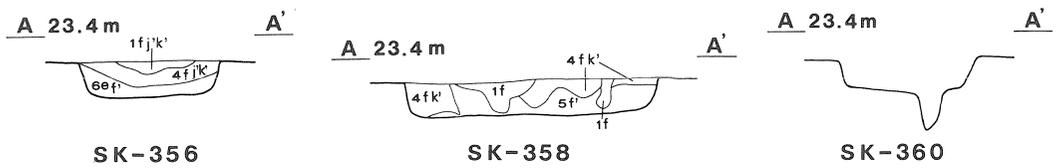
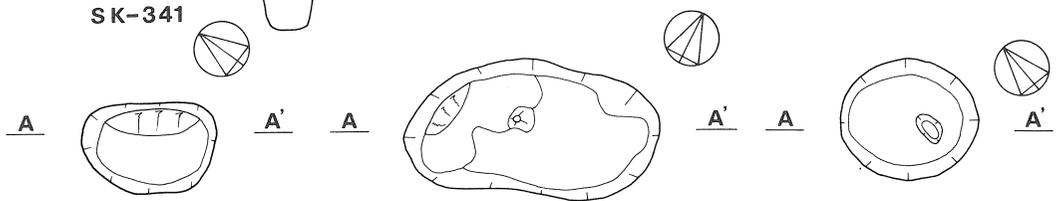
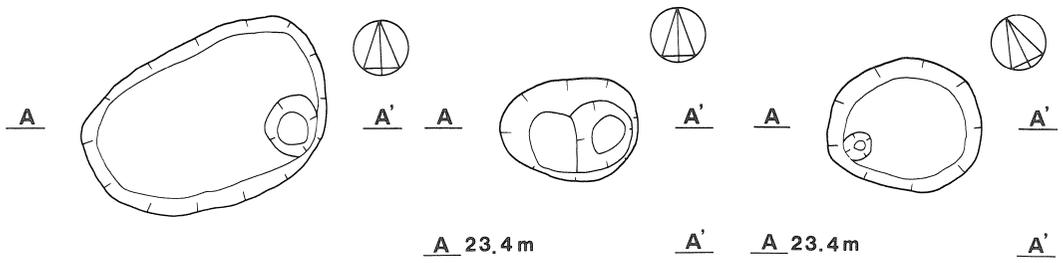
第327图 土壤実測図 (27)



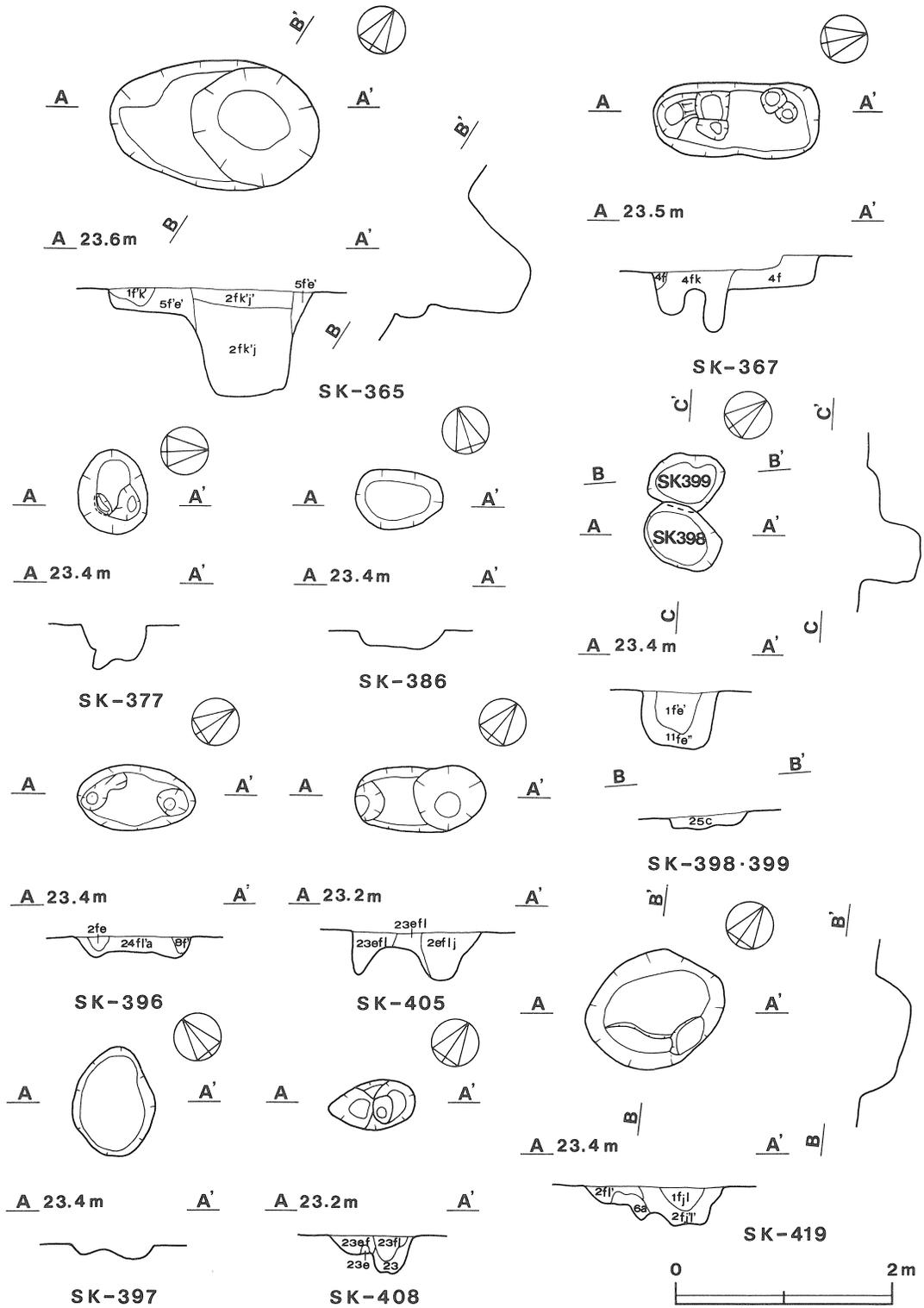
第328图 土壤実測図 (28)



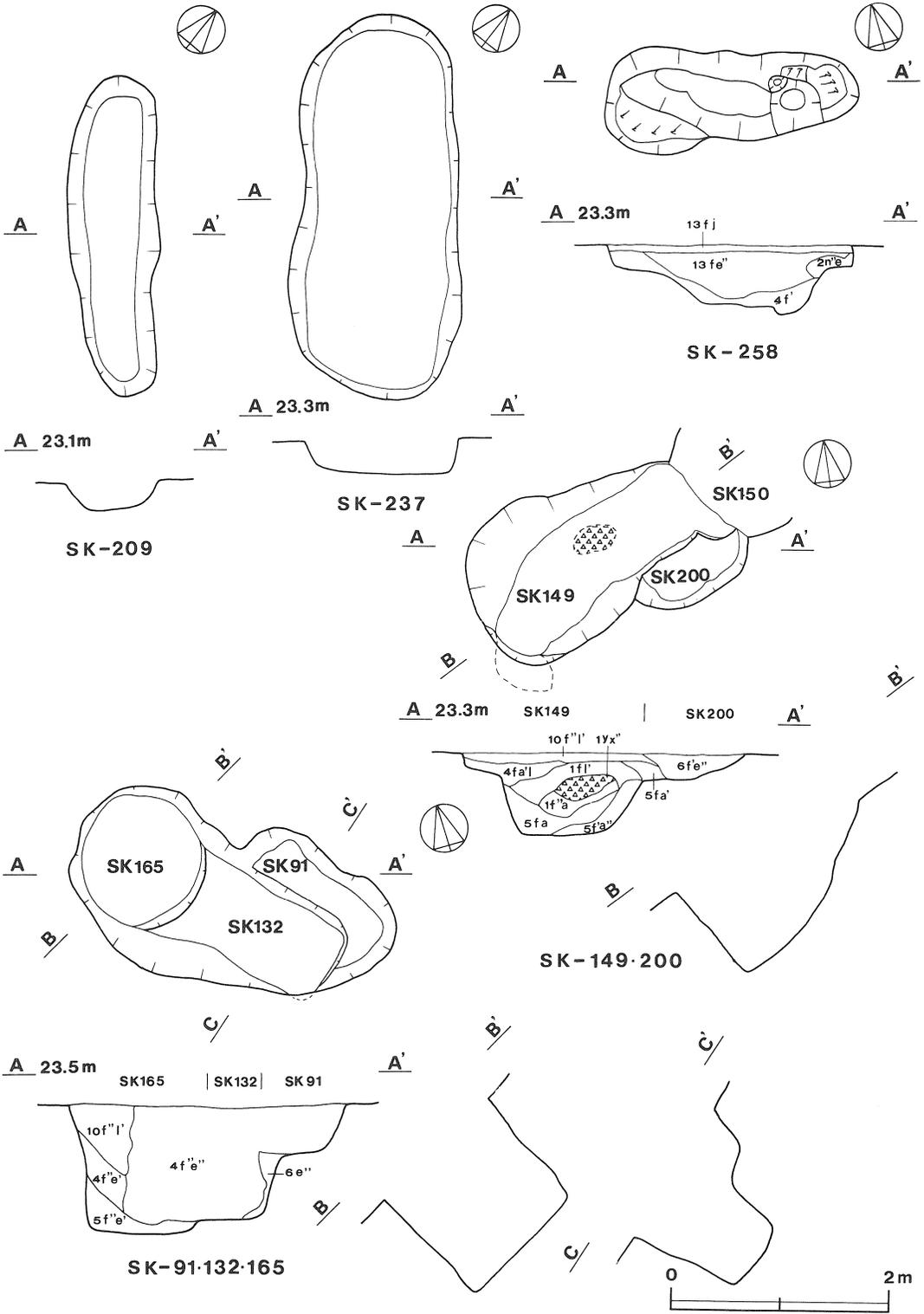
第329図 土壤実測図 (29)



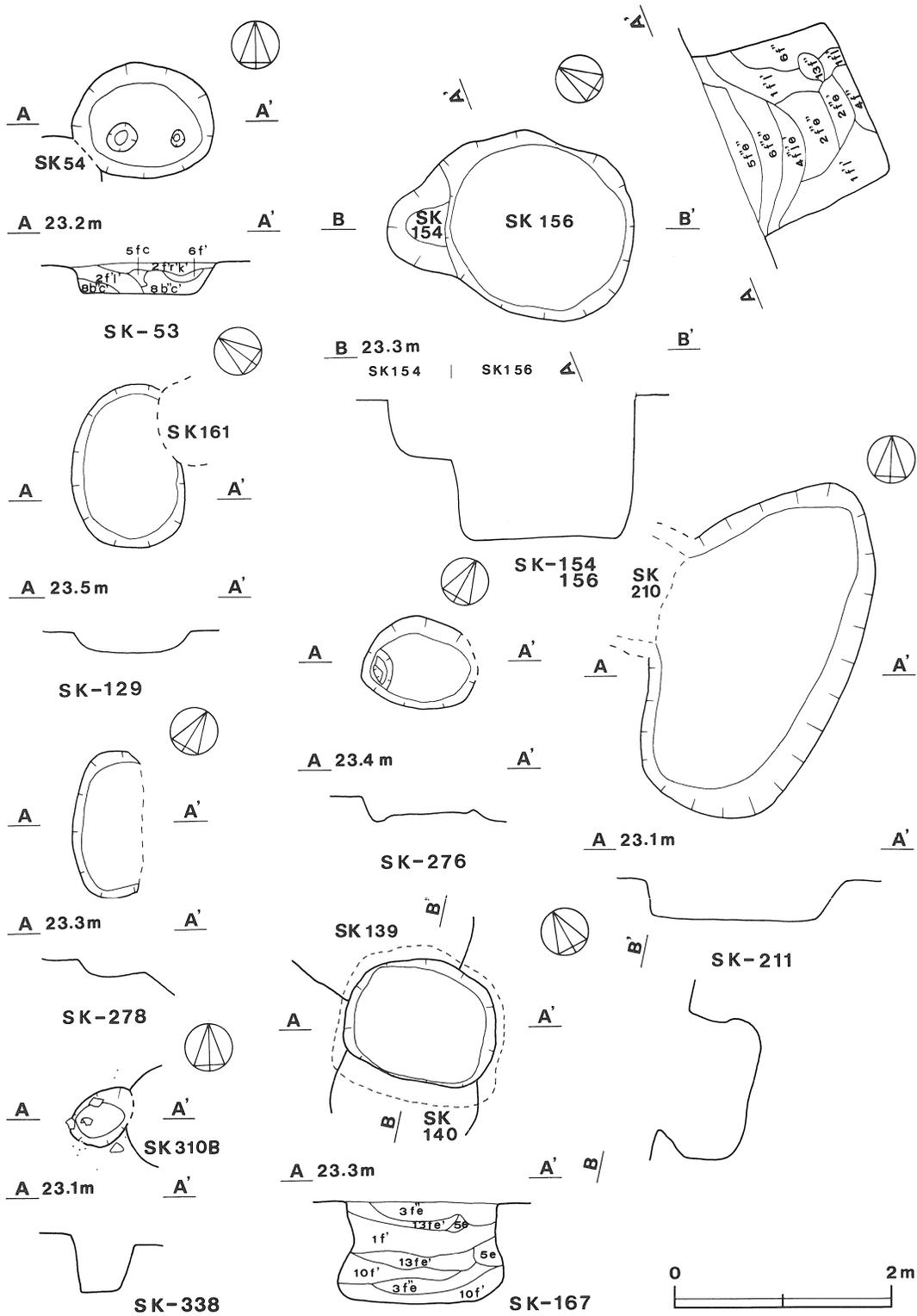
第330图 土壤実測図 (30)



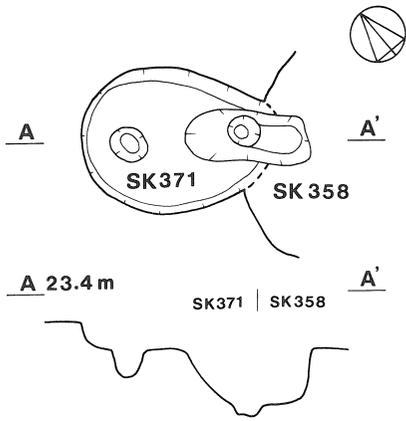
第331图 土壤実測図 (31)



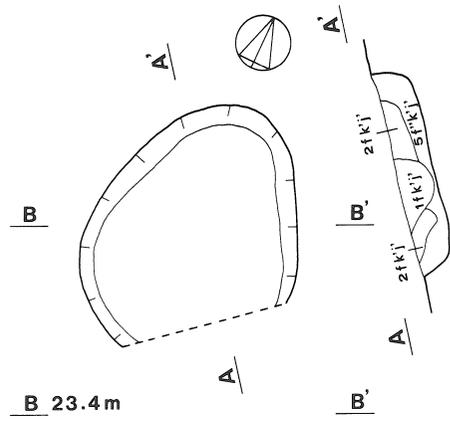
第332图 土壤実測図 (32)



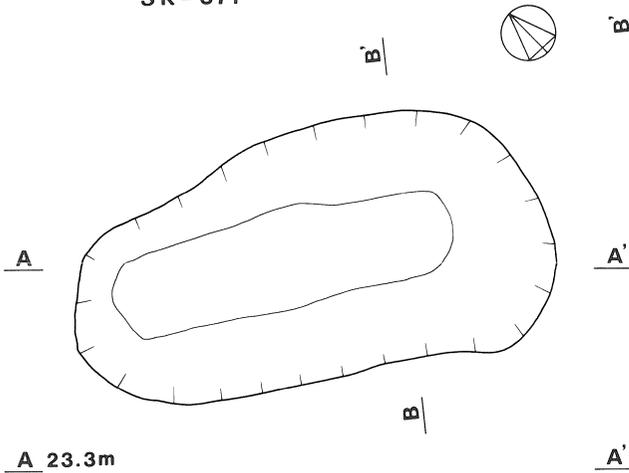
第333図 土壤実測図 (33)



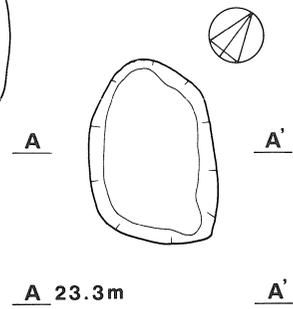
SK-371



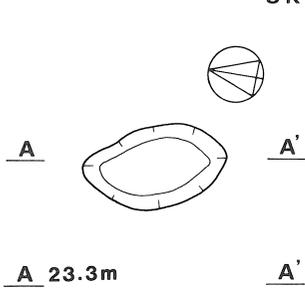
SK-363



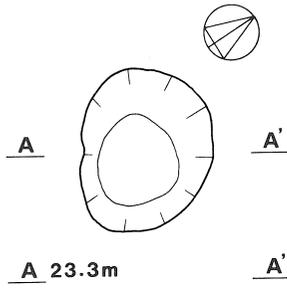
SK-1



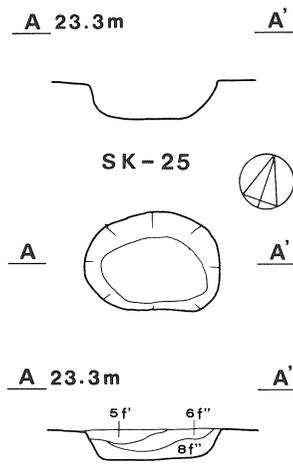
SK-25



SK-28



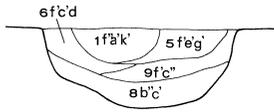
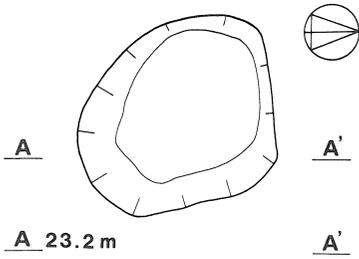
SK-72



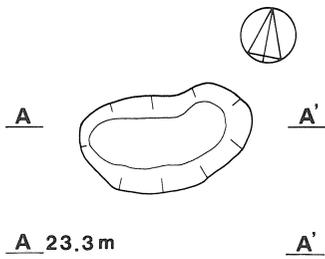
SK-71



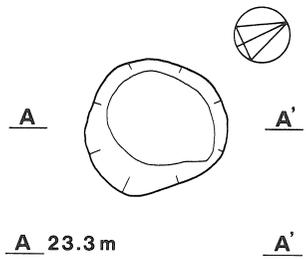
第334图 土壤実測図 (34)



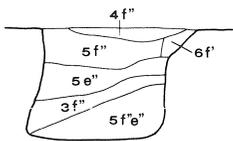
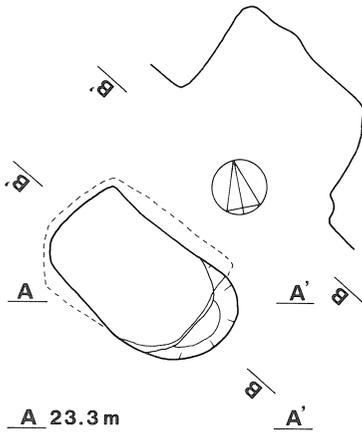
SK-76



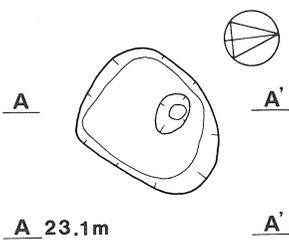
SK-80



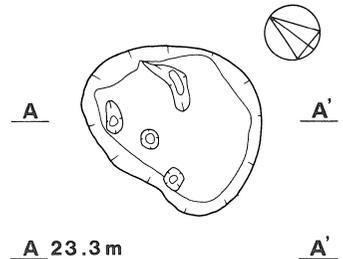
SK-102



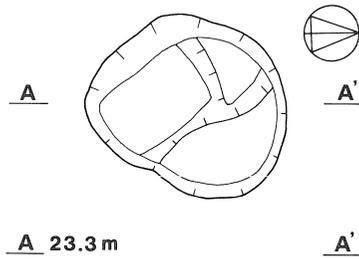
SK-90



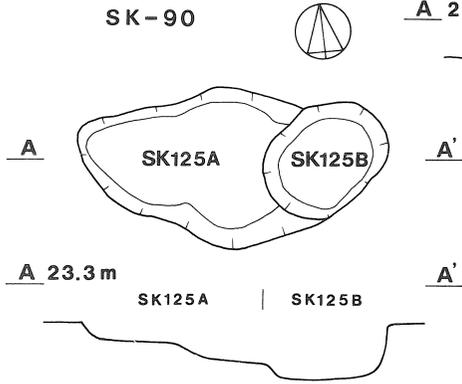
SK-208



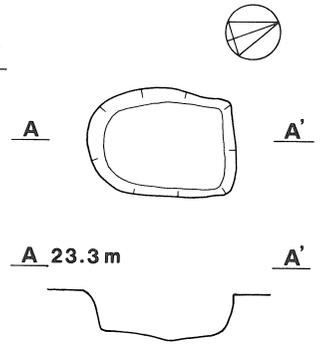
SK-101



SK-127



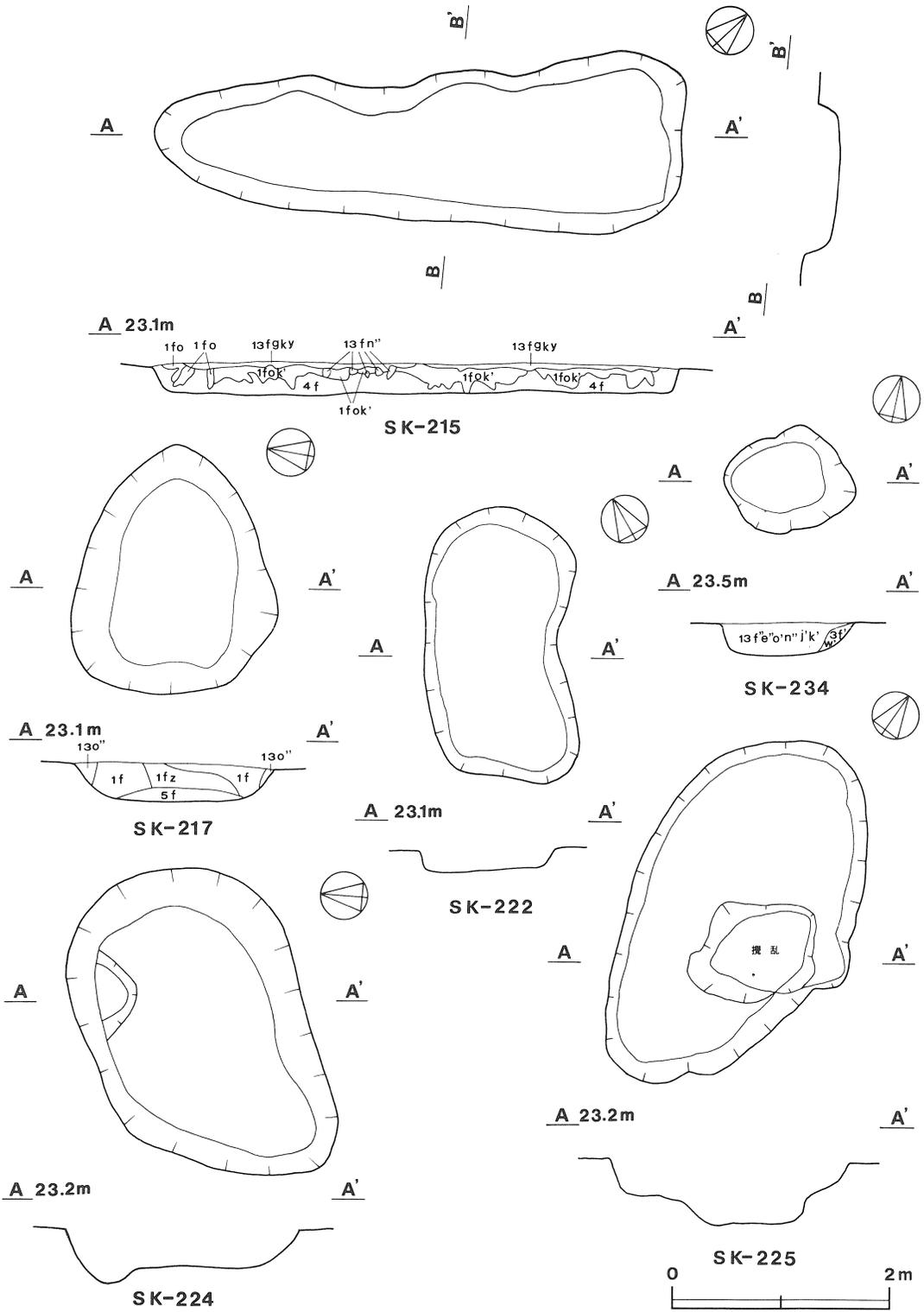
SK-125



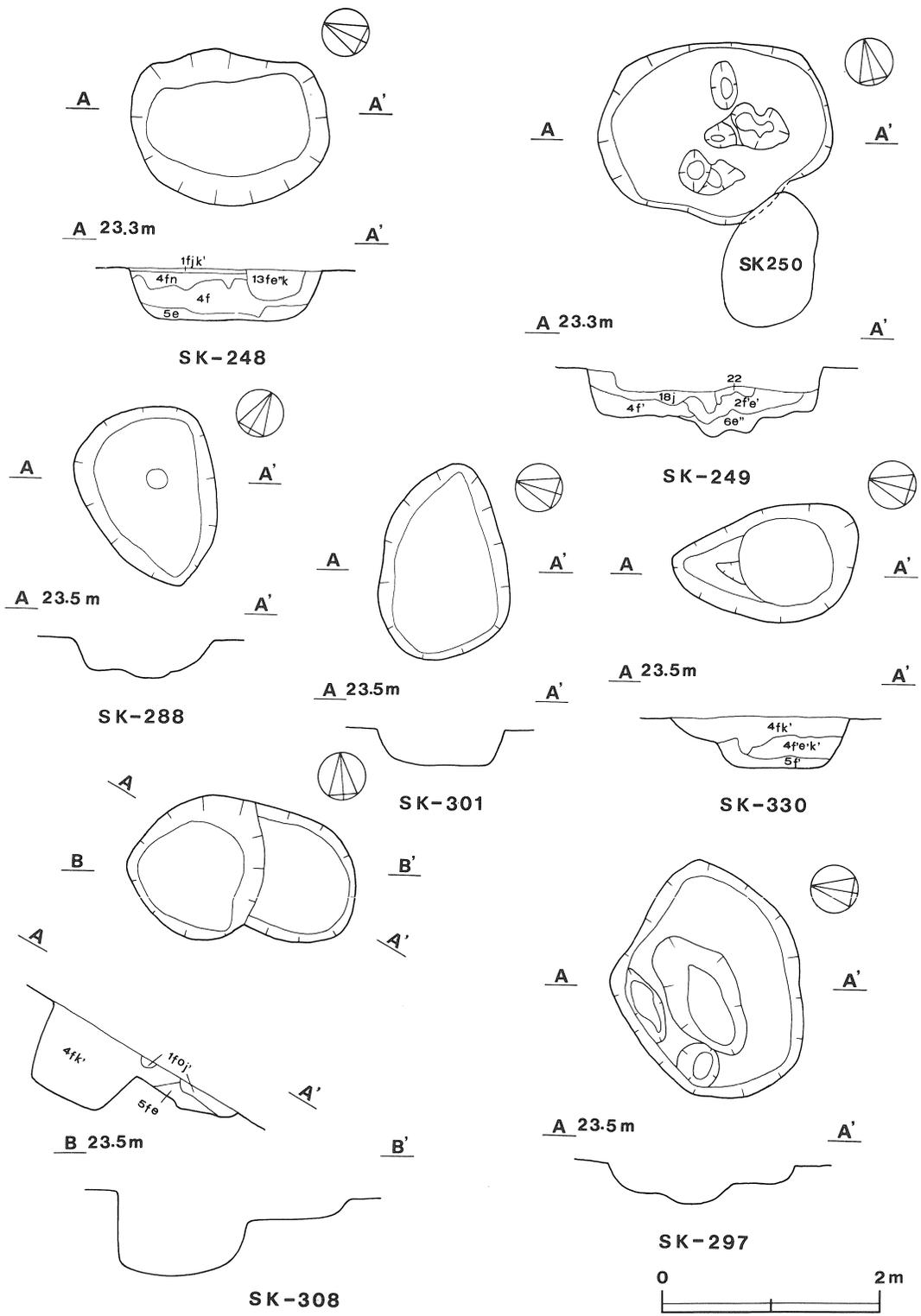
SK-130



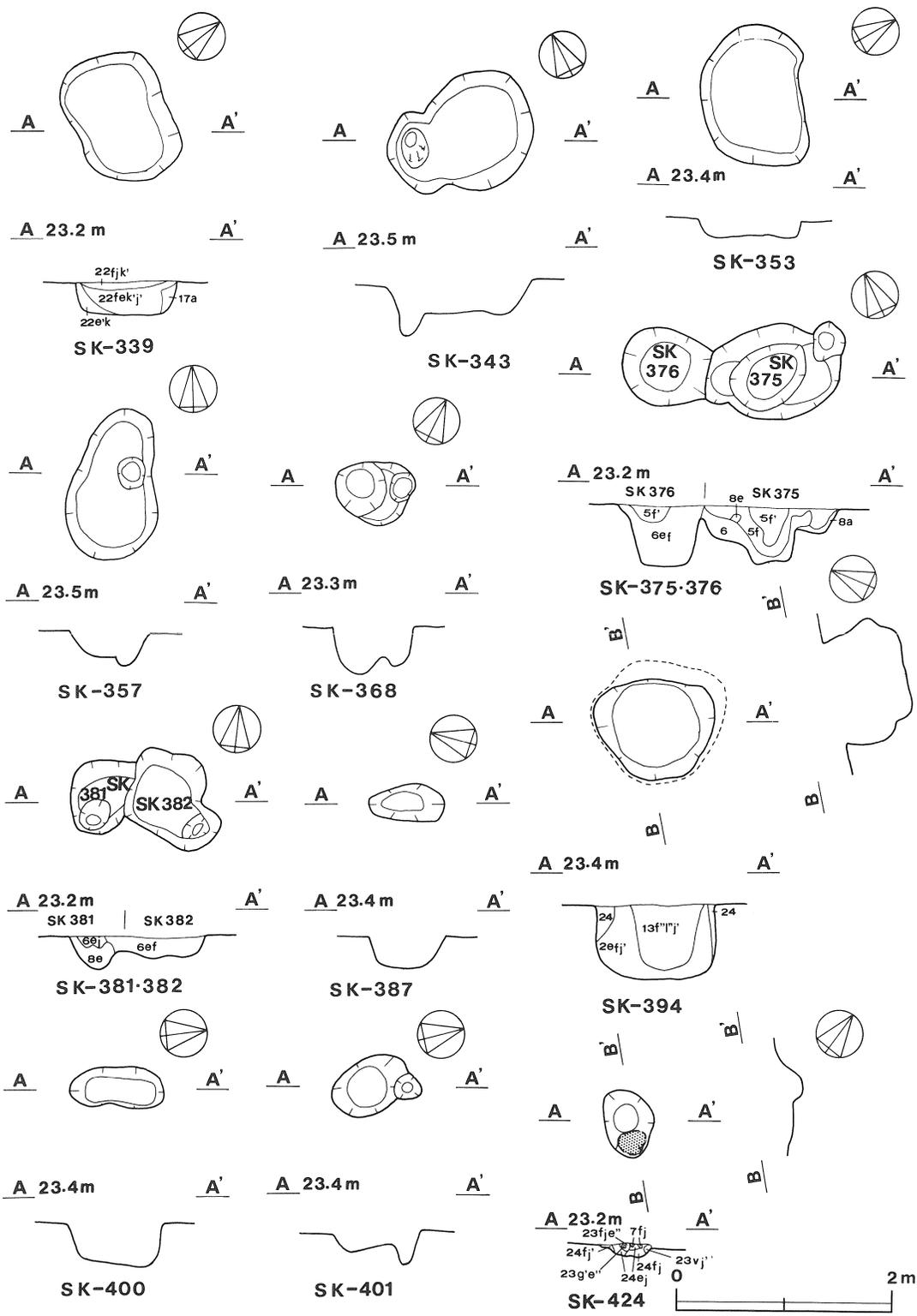
第335図 土壤実測図 (35)



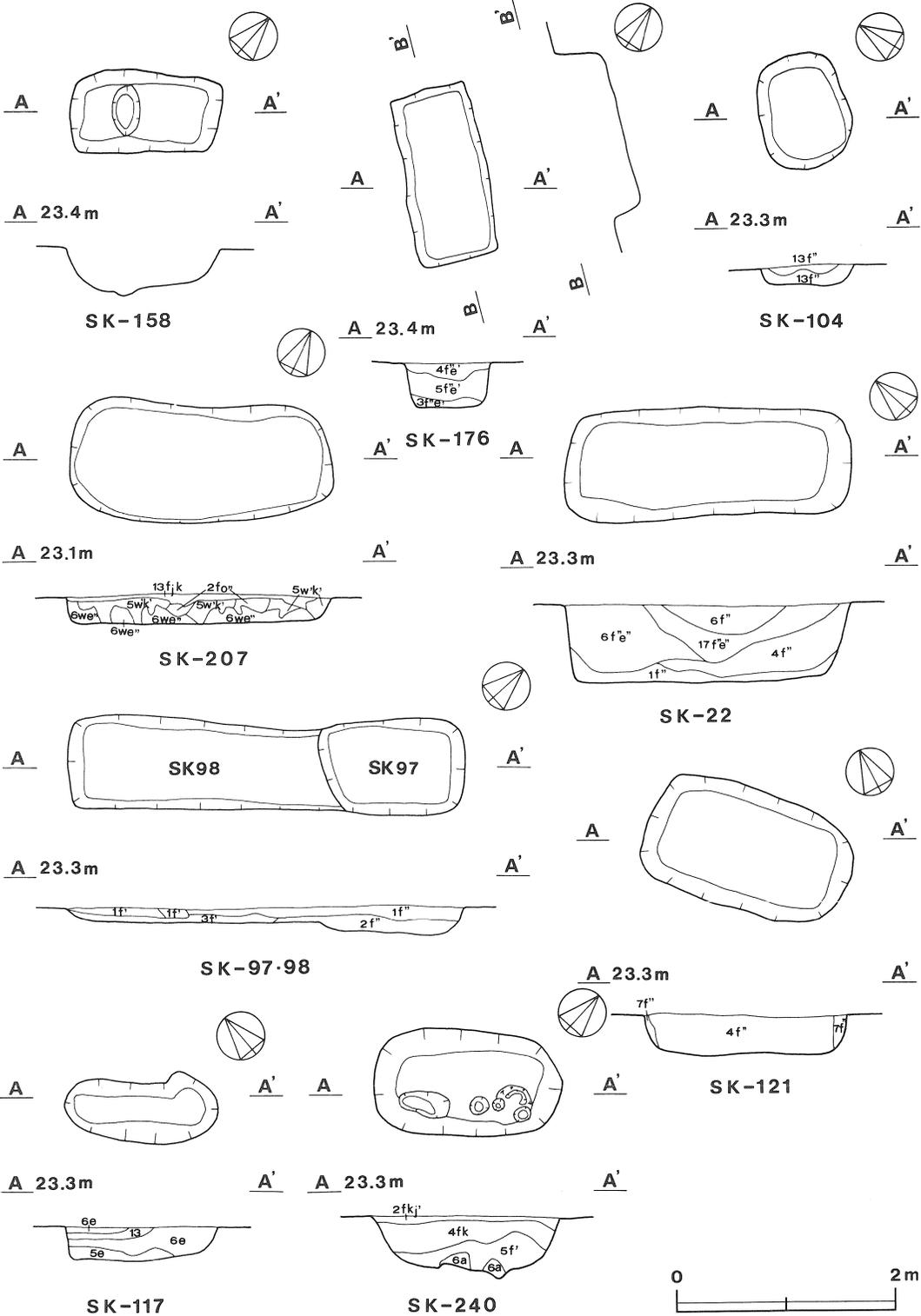
第336図 土壤実測図 (36)



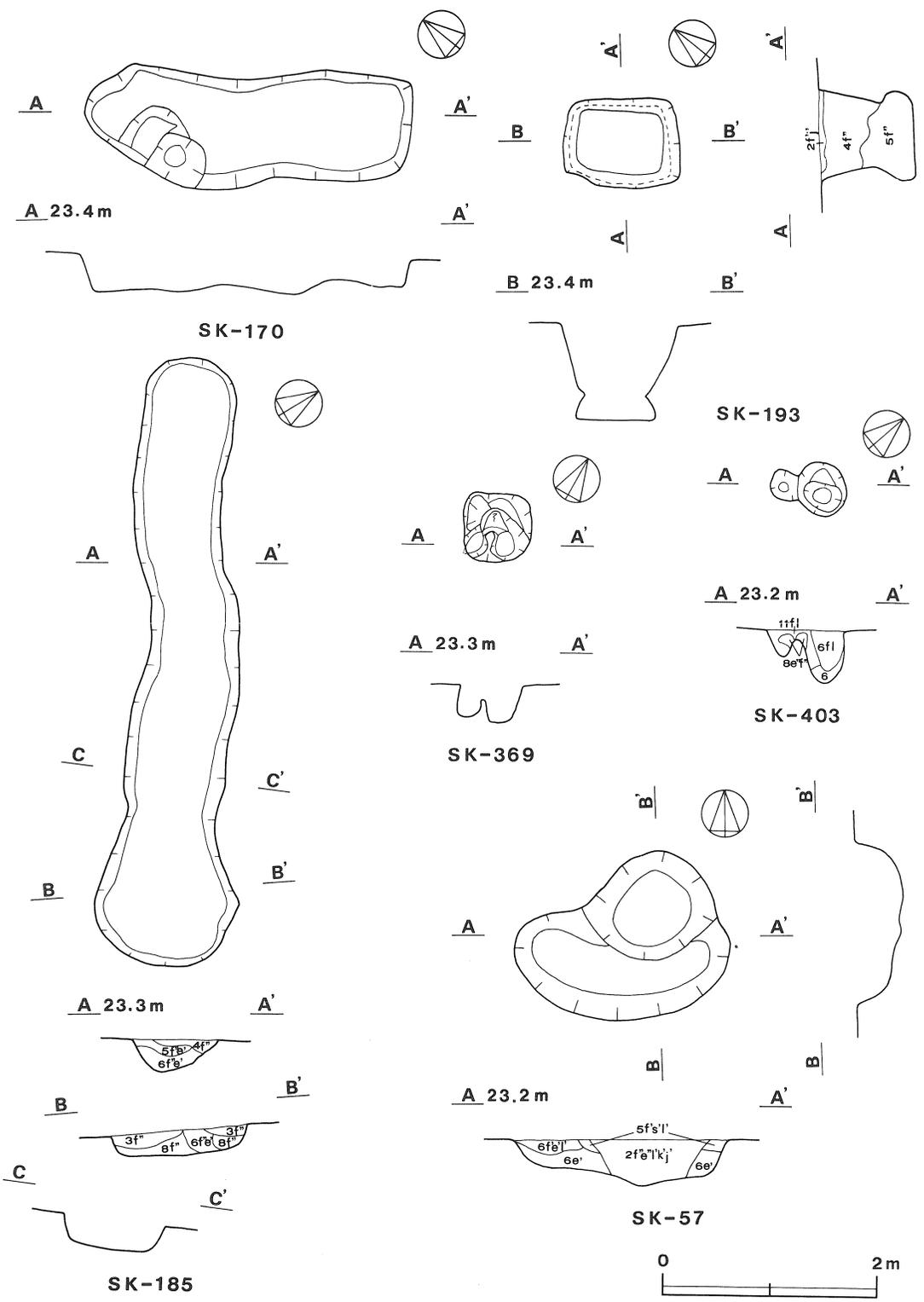
第337図 土壤実測図 (37)



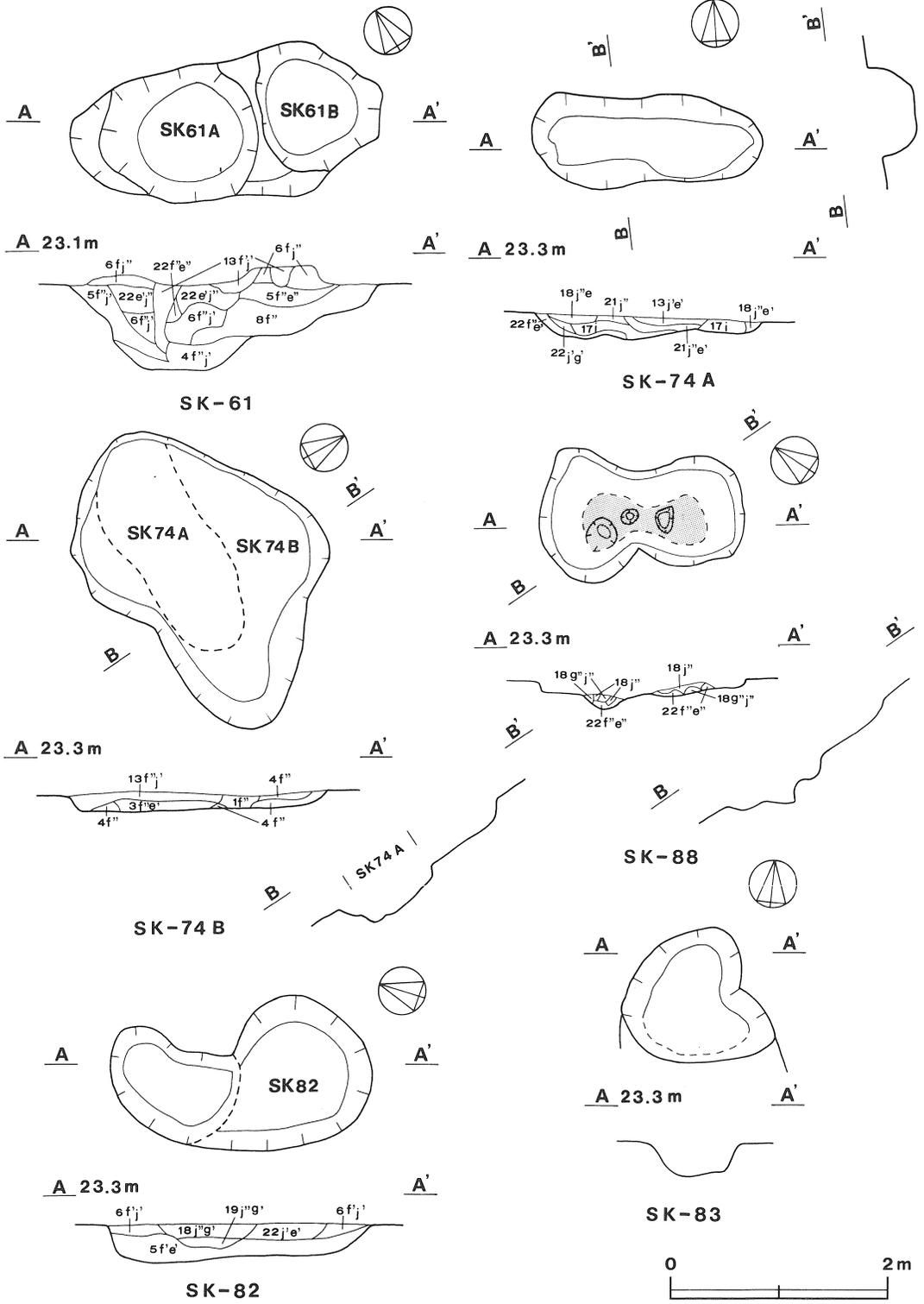
第338図 土壌実測図 (38)



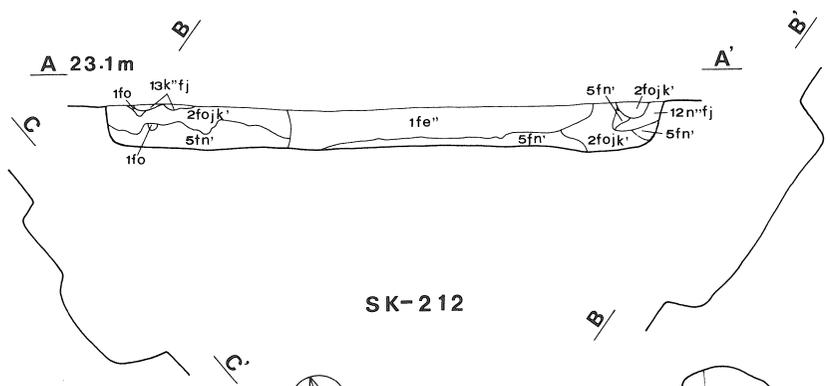
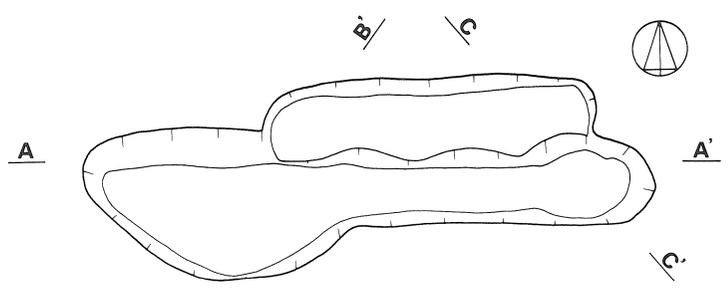
第339图 土壤実測図 (39)



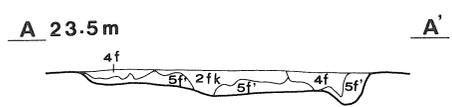
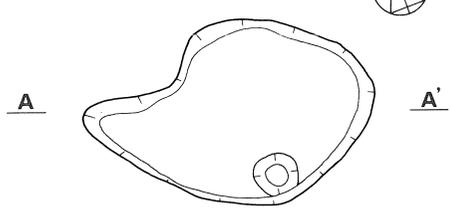
第340图 土壤実測図 (40)



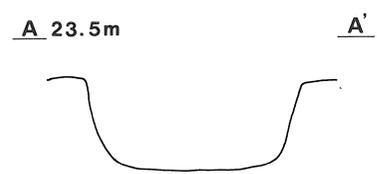
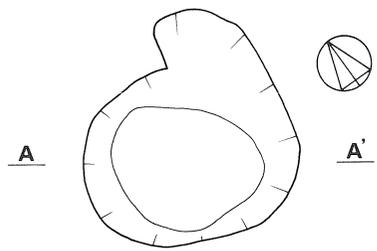
第341図 土壤実測図 (41)



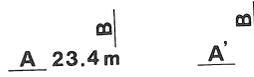
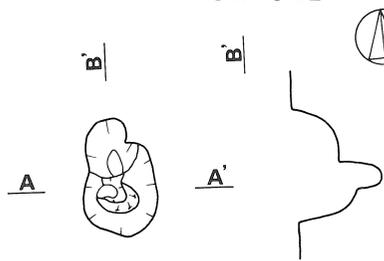
SK-212



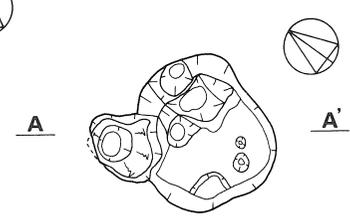
SK-302



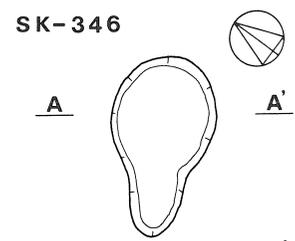
SK-346



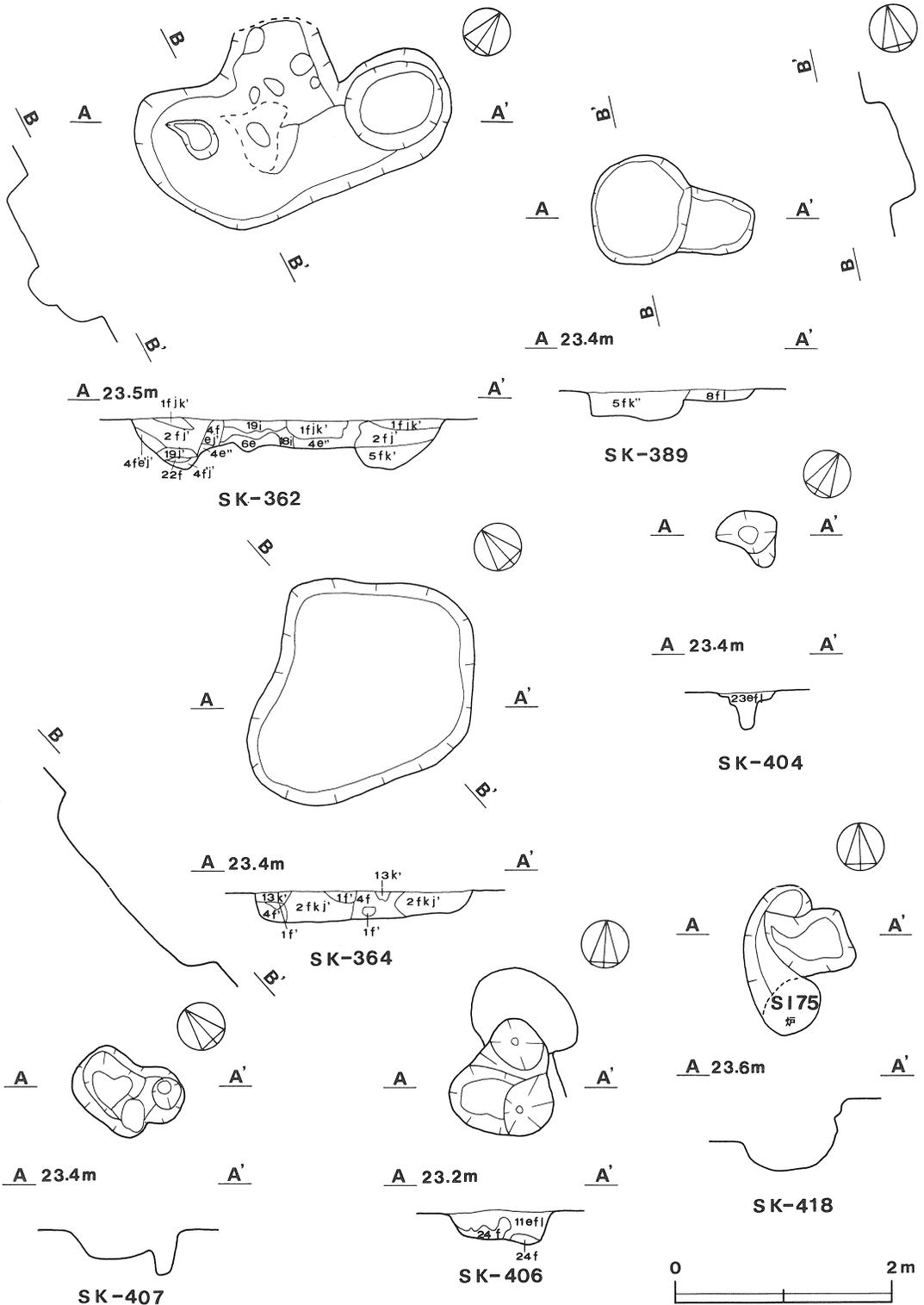
SK-355



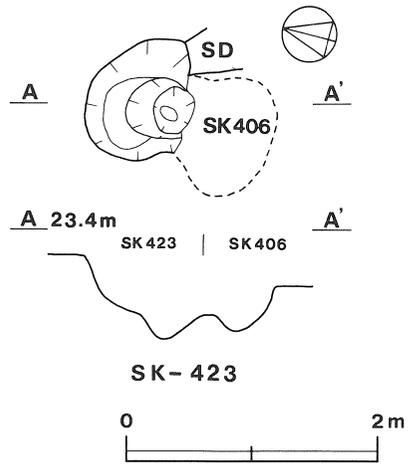
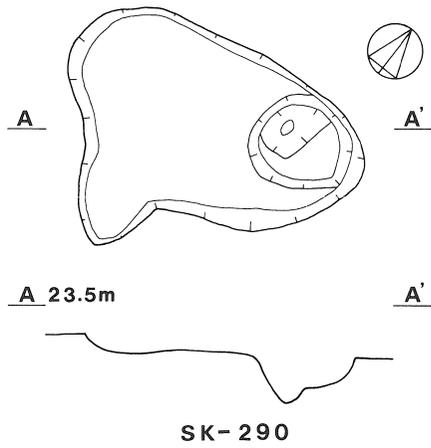
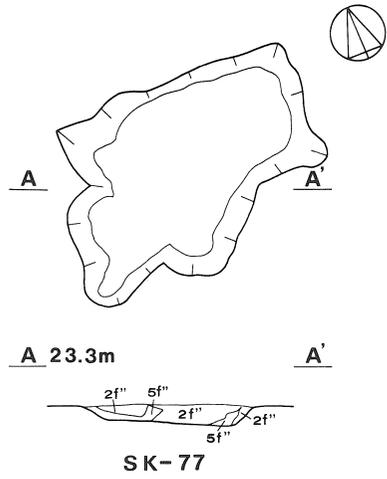
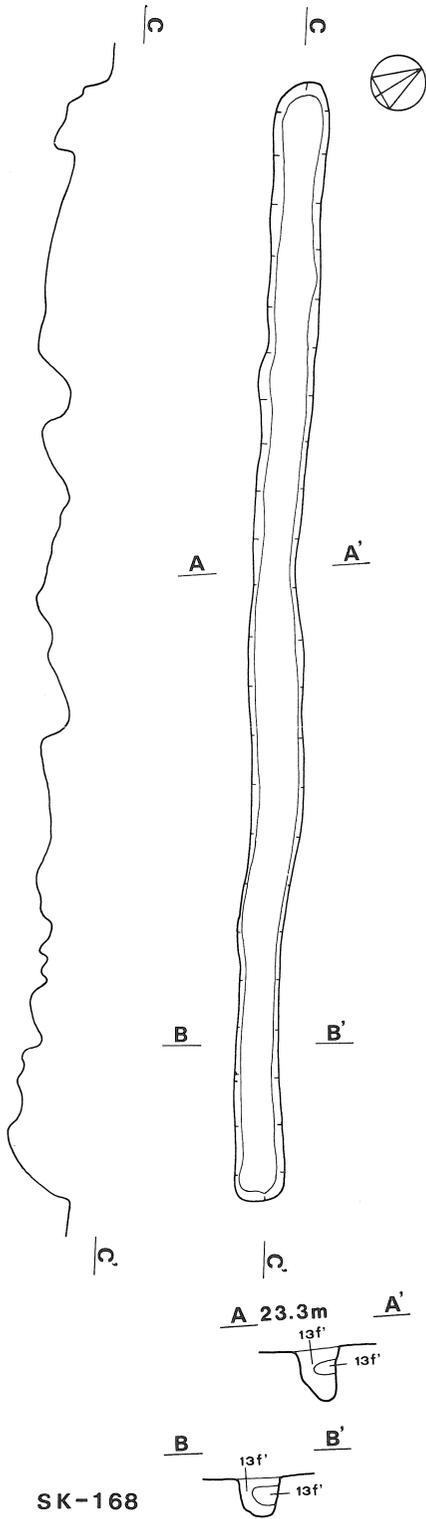
SK-366



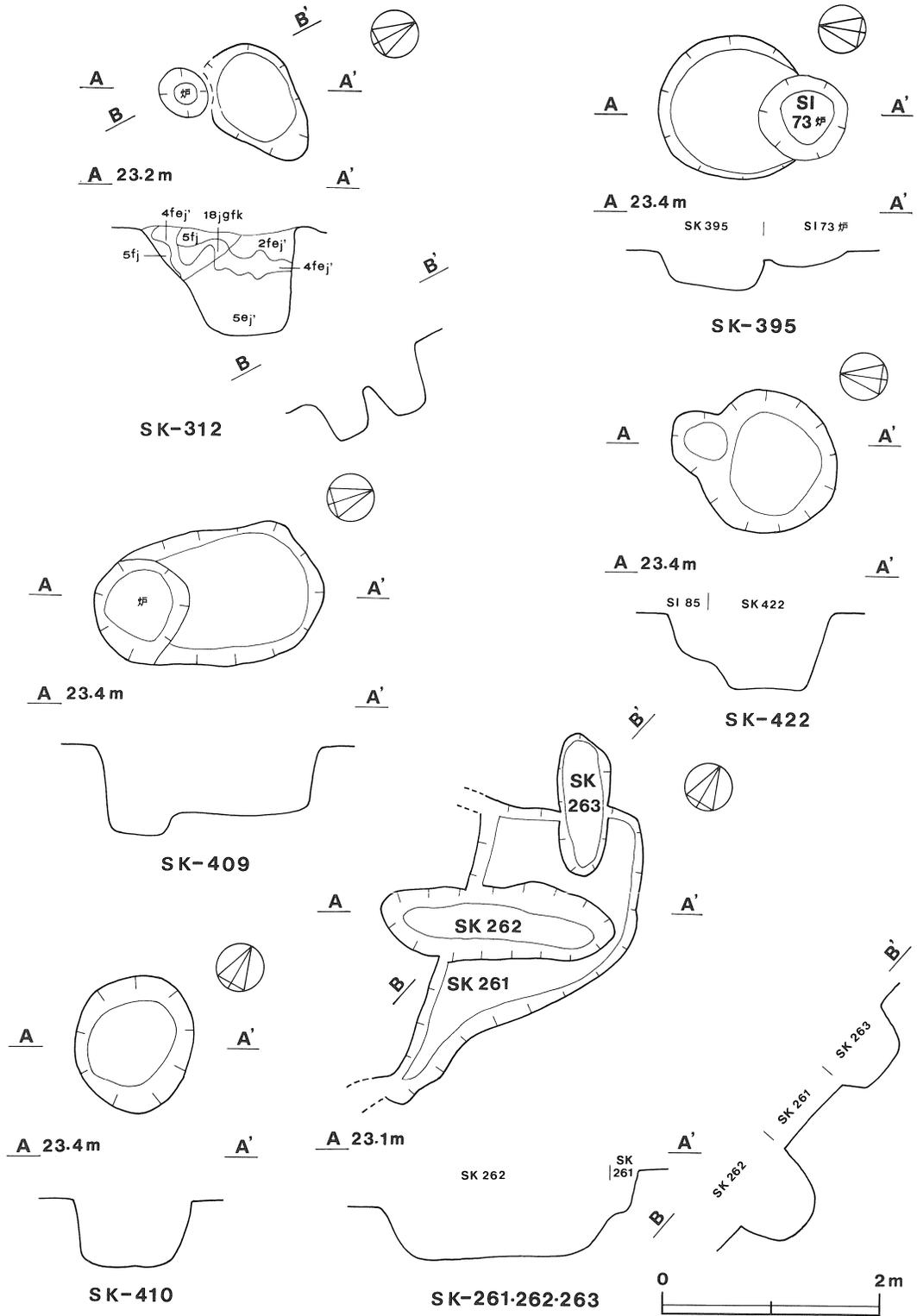
第342図 土壤実測図 (42)



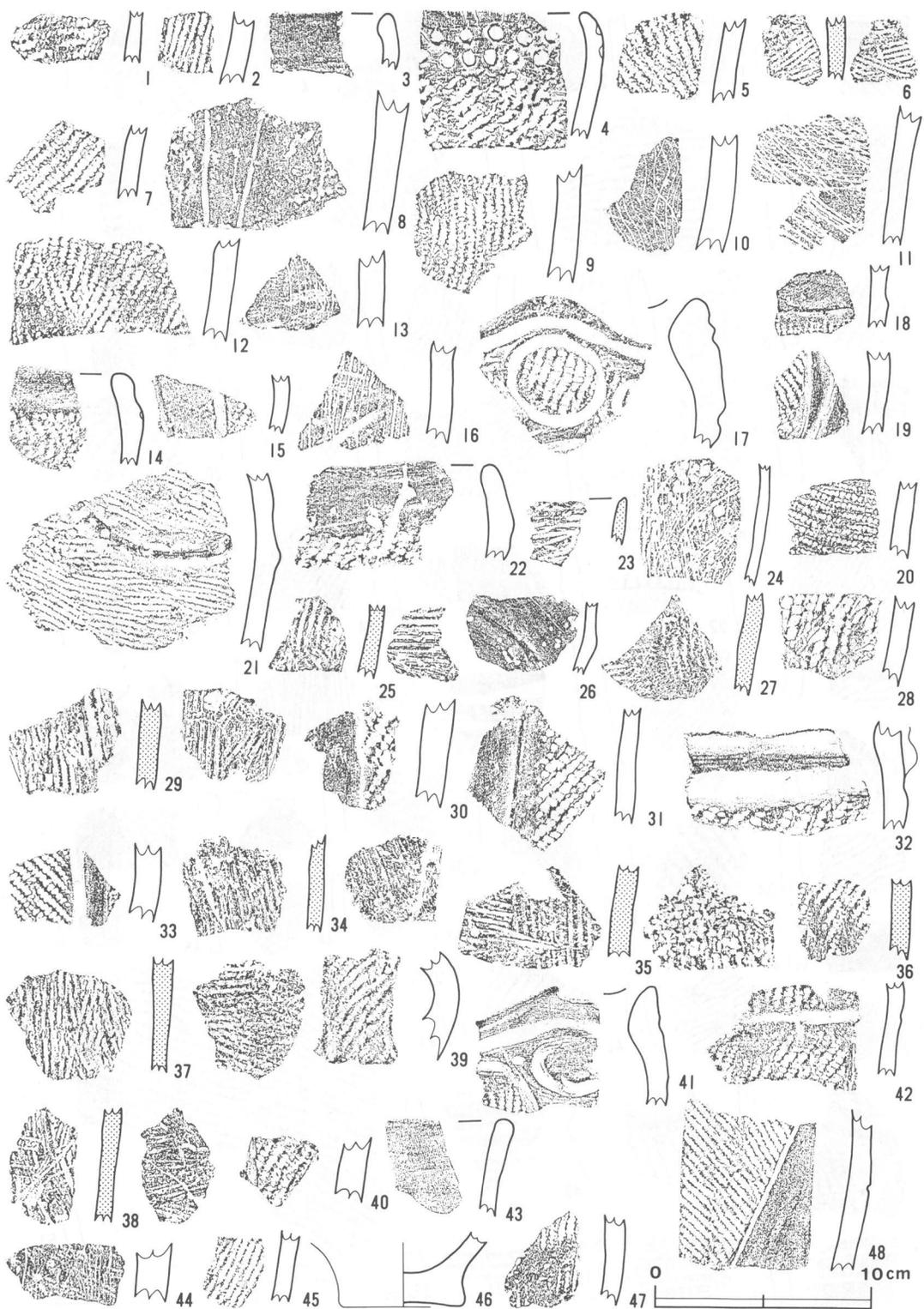
第343图 土壤実測図 (43)



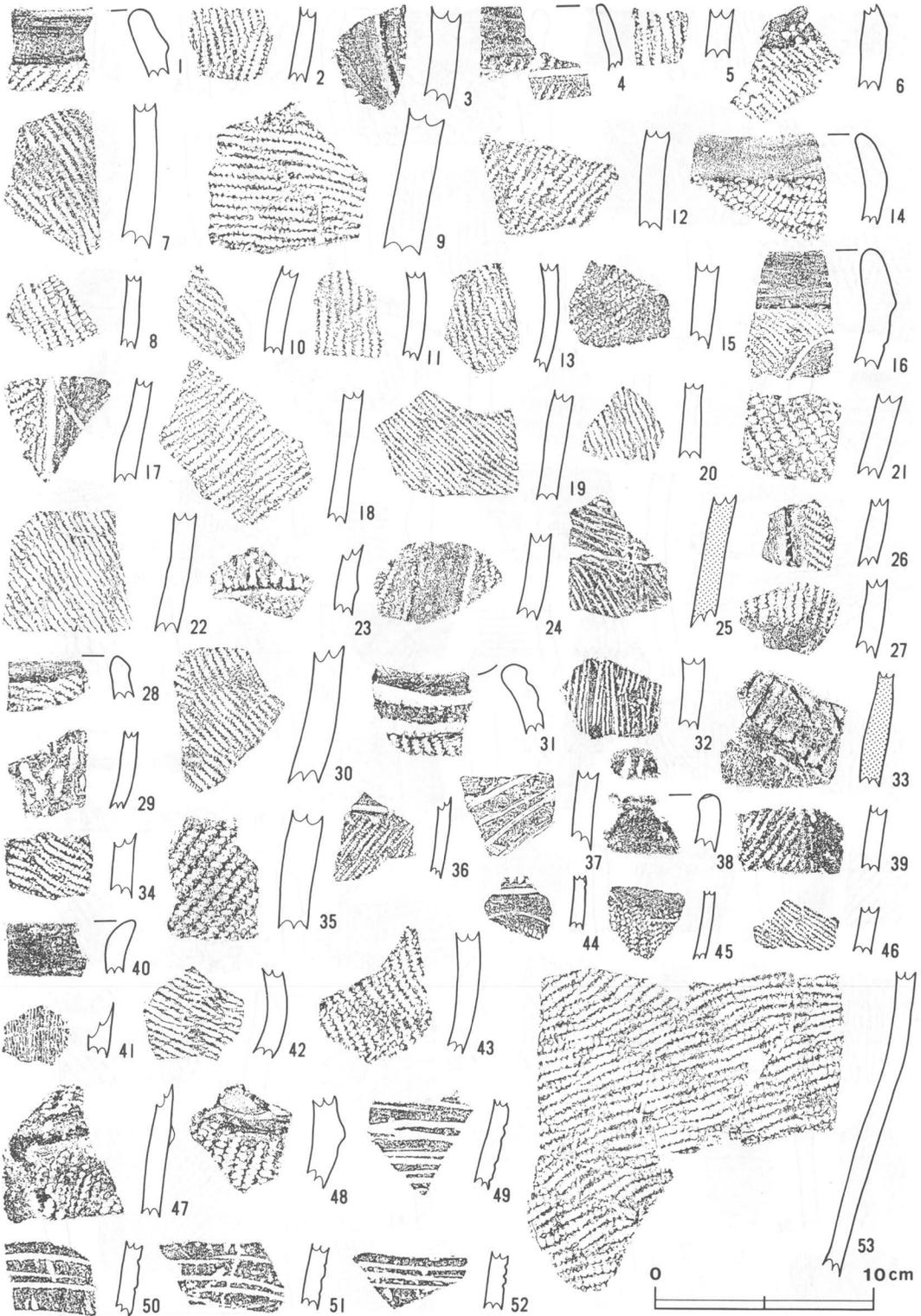
第344图 土壤実測図 (44)



第345図 土壤実測図 (45)



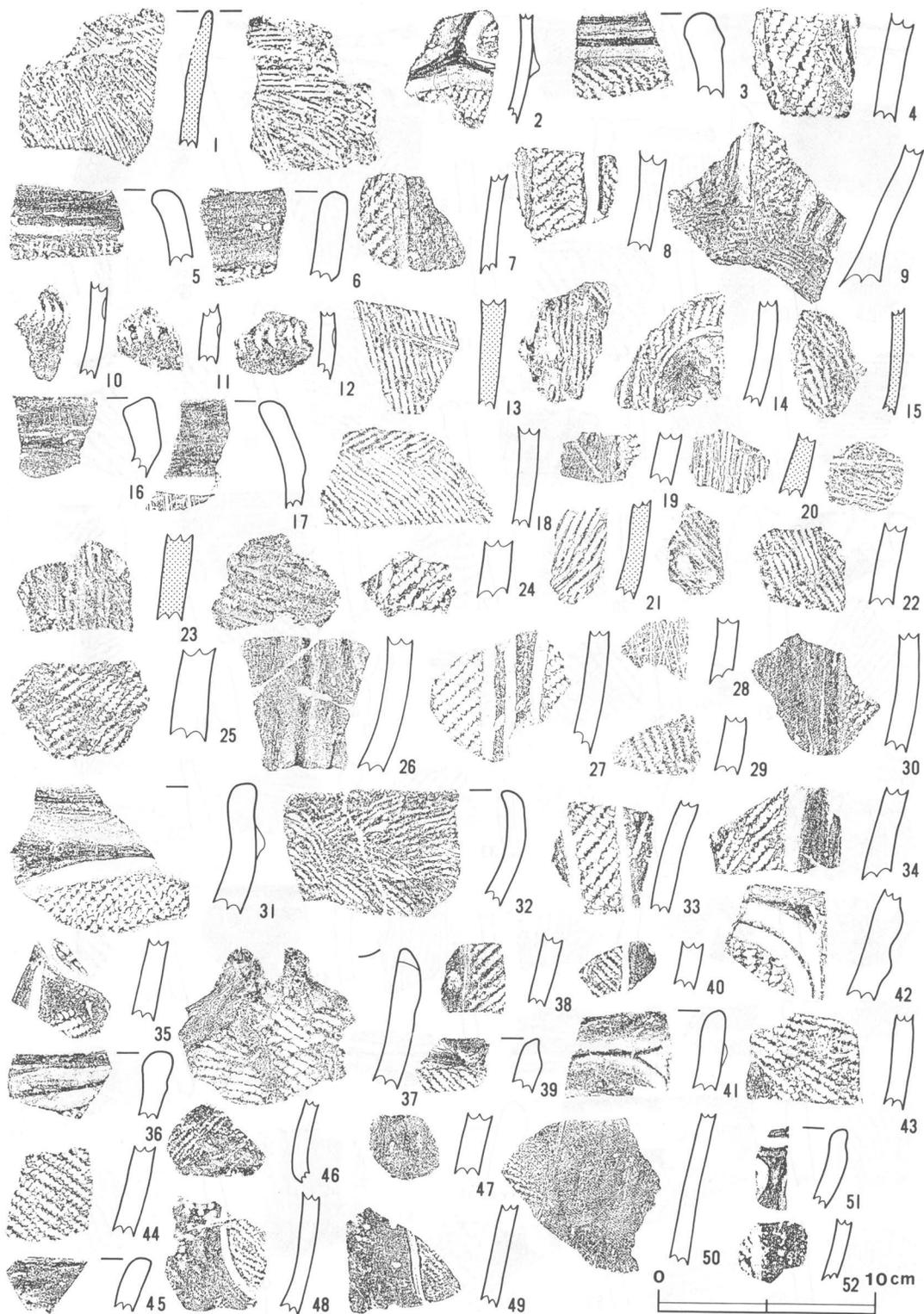
第346图 土壤出土土器实测图·拓影图 (1)



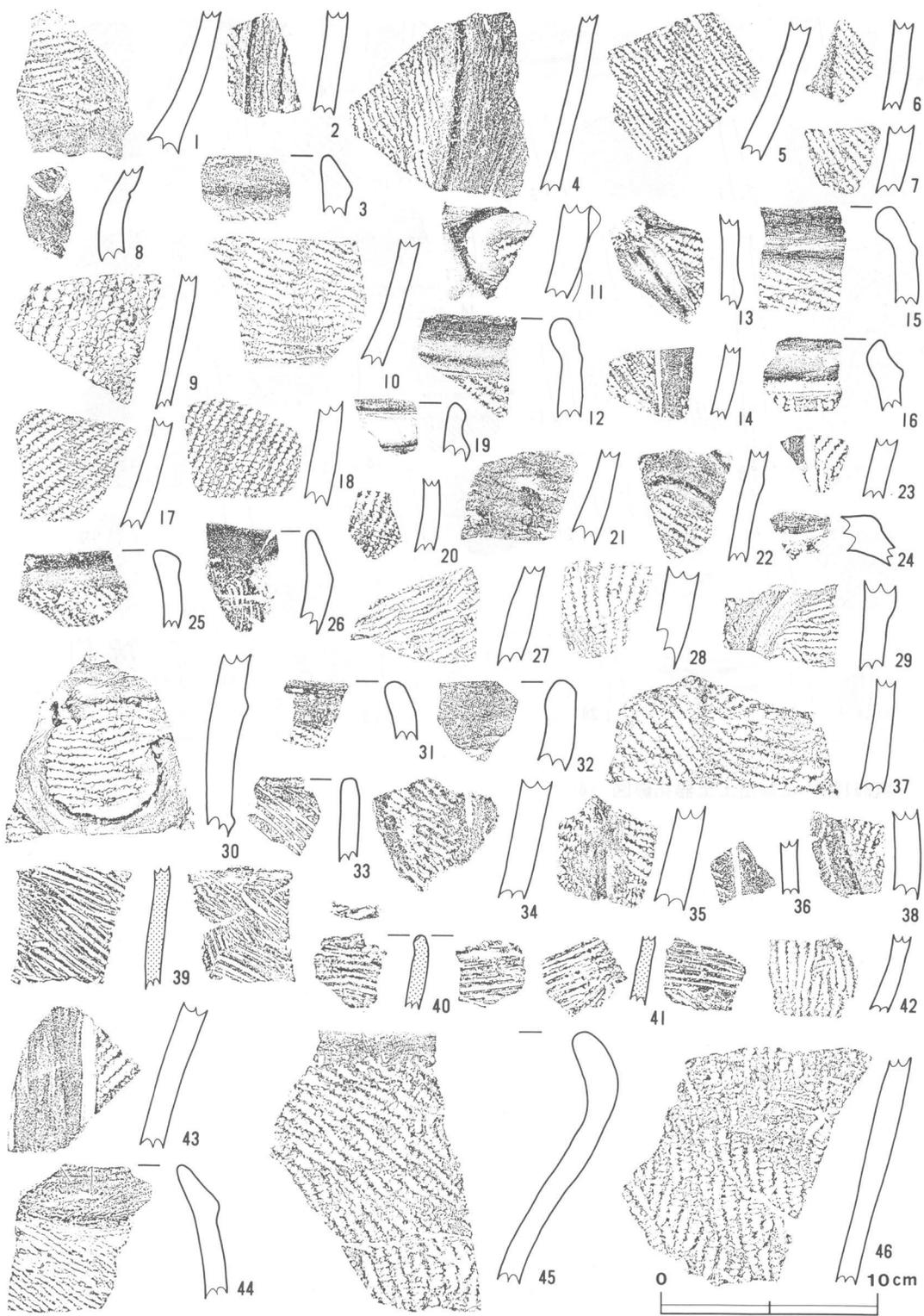
第347图 土壤出土土器拓影图 (2)



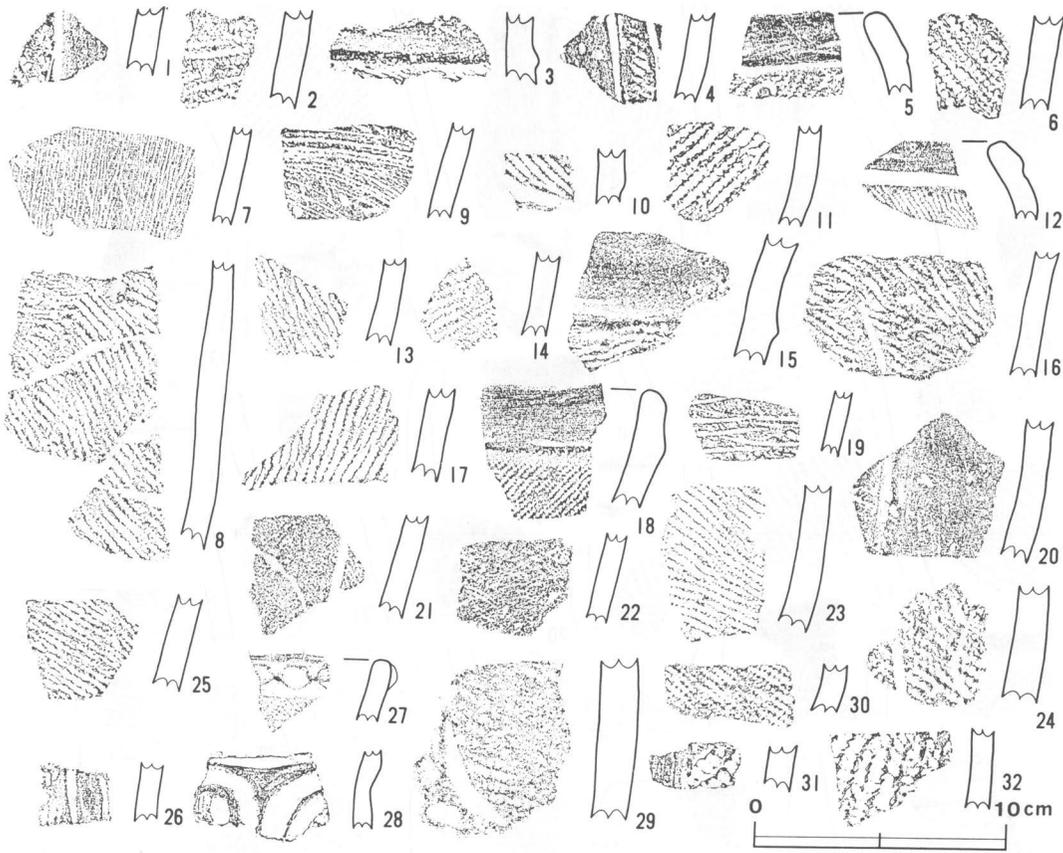
第348图 土壤出土土器拓影图 (3)



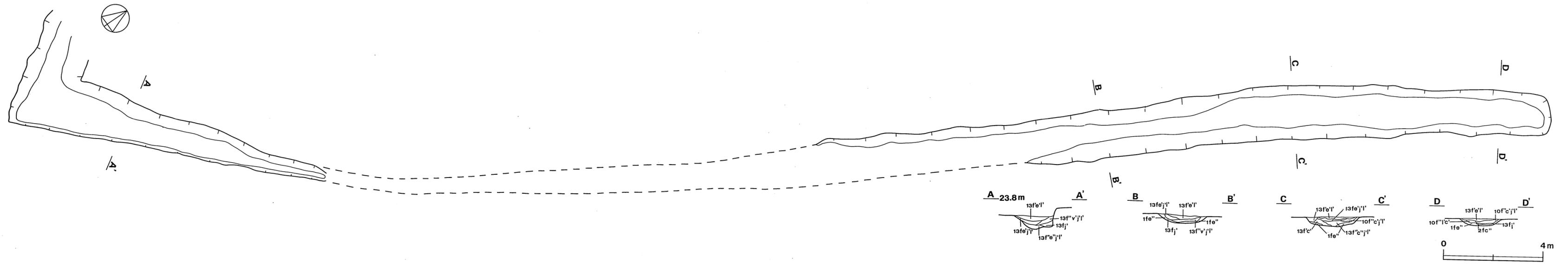
第349图 土壤出土土器拓影图 (4)



第350图 土壤出土土器拓影图 (5)



第351图 土壤出土土器拓影图 (6)



第353图 第2号沟渠测图

第4節 溝と出土土器

第1号溝（第352図）

本跡は、南三島遺跡1・2区の第1号溝が、農道の下を通過して6区のH5f₈区に確認され、ほぼ直線的に北西方向へF4j₅区まで延び、さらに農道の下を通過して7区の第4号溝となっている。6区における長さは94mで、主軸方向はN-44°-Wを指している。1・2・7区を合わせた総延長は392.9mである。

溝の幅は、上幅が160~220cm・下幅が50~90cmである。壁はハードロームで硬く、外傾して立ち上がっている。底面もハードロームで硬く、平坦である。確認面からの深さは、44~81cmである。断面は、「」形をしている部分が多い。G5i₃区に1か所、H5a₄区に1か所、計2か所のピットが検出されているが、その性格は不明である。底面のレベルは、Aで22.31m・Cで22.29m・Eで22.53m・Gで22.61m・Iで22.66mで、Cの部分が最も低いが、全体的にみるとAからIへ徐々に低くなっている。

覆土は21層からなり、上層に黒褐色土、中層に暗褐色土・極暗褐色土、下層に褐色土・明褐色土がそれぞれ堆積している。

遺物は馬骨が、G4a₆区・G4b₆区・G4e₈区の底面からそれぞれ1体ずつ、計3体が出土している。また、縄文土器片も出土しているが、縄文土器片は覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

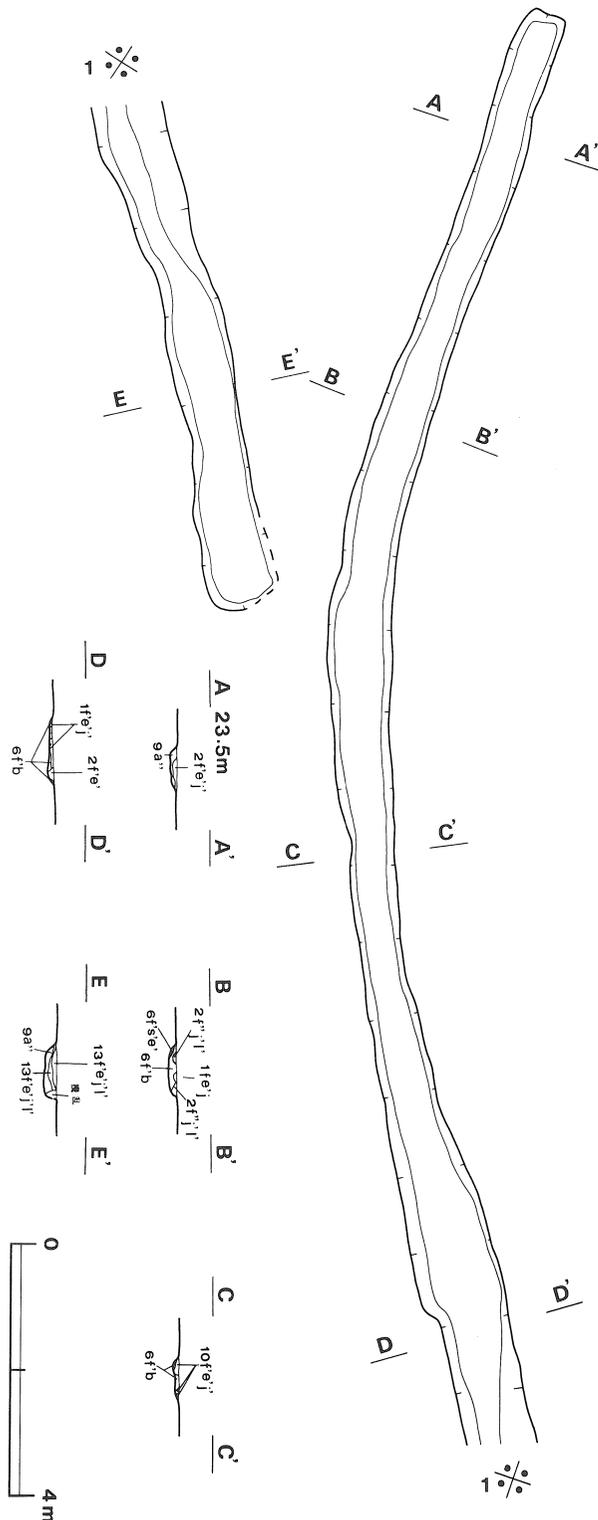
第2号溝（第353図）

本跡は、G6c₉区から延びており、G6e₇区まで直線的に南西方向へ続き、さらに、G6e₇区から大きく湾曲し、G6h₆区で農道の下へ至り、H5e₀区で再び確認され、H5f₈区で第1号溝と合流している。直線部分は12mで、主軸方向はN-56°-Eを指している。湾曲する部分は推定で56mであり、総延長は68mと思われる。

溝の幅は、上幅が170~220cm・下幅が30~40cmである。壁はハードロームで硬く、なだらかに外傾して立ち上がっている。底面もハードロームで硬く、ほぼ平坦である。確認面からの深さは、56~69cmである。断面は、「」形をしている。底面のレベルは、Aで22.58m・Bで22.62m・Dで22.71mで、Aの部分が最も低くなっており、全体にDからAにかけて徐々に低くなっている。

覆土は11層からなり、黒褐色土・極暗褐色土・暗褐色土などが堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。



第354図 第3号溝実測図



第3号溝 (第354図)

本跡は、第6号溝のF6d₃区から延びており、F6g₆区まで大きく湾曲している。その後、直線的に南東方向へ延び、F6i₉区へ至っている。湾曲部分は18.2m、直線部分は12.6mで、主軸方向はN-61°-Wを指している。総延長は30.8mである。

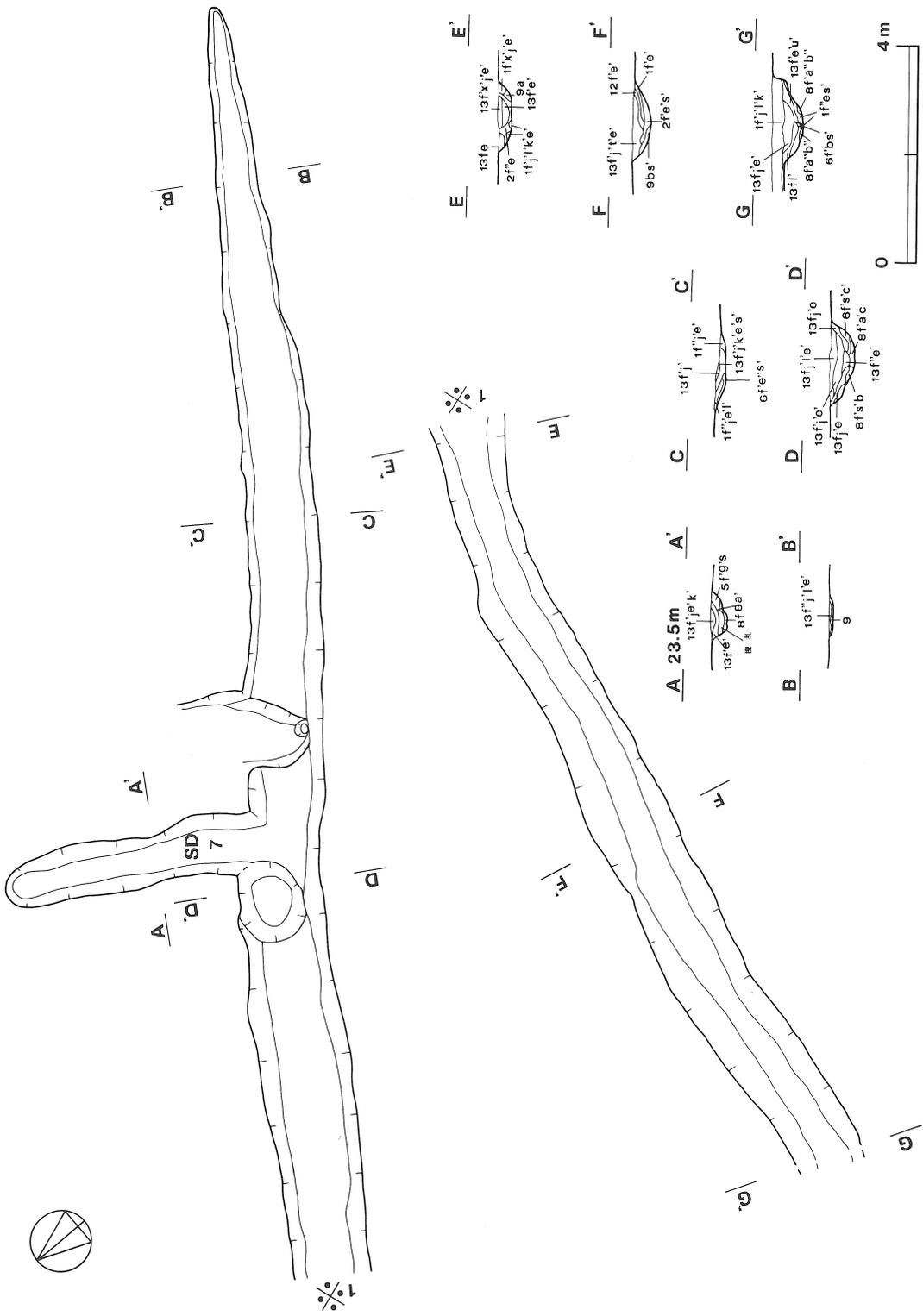
溝の幅は、上幅が70~140cm・下幅が40~80cmである。壁はソフトロームで軟らかく、外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、平坦である。確認面からの深さは7~11cmである。断面は、「」形をしている。底面のレベルは、Aで22.81m・Cで22.85m・Eで22.85mで、Aの部分が最も低くなっている。

覆土は4層からなり、黒褐色土・暗褐色土・褐色土・明褐色土の順で堆積している。

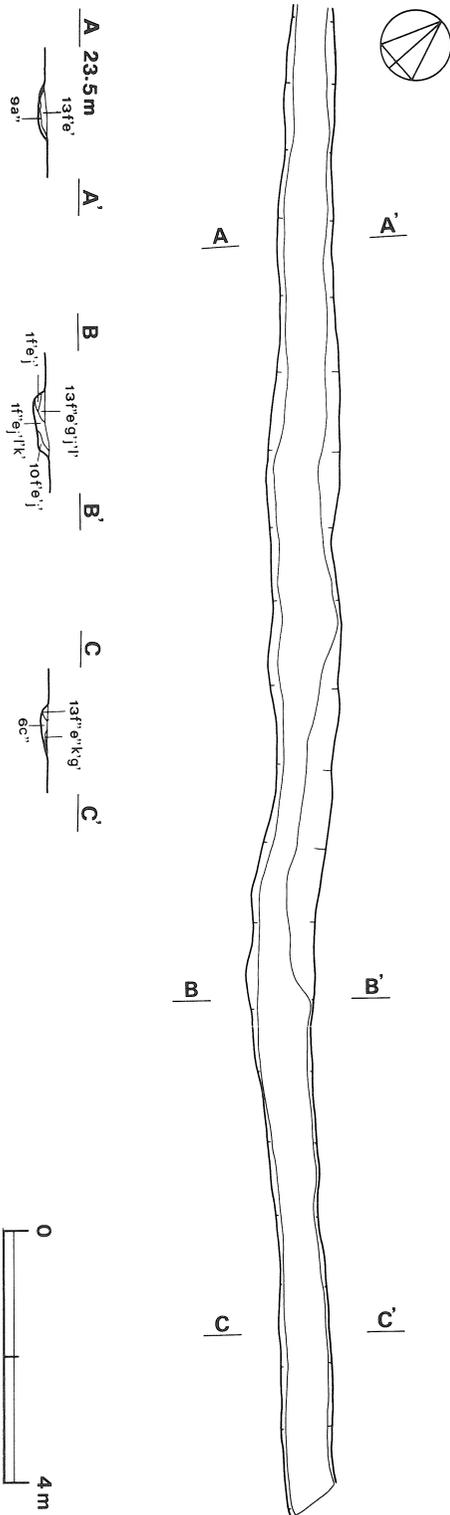
遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

第4号溝 (第355図)

本跡は、F6e₁区から延びており、直線的に北西方向へ続き、F5a₇区でやや角度を変え、E5j₄区へ至っている。さらに、農道の下を通り、7区の第3号溝として検出されて



第355图 第4·7号沟渠测图



第356図 第5号溝実測図

いる。F6e₁区からF5a₇区までの長さは24.8mで、主軸方向はN-49°-Wを指している。F5a₇区からE5j₄区までの長さは13.8mで、主軸方向はN-67°-Wを指している。6区における長さは38.6mで、7区を合わせた総延長は161.4mである。

溝の幅は、上幅が44~168cm・下幅が38~114cmである。壁はソフトロームで軟らかく、外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、ほぼ平坦である。確認面からの深さは、14~32cmである。断面は、「」形をしている。F5b₈区にピット1か所が検出されているが、その性格は不明である。底面のレベルは、Aで22.84m・Bで22.81m・Dで22.66m・Fで22.79mで、Dの部分が最も低くなっている。AからDへ、FからDへと徐々に低くなっている。

覆土は7層からなり、黒色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土・明褐色土が堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

第5号溝（第356図）

本跡は、F6j₇区から延びており、北西方向へ直線的に続き、F6g₃区で第6号溝と合流している。長さは23.6mで、主軸方向はN-50°-Wを指している。

溝の幅は、上幅が64~116cm・下幅が52~88cmである。壁はソフトロームで軟らかく、外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、平坦である。確認面からの深さは、4~15cmで非常に浅い。断面は、「」形をしている。底面のレベルは、Aで22.89m・Bで22.78m・Dで22.84mで、Bの部分が最も低くなっている。

覆土は5層からなり、黒褐色土・暗褐色土・極暗褐色土・褐色土・明褐色土の順に堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

第6号溝（第357図）

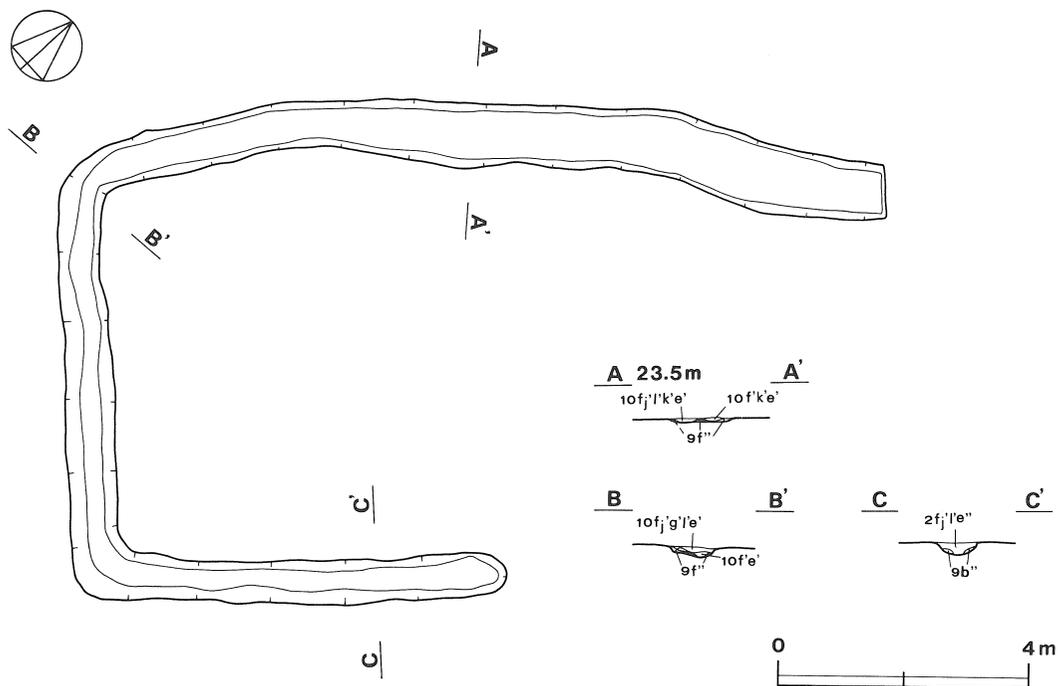
本跡は、遺跡北側の調査区外から延びており、F6d₂区から確認され、F6f₂区まで直線的に南西方向へ続いている。さらに、F6f₂区で南西方向から南東方向へ直角に曲がり、F6g₃区まで直線的に続き、その後、F6g₃区で南東方向から北東方向へ直角に曲がり、F6f₄区まで直線的に北方向へ延びている。全体的にみると、大きな「コ」字形をしている。F6d₂区からF6f₂区までの長さは12.9mで、主軸方向はN-45°-Eを指している。F6f₂区からF6g₃区までの長さは6.3mで、主軸方向はN-48°-Wを指している。F6g₃区からF6f₄区までの長さは6.4mで、主軸方向はN-48°-Eを指している。総延長は25.6mである。

溝の幅は、上幅が62~108cm・下幅が24~90cmである。壁はソフトロームで軟らかく、外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、平坦である。確認面からの深さは、10~24cmである。断面は、「」形をしている。

底面のレベルは、Aで22.81m・Cで22.75m・Dで22.89mで、Cの部分が最も低くなっている。

覆土は4層からなり、黒褐色土・極暗褐色土・明褐色土が堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。



第357図 第6号溝実測図

第7号溝 (第355図)

本跡は、第23号住居跡内のF5b₉区に確認され、南西方向へ直線的に延び、同じ区で第4号溝と合流している。新旧関係は土層から本跡が新しいと考えられる。長さは4.9mで短かく、主軸方向はN-42°-Eを指している。

溝の幅は、上幅が80~116cm・下幅が48~76cmである。壁はソフトロームで軟らかく、西側は外傾するが、東側は2段に掘りこまれて立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、段をもっているところが大部分である。確認面からの深さは、64cmである。断面は、「」形をしているところが多い。底面のレベルは、1地点だけ計測し、Aで22.69mである。

覆土は6層からなり、黒褐色土・暗褐色土・褐色土・明褐色土が堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

第8号溝 (第358図)

本跡は、第4号溝のF5c₉区から延びており、F6a₁区まで北東方向に直線的に続き、F6a₁区で北東方向から北西方向へ直角に曲がり、その後、E5f₇区まで直線的に続いている。また、農道の下を通り、7区の第1号溝として検出されている。E5f₇区からF6a₁区までの長さは23.3mで、主軸方向はN-45°-Wを指している。E6a₁区からF5c₉区までの長さは11.6mで、主軸方向はN-45°-Eを指している。6区での長さは34.9mで、7区を合わせた総延長は226.1mである。

溝の幅は、F5c₀区だけが広く、上幅が152cm・下幅が108cmである。他の区では、上幅が60~128cm・下幅が34~96cmである。壁はソフトロームで軟らかく、外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、平坦である。確認面からの深さは、11~31cmである。断面は「」形をしている。E5i₁区でピット1か所が検出されているが、その性格は不明である。底面のレベルは、Aで22.81m・Bで22.61m・Cで22.80mで、ピットが掘りこまれているBの部分が最も低くなっている。

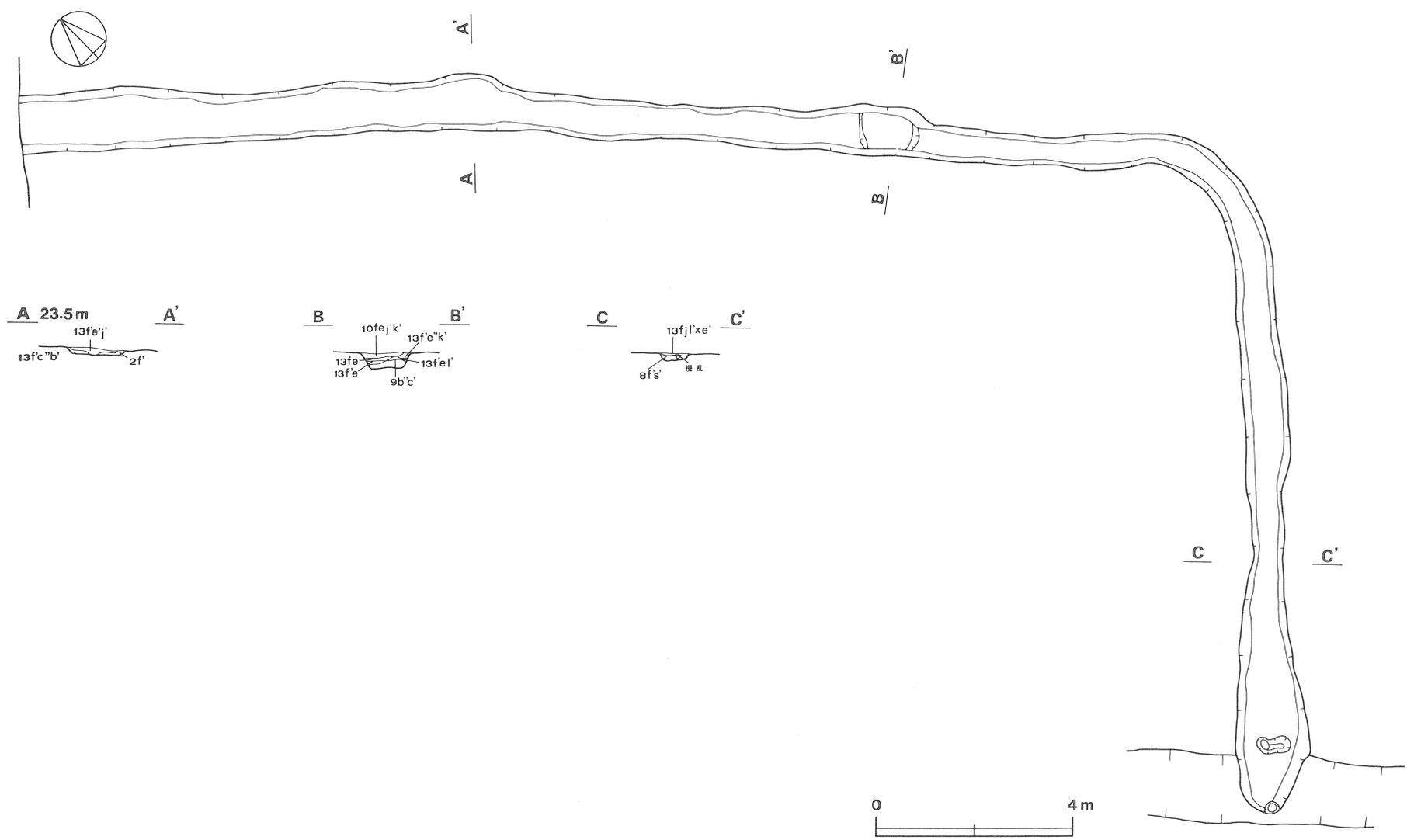
覆土は4層からなり、極暗褐色土・黒褐色土・明褐色土が堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

第9号溝 (第359図)

本跡は、F5a₅区から延びており、直線的に南西方向へ続き、G4a₆区で第1号溝と合流している。総延長は55.4mで、主軸方向はN-42°-Eを指している。

溝の幅は、上幅が58~134cm・下幅が15~50cmである。壁はソフトロームで軟らかく、外傾して立ち上がっている。底面もやはりソフトロームで軟らかく、F5a₅区からF5e₃区までは東側から西側にかけてやや傾斜をしているが、他の区では平坦である。確認面からの深さは、6~10cmであ



第358图 第8号沟渠测图

る。断面は「」形をしている部分が多い。底面のレベルは、Aで22.73m・Dで22.77m・Fで22.76mである。

覆土は4層からなり、暗褐色土・極暗褐色土・明褐色土が堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

第10号溝（第360図）

本跡は、H4a₃区から延びており、H4c₄区まで直線的に続いている。総延長は7.5mで、主軸方向はN-40°-Wを指している。

溝の幅は、上幅が90~108cm・下幅が60~75cmであるが、途中H4b₃区で二重に掘りこまれている。この部分の上幅が広いのは、後世の攪乱穴(芋穴)との重複によるものである。壁はハードロームで硬く、外傾して立ち上がっている。底面もハードロームで硬く、芋穴の部分を除くと平坦である。確認面からの深さは16~40cmである。重複部分は80cmの深さである。底面のレベルは、22.5~22.74mである。

覆土は、1層だけで、暗褐色土がざくざくした状態で堆積している。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

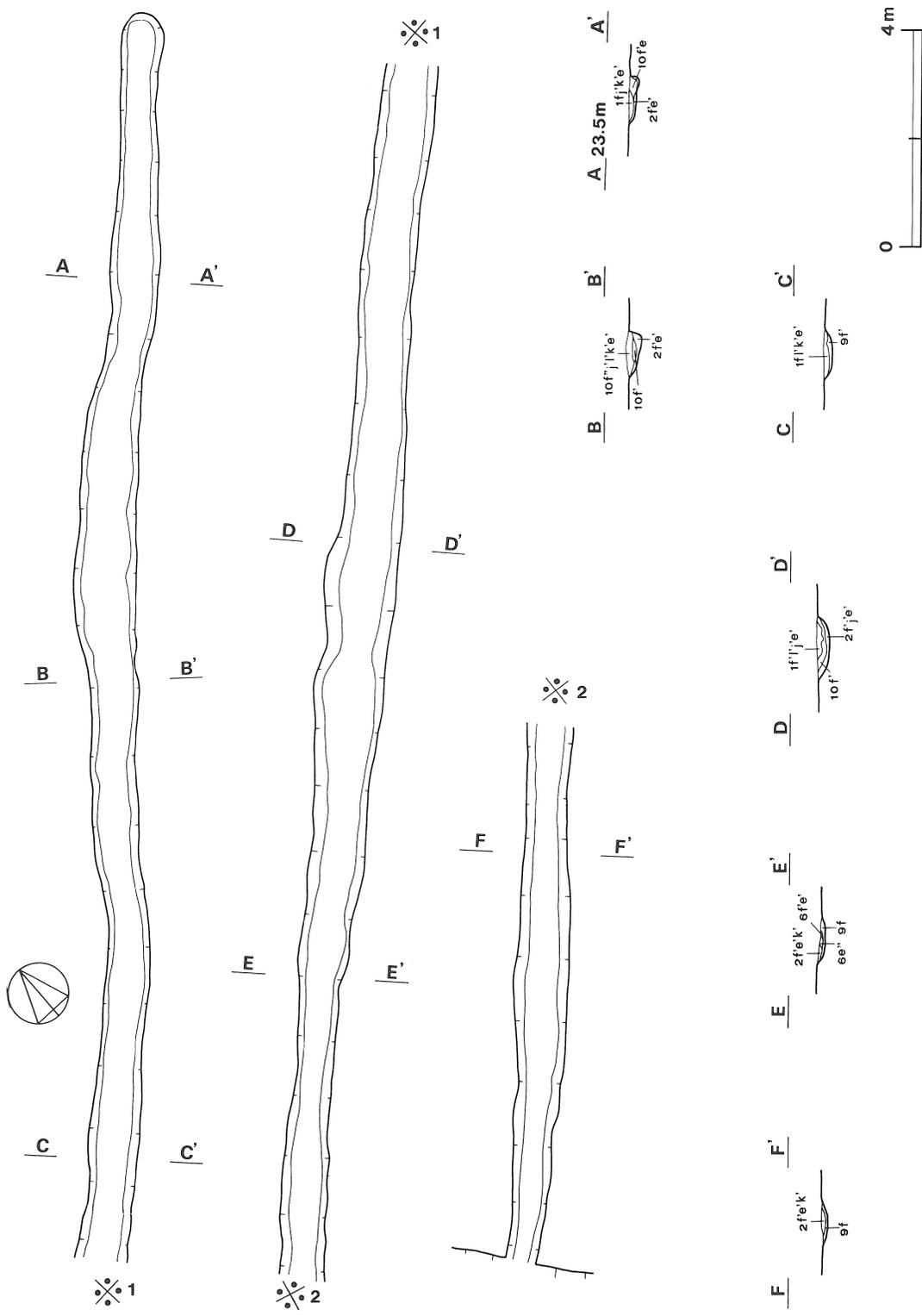
第11号溝（第361図）

本跡は、H4f₂区から直線的にH4j₆区まで南東方向に延びており、H4j₆区で南東から南西へとほぼ直角に曲がり、また、直線的に延びて、I4c₄区へ至っている。H4f₂区からH4j₆区までの長さは25.2mで、主軸方向はN-43°-Eを指している。H4c₄区からI4c₄区までの長さは15.3mで、主軸方向はN-40°-Eを指している。総延長は40.5mである。

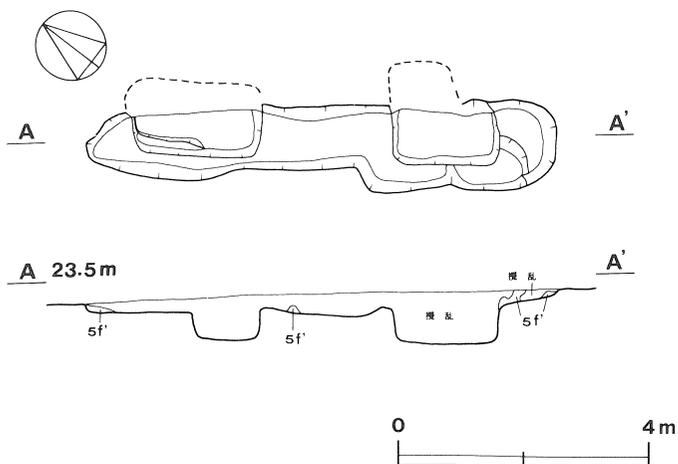
溝の幅は、H4f₂区・H4f₃区で幅が狭く、上幅が44~66cm・下幅が14~22cmである。次のH4f₃~H4f₄区では、上幅が80~114cm・下幅が6~66cmであり、他の区では幅が広くなり、上幅が116~118cm・下幅が68~140cmとなっている。壁はハードロームで硬く、緩やかに外傾して立ち上がっている。底面もハードロームで硬く、H4f₂区からH4g₄区まではほぼ平坦であるが、その他の区では大小のピットが掘られており、凹凸が著しい。確認面からの深さは、10~43cmと高低差がある。断面は、「」形をしているところが多くみられる。底面のレベルは、Aで22.81m・Cで22.98m・Eで22.65m・Gで22.88mである。Eの部分が最も低くなっている。

覆土は3層からなり、1層が黒褐色土、2・3層が褐色土である。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。



第359图 第9号沟实测图



第360図 第10号溝実測図

本跡は、H4h₂区から延びており、H4h₃区で南西方向から南東方向へ直角に曲がり、H4h₃区からI4a₆区まで直線的に続き、I4a₆区で南東方向から南西方向へまた直角に曲がり、直線的にI4c₄区へ至っている。H4h₂区～H4h₃区までの長さは短かく2.7mで、主軸方向はN-56°-Eを指している。H4h₃～I4a₆区までの長さは19.5mで、主軸方向はN-44°-Wを指している。I4a₆～I4c₄区までの長さは10.6mで、主軸方向はN-56°-Eを指している。総延長は32.8mで、全体的にみると、大きな「コ」字形をしている。

溝の幅は、I4a₆区からI4c₄区までは幅が狭く、上幅が66～88cm・下幅が22～66cmである。その他の区では広く、上幅が90～200cm・下幅が70～186cmである。壁はハードロームで硬く、外傾して立ち上がっているところが多い。底面もハードロームで硬く、H4h₃区からH4j₅区までは大小のピットが掘られ、凹凸が著しい。他の区では、平坦である。確認面からの深さは、7～45cmと高低差がある。断面は、「」形である。底面のレベルは、Aで22.94m・Bで22.93m・Eで22.56mであり、Eの部分が最も低くなっている。

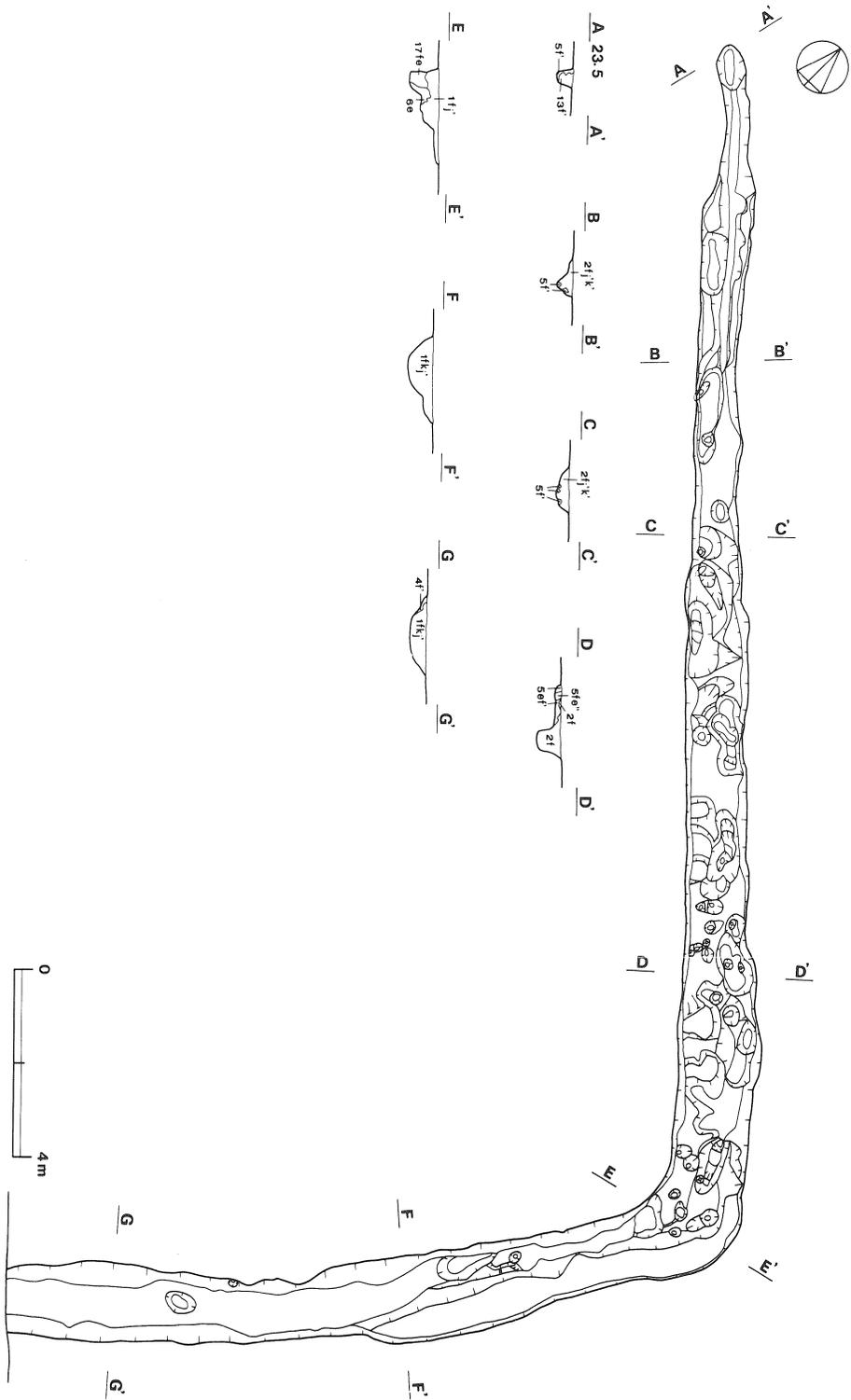
覆土は4層からなり、1・2層が暗褐色土、3・4層が褐色土である。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

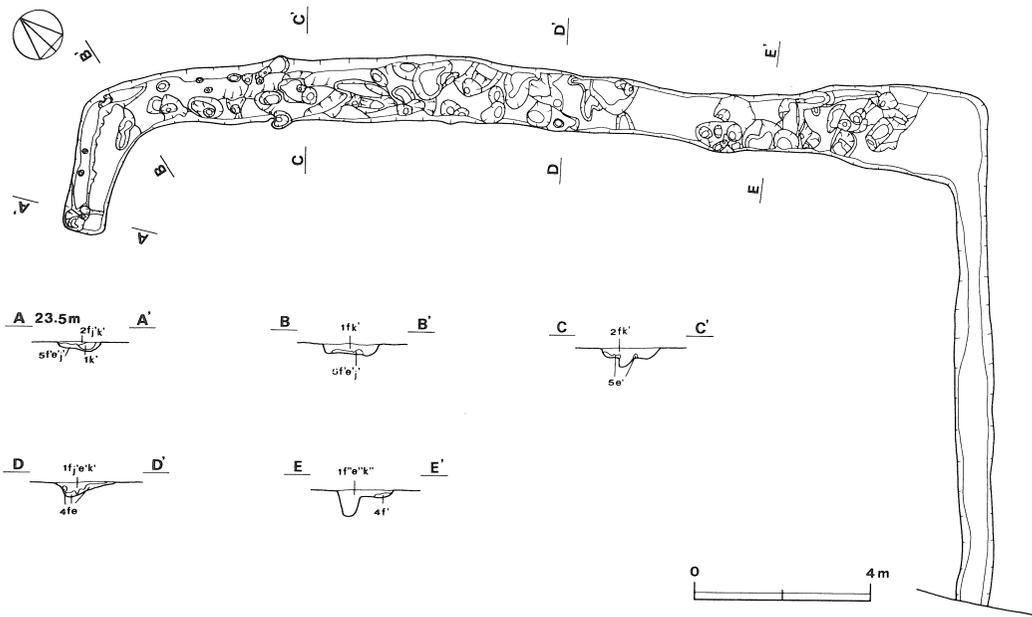
第13号溝（第363図）

本跡は、H4j₃区から延びており、同じ区で北東方向から南東方向へ直角に曲がり、さらに、I4a₄区まで直線的に続き、その後、I4a₄区で南東方向から南西方向へ直角に曲がり、I4b₄区へ直線的に至っている。H4j₃区での長さは3.7mで、主軸方向はN-60°-Eを指している。H3j₃～I4a₄区までの長さは6.2mで、主軸方向はN-45°-Wを指している。I4a₄～I4b₄区までの長さは4mで、主軸方向はN-60°-Eを指している。総延長は13.9mで、全体的にみると、「コ」字形をしている。

溝の幅は、上幅は80～136cm・下幅は72～114cmである。壁はハードロームで硬く、外傾して立ち上がっている。底面もハードロームで硬く、ほぼ平坦である。ただ、H4j₃～I4b₄区では、2段に掘りこまれている。断面は、H4j₃～I4b₄区では「」形で、その他の区では「」形をしている。また、I4a₄区にはピット1か所が検出されているが、その性格は不明である。底面のレベル



第361图 第11号沟渠测图

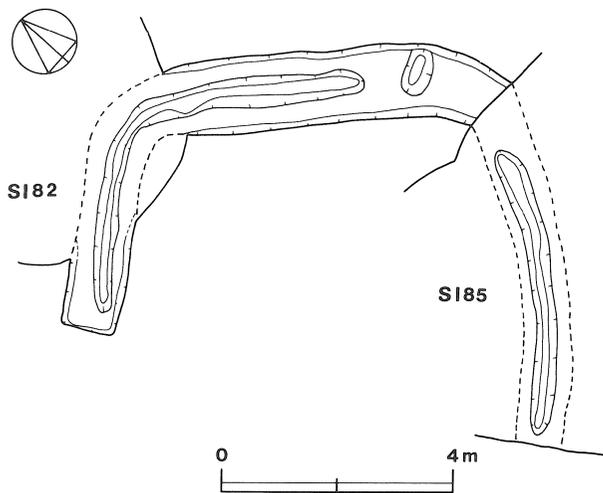


第362図 第12号溝実測図

は計測していない。

覆土は、1層だけで、暗褐色土が堆積している。

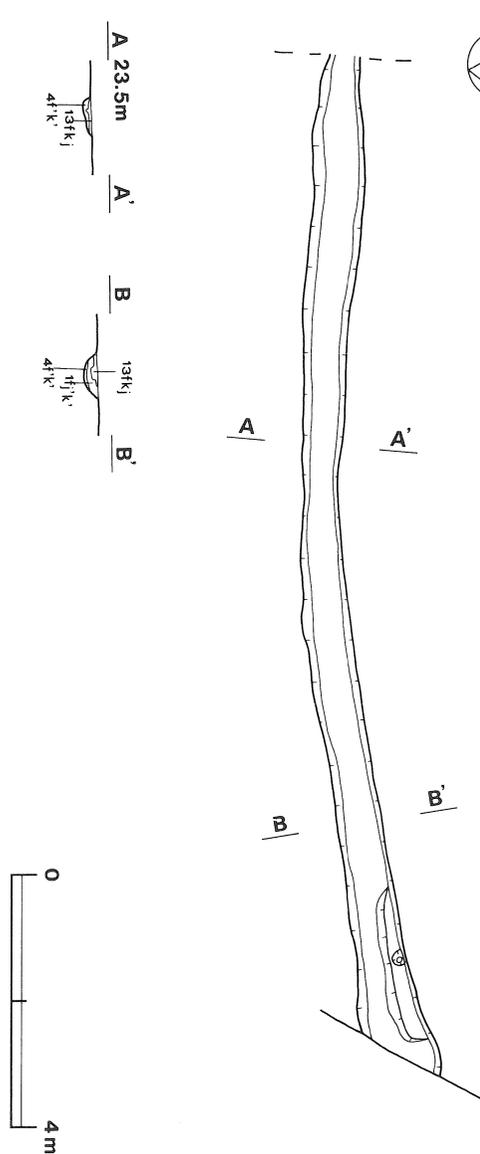
遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。



第363図 第13号溝実測図

第15号溝 (364図)

本跡は、第11号溝のI4c₄区から延びており、I4e₅区まで直線的に続き、I4e₅区でやや曲がり、さらに、同区からI4f₇区まで直線的に延び、その後、農道の下を通過して2区の第2号溝とつながっている。I4c₄区からI4e₅区までの長さは7mで、主軸方向はN-45°-Wを指している。I4e₅区からI4f₇区までの長さは9mで、主軸方向はN-



第364図 第15号溝実測図

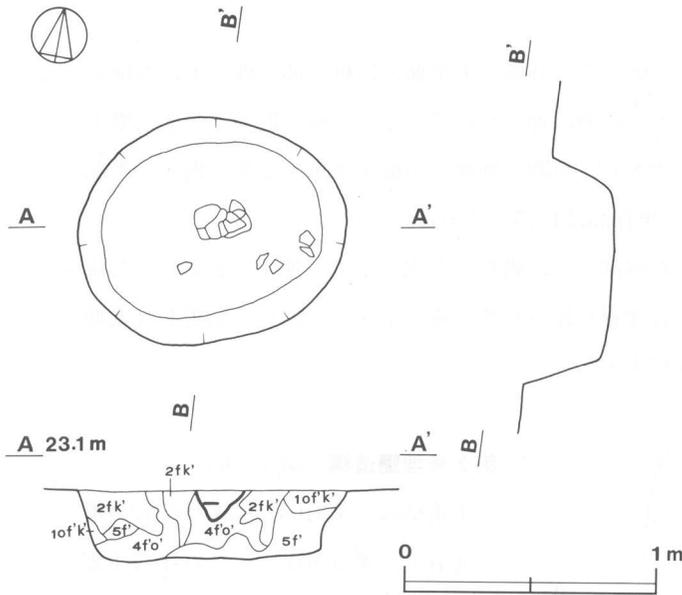
32°-Wを指している。6区における長さは16mで、2区を合わせた総延長は78.8mである。

溝の幅は、上幅が48~102m・下幅が34~80cmである。壁はソフトロームで軟らかく、外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームで軟らかく、ほぼ平坦である。確認面からの深さは、8~10cmである。断面は、「」形をしている。I4f7区だけが2段に掘りこまれ、I4f7区でピット1か所が検出されている。ピットの性格は不明である。底面のレベルは、Aで23.1m・Bで23.09mである。全体としてAからBへ、さらに2区へと徐々に低くなっている。

覆土は3層からなり、1・2層は暗褐色土、3層が褐色土である。

遺物は、縄文土器片が出土しているが、覆土の上層からなので、時期決定の資料とはならない。

第5節 埋甕遺構と出土土器



第365図 第1号埋甕遺構実測図

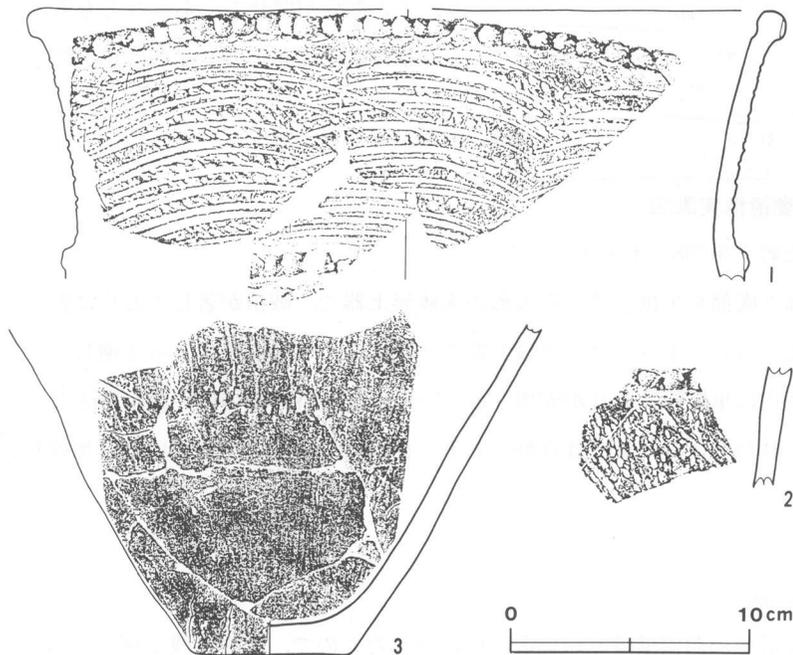
土は、褐色、暗褐色を呈する4層からなり、本土器が埋設されていた部分は褐色土層であったが、掘り方は確認できなかった。破片は一括して折りかさなるような状態で出土した。

第1号埋甕遺構

(第365図)

本遺構は、G4h₇グリッドに位置し、長径107cm、短径90cm、深さ29cmの楕円形を呈する土壌のほぼ中央部に第366図1・3の土器が正位で埋設されていたものである。

胴下半部から底部(3)にかけてはほぼ完存していたが、胴上部から口縁部(1)にかけては破損が著しく、復元は不充分である。土器の底面は壙底まで達していない。本壙の覆



第366図 第1号埋甕遺構出土土器実測図・拓影図

第1号埋甕遺構 出土土器

(第366図1~3)

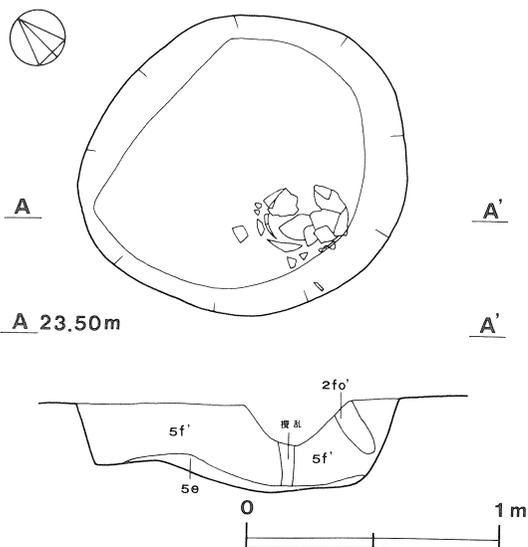
1と3は、同一個体であるが上記のような理由により接合できなかった。

1は、口縁直下および頸部に押圧を加えた紐線を貼付し、粗い縄文地上に弧状の沈線文を

左から右へ施している。口唇部内面に1条の沈線を巡らしている。胎土に微砂を含み、焼成は良好である。色調は外面がにぶい褐色、内面が褐色を呈している。推定口径は30.7cmで、現存高は9.3cmである。

3は、胴下半部から底部にかけての破片で、外面の上半部には粗い縄文地上に縦位の沈線文を付し、下半部には縦方向のヘラナデが顕著に加えられている。底面の近くは一部に横ナデを施している部分がある。内面は横ナデである。色調は外面と内面下半部が褐色、内面上半部が暗灰褐色を呈している。底径は6.7cmで、現存高は13.5cmである。

2は、本遺構の覆土中から出土した胴部片で、破片の上端に1条の押圧が加えられた紐線が貼付され、以下は粗い縄文地上に斜行沈線が施されている。1・3と同じく加曽利B式期のものであるが、1・3とは別個体の破片である。



第2号埋甕遺構（第367図）

本遺構は、第310号土壌の南側の覆土上位に所在し、第368図1～3の埋設土器が正位で出土したものである。埋設土器の掘り方は捉えられなかったが、第310号土壌の覆土第2層の褐色土層が浅いV字状に落ち込んでおり、この部分が掘り方であったとも考えられる。推定直径は46cmで、深さは18cmである。

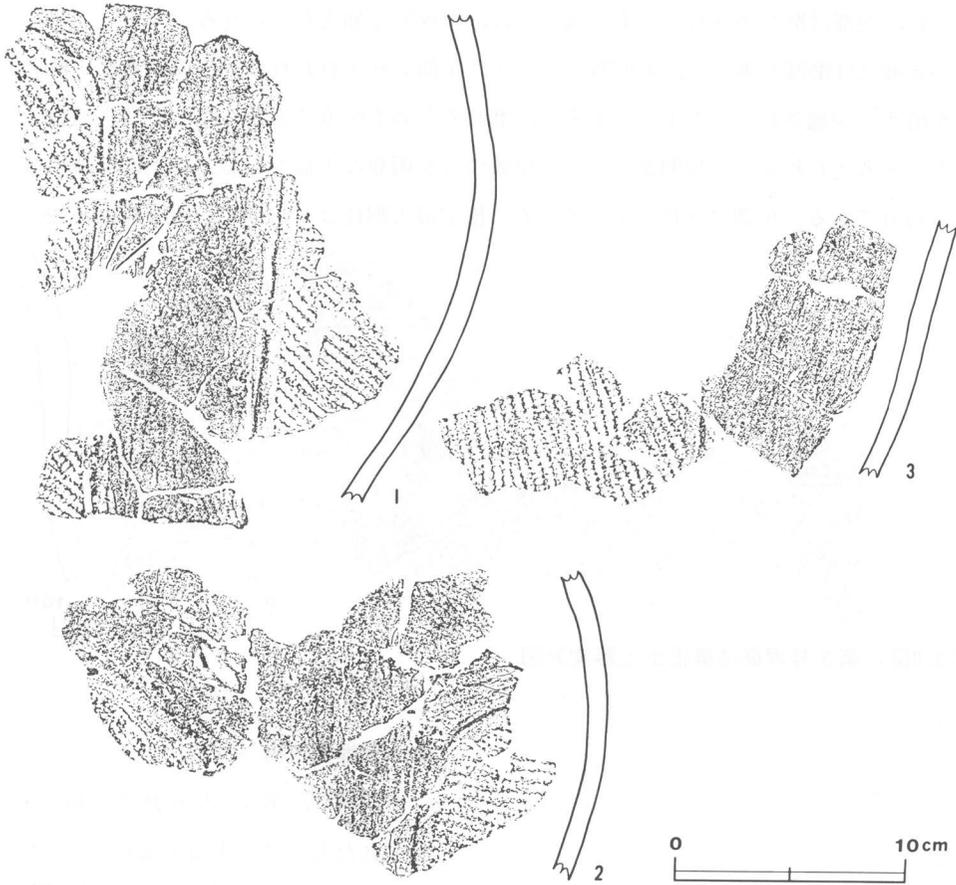
第367図 第2号埋甕遺構実測図

第2号埋甕遺構出土土器（第368図1～3）

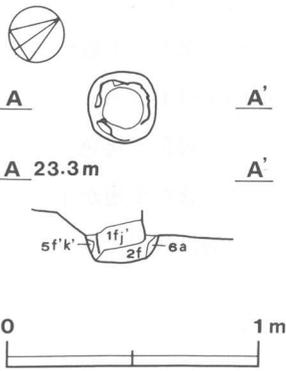
埋設土器は、口縁部と底部を欠損している大形の深鉢形土器で、破損が著しく22片に割れていたために復元はできなかった。1～3は、埋設土器の一部である。微隆線によって逆U字状のモチーフが描かれ、区画内に単節縄文LRが充填されている。区画外は幅の広い磨消帯となっている。胎土には小石粒、砂粒を含み、焼成は良好である。色調は茶褐色を呈している。加曽利EIV式期のものである。

第3号埋甕遺構（第369図）

本遺構は、第50号住居跡の西側壁近くの位置に検出されたもので、床面を浅く掘り込んで、ほぼ正位の状態で深鉢形土器が埋設されていたものである。掘り方は、径29cmの円形を呈し、深さ



第368図 第2号埋甕遺構出土土器拓影図



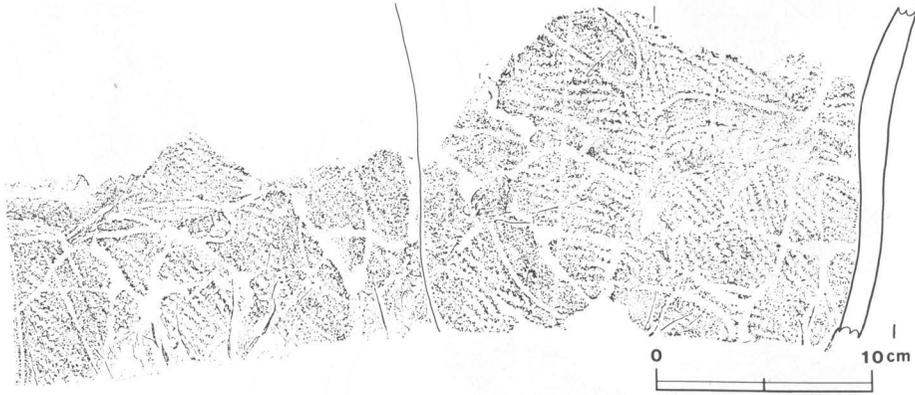
第369図 第3号埋甕遺構
実測図

は土器の遺存状態からみて最低21cm以上あったものと推定されるが、現状では深さは11cm程度である。土器の内・外の土層とも同様で、ローム粒子を含む暗褐色土層が主に堆積している。土器内部の土には、わずかに焼土粒子が混入している。本土器が、第50号住居跡が使用されている間に埋設されたものか、あるいは廃絶後に覆土、床面を掘り込んで埋設されたものかは明らかにできなかった。

第3号埋甕遺構出土土器 (第370図1)

1は、口縁部と底部を欠き、胴部だけが完存しており、復元の過程で第50号住居跡の覆土中から出土した破片1点も接合できた。器面全体に細い沈線で曲線的モチーフが横位に展開するよう

に施され、内部は磨り消されている。部分的には直線的な施文もみられる。モチーフ間に施文されている縄文は磨滅が著しく、不明瞭であるが、単節LRと思われる。内面上半部が横ナデ、下半部が縦ナデが施されていたようであるが、磨滅のため不明瞭である。本土器は、加曾利E III式期のものと考えられるが、類例が乏しく、位置づけが困難な土器である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定最大胴径は24.1cmで、現存高は15.2cmである。

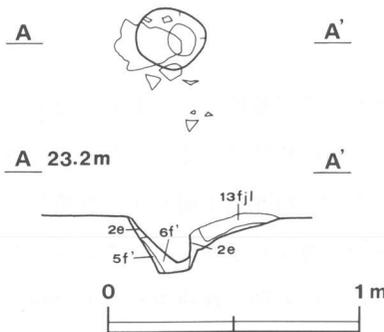


第370図 第3号埋甕遺構出土土器実測図



第4号埋甕遺構 (第371図)

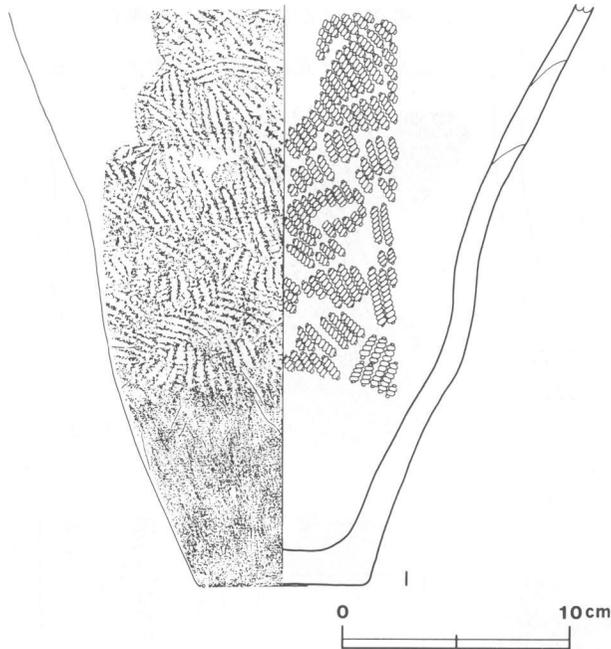
本遺構は、第50号住居跡の南側の床面に検出されたもので、床面を掘り込んで口縁部を欠く深鉢形土器が北西方向に倒れて埋設されていたものである。掘り方は、28×25cmのほぼ円形状を呈しており、深さは土器の遺存状態から考えて、最低23cm以上はあったものと考えられる。覆土は、暗褐色、褐色のローム粒子、ロームブロックを含む土層が主となっていた。土器内部の土層は観察できなかった。



第371図 第4号埋甕遺構実測図

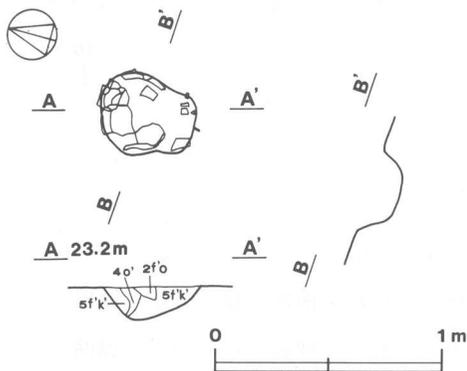
第4号埋甕遺構出土土器 (第372図1)

1は、やや厚手の深鉢形土器で、口縁部を欠損している。残存部上位は焼成が不良でもろく、9片に割れていて土器の接合に困難をきたした。全面に単節縄文RLが横位を主に、縦位、斜位など乱雑に回転施文されている。底面から上へ8cmほどは縦方向のヘラミガキによって調整されている。底面の近くは横ナデが、内面は縦ナデが加えられている。胎土には小石粒、砂粒を含ん



第372図 第4号埋甕遺構出土土器実測図

ている。胴上半部は焼成は不良だが、その他は良好である。色調は内外面とも暗褐色を呈している。底径は7.5cmで、現存高は25.5cmである。本土器は、縄文だけの土器で、型式的特徴に乏しいが、加曾利E III式期のものと思われる。



第373図 第5号埋甕遺構実測図

第5号埋甕遺構 (第373図)

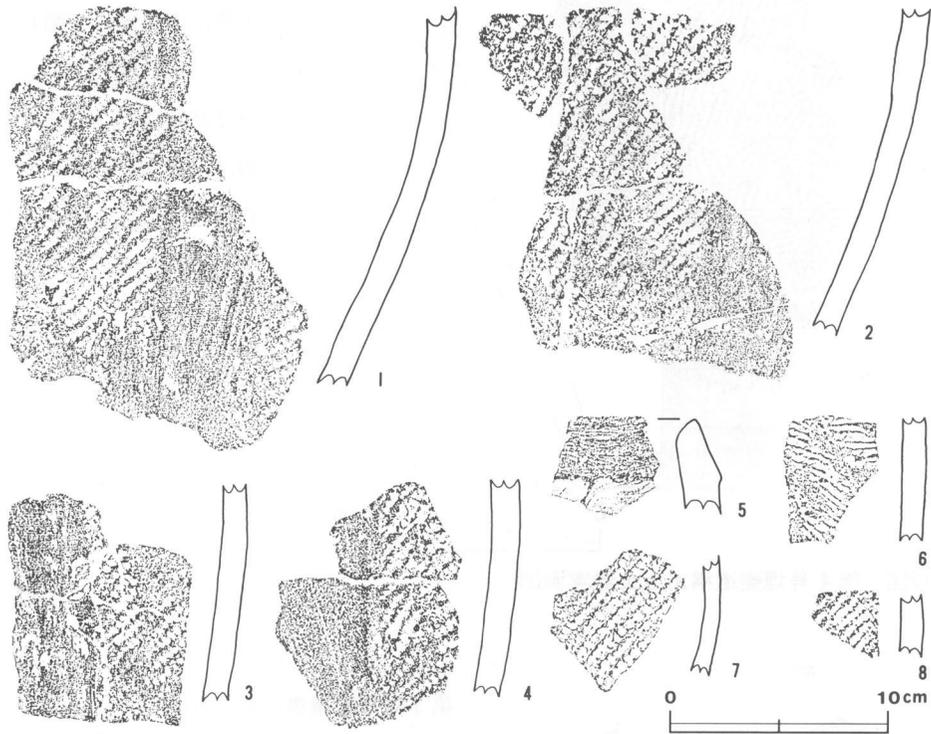
本遺構は、第53号住居跡の南西側の壁近くの覆土上面で検出されたもので、深鉢形土器が正位で埋設されていたが、口縁部および底部を欠損し、胴部だけが残存していた。掘り方は、45×35cmの楕円形を呈し、深さは14cmであった。覆土は暗褐色、褐色を呈し、ローム粒子、炭化物が少し含まれていた。掘り方からは45点の土

器片が出土しており、そのうちの40点が同一個体で埋設土器として使用されたものであり、他に別個体の破片が5点含まれている。

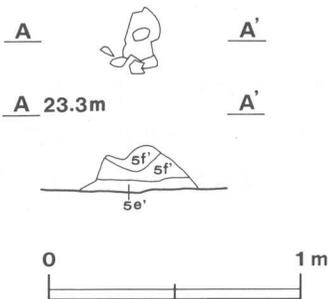
第5号埋甕遺構出土土器 (第374図1～8)

1～4は、埋設土器の一部である。いずれも深鉢形土器の胴下半部片で、直線の磨消帯が垂下しているが、沈線または微隆線による明確な区画は認められない。器面の磨滅が著しいので、微隆線が磨滅してしまったものと推測される。縄文は単節RLで、縦位回転で施文されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。5は、口縁部無文帯を有し、以

下に微隆線によるモチーフを描いている。6～8は、縄文だけが施されている胴部片で、6は無節、7・8は単節縄文が付されている。これらは、加曽利E IV式期のものと考えられる。



第374図 第5号埋甕遺構出土土器拓影図



第375図 第6号埋甕遺構実測図

第6号埋甕遺構 (第375図)

本遺構は、第66号住居跡の南側の覆土中から検出され、深鉢形土器が北西方向に傾いて埋設されていた。周囲の土層は、褐色のローム粒子、小ブロックを含みやわらかである。掘り方は確認されなかったが、底部が付いていたやや硬い面が、あるいは住居跡の床面かと考えられるが確かではない。

第6号埋甕遺構出土土器 (第376図1)

1は、胴下半部から底部にかけてが残存している深鉢形土器で、胴上半部以上を欠損している。器形は、胴下半部から急激にすぼまっている。外面に無節縄文と条線文が乱雑に施文されており、底面の近くは横、斜方向の粗いナデにより調整されている。内面は縦ナデが加えられている。胎



第376図 第6号埋甕遺構出土土器実測図

土には微砂を含み、焼成はやや不良である。色調は外面が褐色，暗灰褐色，内面が暗灰褐色を呈している。底径は7.6cmで，現存高は19.2cmである。加曾利EⅢ式期のものと考えられる。

第6節 炉穴と出土土器

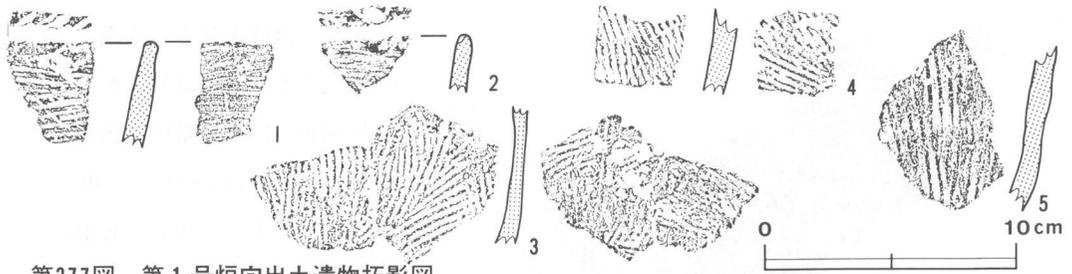
第1号炉穴（第236図）

本跡は，G6a₉区に確認され，遺跡の北東側に位置している。平面形は，長径1.7m・短径1.4mの楕円形である。長径方向は，N-42°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，25cmである。覆土は，5層からなっている。炉跡は底面の東側にあり，長径36cmの不定形である。焼土の厚さは7cmである。遺物は，覆土から早期の土器片が20点出土している。

第1号炉穴出土土器（第377図1～5）

1・2は，口縁部片で，1は口唇部に鋭い斜位のキザミ目を付し，2は口唇部に深い押捺を施している。1の表面は横位の貝殻条痕文，裏面は横位の擦痕文を付している。2も横位の擦痕により調整されている。3・4は，同一個体と思われ，明瞭な貝殻条痕文が縦位，斜位に施文されている。5は，やや太めの縦位の貝殻条痕文が施されている。3・5は底部に近い部分と考えられる。

本炉穴からは20点の破片が出土しており，そのすべてが早期のものである。したがって，本炉穴の時期は早期の貝殻条痕文系土器の時期と考えられる。

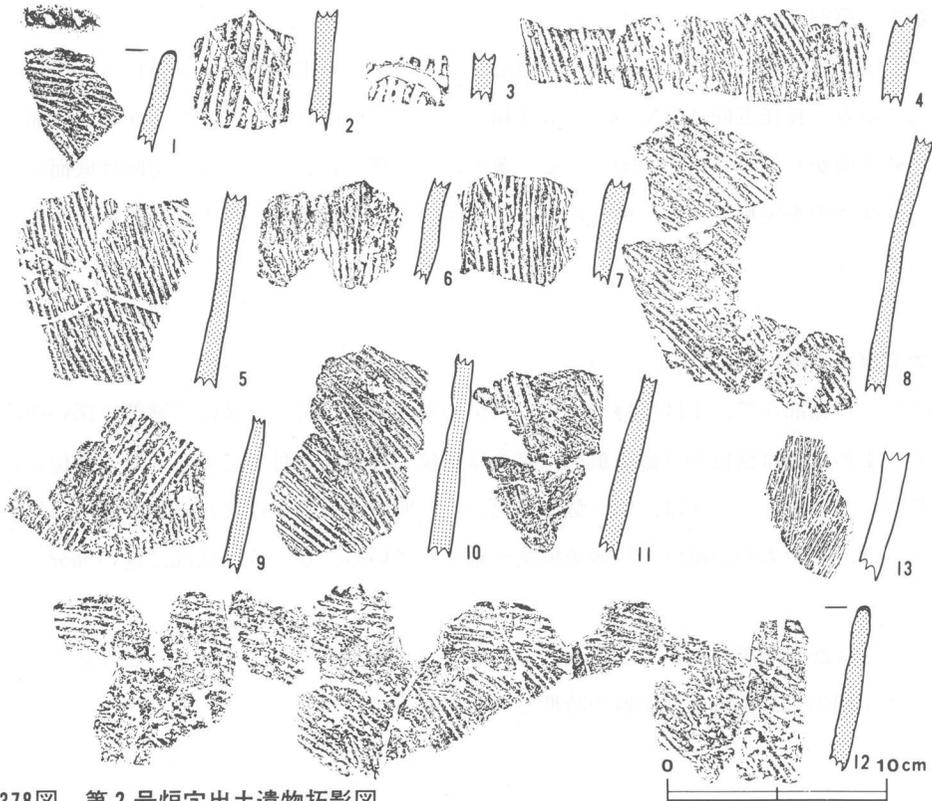


第377図 第1号炉穴出土遺物拓影図

第2号炉穴 (第257図)

本跡は、F6j₆区を中心に確認され、第1号炉穴の西側13mに位置している。平面形は、長径1.9m・短径1.2mの不定形である。長径方向は、N-36°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は凹凸がある。確認面からの深さは、12cmである。覆土は、3層からなっている。炉跡は底面の中央にあり、長径35cm・短径14cmの双円形である。焼土の厚さは8cmである。遺物は、覆土から早期の土器片が50点出土している。

第2号炉穴出土土器 (第378図1~13)



第378図 第2号炉穴出土遺物拓影図

1～12は早期のもので、13は中期のものである。1は口縁部片で、表裏面に貝殻条痕文が横位、斜位に施文され、口唇部に斜位のキザミ目が付されている。2・3は、細い縦位の沈線文を施文し、その上にやや太めの浅い沈線を斜位ないしは弧状に施している胴部片である。4～11は、縦位に貝殻条痕文が施されている胴部片である。6は底部の近くの破片で、尖底を呈するものと推定される。いずれも器面に剝落痕が認められる。12は、深鉢形土器の上半部の3分の1程度を残す破片で、表面には斜位の貝殻条痕文、裏面には横位の条痕文が付されている。口唇部は薄くなり、キザミ目も加えられている。13は、縦位・斜位の条線文を施している胴部片である。

本炉穴からは50点の土器片が出土しており、図示したもののうち13以外はすべて早期の条痕文系の土器片である。以上から本炉穴の時期は早期の条痕文系土器の時期と考えられる。

第3号炉穴（第242図）

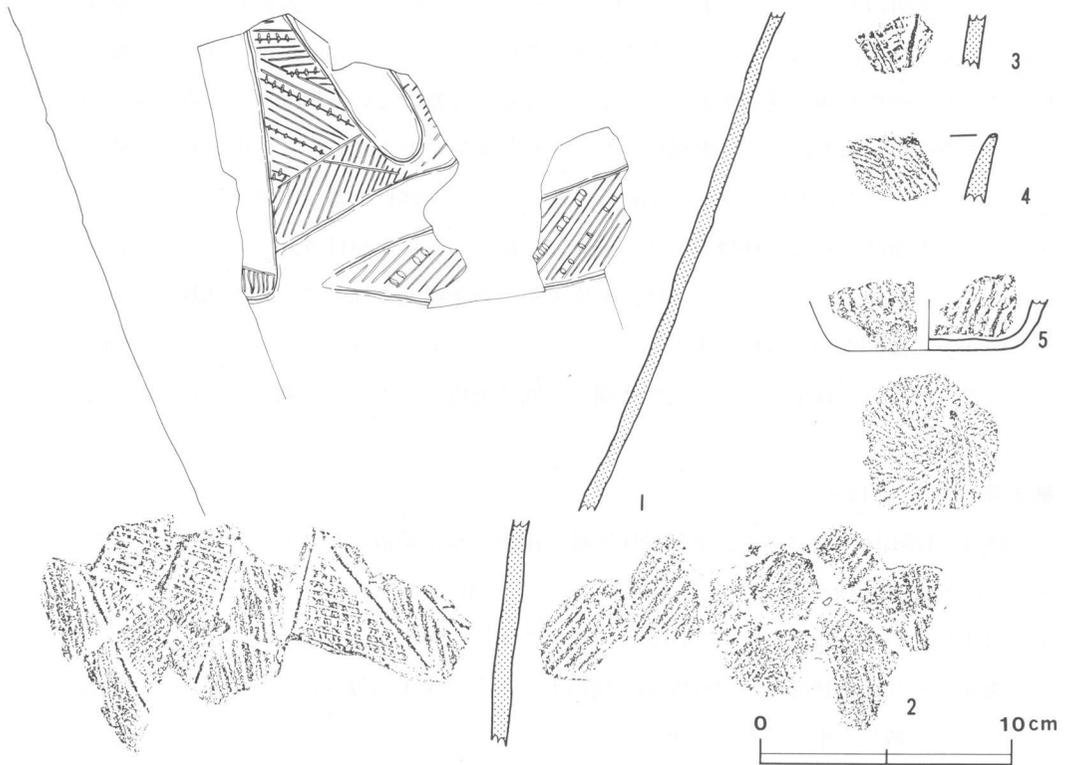
本跡は、H5d₄区に確認され、第51号住居跡の南側3mに位置している。平面形は、長径1.8m・短径0.9mの楕円形である。長径方向は、N-22°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、35cmである。覆土は、5層からなっている。炉跡は底面の東側にあり、長径80cm・短径20cmの楕円形である。焼土の厚さは6cmである。遺物は、覆土から早期の土器片を中心に35点出土している。

第3号炉穴出土土器（第379図1～5）

1は、本炉穴の覆土中から出土した破片20数点が接合したもので、薄手の深鉢形土器の胴部片である。胴上半部には地文の貝殻条痕文上に、微隆起線による幾何学的な文様構成を施し、区画内を細沈線で小割にし、同じ沈線を斜行させて充填している。更に沈線文の一部には刺突文を加えている。区画は直線的なものばかりではなく、曲線的なものも認められる。地文の貝殻条痕文は右傾し、外面の下半部はやや縦方向に近い。内面の上端部には横位の条痕文が、以下には縦位の条痕文が施されている。胎土にはやや大粒の長石、石英粒と、わずかの繊維を含み、焼成は良好である。色調は外面上半部および内面が暗褐色、外面下半部は2次加熱を受けたためか赤褐色を呈している。本土器は、内外面とも胴下半部の磨滅が著しい。推定最大胴径は30.7cmで、現存高は20.0cmである。縄文早期の野島式土器である。

2・3は、1と同一個体である。幾何学的な微隆起線による区画内に細沈線文を充填している。地文の貝殻条痕文は縦位に付されている。内面は斜位、縦位に施文されている。4は、表裏面とも斜位に貝殻条痕文が施されている口縁部片で、口唇部に斜位のキザミ目が付されている。

5は、本壙の覆土上位から出土した平底を呈する薄手の底部片である。内外面とも縦位の貝殻条痕文が施されている。底部外面には放射状の条痕文が施文され、その上からナデが加えられて



第379図 第3号炉穴出土遺物実測図・拓影図

いる。内面は未調整である。胎土には小石粒や砂粒を混入しているが、繊維は認められない。焼成は良好で、色調は外面が黒褐色、内面が褐色を呈している。推定底径が7.6cmで、現存高は2.0cmである。

本炉穴からは35点の土器片が出土しており、主体は早期の条痕文系土器群に属するもので、1～3などから判断すれば、野島式期である。中期の土器片もわずかに混入しているが、本炉穴の時期は野島式期と考えられる。

第4号炉穴（第225図）

本跡は、H5f7区に確認され、第37号住居跡の南側3mに位置している。平面形は、長径1.5m・短径1.3mの楕円形である。長径方向は、N-54°-Eを指している。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは、22cmである。覆土は、2層からなっている。炉跡は底面の北西側にあり、長径64cm・短径44cmの楕円形である。焼土の厚さは16cmである。遺物は、覆土から早期の土器片が2点出土している。

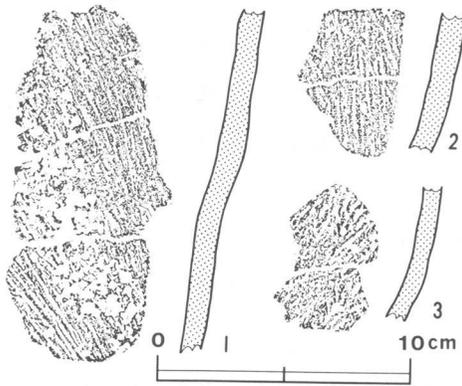
第4号炉穴出土土器 (第349図13)

13は、表裏面に縦位の条痕文が付されている胴部片で、胎土に繊維を含んでいる。

本炉穴からは2点の土器しか出土していないが、ともに早期の条痕文系土器片である。したがって、本炉穴の時期は早期の条痕文土器群の時期と考えられる。

第5号炉穴 (第254図)

本跡は、H5i₁区に確認され、第65号住居跡内に位置している。新旧関係は出土遺物から本跡が古いと考えられる。当初、第83号住居跡の炉として調査をしたが、出土土器が縄文時代早期のものであるため、第5号炉穴とした。平面形は、長径0.66m・短径0.46mの楕円形である。長径方向は、N-48°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり、底面は起伏が著しい。確認面からの深さは12cmである。覆土は、7層からなっている。炉跡は底面の南側にあり、径26cmの不整形円形である。焼土の厚さは7cmである。遺物は、覆土から早期の土器片が55点出土している。



第5号炉穴出土土器 (第380図1~3)

1~3は、いずれも本壙の焼土内から出土したもので、早期の条痕文土器片である。表面に縦位および斜位の条痕文が付されている。裏面は剥落が著しく、調整については不明である。胎土に砂粒、繊維を含有している。

本壙からは55点の土器片が出土しており、そのすべてが早期の条痕文土器片である。したがって、本壙の時期は早期の条痕文土器群の時期と考えられる。

なお、本壙の周囲は、縄文中期の加曽利E III, IV式

期の住居跡、土壌が複雑に重複しており、このために本壙が、破壊され、炉底部だけが残存したものと考えられる。

第380図 第5号炉穴出土遺物拓影図

第7節 土器以外の人工遺物

1 把手（第381～384図1～47）

この項においては、土器のうち特徴ある把手を有する資料について個別に説明する。

1は、口縁部無文帯を有し、以下に段を有している口縁部片で、縄文と沈線による施文が加えられている。有段部の一部が特に張り出し、そこに上から下に向けて孔が穿たれて、小把手を形成している。器面の一部に赤彩痕が残っている。無文帯の整形は丁寧である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、黒色を呈している。（第25号住居跡出土）

2は、橋状把手の破片である。縦位の条線文が全面に施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、橙色を呈している。（第42号住居跡出土）

3は、深鉢形土器の口縁部片で、波頂部が筒状に突出し、上面がU字状に少し凹んでいる。波状縁に沿って1条の沈線と円形刺突文列が巡り、以下に逆U字状の磨消帯を施している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、褐色を呈している。（第42号住居跡出土）

4は、小さな筒状把手の破片で、上面が凹んでいる。小さな円形刺突文が縦位に2列、横位に1列付されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、暗褐色を呈している。（第42号住居跡出土）

5は、微隆線による曲線的モチーフが描かれている胴部片で、橋状把手が横位に付されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面がにぶい褐色、内面が橙色を呈している。（第42号住居跡出土）

6は、筒状把手の破片で、上面は大きく凹んでいる。沈線による渦巻状のモチーフなどが施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、にぶい褐色を呈している。（第48号住居跡出土）

7は、筒状把手の破片で、上面は凹んでいる。微隆線による区画と縄文が施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。（第48号住居跡出土）

8は、筒状把手の破片で、上面はほぼ平坦であるが、微妙に凹んでいる。断面三角形の微隆線による区画内に縄文を充填している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、外面が灰色、内面が褐色を呈している。（第49号住居跡出土）

9は、小形の深鉢形土器の口縁部片で、口縁部無文帯を1条の細い沈線で区切り、無文帯と沈線上にそれぞれ小さな刺突を施している。以下は細い沈線による幾何学的磨消帯を加えている。小さな橋状把手は、無文帯をまたぐように付されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、明褐色を呈している。（第49号住居跡出土）

10は、微隆線による曲線的モチーフが描かれている胴部片で、橋状把手が横位に付されている。5に類似しているが、別個体である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面がにぶい褐色、内面が褐色を呈している。(第49号住居跡出土)

11は、断面三角形の微隆線による区画と縄文が施されている胴部片で、橋状把手が横位に付されている。把手上にも縄文が加えられている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が暗褐色を呈している。(第51号住居跡出土)

12は、全面縄文が施されている胴部片で、小さな橋状把手が横位に付されている。把手上は無文である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が暗褐色、内面がにぶい赤褐色を呈している。(第51号住居跡出土)

13は、筒状把手の破片である。上面は少し凹んでいる。沈線による区画と縄文が施されているが、沈線の一部は把手の上面にまで延びている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が暗褐色、内面が褐色を呈している。(第55号住居跡出土)

14は、薄手の深鉢形土器の口縁部片で、波頂部に橋状把手が縦位に付されている。口縁部無文帯を1条の細い沈線で区画し、以下に縄文を施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、褐色を呈している。(第57号住居跡出土)

15は、橋状把手を縦位に付している口縁部片である。器面には微隆線による曲線的区画と縄文が施されている。把手上にも縄文が施され、縄文は内面にもおよんでいる。内面には円孔がみられる。器面は剥落が著しい。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が赤褐色、内面が褐色を呈している。(第63号住居跡出土)

16は、鳥頭形を呈する把手である。器面には、断面三角形の微隆線による区画がなされ、区画内に単節縄文LRが充填されている。鳥頭部にも同じ縄文が加えられている。孔が2か所あり、内面には微隆線による渦巻文が認められる。嘴部の先端と右眼孔部および鳥頭部の一部を欠くが、ほぼ完存している。眼孔部は微隆線で軽い入組状に整形され、凹んでいる。器面には、炭化物が付着している。以上から本資料は、茨城県常北町片山遺跡、千葉県市原市柏野遺跡に類似(註1)が認められるワシタカ科の鳥を模した把手と考えられる。(註2)

胎土には小石粒を含み、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。(第64号住居跡南側覆土出土)

17は、口縁部に小さな橋状把手を付している口縁部片で、無文帯を残している。把手上も含めて縦位の条線文を施している。把手の中央部が浅く凹んでいる点に特色がある。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈している。(第68号住居跡出土)

18は、波状を呈する深鉢形土器の口縁部片で、波頂部に小さな橋状把手がひねって付されている。口縁部に無文帯を有し、以下は沈線区画内に縄文を充填している。内面にも稜がみられる。器面には炭化物が少し付着している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈

している。(第70号住居跡出土)

19は、微隆線による逆S字状のモチーフを内外面に描いた板状を呈する把手で、2孔が穿たれている。側面および上面には単節縄文RLが施され、その上に2列を基本とする円形刺突文が付されている。把手部下の器面には微隆線による区画と縄文が施されると思われる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。(第198号土壙出土)

20は、16に類似し、鳥頭形把手と思われるが、相異点もあり断定できない。深鉢形土器の波頂部に形づくられたもので、^{くちばし}嘴部の左右には細い沈線が施され、口を閉じた状況を示している。眼孔部が入組状に作出される点は似ているが、凹むだけではなく貫通孔となっている。頭部上面は鋭い三角形状を呈し、凹んでいる。把手の外面には橋状把手が縦位に施されており、上面に単節縄文RLが付されている。その直下に小さな円孔が穿たれている。器面には微隆線による区画と縄文が施文されているが、磨滅していて不鮮明である。本資料が果していかなる動物を模したものであるかは興味のあるところである。胎土には砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈している。(第198号土壙から19とともに出土)

21は、筒状把手の破片である。上面はわずかに皿状に凹んでいる。把手に沿って沈線が巡り、区画内は磨消され、区画外に単節縄文RLが施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は明褐色を呈している。(第312号土壙出土)

22は、縦位の橋状把手が口縁部無文帯をまたぐように付されている口縁部片である。器面の磨滅が激しいが、縄文が施されている。炭化物の付着もわずかにみられる。胎土には砂粒を含み、焼成はやや不良である。色調は明黄褐色を呈している。(第419号土壙出土)

23は、波状を呈する口縁部片で、橋状把手が付されている。橋状把手の上方と下方から孔が穿たれている。下方の孔を取り巻くように沈線が描かれ、以下は縄文が施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が暗褐色、内面が褐色を呈している。(第419号土壙出土)

24は、逆U字状の隆線が貼付されている把手の破片である。隆線上には1個の円形刺突文とU字状の沈線が加えられている。後期初頭のものである。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。(第7号溝出土)

25は、口縁部上に横位に橋状把手が付されている。把手の表側には、縄文が施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が暗褐色、内面が褐色を呈している。(第11号溝出土)

26は、小形の鳥頭形把手と思われるものである。^{くちばし}嘴部の先端、左側孔部と鳥頭部の隆線の一部が欠損しているが、ほぼ原形をうかがえる。本把手の特色は、鳥頭部から^{くちばし}嘴部にかけて施されている1本の隆線であり、隆線上には縄文が付されている。眼孔部は入組状に形づくられ、他の類

例と共通している。眼孔部の凹みはかなり深い。この隆線に接続して逆S字状の隆線も貼付されている。内面にも逆S字状の貼付文があるが、共に欠損している。逆S字文の中央部の2か所は穿孔されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。(H4h₉グリッド出土)

27は、筒状把手と橋状把手が組みあわされたものである。口縁部無文帯を微隆線と沈線で区画し、直下に刺突文を施し、以下は縄文を付している。橋状把手上にも区画の沈線が逆V字状に延びており、その内部の把手上にも縄文が施されていたらしいが磨滅が著しく不明である。口縁部上の筒状把手も破損が著しく、上面の凹みが深いことが分るだけである。胎土には小石粒、砂粒を含み、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。(H4区出土)

28は、太い筒状把手であり、上面からの凹みは非常に深い。内外面に逆S字状の貼付文が施され、上半部には単節縄文LRが内外面を一周している。以下の両側面と内面は無文であり、両側面は縦位のナデ整形が顕著である。逆S字文の中央部には2孔が穿たれている。胎土には砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈している。(H4h₉グリッド出土)

29は、橋状把手に眼鏡状の円形貼付文が2個付いたものである。何か動物の眼を表現したものであると思われるが明らかではない。大きさはやや異なり、右側が少し大きい。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。(I4区出土)

45・31は、大形の橋状把手を縦位に貼付している口縁部片である。共に外反する幅の広い無文帯をもち、以下は縄文を施している。45の把手は無文帯の直下から貼られ、微隆線による区画を周囲に有している。把手上にも縄文が付されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。31は、把手が口縁直下の無文帯部からはじまり、把手上には何も施文されていない。胎土には砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈している。(45はH5a₁グリッド、31は第26号住居跡出土)

34は、大形の橋状把手をもつ破片であるが、横位に付されているのか、縦位に付されるのか分からない。内面の整形方向からみれば横位と推測される。堅牢な把手で、上面に縄文が施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が明黄褐色、内面が褐色を呈している。(第48号住居跡出土)

42は、口縁部突起状の把手であるが、上半部を欠損している。円孔がみられる。口縁部文様帯は、渦巻文と橋円文で構成されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が黒褐色を呈している。(第81・84・85号住居跡の重複部分から出土)

40は、筒状把手の破片で、無文である。上面は内側に傾いていて、上面には微隆線による同心円状のモチーフが描かれている。外面は縦位のナデが丁寧に加えられている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。(第72号住居跡出土)

30・33・47・43・32は、橋状把手を有しているものである。30・47・32は口縁部片、33・43は胴部片である。30は波状口縁を有しており、口縁部無文帯をまたぐように橋状把手が縦位に付されている。47は30とほぼ同様のものである。32は小形で、橋状把手の上端部の左右側面に1個ずつの円形竹管文が付されている。33の把手上面には太い凹線が加えられている。43は、30・32・33・47とは異なり、小さな橋状把手が横位に付されている。30・32・33・43・47はいずれも胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は30の外表面が褐色、内面が暗褐色、33の外表面が暗褐色、内面が黒褐色、47は内外面とも橙色、43の外表面が赤褐色、内面が黒色、32が褐色を呈している。(30は第15号住居跡、33は第48号住居跡、47はF6i₄グリッド、43は第222号土壇、32は第47号住居跡出土)

36は、小さな筒状把手の破片である。上面は平坦で、中央部が凹んでいる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は明黄褐色を呈している。(第58号住居跡出土)

46は、8字状の平坦な貼付文をもつ把手で、上半部に1孔が穿たれている。器面の磨滅が著しい。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。(H4j₈グリッド出土)

39・41は円形貼付文をもつ把手である。41には、円形貼付文の下に接続して、小さな橋状把手が縦位に付されている。共に胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は39は内外面ともにぶい黄橙色、41の外表面が灰褐色、内面が褐色を呈している。(39は第70号住居跡、41は第80号住居跡出土)

35・44は橋状把手の破片である。35にはS字状を呈すると思われる貼付文が付されている。円孔が1か所みられる。44には楕円形の孔があげられている。共に胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は共に褐色を呈している。(35は第55号住居跡出土・44は第354号土壇出土)

37は、T字状を呈する耳状の把手で、類例のないものと思われる。弁状部はやや湾曲していて、上面は凹んでいる。茎部の中央に1孔を穿ち、孔の周囲を凹線で囲んでいる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。(第68号住居跡出土)

註1 橋口尚武他「茨城県常北町片山遺跡の表採遺物」 『考古学雑誌』第66巻第3号 日本考古学会 1980年

註2 上守秀明「市原市高滝柏野遺跡出土の鳥頭形把手」 『研究連絡誌』第6号 千葉県文化財センター 1983年

上記以外にこのような把手を集成し検討したものに下記の文献がある。

佐藤次男「縄文時代における蛇形装飾付土器について——「とくに茨城県内の出土資料を中心に——」 『茨城県立歴史館報』9 1982年

佐藤次男「『角のある蛇』と『頭上の蛇』」 『茨城の民俗』18 茨城民俗学会 1979年

表 3

把 手 一 覽 表

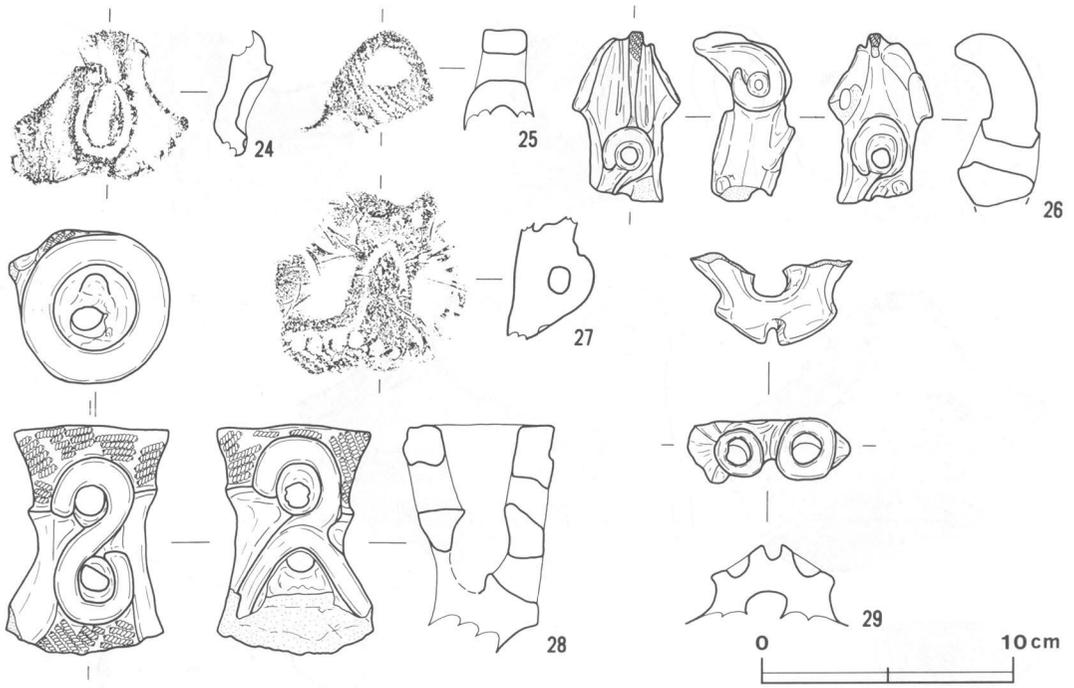
挿図番号	写真番号	出土位置	台帳番号	挿図番号	写真番号	出土位置	台帳番号	挿図番号	写真番号	出土位置	台帳番号
第381図 1	P L 49 1	SI - 25	344	第382図 17	P L 49 9	SI - 68	338	第384図 33		SI - 48	334
2		SI - 42	362	18		SI - 70	339	34		SI - 48	346
3		SI - 42	324	19	P L 49 11	SK-198	144	35		SI - 55	351
4		SI - 42	323	20	P L 50 15	SK-198	145	36		SI - 58	329
5	P L 49 2	SI - 42	345	21		SK-312	331	37		SI - 68	356
6		SI - 48	326	22	P L 49 10	SK-419	340	38		SI - 70	353
7		SI - 48	325	23		SK-419	341	39		SI - 70	352
8		SI - 49	327	第383図 24	P L 49 12	S D 7	360	40		SI - 72	330
9	P L 49 4	SI - 49	335	25	P L 49 13	S D 11	361	41		SI - 80	357
10	P L 49 6	SI - 49	347	26	P L 51 16	H 4 区	305	42		SI81・84・85	358
11	P L 49 5	SI - 51	349	27	P L 51 18	H 4 区	343	43		SK-222	350
12	P L 49 3	SI - 51	348	28	P L 51 19	H 4 区	4	44		SK-354	354
13		SI - 55	328	29	P L 51 17	I 4 区	363	45		H 5 g 1	3
14	P L 49 7	SI - 57	336	第384図 30		SI - 15	332	46		H 4 j 8	355
第382図 15	P L 49 8	SI - 63	337	31		SI - 26	333	47		F 6 区	342
第381図 16	P L 50 14	SI - 64	68	32		SI - 47	359				



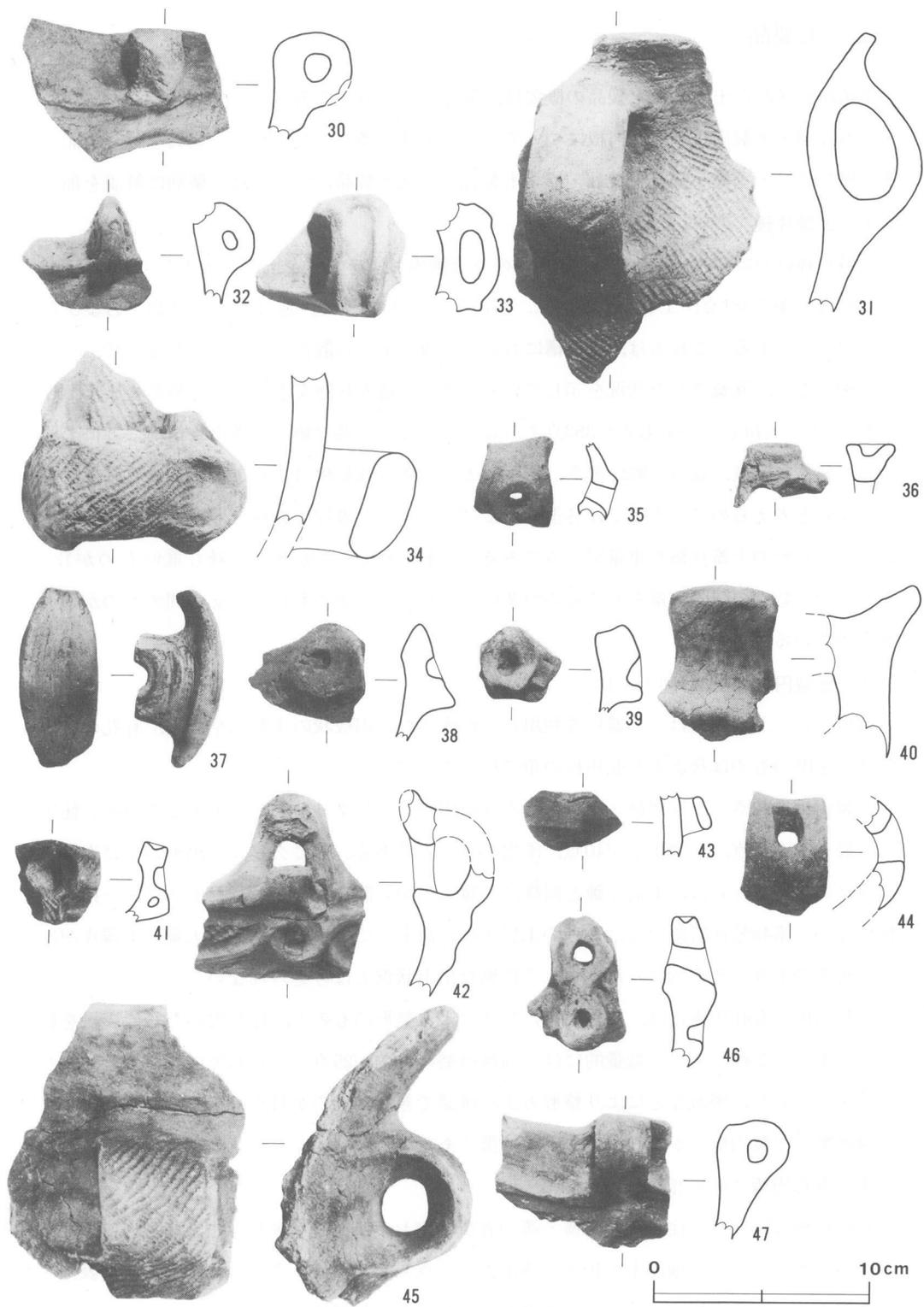
第381图 把手实测图(1)



第382图 把手实测图(2)



第383图 把手实测图(3)



第384图 把手実測图(4)

2 土製品

当遺跡6区から出土した土製品の概要は、前記したとおりである。

土器片錘・土製円板・有孔円板については、出土量が多かったので、一覧表を付して記述し、その他の耳栓・垂飾・管状土製品・棒状土製品・塊状土製品については、個別に解説を加えた。

(1) 土器片錘 (第385～390図1～253)

土器片錘は542点で、住居跡・土壇・溝の各遺構内およびグリッドから出土している。住居跡出土が最も多く381点、土壇出土が64点、溝出土が29点である。他にグリッド出土および表採のものが68点である。これらは、各遺構において、覆土中から散在して出土したもので、一括出土した例はなく、廃棄された状況を示している。また、遺存状態をみると、完形のまま出土したものが190点、欠損しているものが352点である。これらの土器片錘は、各出土遺構ごとに土器片錘のもつ属性(重量、長さ、幅、厚さ、形状など)の差を比較検討することにあまり有意性が認められないと考えるので、本項では各遺構およびグリッド、表採の資料をも一括して記載することにした。完形の土器片錘を重量別にみても、最も軽いものが8g、最も重いものが133gであり、10～45gの間の重量をもつものが多いことが分る。中でも15～35gの間のものが最も多数を占めている。

(2) 土製円板 (第391図1～48)

本項でいう土製円板は、土器片を利用して作成された円板状の土製品を指し、有孔のものおよび穿孔途中のものは後記の有孔円板の項で扱うことにする。

土製円板は72点で、住居跡・土壇・溝の各遺構内およびグリッドから出土している。住居跡出土が最も多く47点、土壇出土が10点、溝出土が1点である。他にグリッド出土および表採のものが14点ある。これらは、土器片錘と同様に、覆土中から散在して出土したもので、一括出土した例はない。第48号住居跡からは16点の土製円板が出土しているが、同跡は大量に土器片が出土した住居跡であり、比率的にみれば決して特異な出土状況とは考えられない。

土製円板・有孔円板には、打ち欠いただけによる整形のものと、打ち欠いた後に周縁を研磨しているものの2種がある。数量的には、周縁研磨のものが25点で、打ち欠いただけのもの6点を上回っているが、磨滅などにより整形方法が確認できないものが41点もある。いずれにしても、周縁研磨の土製円板がかなり多いことが特徴である。

(3) 有孔円板 (第392図1～27)

有孔円板は56点で、住居跡・土壇・溝の各遺構内およびグリッドから出土している。住居跡出土が最も多く35点、土壇出土が10点、溝出土が2点である。他にグリッド出土および表採のものが9点ある。有孔円板についても、特異な出土状況を示してはいない。

有孔円板には、穿孔されているものと、穿孔途中のものがみられる。穿孔方法についてみると、表裏面の両側から孔が穿たれているものと、片側から穿たれているものに分けられる。未貫通のものには、裏面からだけの例もあるが、ほとんどは両側から穿孔しようとした痕跡が残されている。両側から穿孔する方法が本来のものであったと推定できる。また、穿孔された孔の周囲が丁寧に整形されている点特徴的である。

有孔円板56点のうち、周縁研磨のものが38点、打ち欠いただけのもの2点、磨滅などにより整形方法が不明なもの16点である。周縁研磨の例が圧倒的多数を占めている。

なお、19は土器片の内外面に施文が認められ、周縁も粗く打ち欠かれただけで、孔の周囲も整形されていない。これらの特徴は、上記の有孔円板一般の特徴とは異なるもので、異質なものと考えられる。一応、こゝに含めたが、あるいは別項を設けるべきかもしれない。

(4) 耳栓 (第393図4)

第55号住居跡の覆土中から他の土器片に混じって出土した輪鼓状の耳栓の破片で、下半部を欠損している。上面は凹み、外面は縦位のナデにより整形されているが、手づくねの痕跡も残っている。胎土には微砂を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定最大径は1.8cmで、現存高は1.8cmである。重量は4.7gである。

(5) 垂飾 (第393図9)

第70号住居跡の覆土中から出土した円形の土製品で、幅6～7mmの細い粘土紐を丸めて作っており、上部に2孔を焼成前に穿っている。手づくねの痕跡が残り、上部が厚くなっている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。外径は2.4×2.3cm、内径は1.0×0.9cmである。重量は2.8gである。

(6) 管状土製品 (第393図2・3・7・10)

2・3は、第49号住居跡の覆土中から出土したもので、2は北壁近く、3は中央部やや南側からの出土である。2は、出土時にすでに孔の部分で半截されたような状態であり、その後の乾燥により10片ほどに割れたが、両端および表面の一部を除いて、ほぼ完形に復元できた。表面は凸凹しており、ほとんど作り放しのような感を受ける。孔は一方から穿たれており、孔の断面形は不整三角形を呈している。胎土はわずかに微砂を含むが緻密である。焼成は不良で、ほとんど未焼成に近い状態である。色調はにぶい褐色を呈している。3も、出土時にすでに図示のように半分に割れており、取り上げ後に4片に割れたが、完形に復元できた。整形は2とほぼ同様であるが、2ほどには凸凹していない。孔は一方向から穿たれており、孔の断面形は楕円形を呈している。胎土、焼成、色調は2と同様である。2は、最大長8.1cm、最大幅5.6cm、最大厚5.8cmである。重量は116gである。3は、最大長6.5cm、最大幅3.4cm、最大厚2.5cmである。重量は41.0gである。

7は、第59号住居跡の覆土中から出土した管を輪切りにしたような形状を呈する土製品で、縦に半割されている。孔は曲ってあけられており、断面形状は浅いU字状を呈している。外面は縦位のナデにより丁寧に整形されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈している。最大長は3.4cm、最大幅2.7cm、現存最大厚は1.7cmで、現存重量は12.9gである。

10は、第308号土壙から出土したもので、下半部を欠く半欠品で、管を縦に半割したような形状を呈している。表面の図の上端部に浅い楕円形の凹み、現存部の下端には深い断面U字状の溝を有し、深い溝の上端から上方に向けて断面長方形を呈する孔を穿っている。胎土に石英、長石粒、雲母片などの細粒を少し含むが、良質である。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈している。

現存長は4.5cm、最大幅1.4cm、最大厚は1.6cm、現存重量は10.2gである。

2・3・7・10については、いわゆる管状土錘の可能性も考えられるが、形状的には不統一なもので、それぞれ別個の用途が考えられる。特に10については、形状的に類例がなく、今後の検討を要する。いずれも出土した遺構の時期から、加曽利EⅢ～Ⅳ式期の所産であることは確実である。当遺跡1・2区の報告書の第365図20・21は、管状土錘と報告されているが、本項の2・3・7などの類例に数えられる。

(7) 棒状土製品 (第393図6・8・11)

6は、第55号住居跡の北側のセクションベルト内から出土したもので、粘土を手でひねって棒状に整形したものである。全体にヒビ割れが目立ち、先端部の一部と下半部を欠損している。整形時に左右から指で押さえた圧痕が明瞭に残っている。胎土には長石、石英などの細粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。現存長は6.8cm、厚さ2.1cmで、現存重量は28.6gである。

8は、第63号住居跡の南側の床面上から出土したもので、上下両端および片面を欠損している。図の上端に浅い沈線が巡り、整形は丁寧なナデである。胎土には微砂を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。現存長は3.4cm、現存部最大厚は2.8cmで、現存重量は16.9gである。

11は、第344号土壙の覆土中から出土したもので、手びねりによって棒状に整形している。断面形状は円形を呈さず、不整楕円形を呈している。6よりも指頭による押さえが強く加えられている。指頭による押さえは、左右および右下・真下など各方向から施されている。上下端を欠損している。胎土には長石、石英粒などを含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。現存長は7.9cm、最大厚さは3.1cmで、現存重量は38.1gである。

これらの棒状土製品と称したものは、用途などまったく不明である。今後の類例の増加を待つて検討すべきものとする。

(8) 塊状土製品 (第393図5)

5は、第55号住居跡の覆土中から、他の土器片とともに出土したもので、整理の段階で見出さ

れたもので、原形は不明である。表面に網代の圧痕が明瞭に残されている。本土製品は、粘土を竹箆様の器に入れて保管しているうちに圧痕が付着したものと考えられ、意図的な土製品かどうかは明らかではない。胎土に砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。現存長は6.0cm、現存幅4.4cm、現存厚4.1cmで、現存重量は56.2gである。

5と類似する土製品は、他の住居跡などからも多数出土しているが、網代痕のあるものはない。当遺跡1・2区の報告書の第365図22において手捏土錘とされているものもこれらの仲間と考えられる。

(9) 有孔土製品 (第393図1)

1は、第42号住居跡の覆土中から出土したもので、縄文だけが施されている胴部の小片の裏面から穿孔されている。孔は真直ぐで、小さなものである。焼成が悪く、周縁および表裏面は磨滅している。有孔円板とは異なる穿孔方法と考えられるので、ここに有孔土製品として報告した。有孔円板とした第392図19もあるいはこれらの仲間かもしれない。胎土には砂粒を含み、焼成は不良で、強く押すとくずれそうである。色調は暗褐色を呈している。長さ3.0cm、幅2.7cm、厚さ1.2cmで、重量は8.2gである。

(10) 球状土製品 (第393図12)

12は、第46号住居跡の覆土中から出土したもので、径1.1cmの球形を呈する無文の土製品である。焼成があまり良くなく、剥落が2か所に認められる。胎土には微砂を含んでいる。色調は褐色を呈している。重量は1.0gである。用途などは不明である。

表4 土器片錘一覧表

(1)

挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	
第338図 1	PL52 1	(6.2)	5.9	1.3	(40.5)	SI15	口縁部片 C		1	第338図 33	PL53 35	7.2	12.3	1.2	15.7	SI47	口縁部片 C		678	
2	2	(4.0)	4.8	1.8	(24.5)	〃	C		3	34	52	4.6	5.6	0.7	34.1	SI48	口縁部片 A		114	
3	3	4.8	5.0	0.7	22.5	SI25	C		14	34	52	3.5	(5.0)	0.9	(14.4)	〃	C		144	
4	5	4.4	5.3	1.1	37.0	SI26	切り込みが片 方だけ2か所		17	35	51	(5.2)	4.9	0.9	(18.8)	〃	C		142	
5	4	6.6	6.3	1.1	46.5	〃	C		16	36	49	4.9	4.6	0.8	15.8	〃	C		136	
6	6	4.4	(4.9)	0.9	(21.6)	〃	C		18	37	57	4.7	4.2	0.8	19.8	〃	A		155	
7	7	3.1	(3.3)	0.8	(6.5)	SI32	C		36	38	PL54 62	3.9	5.1	1.3	28.8	〃	C		164	
8	8	3.8	3.6	1.3	16.0	SI33	C		40	39	PL53 50	3.9	4.3	1.6	20.2	〃	C		137	
9		5.0	6.4	1.1	35.0	SI34	口縁部片 C		667	40	34	3.0	3.3	0.9	9.7	〃	C		109	
10	9	4.7	(3.1)	0.6	(13.0)	SI38	C		41	42	33	3.7	4.0	1.2	18.2	〃	C		108	
11	10	4.2	4.8	1.0	19.0	SI40	C		463	42	60	3.9	4.4	1.3	18.3	〃	C		162	
12	20	5.3	6.8	1.0	41.2	SI42	口縁部片 C		516	43	PL54 68	(3.4)	(3.5)	1.2	(14.2)	〃	炉	C		177
13	15	(5.9)	(6.9)	1.4	(51.0)	〃	C		51	44	PL53 40	2.4	3.7	1.0	11.5	〃	C		120	
14	17	4.9	4.2	1.2	29.0	〃	C		55	45	48	(3.0)	(4.2)	1.1	(16.6)	〃	口縁部片 C		135	
15	21	6.7	5.6	1.2	49.3	〃	炉	C	517	46	59	4.7	4.2	1.1	22.7	〃	C		161	
16	19	5.5	6.4	1.3	52.9	〃	C		58	47	PL54 71	3.1	4.9	1.1	31.6	〃	C		183	
17	12	4.5	5.5	1.2	32.8	〃	C		46	第338図 48	PL53 38	7.8	8.5	0.7	64.0	〃	C		118	
18	14	4.6	4.9	1.1	30.0	〃	C		49	49	36	7.8	10.4	0.8	73.8	〃	口縁部片 C		115	
10	11	3.9	4.9	0.8	22.3	〃	口縁部片 C		45	50	PL52 31	6.0	6.4	0.9	49.3	〃	C		74	
20	16	(4.6)	5.5	1.5	(40.2)	〃	C		53	51	PL53 45	6.1	6.6	1.0	61.4	〃	C		131	
21	13	4.5	7.7	1.8	72.7	〃	口縁部片 C		47	52	PL54 64	5.2	5.0	1.3	37.1	〃	C		167	
22	18	4.8	5.9	1.3	40.2	〃	C		57	53	PL53 56	5.3	5.1	1.4	51.8	〃	C		154	
23	22	5.5	4.5	0.9	24.0	SI44	C		68	54	47	5.3	6.8	0.9	39.5	〃	C		134	
24	23	5.9	4.8	1.0	32.5	〃	切り込みが片 方だけ2か所		70	55	55	(4.5)	(4.6)	1.1	(22.8)	〃	C		151	
25	27	(2.8)	5.1	1.1	(15.7)	SI45	C		78	56	44	5.4	7.1	0.9	36.3	〃	C		130	
26	24	4.1	(2.8)	1.0	(12.0)	〃	口縁部片 C		75	57	37	4.6	6.8	0.8	29.8	〃	C		116	
27	25	3.8	3.8	0.9	11.0	〃	C		76	58	PL54 70	5.6	5.4	1.3	43.9	〃	C		180	
28	28	3.8	3.5	0.9	11.5	〃	C		79	59	PL53 43	4.6	6.5	1.2	39.8	〃	C		126	
29	26	4.9	3.9	1.2	28.3	〃	C		77	60	39	5.0	4.7	1.3	32.5	〃	口縁部片 C		119	
30	29	5.8	4.9	1.1	28.9	SI46	C		92	61	53	5.2	4.4	1.4	19.5	〃	C		145	
31	30	5.4	6.7	1.3	44.6	SI47	C		96	62	32	6.6	6.5	1.6	66.8	〃	A		104	

(2)

挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号
第33図 63	PL54 67	5.1	5.9	1.1	27.1	SI48	C		175	第33図 94	PL55 94	(5.6)	(5.3)	0.7	(27.2)	SI51	C		254
64	73	4.8	(4.8)	1.3	(30.0)	〃	C		186	95	PL54 81	(7.3)	(6.5)	1.0	(51.5)	〃	切り込み片方 だけ2か所		234
65	PL53 54	5.0	5.4	0.9	26.2	〃	C		146	96	85	5.4	4.5	1.0	31.0	〃	C		238
66	PL54 65	4.2	4.4	0.9	15.0	〃	C		170	97	PL55 95	4.4	4.7	0.9	26.2	〃	C		255
67	63	4.4	5.7	0.8	28.2	〃	C		166	98	PL54 89	5.4	5.2	1.2	28.5	〃	A		247
68	69	4.3	5.0	1.3	37.5	〃	C		178	99	PL55 92	5.1	5.8	1.2	33.7	〃	C		250
69	66	4.9	5.9	0.9	27.3	〃	C		174	100		4.7	4.9	1.3	34.6	〃	C		244
70	72	4.0	5.6	1.1	24.9	〃	C		184	101	PL55 100	5.7	5.2	1.2	30.7	〃	C		261
71	PL53 61	(6.1)	5.9	0.9	(27.8)	〃	C		163	102	98	5.4	5.9	1.2	31.3	〃	C		259
72	58	4.1	5.8	1.3	37.2	〃	C		158	103	PL54 77	4.6	4.3	0.8	23.2	〃	C		103
73	42	3.4	3.0	1.2	12.1	〃	C		125	104	PL55 101	9.8	7.7	1.1	95.0	SI52	C		271
74	46	4.4	6.4	1.8	55.0	〃	口縁部片 C		132	105	102	(5.5)	(5.6)	1.3	(40.5)	〃	阿玉台式 C		272
75	41	5.0	(6.0)	1.0	(26.8)	〃	C		123	106		(6.3)	7.6	1.2	(78.5)	SI53	C		672
76	PL54 74	4.9	6.4	1.3	43.6	SI49	C		217	107	PL56 131	2.9	4.2	1.2	15.2	SI55	A		332
77	75	(5.7)	5.7	1.4	(48.4)	〃	A		219	108	123	4.4	3.4	1.1	18.6	〃	C		317
78	76	2.5	3.3	0.8	8.4	〃	C		225	109	126	3.2	5.0	1.2	24.2	〃	口縁部片 C		322
79	86	3.8	6.1	1.0	30.6	SI51	C		241	110	PL55 116	(3.7)	(3.2)	1.0	(12.1)	〃	C		304
80	87	5.6	5.6	1.2	35.3	〃	C		243	111	PL56 129	3.8	4.6	1.1	17.5	〃	C		329
81	84	6.1	5.0	1.1	40.8	〃	C		237	112	PL55 119	3.1	4.3	1.2	15.5	〃	C		311
82	PL55 91	5.3	4.5	1.1	29.8	〃	C		249	113	103	8.1	(6.4)	1.1	(62.3)	〃	C		282
83	PL54 83	(5.0)	(4.6)	0.9	(20.3)	〃	切り込み片方 だけ2か所		236	114	PL56 136	8.0	7.8	1.1	81.2	〃	C		348
84	90	(3.9)	3.5	0.9	(14.7)	〃	C		248	115	128	3.3	3.7	1.4	15.1	〃	C		327
85	PL55 93	(5.4)	(4.5)	1.0	(21.8)	〃	C		253	116	132	4.5	3.7	1.0	13.4	〃	C		336
86	PL54 88	5.1	6.4	0.8	32.0	〃	A		246	117	124	3.6	4.4	1.3	22.5	〃	口縁部片 C		320
87	82	3.9	3.0	2.0	22.8	〃	C		235	118	139	3.2	3.9	1.3	15.0	〃	C		353
88	PL55 97	3.8	4.2	1.3	22.2	〃	C		258	119	121	(3.9)	4.6	1.0	(18.8)	〃	C		315
89	PL54 79	7.0	6.7	0.9	55.8	〃	A		232	120	135	4.1	(3.7)	1.1	(16.6)	〃	C		344
90	80	7.5	7.7	1.0	56.7	〃	C		233	121	PL55 104	6.4	7.2	1.7	82.5	〃	C		283
第33図 91	78	9.8	8.1	1.2	99.1	〃	C		231	122	PL56 130	(5.2)	4.9	1.0	(21.2)	〃	C		331
92	PL55 99	5.1	4.8	1.0	22.9	〃	C		260	123	PL55 109	3.9	6.3	1.3	28.2	〃	C		291
93	96	6.1	4.5	0.9	20.0	〃	C		256	124	117	3.3	3.3	1.0	12.3	〃	口縁部片 C		305

(3)

挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号
第338図 125	PL56 133	2.4	2.9	1.0	7.7	SI55	C		338	第338図 156	PL57 153	4.7	3.7	1.1	17.1	SI71	切り込み片方 だけ2か所		399
126	PL55 107	5.5	6.1	1.7	55.8	〃	C		288	157	150	8.2	8.0	1.3	88.3	〃	C		393
127	115	5.2	5.9	0.9	28.7	〃	C		303	158	151	6.1	8.8	1.3	76.2	〃	C		394
128	PL56 125	4.4	3.1	1.8	24.7	〃	A 口縁部片		321	159	152	4.0	4.4	1.4	22.0	〃	C		395
129	127	4.3	4.4	1.1	23.4	〃	C		325	160	154	(3.6)	(3.6)	0.7	(10.3)	〃	C		401
130	137	6.0	(4.1)	1.0	(29.6)	〃	C		349	161	157	4.1	3.8	0.7	17.2	SI72	C		408
131	122	5.7	7.0	1.4	46.5	〃	C		316	162	156	4.9	4.2	1.0	19.0	〃	C		407
132	PL55 112	5.7	6.4	0.9	30.0	〃	C		297	163	155	(6.5)	8.7	1.1	(62.8)	〃	C		406
133	110	5.9	5.8	1.2	38.4	〃	C		294	164	158	8.2	7.3	1.1	93.0	SI74	C		413
134	PL56 138	4.7	4.0	2.0	31.4	〃	C		350	165	163	3.5	5.3	1.1	22.2	〃	C		421
135	134	3.9	3.1	1.1	12.5	〃	C		340	166	159	4.7	6.0	1.5	48.2	〃	C		414
第339図 136	PL55 106	4.6	4.7	0.8	24.0	〃	C		287	167	160	5.3	6.5	1.3	41.7	〃	C		417
137	118	4.4	4.3	1.8	33.7	〃	C		309	168	162	5.1	5.1	1.1	40.4	〃	C		419
138	111	4.0	5.6	0.9	21.5	〃	C		295	169	161	4.0	3.1	1.0	14.3	〃	C		418
139	113	4.3	5.8	1.4	54.8	〃	口縁部片 C		299	170	164	3.4	5.8	1.5	24.8	SI75	口縁部片 C		423
140	108	5.0	7.0	0.9	46.3	〃	C		289	171	165	6.6	6.5	1.0	49.4	SI77 炉	C		425
141	105	4.4	6.1	1.6	33.9	〃	C		284	172	PL58 173	3.5	5.2	0.9	21.8	SI81	C		443
142	114	3.9	5.6	0.8	26.7	〃	口縁部片 C		300	173	176	3.5	(3.0)	0.8	(9.2)	〃	C		448
143		4.6	4.9	1.1	30.0	〃	C		354	174	171	3.4	3.5	1.5	21.5	〃	C		439
144	120	3.9	5.2	1.2	30.0	〃	A		312	175	167	4.6	(4.5)	1.4)	(32.7)	〃	C		431
145	PL56 141	9.0	8.1	1.0	75.4	SI56	C		363	176	170	4.8	5.4	1.0	32.3	〃	C		438
146	140	10.0	12.2	0.9	111.8	〃	C		360	第339図 177	PL57 166	5.7	6.8	2.0	53.2	〃	口縁部片 C		430
147	142	3.9	3.0	1.0	13.3	SI57	C		364	178	PL58 169	(6.6)	(5.5)	0.9	(41.2)	〃	C		436
148	143	(3.4)	(5.8)	1.9	(23.7)	SI58	口縁部片 C		369	179	174	(4.6)	(4.0)	1.6	(23.8)	〃	C		445
149	144	6.1	6.4	1.0	36.5	〃	C		371	180	175	3.3	3.0	1.1	(7.5)	〃	C		446
150	145	3.6	(4.2)	1.1	(14.4)	〃	A		374	181	172	5.8	6.2	1.4	58.8	〃	切り込みが片 方だけ2か所		440
151	PL57 147	4.5	5.5	1.0	34.1	SI59	C		367	182	168	(4.6)	7.7	1.9	(22.8)	〃	C		432
152		4.0	(5.9)	1.0	(25.8)	〃	口縁部片 C		671	183	178	4.8	3.6	1.3	17.3)	SI82	C		456
153	146	4.8	7.5	1.2	37.9	〃	C		366	184	177	(7.2)	6.8	0.6	(39.9)	〃	A		453
154	148	5.7	6.9	1.1	47.5	SI70	C		387	185	179	4.0	5.2	1.5	34.7	SK61B	C		464
155	149	6.2	6.2	0.8	25.9	〃	C		388	186	180	4.8	4.0	1.2	23.5	SK70	A 口縁部片		468

挿入 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備 考	台長 番号	挿入 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備 考	台帳 番号
第338図 187	PL58 181	4.4	4.3	0.7	12.2	SK130	口縁部片 C	470	第338図 216	PL59 209	5.3	7.7	1.0	44.2	SK402	切り込み片方 だけ2か所	539
188	183	3.8	4.5	1.2	21.3	SK135	C	474	217	210	4.9	5.1	1.1	38.5	SK416	C	542
189	182	8.9	7.6	1.2	90.0	〃	C	473	218	211	7.5	6.6	0.7	39.8	SK420	A	544
190	184	4.2	3.9	0.9	15.7	SK142	C	477	第339図 219	212	5.9	4.7	1.9	44.3	SD1	把手 C	547
191	186	2.9	3.0	0.8	8.9	SK149	C	479	220	214	3.6	6.3	1.1	21.8	SD2	C	561
192	185	2.9	3.0	0.9	9.8	〃	C	478	221	213	5.9	5.8	0.6	26.7	〃	C	558
		1.9	3.3	1.4	8.5	〃	C	679	222	215	4.3	5.5	0.8	22.0	〃	C	562
		(3.5)	3.9	1.05	(9.0)	〃	半欠 C	680	223	216	3.2	2.8	1.2	11.2	SD4	C	566
193	189	4.1	4.1	0.8	35.3	SK194	C	487	224	217	4.2	6.0	1.2	34.8	A6 SD11~13	C	575
194	187	6.8	7.9	1.5	96.8	〃	C	485	225	218	3.2	3.5	1.1	13.4	〃	C	576
195	190	5.1	5.0	1.2	15.8	〃	C	488	226	PL60 222	3.0	3.8	1.0	11.6	G4区	C	573
196	188	5.0	6.2	1.2	36.2	〃	C	486	227	219	(5.7)	6.4	1.7	(59.3)	〃	C	581
197	191	5.0	6.1	1.4	43.2	SK198	C	492	228	220	5.4	5.9	1.0	34.6	G4d6	C	584
198	192	4.8	4.3	0.9	20.6	SK215	C	498	229	221	7.8	7.2	1.0	58.3	G4c0	C	585
199	PL59 193	6.3	6.6	1.0	47.4	SK225	口縁部片 C	499	230	226	5.8	6.6	0.7	25.7	H4g6	C	599
200		4.9	4.6	1.2	27.2	SK261	C	69	231	225	5.7	6.1	1.2	46.0	H4a6	C	598
201	194	(3.5)	5.3	0.7	(18.4)	SK272	口縁部片 C	504	232	223	6.8	8.4	1.3	69.8	H4区	C	594
202	196	6.5	5.3	1.0	47.9	SK281	C	506	233	224	8.8	(8.2)	1.1	(74.5)	〃	C	597
203	197	4.3	4.2	1.0	29.7	〃	C	507	234		5.5	6.0	0.8		H4i0	C	670
204	195	2.1	2.7	0.9	7.8	〃	C	505	235	227	5.6	5.9	1.0	33.2	H4区	C	600
205	198	4.1	4.3	1.0	29.9	SK288	C	510	236	228	5.3	5.8	0.9	30.4	〃	C	607
206	199	10.5	9.9	1.1	132.6	SK333	C	515	237	230	5.9	4.8	1.3	37.8	H5g7	C	618
207	200	4.8	6.9	1.0	36.2	SK346	口縁部片 C	521	238	229	5.2	6.9	1.1	54.1	H5i2	C	615
208	203	6.3	7.4	0.8	40.8	SK365	C	525	239	231	5.5	5.8	1.0	34.0	I4b8	C	623
209	202	5.9	6.8	1.0	49.2	〃	C	524	240	237	7.2	5.7	1.2	58.4	I4e9	C	638
210	201	4.7	7.5	0.9	40.8	〃	口縁部片 C	523	241	238	4.5	4.9	0.7	17.4	I4d8	C	639
211	204	3.5	4.0	1.0	19.3	〃	C	526	242	243	4.1	6.5	1.4	37.7	I4c8	C	645
212	205	6.3	8.1	0.8	49.5	SK394	C	532	243	236	4.4	4.5	0.9	21.3	I4b6	C	637
213	206	6.4	5.3	1.4	27.2	〃	口縁部片 C	533	244	240	4.0	5.5	1.3	23.7	I4a7	C	642
214	207	(6.1)	(5.7)	1.1	(32.9)	〃	C	535	245	235	3.4	4.5	0.6	14.5	〃	口縁部片 C	636
215	208	4.5	4.6	0.9	16.4	〃	C	536	246	244	4.5	5.0	1.2	30.0	I4e8	C	646

挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号
第300図 247	PL60 232	4.3	6.5	1.0	36.5	I 4 a 8	C		625			4.2	(4.0)	1.6	(27.1)	SI42	口縁部片 C 半欠		484
248	241	3.9	4.6	1.2	16.3	I 4 e 8	C		643			(4.3)	3.3	1.0	(21.8)	〃 炉	口縁部片 C 半欠		48
249	233	5.7	6.1	1.3	41.0	〃	C		628			4.3	3.7	1.3	20.8	〃	ノッチ3か所 完形		50
250	245	5.3	7.3	1.1	50.0	I 4 b 9	C		650			(4.9)	(4.2)	0.8	(16.5)	〃	半欠 C		52
251	239	4.7	4.3	1.3	27.0	I 4 e 8	C		640			(3.7)	4.2	1.0	(12.9)	〃	半欠 C		54
252	242	6.3	4.7	1.4	39.5	〃	C		644			(4.9)	(5.7)	0.9	(24.8)	〃	半欠 C		59
253	234	3.2	3.4	1.0	13.3	〃	C		629			5.7	(3.6)	1.6	(26.8)	〃	半欠 C		60
		5.2	4.0	1.0	21.7	SI15	口縁部片 C 半欠		2			5.6	(3.0)	0.9	(15.8)	〃	半欠 C		61
		4.8	(4.1)	1.1	(25.0)	〃	口縁部片 C 半欠		4			(3.4)	5.8	0.8	(19.8)	〃	半欠 C		62
		(6.8)	(5.7)	1.1	(45.3)	〃	半欠 C		5			4.7	(5.9)	1.2	(39.9)	SI144	口縁部片 C 半欠		67
		5.7	(4.6)	0.9	(28.8)	〃	半欠 C		6			(5.2)	5.5	1.3	(31.8)	SI145	口縁部片 C 半欠		73
		(5.2)	6.4	1.4	(39.5)	〃	半欠 C		7			(3.6)	(4.7)	1.0	(19.5)	〃	半欠 C		80
		(5.2)	6.5	1.0	(40.2)	〃	半欠 C		8			5.6	5.6	1.0	35.3	〃	完形 C		81
		(3.2)	3.8	1.1	(14.0)	〃	裏に木の实状 圧痕あり半欠		56			(3.1)	(3.8)	1.0	(10.5)	〃	半欠 C		82
		(5.3)	(5.8)	1.7	(34.7)	SI25	半欠 C		13			(3.2)	(6.0)	1.2	(21.8)	〃	半欠 C		83
		(3.8)	4.4	1.2	(21.5)	SI26	半欠 C		15			6.8	8.1	0.8	52.4	SI146	完形 C		91
		(3.8)	(3.9)	1.0	(14.0)	〃	半欠 C		19			(2.4)	(3.3)	1.0	(18.0)	〃	半欠 C		93
		(3.2)	6.2	0.9	(22.8)	〃	半欠 C		20			(3.3)	(3.9)	0.9	(12.8)	〃	半欠 C		94
		(4.0)	(3.9)	1.1	(16.5)	SI30	半欠 C		27			4.9	(5.3)	1.1	(24.0)	SI147	半欠 C		97
		4.6	4.2	1.0	24.8	SI31	口縁部片 C		28			4.8	(5.5)	0.8	(28.8)	〃	半欠 C		98
		(3.6)	(5.2)	0.9	(19.5)	〃	半欠 C		29			(4.7)	5.9	1.3	(33.6)	SI148	口縁部片 C 半欠		105
		(5.0)	(4.3)	1.2	(29.5)	〃	半欠 C		30			5.2	(4.3)	1.1	(22.5)	〃	口縁部片 C 半欠		106
		3.6	4.8	1.1	13.8	SI32	切り込み片方 だけ2か所 完形		33			(7.5)	(6.9)	1.3	(72.0)	〃	半欠 C		107
		(4.4)	(5.1)	0.7	(19.8)	〃	口縁部片 C 半欠		34			(4.3)	(6.6)	1.4	(45.5)	〃	半欠 C		110
		(4.8)	5.0	0.9	(19.8)	〃	半欠 C		35			(4.0)	6.8	0.9	(28.7)	〃	半欠 C		111
		3.8	(3.1)	1.1	(10.8)	〃 炉	半欠 C		37			2.8	(2.9)	1.3	(8.4)	〃	半欠 C		112
		4.2	4.6	1.1	21.2	〃	完形 C		38			3.0	2.6	0.9	8.7	〃	完形 C		113
		4.0	(3.9)	1.1	(18.5)	〃	半欠 C		63			3.2	3.0	0.8	9.5	〃	完形 C		117
		(4.5)	(4.3)	1.2	(15.8)	SI38	半欠 C		42			(5.8)	5.0	1.0	(29.9)	〃	口縁部片 C 半欠		121
		(5.7)	5.4	1.0	(41.3)	SI41	半欠 C		44			(2.7)	(2.8)	0.7	(5.8)	〃	半欠 C		122
		4.9	(6.5)	1.7	(44.7)	S 142	口縁部片 C 半欠		483			(4.6)	(4.0)	1.4	(24.2)	〃	口縁部片 C 半欠		124

挿 図 番 号	写 真 番 号	縦	横	厚	重	出土位置	備 考	台帳 番 号	挿 図 番 号	写 真 番 号	縦	横	厚	重	出土位置	備 考	台帳 番 号
		(6.5)	(5.1)	2.0	(58.0)	SI48	半欠 C	127			5.5	(4.2)	1.0	(25.0)	SI48	半欠 C	188
		3.4	3.5	1.1	(13.5)	〃	一部欠 C	128			(2.8)	(4.3)	0.8	(7.1)	〃	半欠 C	189
		4.1	4.9	1.2	28.5	〃	完形 C	129			(3.6)	(5.1)	0.9	(16.7)	〃	半欠 C	676
		3.3	5.5	1.2	25.5	〃	口縁部片 C 完形	133			5.4	(6.7)	1.4	(44.9)		半欠 C	218
		(3.4)	(4.5)	0.8	(13.0)	〃	半欠 C	138			4.8	(6.8)	1.2	(47.5)	〃	半欠 C	220
		4.8	4.9	1.4	(29.5)	〃	一部欠 C	139			(5.0)	6.4	1.1	(33.2)	〃	半欠 C	221
		(5.0)	(5.6)	0.7	(26.0)	〃	A 半欠	140			(5.2)	6.6	1.3	(31.2)	〃	半欠 C	222
		(4.1)	6.2	1.0	(25.6)	〃	A 半欠	141			(3.5)	(3.9)	1.0	(15.8)	〃	半欠 C	223
		(4.5)	3.8	1.1	(13.3)	〃	半欠 C	143			(3.7)	(3.0)	0.9	(14.1)	〃	半欠 C	224
		4.7	(3.6)	0.8	(14.3)	〃	A 半欠	147			(5.7)	(5.4)	1.1	(32.1)	〃	半欠 C	226
		(2.3)	(3.6)	0.7	(5.8)	〃	半欠 C	148			(4.4)	(4.8)	2.0	(36.6)	〃	口縁部片 C 半欠	227
		(4.2)	(2.4)	1.1	(14.3)	〃	半欠 C	149			5.8	(3.9)	1.0	(22.4)	SI50 炉	A 半欠	230
		(5.1)	(4.9)	1.2	(25.5)	〃	半欠 C	150			5.1	(3.6)	0.9	(23.3)	〃	A 半欠	262
		(4.6)	(5.8)	1.0	(35.9)	〃	半欠 C	152			3.2	(4.9)	0.6	(13.9)	SI51	半欠 C	1D
		4.1	5.8	1.1	(28.5)	〃	一部欠 C	153			5.5	6.8	1.0	45.2	〃	完形 C	239
		6.4	(4.9)	1.3	(49.6)	〃	A 半欠	156			(5.4)	(6.4)	1.1	(36.3)	〃	半欠 C	240
		4.6	5.7	1.0	26.8	〃	完形 C	157			5.7	(5.2)	1.0	(26.8)	〃	半欠 C	242
		3.9	5.5	1.4	(25.8)	〃	口縁部片 C 一部欠	159			(5.3)	5.0	1.3	(28.8)	〃	半欠 C	245
		4.6	(4.3)	0.8	(15.2)	〃	半欠 C	160			6.6	5.7	1.2	(39.8)	〃	一部欠 C	251
		(4.0)	(4.0)	1.2	(13.7)	〃	半欠 C	165			(3.9)	5.5	0.8	(14.6)	〃	半欠 C	252
		3.8	(3.1)	1.2	(15.1)	〃	半欠 C	168			(5.3)	5.4	0.9	(32.3)	〃	半欠 C	257
		5.1	(3.5)	0.9	(19.0)	〃	半欠 C	169			5.0	4.1	0.8	(16.4)	SI52	一部欠 C	273
		4.8	4.8	1.1	22.0	〃	完形 C	171			5.3	(3.9)	1.1	(19.2)	SI53	口縁部片 C	274
		(3.2)	(4.1)	0.8	(13.4)	〃	半欠 C	172			4.0	5.9	0.9	(24.5)	〃	半欠 C	275
		(4.2)	4.1	1.1	(19.0)	〃	半欠 C	173			(5.2)	(5.0)	0.8	(19.3)	SI54	切り込み片方だけ2カ所 半欠	279
		(5.5)	(4.7)	1.3	(25.6)	〃	半欠 C	176			(5.7)	(8.8)	1.0	(75.1)	SI55	半欠 C	285
		4.3	4.3	1.4	(25.0)	〃	一部欠 C	179			(4.9)	(5.1)	1.0	(26.2)	〃	半欠 C	286
		(3.7)	(3.5)	1.0	(15.5)	〃	半欠 C	181			4.4	(4.0)	1.0	(22.8)	〃	半欠 C	290
		3.7	5.2	1.0	(21.0)	〃	一部欠 C	182			(3.1)	(4.4)	1.2	(19.5)	〃	半欠 C	292
		6.0	5.8	1.4	(37.1)	〃	一部欠 C	185			6.4	(6.1)	1.3	(45.6)	〃	半欠 C	293
		4.8	5.4	1.2	(23.8)	〃	一部欠 C	187			(3.1)	6.1	1.3	(29.2)	〃	半欠 C	296

挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号
		(4.3)	6.0	1.0	(35.8)	SI55	半欠 C		298			(6.4)	(8.3)	1.1	(53.7)	SI56	半欠 C		361
		(4.9)	5.6	1.3	(34.2)	〃	半欠 C		301			5.4	3.5	1.1	29.9	〃	完形 C		362
		3.9	5.2	1.4	30.8	〃	完形 C		302			(3.0)	(2.1)	0.8	(7.4)	SI58	半欠 C		370
		3.3	(2.8)	1.4	(13.9)	〃	口縁 片 C		306			(6.5)	(4.4)	1.2	(31.0)	〃	半欠 C		372
		(3.8)	(2.9)	0.8	(8.0)	〃	半欠 C		307			(4.7)	(4.6)	0.8	(16.7)	〃	半欠 C		373
		5.1	(4.8)	1.1	(28.2)	〃	半欠 C		308			7.3	5.8	1.7	(65.0)	SI59	一部欠 C		365
		5.2	(4.3)	0.9	(24.5)	〃	半欠 C		310			(3.7)	(2.3)	0.7	(7.5)	〃	半欠 C		368
		(4.4)	(4.1)	0.9	(19.8)	〃	半欠 C		313			7.5	(6.4)	1.3	(50.0)	SI60	半欠 C		377
		(6.6)	(5.6)	1.4	(61.4)	〃	半欠 C		314			5.4	6.6	1.1	(39.5)	SI61	口縁部片 C 一部欠		378
		(3.9)	4.6	1.0	(18.8)	〃	半欠 C		315			3.4	(3.0)	0.9	(9.8)	〃	口縁部片 C 半欠		379
		4.0	4.5	1.1	(22.4)	〃	一部欠 C		318			4.7	6.3	1.2	(39.4)	〃	一部欠 C		380
		3.8	(4.8)	1.4	(30.2)	〃	半欠 C		319			3.7	5.9	1.2	(30.7)	〃	一部欠 C		381
		(6.1)	5.6	1.4	(44.7)	〃	半欠 C		323			(7.2)	(6.4)	1.1	(46.4)	SI63	半欠 C		382
		(4.1)	(4.7)	1.1	(24.7)	〃	半欠 C		324			(4.0)	(6.6)	1.2	(38.2)	〃	半欠 C		383
		(3.9)	(5.0)	1.1	(28.5)	〃	半欠 C		326			(5.9)	(5.7)	1.3	(40.8)	SI68	半欠 C		384
		(2.8)	4.8	1.3	(17.5)	〃	半欠 C		328			(5.1)	(4.2)	0.9	(13.2)	SI69	残欠 C		386
		(6.1)	6.6	1.1	(37.3)	〃	半欠 C		330			(3.0)	3.1	1.4	(8.9)	SI70	口縁部片 C 残欠		389
		(2.9)	(3.6)	0.7	(8.3)	〃	半欠 C		333			(2.6)	(3.1)	0.8	(5.6)	〃	残欠 C		390
		(2.8)	(3.4)	0.9	(9.0)	〃	半欠 C		334			(6.6)	(3.3)	1.1	(20.8)	SI71 炉	切りこみ片方だ け2か所 半欠		396
		2.9	(2.7)	1.5	(12.4)	〃	半欠 C		335			5.7	7.0	1.2	(40.5)	〃	一部欠 C		397
		(4.1)	(2.8)	1.0	(12.0)	〃	半欠 C		337			4.4	(2.9)	0.9	(12.2)	〃	半欠 C		398
		(6.2)	(5.3)	1.4	(28.4)	〃	半欠 C		339			(3.8)	(4.9)	0.8	(20.2)	〃	半欠 C		400
		(4.2)	(2.6)	0.9	(12.6)	〃	残欠 C		341			(4.2)	(5.1)	0.8	(19.2)	〃	半欠 C		402
		(4.9)	(3.4)	1.0	(15.3)	〃	残欠 C		342			(2.9)	(3.6)	1.1	(14.1)	〃	半欠 C		403
		(3.3)	(3.1)	1.3	(10.0)	〃	半欠 C		343			2.6	(2.4)	0.8	(5.2)	〃	半欠 C		404
		(3.7)	(3.5)	1.1	(12.7)	〃	半欠 C		345			(3.0)	(3.2)	1.0	(11.0)	〃	半欠 C		405
		(3.7)	(4.3)	0.7	(12.0)	〃	半欠 C		346			4.8	4.6	0.9	22.0	SI72	完形 C		409
		(2.8)	(3.3)	0.9	(9.8)	〃	半欠 C		347			(3.1)	3.6	0.9	(10.2)	〃	半欠 C		410
		(3.1)	(4.6)	1.4	(13.9)	〃	半欠 C		351			(4.9)	(3.9)	1.1	(17.8)	〃	半欠 C		411
		(4.2)	3.8	1.0	(15.6)	〃	半欠 C		352			(3.4)	5.3	1.0	(23.3)	SI74	半欠 C		415
		7.8	7.2	0.9	(52.8)	SI56	一部欠 C		359			5.9	6.6	1.8	(77.2)	〃 炉	一部欠 C		416

(8)

插图 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	插图 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号
		(3.8)	5.4	1.1	(23.2)	SI74	半欠 C		420			5.4	6.8	0.9	(51.0)	SK307	一部欠 C		675
		(4.3)	8.4	1.1	(48.5)	〃	半欠 C		422			(3.5)	3.5	0.8	(10.7)	SK310	半欠 C		513
		4.6	(4.8)	0.6	(25.2)	SI76	半欠 C		424			(3.5)	5.9	1.1	(27.9)	SK322	半欠 C		514
		4.4	(4.2)	1.0	(22.1)	SI77 炉	半欠 C		426			3.6	3.3	1.2	12.1	SK337	完形 C		546
		(3.1)	(3.8)	0.8	(8.8)	〃	半欠 C		427			4.2	(4.8)	0.9	(20.3)	SK364	半欠 C		522
		5.9	(3.7)	1.0	(23.7)	SI80	半欠 C		429			(6.1)	5.5	0.9	(28.2)	SK383	口縁部片 C 半欠		529
		(3.1)	(4.6)	1.3	(16.2)	SI81	半欠 C		433			3.5	(4.2)	1.0	(18.8)	SK392	半欠 C		553
		3.2	(3.8)	1.4	(16.7)	〃	口縁部片 C 半欠		434			(2.6)	(2.7)	1.0	(8.7)	〃	半欠 C		531
		(3.7)	(4.8)	0.9	(20.5)	〃	半欠 C		435			(4.8)	5.2	1.0	(21.3)	SK394	半欠 C		534
		(4.0)	5.7	1.3	(36.4)	〃	半欠 C		437			(5.5)	(4.3)	0.9	(21.9)	〃	半欠 C		537
		4.8	(2.5)	1.1	(15.5)	〃	半欠 C		441			(5.3)	(3.4)	0.8	(14.7)	SK398	半欠 C		538
		(4.1)	(4.6)	0.9	17.4	〃 炉	半欠 C		442			(4.7)	(3.1)	1.0	(14.3)	SK412	半欠 C		540
		(3.5)	(3.6)	0.8	(8.7)	〃	半欠 C		447			(3.6)	5.5	1.5	(36.7)	SK416	半欠 半欠		541
		(5.4)	(4.2)	1.5	(33.5)	〃	半欠 C		447			(4.1)	(3.6)	1.0	(14.5)	SK417	半欠 C		543
		(3.1)	(2.5)	0.4	(3.8)	〃 炉	半欠 C		449			(5.4)	(7.0)	0.9	(27.8)	SK420	A 半欠		545
		7.8	7.6	0.6	(34.7)	SI82	一部欠 C		454			(5.6)	(4.0)	1.4	(21.3)	SD 1	残欠 C		548
		(3.1)	5.9	0.9	(17.3)	〃	完形 C		455			6.2	7.1	1.0	(65.9)	〃	一部欠 C		549
		6.7	6.4	1.1	66.4	SI 81-84-85	完形 C		450			(3.8)	4.7	1.2	(21.8)	〃	A 半欠		550
		(3.2)	3.9	0.7	(8.6)	SK61B	太欠 C		465			(3.1)	3.2	0.7	(6.8)	〃	半欠 C		551
		(5.7)	4.1	1.2	(15.5)	SK69	A 半欠		466			(4.6)	5.7	1.2	(30.6)	〃	半欠 C		552
		(4.1)	(4.6)	0.6	(14.5)	SK79	半欠 C		474			(5.3)	6.7	1.1	(35.8)	〃	半欠 C		553
		5.3	(4.0)	0.9	(20.3)	SK135	半欠 C		475			(4.8)	(4.6)	1.5	(23.6)	〃	口縁部片 C 半欠		554
		4.2	3.9	0.9	15.7	SK142	完形 C		477			(2.9)	4.0	0.7	(10.0)	〃	半欠 C		555
		2.8	3.4	1.2	12.0	SK194	完形 C		489			(5.0)	8.4	1.1	(53.9)	SD 2	半欠 C		559
		(3.7)	(3.8)	1.3	(17.0)	SK197	半欠 C		491			(4.8)	(3.3)	0.7	(13.3)	〃	半欠 C		560
		(4.8)	5.8	1.0	(21.2)	SK198	半欠 C		493			(3.7)	(3.5)	1.1	(9.9)	SD 3	口縁部片 C 残欠		563
		(3.6)	(5.7)	0.9	(22.3)	SK212	半欠 C		497			(5.3)	4.9	1.3	(23.6)	SD 4	半欠 C		564
		(5.7)	5.0	1.0	(18.4)	SK231	半欠 C		501			(4.3)	(4.9)	1.2	(32.3)	〃	半欠 C		565
		(5.1)	(6.9)	1.3	(49.7)	〃	半欠 C		673			3.6	(5.4)	1.1	(24.6)	SD 5	口縁部片 C 半欠		567
		6.5	5.4	0.9	38.8	SK248	完形 C		502			(4.7)	4.6	1.1	(31.4)	SD11	口縁部片 C 半欠		568
		(7.0)	(6.8)	1.4	(46.3)	SK260	半欠 C		503			(3.0)	5.0	0.9	(14.8)	〃	口縁部片 C 半欠		569

挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号
		(3.1)	(2.9)	0.6	(8.5)	SD11	半欠 C		579			(4.3)	(5.5)	1.0	(30.0)	H5j2	半欠 C		616
		(6.4)	(4.3)	0.9	(31.9)	SD12	半欠 C		570			(2.7)	(4.8)	1.2	(18.3)	〃	半欠 C		617
		3.6	6.0	1.9	(42.0)	SD11-13	口縁部片 C 一部欠		574			(4.7)	(4.7)	1.1	(27.0)	H5g3	口縁部片 C 半欠		619
		(5.1)	(4.1)	0.9	(19.8)	〃	半欠 C		577			(4.6)	(5.0)	0.8	(20.6)	H5c5	半欠 C		620
		4.7	(4.7)	0.8	(19.4)	〃	半欠 C		578			(5.0)	(4.9)	1.1	(29.0)	H6a2	半欠 C		622
		(6.7)	(5.8)	1.2	(44.3)	SD15	口縁部片 C 半欠		580			4.9	(5.1)	1.1	(23.5)	14b8	半欠 C		624
		7.7	7.0	0.9	(40.2)	G4区	一部欠 C		572			(3.6)	(3.9)	1.3	(16.5)	14e8	半欠 C		626
		(3.7)	(2.9)	0.5	(5.7)	〃	残欠 C		582			(5.5)	6.1	1.4	(51.5)	14c7	半欠 C		627
		3.7	5.9	1.1	(27.2)	G4c6	口縁部片 C 一部欠		583			(2.6)	(3.4)	1.0	(10.0)	14e8	半欠 C		630
		(6.2)	(5.1)	1.0	(25.8)	G4e8	半欠 C		586			(3.8)	(5.6)	1.4	(25.4)	14d5	半欠 C		631
		5.0	(2.9)	0.6	(13.0)	G5区	半欠 C		591			(3.3)	(3.6)	0.5	(8.8)	〃	半欠 C		632
		5.4	(6.2)	1.2	(35.0)	G6h5	半欠 C		593			(5.0)	(3.8)	0.9	(19.5)	14d8	半欠 C		633
		5.4	(5.3)	1.7	(42.2)	H4区	口縁部片 C 半欠		595			(4.6)	(5.1)	1.3	(19.7)	〃	半欠 C		634
		6.3	(4.9)	1.3	(41.6)	〃	口縁部片 C 半欠		596			(4.9)	(4.1)	0.7	(29.3)	14e7	半欠 C		635
		5.0	(3.5)	1.0	(21.2)	H4e6	半欠 C		601			(2.6)	4.1	0.8	(12.3)	14d9	半欠 C		641
		(4.0)	5.4	0.6	(15.5)	H4区	半欠 C		602			(6.0)	4.9	0.7	(23.7)	15a2	半欠 C		651
		3.6	3.6	0.9	(10.8)	〃	一部欠 C		603			5.0	(5.5)	1.1	(30.6)	表 探	半欠 C		653
		(4.4)	(3.4)	0.9	(17.8)	〃	半欠 C		607			(5.3)	(5.4)	1.0	(28.1)	〃	半欠 C		654
		4.5	(2.6)	0.9	(33.8)	H4j7	半欠 C		605			(5.6)	(4.7)	1.3	(33.0)	〃	半欠 C		655
		(2.6)	5.4	1.0	(12.4)	H4区	残欠 C		606			(5.1)	4.6	1.0	(11.8)	〃	半欠 C		656
		(5.2)	5.9	1.0	(31.3)	H4f3	半欠 C		608			(4.2)	(5.6)	1.0	(31.8)	〃	半欠 C		657
		(4.2)	6.0	0.7	(26.4)	H4j3	半欠 C		609			(3.9)	(3.9)	1.2	(12.5)	〃	半欠 C		658
		(4.3)	(5.5)	1.0	(30.0)	H5j2	半欠 C		610			4.0	(4.2)	1.3	(17.4)	〃	半欠 C		659

表5 土製円板一覧表

挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号
第301区 1	PL61 246	(4.7)	(5.4)	0.7	(22.0)	SI25	C		32	第301区 6	PL61 251	4.4	4.7	0.7	18.0	SI47	A		100
2	247	3.0	2.9	0.9	5.4	SI26	C		21	7		3.9	3.9	1.2	19.1	SI48	C		204
3	248	2.3	2.5	0.8	8.0	〃	A		22	8	255	4.1	3.1	1.1	10.0	〃	C		193
4	249	4.2	4.0	1.4	25.8	SI38	C		43	9	253	5.9	5.8	1.0	44.2	〃	A		191
5	250	4.2	4.0	1.1	20.0	SI47	A ノッチが 1か所		99	10	252	7.5	7.7	1.0	63.6	〃	B		190

(2)

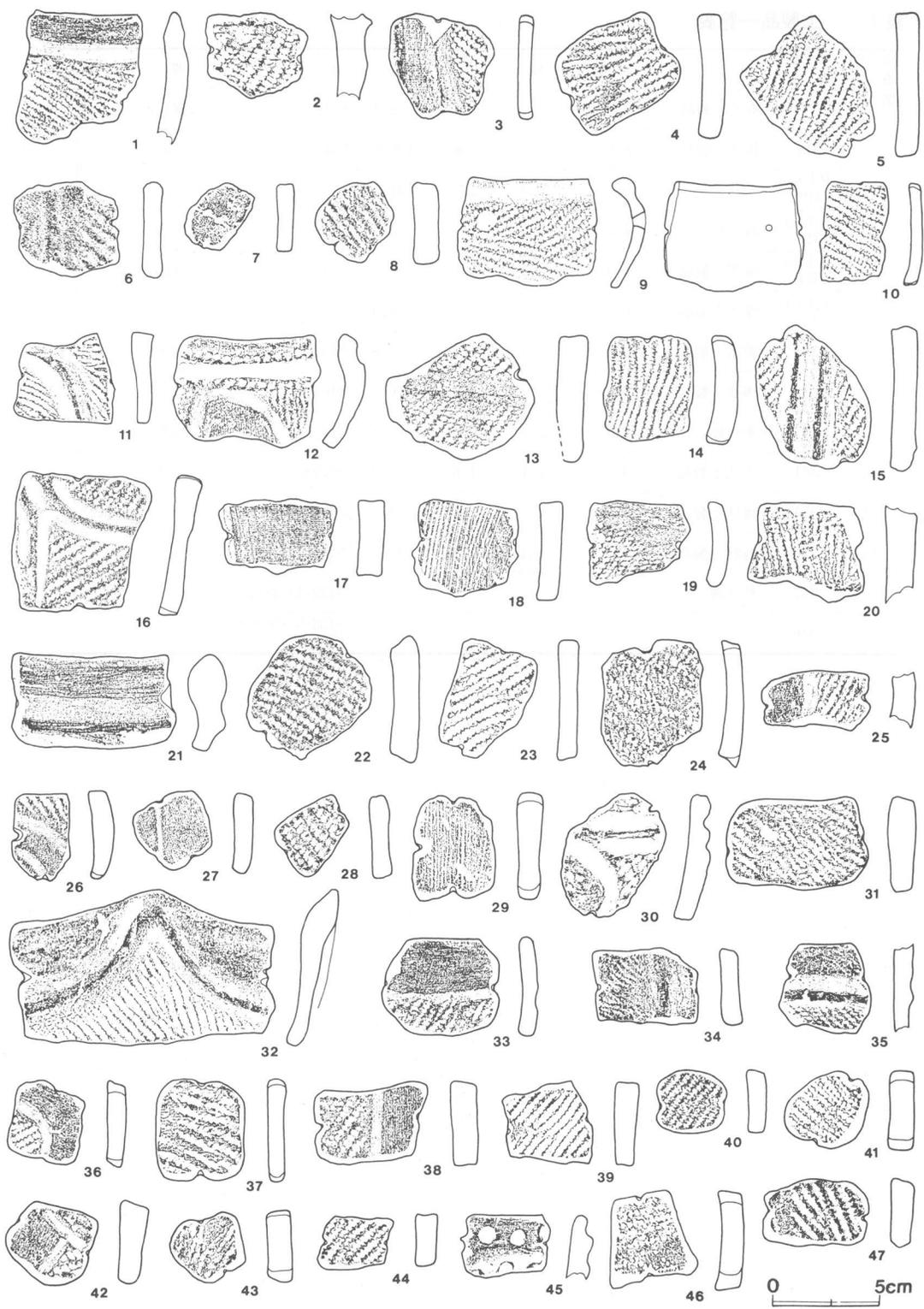
挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号
第38区 11		6.0	5.8	1.5	38.5	SI48	B		199	第38区 42	PL62 278	4.2	4.3	1.1	25.5	H4b7	A		612
12	PL61 256	5.9	5.7	1.2	48.8	〃	C		196	43	281	6.6	6.4	1.2	52.5	I4c7	B		647
13	257	5.3	5.0	0.7	21.8	〃	A		197	44	282	6.4	6.4	1.0	51.9	I4区	C		648
14	258	(3.8)	4.3	1.3	(25.0)	〃	A		198	45	283	4.0	4.0	1.1	19.5	I5c1	A		652
15		3.7	3.7	1.1	18.0	〃	B		202	46	286	4.5	4.2	1.3	28.5	表 採	C		664
16	PL61 254	3.8	3.8	1.3	15.4	〃	A		192	47	287	4.4	4.1	1.2	25.7	〃	C		665
17		4.4	5.7	1.0	24.0	〃	2次加熱 C		206	48	288	3.8	3.7	0.6	11.8	〃	C		666
18		4.4	4.6	1.3	26.8	〃	C		201			(3.5)	(3.4)	0.9	(10.3)	SI15	残欠 C		9
19		3.7	3.8	1.0	14.0	SI51	A		268			(3.3)	(4.3)	1.3	(16.3)	〃	残欠 C		10
20		3.0	3.1	1.2	11.0	〃	C		265			(2.3)	(2.7)	0.8	(15.0)	〃	A 残欠		11
21		6.8	8.0	1.6	97.8	〃	C		266			(3.5)	5.2	1.1	(23.8)	SI42	B 半欠		66
22		(5.2)	5.3	1.2	(39.3)	SI53	C		276			(3.6)	(4.5)	1.0	(19.0)	SI45	B 一部欠		84
23		(5.1)	(3.7)	1.1	(19.6)	SI55	A		355			(2.9)	(4.1)	1.2	(15.8)	SI48	半欠 C		194
24		(4.2)	5.3	1.2	(24.9)	〃	C		356			(2.6)	(4.5)	1.1	(10.3)	〃	残欠 C		195
25		4.7	4.8	0.6	14.0	SI68	2次加熱か C		385			(3.8)	5.3	1.0	(24.6)	〃	半欠 C		203
26		5.0	(4.2)	0.9	(22.5)	SI70	C		391			(4.0)	(4.5)	1.5	(27.8)	〃	半欠 C		205
27		(4.5)	5.4	1.2	(31.7)	〃	C		392			(3.1)	(5.8)	0.8	(13.1)	SI51	残欠 C		263
28		3.2	3.0	0.8	10.5	SI81	C		451			(1.8)	(3.4)	0.7	(5.5)	〃	A 半欠		264
29		(3.6)	4.4	1.4	(17.7)	SI85 炉	C		457			(2.7)	4.9	1.0	(13.7)	〃	半欠 C		267
30	PL62 271	3.9	3.5	1.1	16.8	SK76	C		469			(4.3)	(4.4)	0.9	(20.0)	〃	A 一部欠		269
31	272	3.1	3.1	1.1	12.7	SK135	A		472			(1.7)	(4.2)	0.5	(5.8)	SI53	A 残欠		277
32		(4.1)	4.5	1.1	(25.9)	SK156	A		480			(4.8)	(3.2)	0.9	(13.8)	SI54	A 残欠		280
33	273	(4.0)	3.5	1.0	(17.4)	SK212	C		496			(4.1)	(2.1)	0.5	(5.2)	SI58	A 残欠		375
34	274	3.0	3.1	1.4	16.8	SK281	A		508			(3.3)	(3.2)	1.1	(11.7)	〃	A 残欠		376
35	275	3.6	3.7	0.8	15.3	SK365	A		527			4.8	(2.7)	1.2	(15.7)	SI81 炉	半欠 C		452
36	276	3.2	3.2	1.2	10.8	〃	C		528			(4.9)	(5.0)	1.1	(36.5)	SK135	一部欠 C		471
37	277	3.7	3.9	1.0	17.0	SD12	A		571			(3.7)	(2.6)	1.2	(10.0)	SK198	残欠 C		494
38	284	3.9	(3.8)	0.9	(24.4)	G4g9	C		668			(3.2)	(3.6)	1.3	(12.9)	SK388	A 残欠		518
39	285	4.0	4.8	1.1	14.0	G4i7	口縁部片 C		669			(3.8)	(3.4)	0.7	(11.7)	H5i2	半欠 C		621
40	280	4.3	4.0	1.1	20.0	H4区	C		614			(3.2)	(5.3)	0.8	(14.8)	表 採	残欠 C		662
41	279	3.9	4.2	1.0	20.6	〃	C		613			(4.6)	(3.2)	1.0	(14.3)	〃	A 残欠		663

表 6 有孔円板一覧表

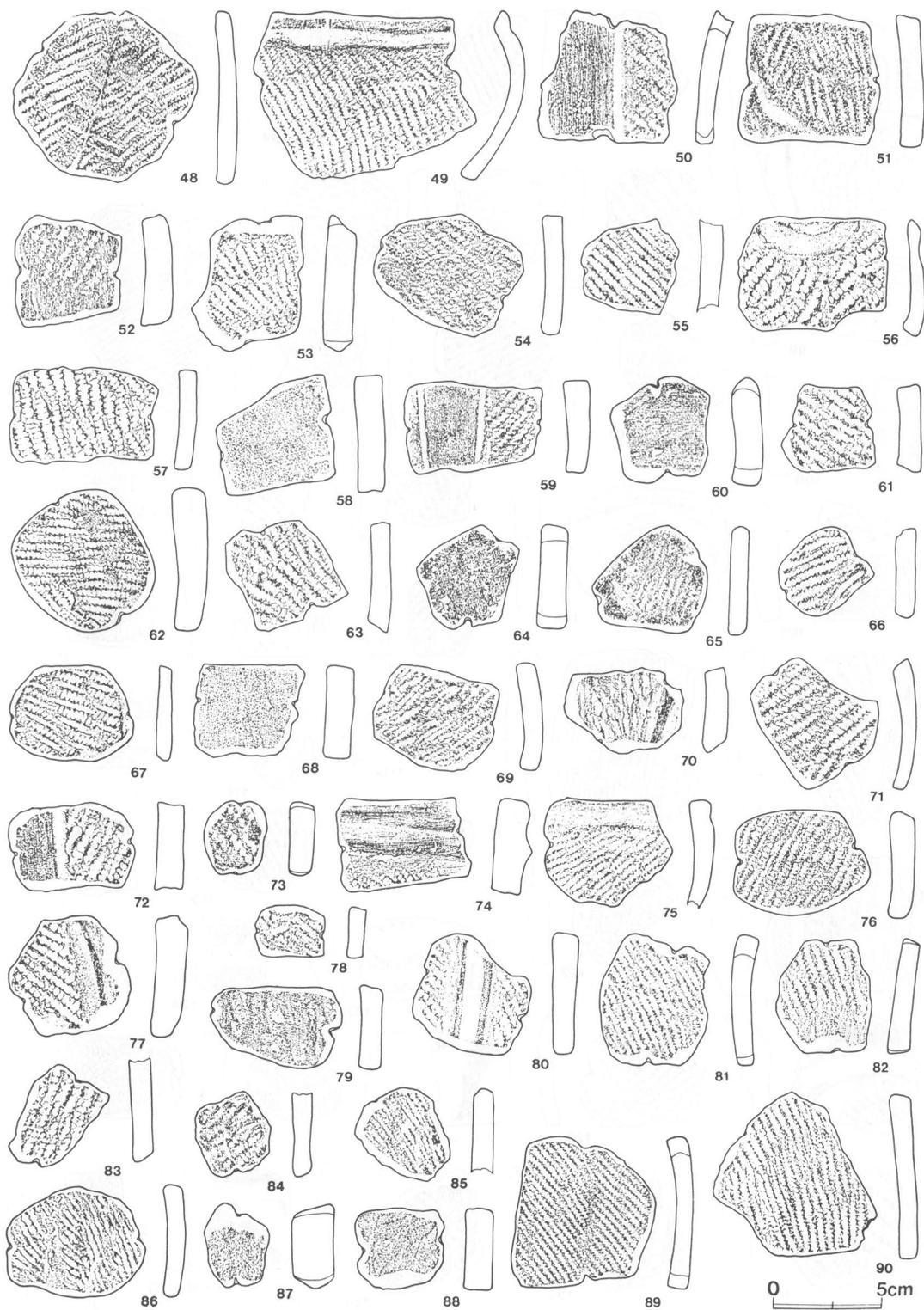
挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号	挿図 番号	写真 番号	縦	横	厚	重	出土位置	備	考	台帳 番号
第2図 1	PL62 289	(5.9)	6.5	0.9	(31.8)	SI15	A		12			(4.5)	(3.1)	1.0	(11.9)	SI45	A 残欠		86
2	290	4.7	4.5	1.4	26.6	SI26	A		23			(4.9)	(2.5)	1.0	(11.8)	〃	A 残欠		88
3	293	2.5	2.4	1.0	6.0	〃	A		26			(3.1)	(1.5)	0.7	(3.5)	SI47	A 残欠		101
4	292	3.5	3.5	0.7	9.5	〃	C		25			4.3	(2.4)	0.7	(7.7)	SI48	A 半欠		208
5	291	4.0	4.2	0.9	17.0	〃 炉	C		24			(3.6)	(2.1)	1.0	(6.3)	〃	A 残欠		209
6	294	(4.6)	4.9	1.3	(17.3)	SI32	A		39			(3.0)	(2.0)	0.8	(5.2)	〃	A 残欠		210
7	296	(3.6)	(6.8)	1.1	(21.0)	SI42	A		64			(4.0)	(3.1)	1.2	(15.4)	〃	裏より穿孔 C 残欠		211
8	295	3.5	3.5	1.1	16.8	〃	A		65			2.9	(1.6)	0.9	(3.6)	〃	A 半欠		213
9	297	4.8	4.9	1.3	29.8	SI44	A		71			(3.0)	(1.8)	1.0	(5.2)	〃	残欠 C		214
10	298	2.8	(1.9)	0.9	(4.8)	〃	A		72			(2.3)	(1.4)	0.5	(1.7)	〃	A 残欠		215
11	299	(4.3)	5.2	1.2	(19.0)	SI45	A		85			(2.9)	(1.9)	1.0	(4.0)	〃	穿孔途中 C 残欠		216
12	300	4.3	(2.5)	0.8	(8.2)	〃	A		87			(2.6)	(2.5)	0.9	(5.4)	SI51	A 残欠		270
13	301	3.0	3.3	1.0	11.5	〃	C		89			(5.0)	(2.4)	1.4	(14.8)	SI54	A 残欠		281
14	302	3.5	(2.2)	1.0	(8.3)	〃	A		90			(2.4)	(2.0)	1.2	(5.2)	SI72	A 残欠		412
15	PL63 304	3.1	3.5	0.8	9.8	SI48	A		212			(4.0)	(2.1)	1.2	(9.1)	SK135	A 残欠		476
16	303	5.2	5.3	11.2	32.9	〃	A		207			(5.1)	(3.1)	1.2	(16.3)	SK164	残欠 C		481
17	305	4.6	4.9	1.2	29.4	〃	A		200			(5.3)	(3.1)	0.9	(15.0)	〃	A 残欠		482
18	306	4.4	4.6	1.0	22.5	SI53	B		278			5.0	(2.9)	1.2	(11.8)	SK198	半欠 C		495
19		(2.9)	3.8	0.8	(8.0)	SI70	両面に施文 B		462			(5.7)	(3.1)	1.4	(24.9)	SK225	裏より穿孔 C 半欠		500
20	307	5.1	5.0	1.1	33.9	SI77	C		428			(3.4)	(2.8)	0.9	(6.2)	SK281	半欠 C		509
21	308	4.3	4.7	1.2	16.9	SK69	A		467			(4.7)	(2.4)	1.2	(10.9)	SD1	A 残欠		556
22	309	2.5	2.6	0.8	6.3	SK194	A		490			4.3	(2.3)	1.0	(8.7)	〃	半欠 C		557
23	310	3.9	3.9	1.1	17.6	SK308	C		511			4.9	(2.8)	1.3	(15.5)	G4g0	A 半欠		589
24	311	4.7	4.7	1.2	27.7	SK344	A		520			(4.1)	(2.3)	1.0	(8.2)	〃	A 残欠		590
25	313	3.1	3.2	0.9	11.3	G4区	C		588			(2.4)	(1.4)	1.0	(3.7)	G5区	A 残欠		592
26	312	5.2	5.7	0.8	28.4	G4g0	A		587			(3.2)	(2.3)	0.9	(5.3)	H4区	A 残欠		611
27	314	4.5	4.3	1.0	23.2	表 採	C		660			(2.6)	(1.7)	1.0	(3.5)	I4a7	A 残欠		649
		(3.1)	(1.8)	0.7	(3.8)	SI31	裏より穿孔 C 残欠		31			(5.5)	(3.3)	1.2	(28.6)	表 採	A 半欠		661

表 7 土製品一覽表

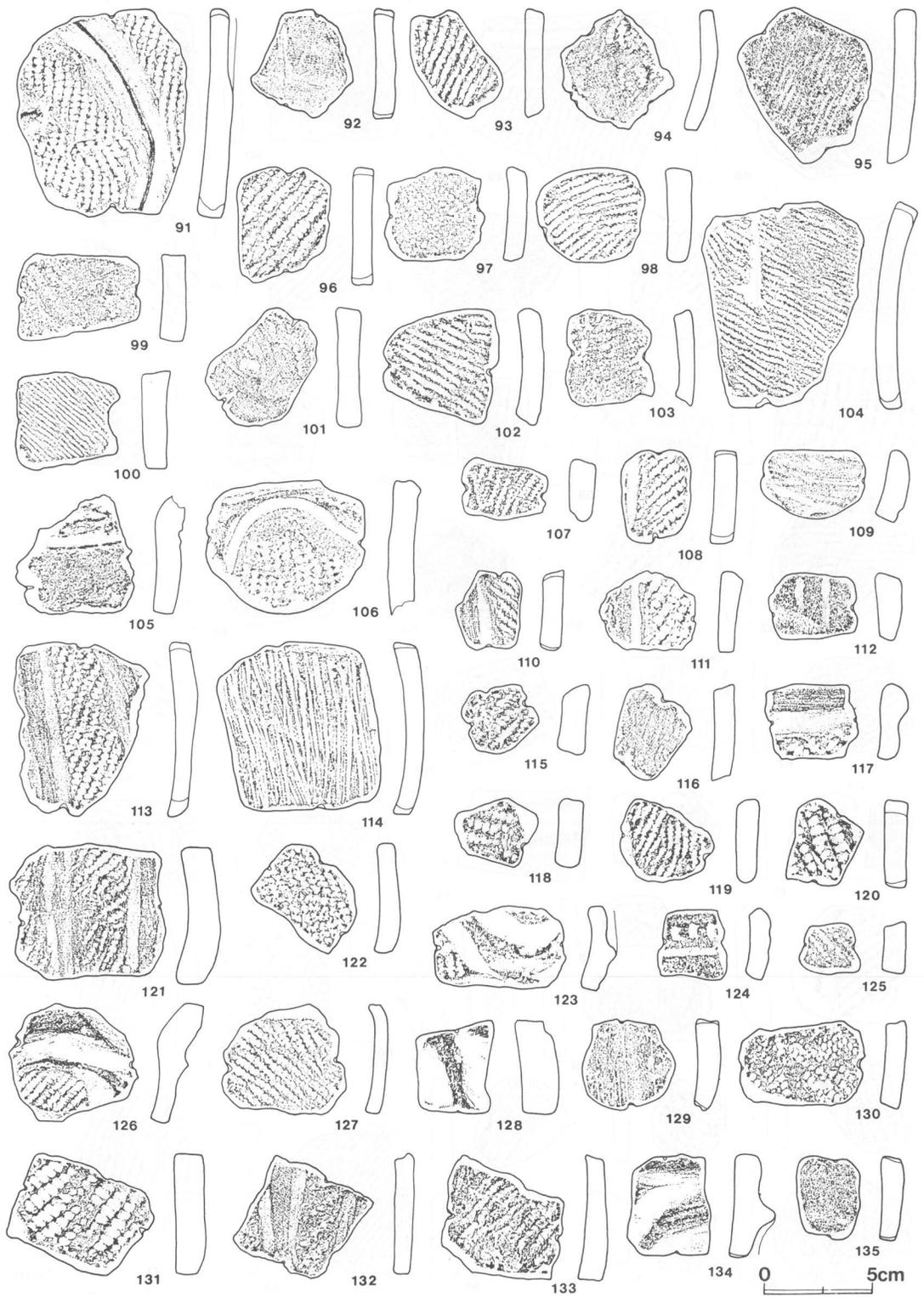
插 番 第	図 号 1	写 真 号 番 号	名 称	縦	横	厚	重	出 土 位 置	備 考	台 番 号
		P L63 315	有孔土製品	3.0	2.7	1.2	8.2	SI42	穿孔途中	460
2		318	管状土製品	(8.1)	5.6	5.8	(116.0)	SI49	一部欠損	228
3		P L64 319	〃	6.5	3.4	2.5	41.0	〃	〃	229
4		P L63 316	耳 栓	(1.8)	1.8		(4.7)	SI55	半欠	357
5		P L63 317	塊状土製品	(6.0)	4.4	4.1	(56.2)	〃	一部欠損	677
6		P L64 320	棒状土製品	(6.8)	1.9	2.1	(28.6)	〃	半欠	358
7		322	管状土製品	3.4	2.7	(1.7)	(12.9)	SI59	半欠	458
8		323	棒状土製品	(3.4)		2.8	(16.9)	SI63	残欠	459
9		325	垂 飾	2.4	2.3	0.6	2.8	SI70	完形	461
10		321	管状土製品	(4.5)	1.4	1.6	(10.2)	SK308	半欠	512
11		324	棒状土製品	(7.9)		3.1	(38.1)	SK344	半欠	519
12		326	球状土製品	1.1	1.1	1.1	1.0	SI46	完形	95
		327	粘土塊					SI32・42・48・49		
		328	〃					SI52・55・58・69 I4区		



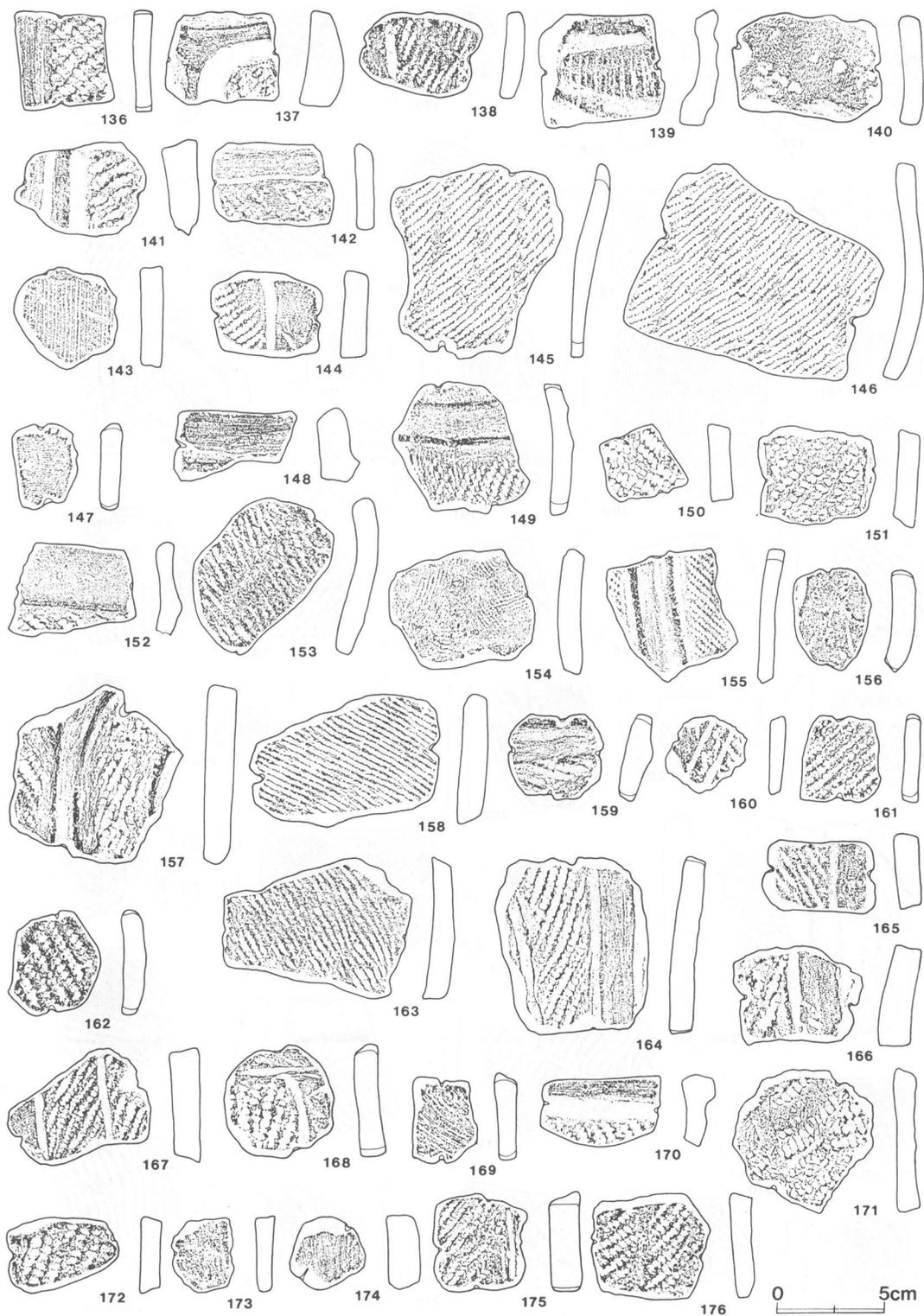
第385图 土器片锤突测图 (1)



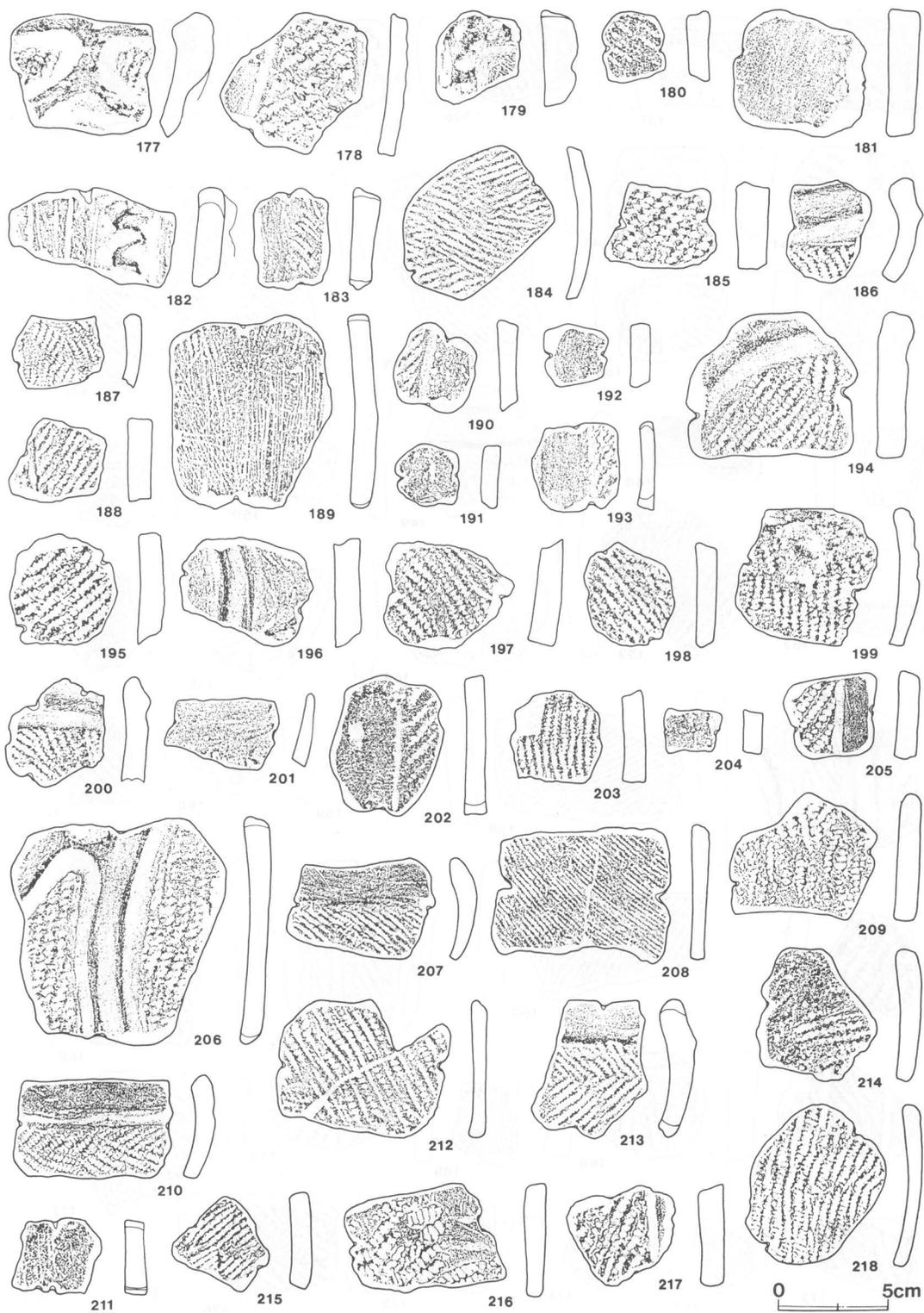
第386图 土器片锤实测图 (2)



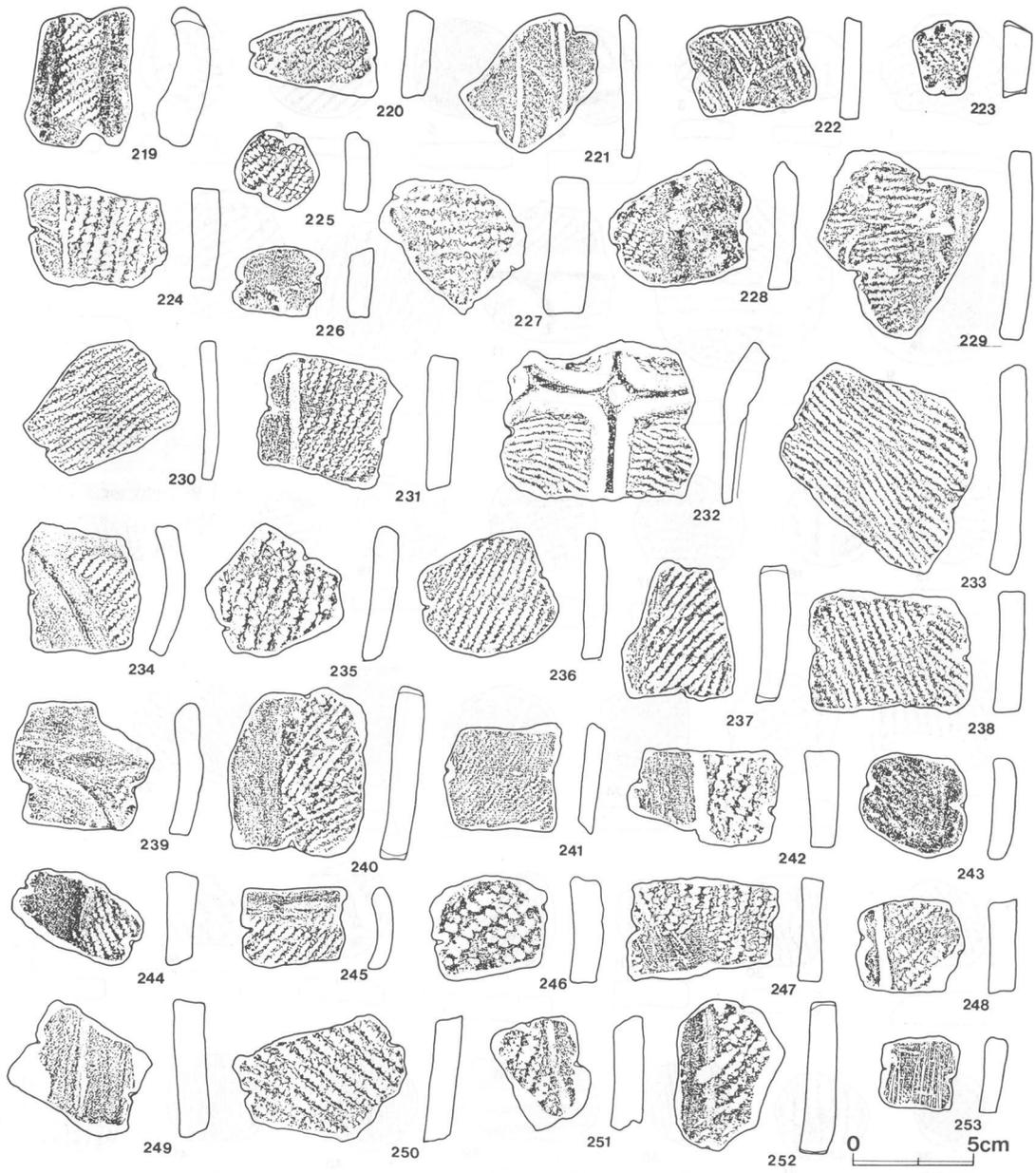
第387图 土器片锤突测图 (3)



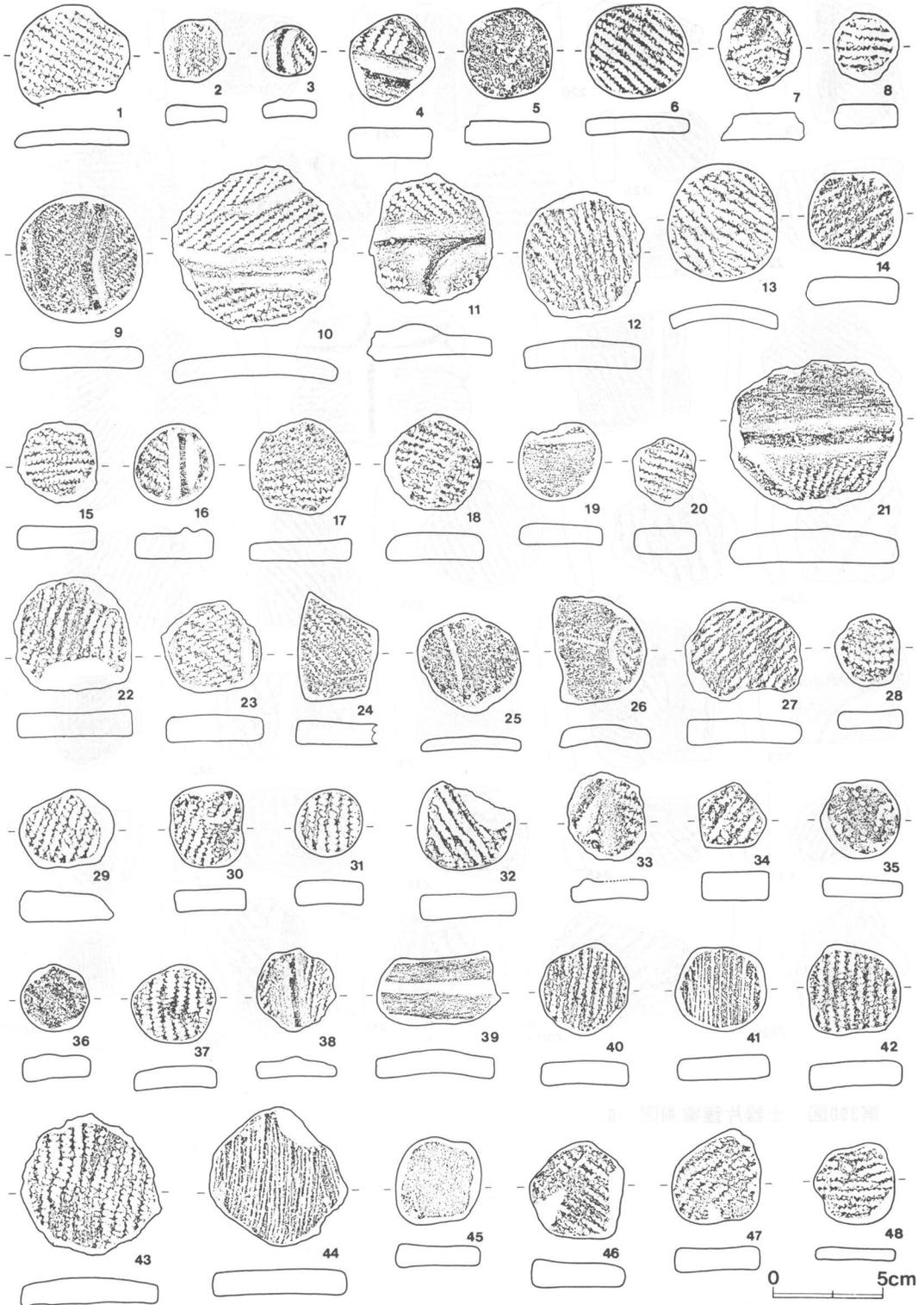
第388図 土器片錘実測図 (4)



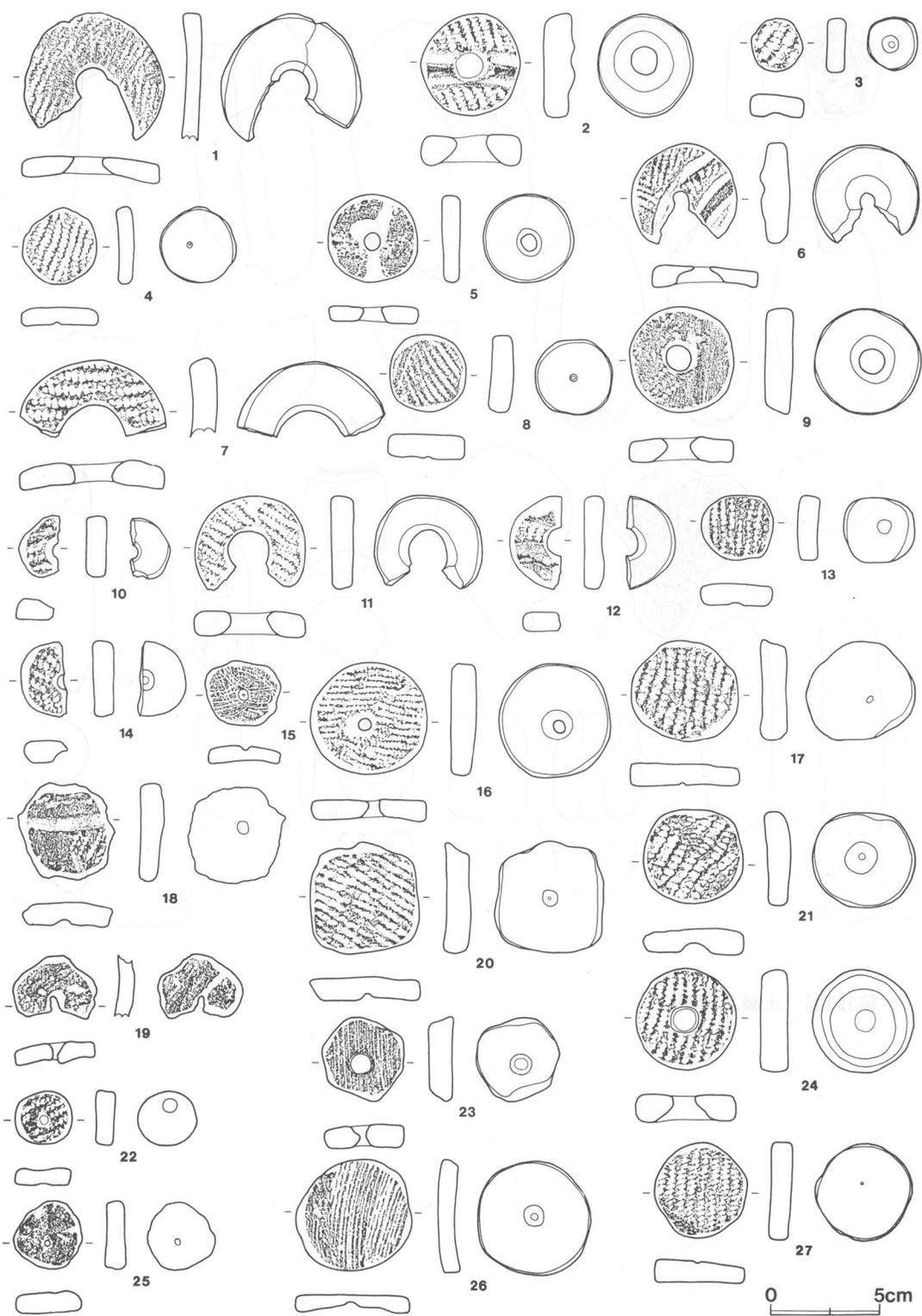
第389圖 土器片錘実測圖 (5)



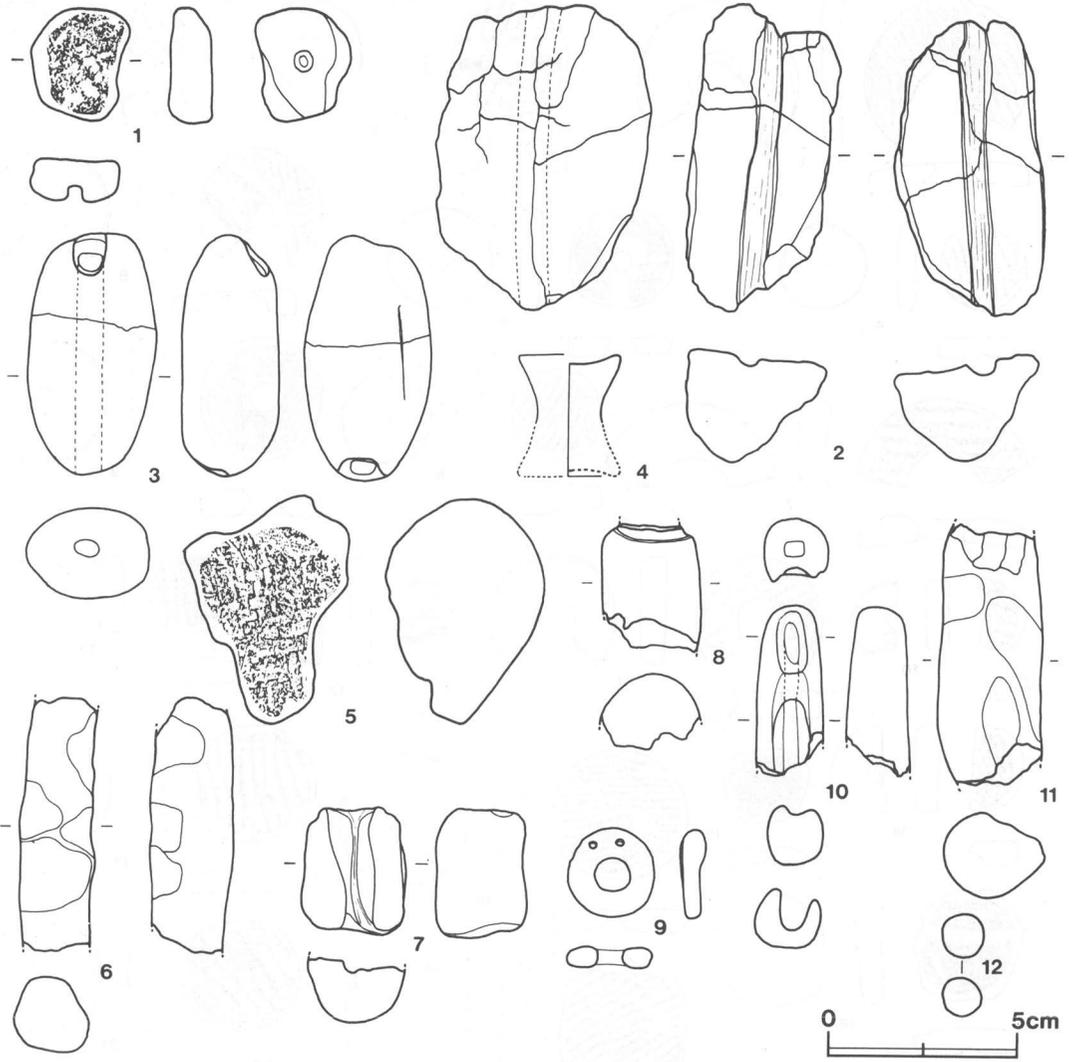
第390図 土器片錘実測図 (6)



第391图 土製円板実測図



第392图 有孔円板実測図



第393图 土製品実測図

3 石器

当遺跡6区から出土した石器の概要は、前記したとおりである。

本稿では、各器種ごとに若干の解説を加えた。個々の石器の形状・法量・石材・出土位置等については一覧表に掲載した。

(1) 石鏃 (第394～395図1～14)

当遺跡6区出土の石鏃は14点で、チャート製のものが11点と断然多く、頁岩、黒曜石、流紋岩製のものが各1点ずつある。無茎石鏃が主であるが、10・13は有茎石鏃である。10は先端部が鋭く尖り、側縁が鋸歯縁を呈し内湾している。基部が緩く外湾している点は特異である。13は有茎石鏃で、先端部と茎部を欠損している。住居跡からの出土が10点、グリッドおよび表採のものが4点である。住居跡からの出土の中で完存品は10だけで、他は先端部ないし脚部を破損している。グリッド出土のものでは11の1点だけが完存品で、他は欠損している。欠損品の多いことが目立っている。

無茎石鏃は、茎部の^く挟りの浅いもの(2・3・9)から深いもの(1・8・11)までを含み、各種バラエティに富んでいる。形状的にも、側縁が直線的なもの(2・3・5)、側縁が外湾気味のもの(4・7・11)、側縁が内湾気味のもの(8～10)などの違いがみられる。

南三島遺跡1・2区の報告書の石鏃の分類基準(第366図)にあてはめれば、6区の石鏃はA-4、B-2、B-3、B-4、C-2、C-3、C-4が存在することになる。

石鏃について注意すべき点は、石質との関連である。1・2区出土の24点の石質をみると、チャート18点、黒曜石4点、流紋岩2点であった。1・2区に頁岩製のものは出土していないが、その他は共通している。石鏃の性格からして、鋭い縁辺部を有する剥片が利用されることは当然であり、結果としてチャート・黒曜石などが選ばれたと考えられる。6・10の側縁に観察できる鋸歯縁も鋭利さをもとめる意義のあらわれと見ることができよう。

(2) 石錐 (第395図15)

石錐の出土はこの1点だけで、先端部を欠損している。第50号住居跡の床面上から出土し、チャート製で、基部はやや幅が広く、調整されているが薄い。

(3) 尖頭石器 (第395図16)

気泡のある黒曜石製で丁寧に剥離されている。下半部を欠き形状が不明なので尖頭石器とした。あるいは搔器の欠損品であるかもしれない。

(4) 搔器 (第395図17・18)

17は、粗く剥離が施されているが、右側縁部の刃部は鋭い。18は、粗く大きな剥離によって調整され、中央稜線部分は甲高である。右側縁部が刃部と考えられる。

(5) 石核 (第395図19)

縦長剥片を剥離した痕跡が残る残核で、裏面の左側縁に粗い剥離痕が残っている。残核を利用して搔器を作成しようとしたものとも考えられる。

(6) 使用痕のある剥片 (第396図20～29)

剥片の石質には、黒曜石・チャート・メノウが用いられ、いずれも鋭い縁辺部を有している。刃潰し加工のみられる21・23・24・29などと、25～27のように使用による刃こぼれが認められるものがある。このような不定形石器は取りあげられることが少ないが、当時の日常生活の器具としては重要なものであったことが推測される。

(7) 磨製石斧 (第396図30, 第397図37～44)

磨製石斧の点数は9点で、完存品は30・40の2点だけで他は欠損品である。30は小形の定角式磨製石斧で、第53号住居跡の東側のピット2の底面近くから出土したもので、非常に丁寧に作られている。研磨は行き届いているが、わずかに稜線が認められる。刃部は蛤刃で、刃縁に直交する磨痕と平行する磨痕の両者が観察できるが、使用痕か、整形痕かは判別できない。40は基部の打撃痕が著しいが、刃部の一部を欠くほかは完存している。側縁に稜が認められず、定角式とはいえない。その他の欠損品は定角式磨製石斧である。37・41・42は基部を欠くもので、38は刃部だけの断片である。いずれも蛤刃を呈している。39・43・44は基部が残り、刃部を欠くものである。37の基部の破損面には磨面が認められ、破損後再利用したことがうかがえる。刃部は直刃のものが多いが、円刃に近いもの(37・40)もある。42の刃部には、刃縁に直交する擦痕が表裏面に顕著に観察できる。着柄方法や使用方法を考える上で注目すべき点である。石材は、39・40・41が砂岩、30・37が緑泥片岩、38が流紋岩、42が斑糲岩、43が閃緑岩、44が片麻岩である。

(8) 打製石斧 (第397図31～33)

分銅形を呈する打製石斧は3点で、32だけが完存品である。31は自然面を有する面を図示したが、反対側は粗い剥離によって加工されている。32は大形の完存品で、表裏両面を粗い剥離によって加工し、自然面が多く残されている。a面左側の抉り部分はかなり磨滅している。刃部は両端ともに磨滅している。33は磨滅が激しく、剥離痕が明瞭ではない。薄手で小形のものである。

(9) 礫器 (第397図34～36)

34は、裏面に自然面を残し、表面は大きな粗い剥離によって加工されている。片刃の刃部は鋭い。甲高の稜線に特色がある。35も片面に大きく自然面を残し、反対側は粗い剥離によって加工されている。刃部は直刃で片刃状を呈している。36は、棒状礫の側縁および下端に粗い打撃を加えている。礫は湾曲している。いずれも砂岩を用いている。

(10) 磨石 (第398～401図45～86)

磨石は、42点出土している。本項では磨りの痕跡が観察できるものについては磨石として分類

した。そのため凹みを有し、凹石としてもよいもの(47・48・59・70・76)も含まれている。平面形は不整形・楕円形を呈するものが主となるが、破片のため形状が明らかでないものもある。断面形は、楕円形や隅丸方形を呈するものが多いが、中には49・64・76などのように甲高な不整形三角形状を呈する資料もある。また、57・58・59・65のように三角形ないし不整形三角の断面形をもつものも認められている。磨りの痕跡は表裏両面にも認められるが、側面に存する資料が特に目立っている。48・55・62・63・64・75・76・77・82・84・85などは、側面の磨りが顕著である。73は、アブライト製の小形磨石で、破片のため断定できないが、断面形が蛤刃状^{はくろば}を呈する仲間と推定されるものである。石質としては、安山岩20点、流紋岩7点、石英斑岩5点、アブライト3点、砂岩3点、多孔質安山岩2点、硬砂岩1点、斑糲岩1点がある。安山岩・流紋岩・石英斑岩などの多いことが目立ち、磨石の石質は石皿・凹石などと共通する傾向が認められる。

(11) 石皿 (第402～403図87～91)

石皿は5点出土している。87・88は、第144号土壌の底面上に遺存したもので、87は底面の中央部やや東側から伏せた状態で、88は北西側の壁に縦位に、裏面を壁に向けて立てかけた状態で出土したものである。共に完形で、87は安山岩、88は流紋岩を用いている。87は10.1kg、88は12.5kgである。共に流し口を有し、底面は著しく凹んでおり、長期間の使用がうかがわれる。特に88は底面が薄くなっていて抜けそうである。裏面および側縁部には凹孔が多数穿たれている。このような石皿の出土状態は稀なものと考えられ、一考を要する課題を提供している。89は、第81・84・85号住居跡が重複する部分の床面上に据え置かれたような状態で出土したものである。使用面と考えられる面は浅く凹み、周縁に3か所の凹みをもっている。出土時には、この面が南西側に傾いた状態であった。右側縁の上部にも1か所の凹みを有している。完形で19.4kgと大変に重い。砂岩を用いている。本例も住居跡の床面上出土ということで注目すべきものである。90・91は、共に小さな断欠である。90は87に類似している。91は点紋粘板岩製で、磨り面は十分に観察できない。

(12) 凹石 (第403図92・93)

凹石は2点で、92は、断面形が円錐形を呈する凹みをもつもので、雲母片岩を利用している。石皿に分類してもよいものかもしれない。93の平面形は楕円形を呈すると思われるが、半欠品である。2次加熱を受けていて非常に軽い。表裏面および側面の磨りの痕跡は、2次加熱により失われている。93の石質は安山岩である。

(13) 敲石 (第403図94)

94は、右側縁に顕著な敲打痕が認められたので敲石とした。石英斑岩を用いている。

(14) 軽石製品 (第403図95～100)

いずれも軽石を一定の大きさとかたちに整形したものである。切断したり、磨ったりしている

痕跡は認められるが、特定の形状や大きさ・重量を示してはいない。用途も不明であるが、浮子^{うき}ないしは骨角器類の製作に使用する研磨具のような役割が考えられる。以上のような理由から、ここではあえて浮子とせずに軽石製品とした。

(15) 砥石状石器(第403図101)

101は、不整形な自然石の上面にやや凹むほどに顕著な痕跡が認められるものである。磨石として扱うべきかもしれないが、手持ち作業用とは考えられないので、ここでは砥石状石器と仮称した。I4b₉グリッドの出土であるが、縄文時代のものと考えられる。

(16) 砥石(第403図102~107)

砥石は、図示したものの他に1点出土している。105が斑糲岩、図示していないものが砂岩である。そのほかは、いずれも凝灰岩製である。断面は方形ないし長方形を呈し、一般的なものと思われる。当遺跡の出土土器および形状から判断して、いずれも近世のものと考えられる。

(17) 石棒(第404図107~114)

石棒は7点出土しているが、出土状態の明確なものは、第41号住居跡の南東側の壁近くの覆土から出土した107・108である。107は頭部で、2次加熱によって縦に約4分の1程度を損傷している。107の側面図の右側部分が加熱の範囲を示している。108は基部で、断面が円錐形を呈する孔が1か所穿たれている。107と同様の2次加熱痕が側面に認められるが、それによって割れてはいない。基部の下面は、頭部上面以上に磨られ滑らかになっている。両者は同一個体であることは間違いがないが、中間部を失っているために接合はできない。109は、大形の石棒の頭部の残欠である。110も頭部で、きわめて写実的な形状を呈している。緑色凝灰岩の比較的軟質な石質を用いている。111も頭部の残欠で、頭部上面に磨痕が顕著にみられる。112は、中間部の残欠である。113は細身の石棒の基部で、丁寧に作られている。基端部は平坦である。114は、他の石棒に比較して扁平なものであるが、石棒として取り扱った。残存部が頭部か基部かは明らかではない。表面には敲打による整形痕が著しく、その上を研磨している。実測図上のスクリントーンは研磨部分を表示している。裏面は、剥落している。

表 8 石器一覧表

(1)

挿図 番号	写真 番号	器 種	縦	横	厚	重	出土位置	石 質	備 考	台帳 番号
第394図 1	PL65 1	石 鏃	(3.1)	2.5	0.5	(2.7)	SI42	チャート		7
2	2	〃	(1.7)	1.4	0.5	(0.7)	〃	〃		6
3	3	〃	(2.4)	(1.8)	0.4	(1.6)	SI48 炉	〃		16
4	4	〃	(2.1)	1.9	0.3	(0.8)	〃	〃		14
5	5	〃	(2.9)	1.8	0.5	(1.5)	〃	〃		17
6	6	〃	(2.9)	1.8	0.5	(1.4)	〃	〃		13
7	7	〃	(2.5)	1.7	0.4	(1.5)	SI51	〃		24
8	8	〃	3.2	1.6	0.4	1.4	SI55	頁 岩		26
9	9	〃	(1.8)	1.5	0.4	(0.7)	SI76	チャート		38
10	10	〃	2.6	2.0	0.3	1.4	SI77	〃		39
11	11	〃	2.1	1.8	0.3	1.0	G4g9	黒 曜 石		62
12	12	〃	(1.7)	(1.4)	0.2	(0.6)	G6a0	流 紋 岩		61
第395図 13	13	〃	(2.0)	1.7	0.3	(1.0)	I4e9	チャート		81
14	14	〃	(2.6)	1.8	0.3	(1.6)	表 採	〃		85
15	15	石 錐	(3.3)	1.0	0.4	(1.5)	SI50 床	〃		23
16	16	尖頭石器	(1.7)	2.2	0.6	(2.0)	SK159	黒 曜 石		103
17	17	搔 器	3.9	3.4	1.2	15.0	SI48	ホルン フェルス		15
18	18	〃	4.8	3.9	1.7	33.8	SK354	頁 岩		55
19	19	石 核	4.1	3.1	1.9	17.8	SI68	〃		31
第396図 20	20	使用痕のある 剝片	3.5	1.7	1.4	5.4	SI46	黒 曜 石		9
21	21	〃	3.3	3.1	1.1	12.4	SI48 炉	メ ノ ウ		20
22	23	〃	4.7	2.9	1.3	13.5	〃	チャート		19
23	24	〃	4.1	3.0	1.0	11.8	〃	〃		18
24	22	〃	2.3	2.9	0.6	4.0	SI64	〃		28
25	26	〃	5.5	1.8	1.8	5.9	SI68	メ ノ ウ		30
26	27	〃	5.7	4.7	1.2	27.7	SI74p1	チャート		35
27	28	〃	5.4	4.3	1.6	32.8	〃	〃		36
28	25	〃	3.0	1.5	1.2	4.1	SD11	黒 曜 石		47
29	29	〃	3.5	2.9	0.7	8.1	D3g2	チャート		59
30	30	磨製石斧	4.0	2.0	1.0	12.2	SI53	緑泥片岩	非常に丁寧な 作り	54
第397図 31	PL66 31	打製石斧	(5.8)	7.0	(2.3)	(110.0)	SI46	砂 岩		10

(2)

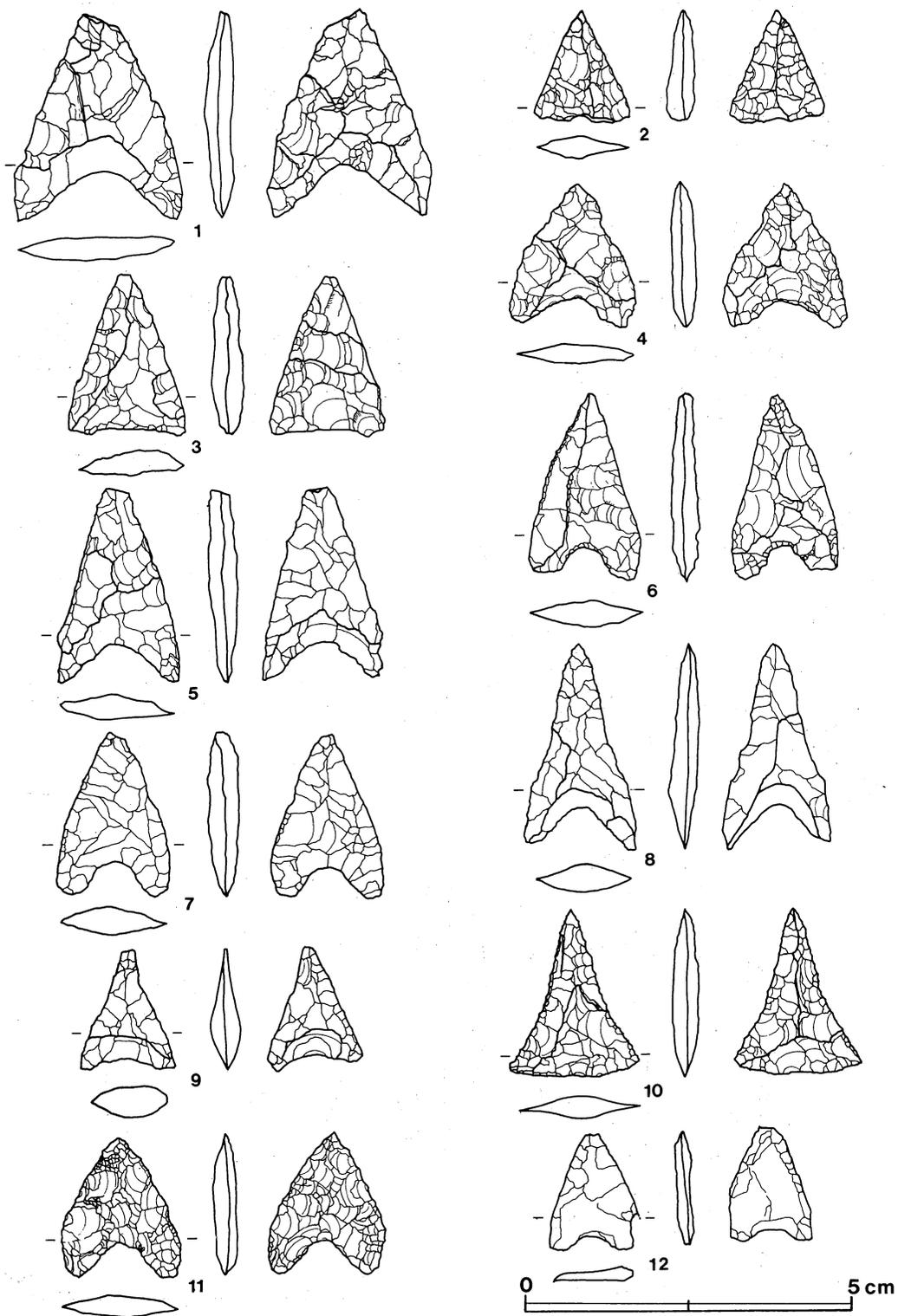
挿図 番号	写真 番号	器 種	縦	横	厚	重	出土位置	石 質	備 考	台帳 番号
第397図 32	PL66 34	打製石斧	12.8	8.5	2.6	365.5	SI51	安山岩		25
33	32	〃	(6.9)	(5.7)	(1.3)	(55.0)	I4f0	砂岩		82
34	33	礫器	9.4	5.9	3.6	170.0	SI48	〃		11
35	36	〃	6.0	4.3	1.5	50.0	SI56	〃		112
36	35	〃	(8.4)	(5.0)	(3.5)	(156.0)	I4b3	〃		67
37	37	磨製石斧	(6.8)	3.6	2.4	(135.0)	SI76	緑泥片岩	基部(破損面)に 磨面が残る	37
38	40	〃	(3.8)	6.3	2.8	(120.0)	SD11	流紋岩		57
39	39	〃	(5.2)	(4.6)	(3.0)	(65.0)	SK223	砂岩		52
40	41	〃	8.6	5.0	2.7	160.0	H4i9	〃		64
41	44	〃	(9.1)	6.4	3.5	(340.0)	SK389	〃		56
42	42	〃	(10.7)	7.2	3.7	(519.0)	I4b3	斑糲岩		78
43	38	〃	(7.2)	4.8	3.7	(152.0)	表採	閃緑岩		101
44	43	〃	(10.4)	4.9	3.0	(241.0)	〃	片麻岩		90
第398図 45	PL67 45	磨石	9.3	8.1	(3.0)	(315.0)	SI26	安山岩		1
46	46	〃	(15.2)	(8.4)	5.5	(995.0)	SI41	〃		3
47	47	〃	9.8	7.4	3.8	360.0	SI42床床	石英斑岩		8
48	49	〃	11.4	7.8	3.3	480.0	SI48 炉	安山岩		12
49	PL68 53	〃	11.5	7.7	4.6	565.0	SI49	流紋岩	2次加熱	22
50	PL67 48	〃	(9.9)	(6.8)	3.6	(290.0)	〃	〃		21
51	50	〃	(6.1)	7.6	4.3	(291.0)	〃	石英斑岩		106
52	PL68 56	〃	(8.3)	15.4	5.3	(921.0)	SI68 床	〃		29
53	54	〃	(8.2)	(5.3)	5.7	(290.0)	〃	アプライト		32
第399図 54	PL67 52	〃	(7.5)	(5.2)	4.8	(216.0)	〃	石英斑岩		33
55	PL68 58	〃	(7.5)	(7.5)	4.3	(225.0)	SI71	安山岩	破損面に弱い磨 痕が残る	34
56	PL67 51	〃	(6.1)	(7.0)	4.8	(181.0)	SI81・84・85	流紋岩		42
57	PL68 59	〃	6.7	6.4	3.9	210.0	SI80	〃		40
58	55	〃	(9.1)	6.4	4.3	(295.0)	SI81・84・85	安山岩		44
59	57	〃	12.2	5.0	5.9	375.0	〃	〃		43
60	60	〃	(10.0)	9.6	5.9	(516.0)	〃	砂岩		46
61	PL69 61	〃	(11.0)	8.6	5.3	(725.0)	〃	安山岩		45
62	62	〃	(8.1)	(6.9)	4.2	(289.0)	SK194	硬砂岩		104

(3)

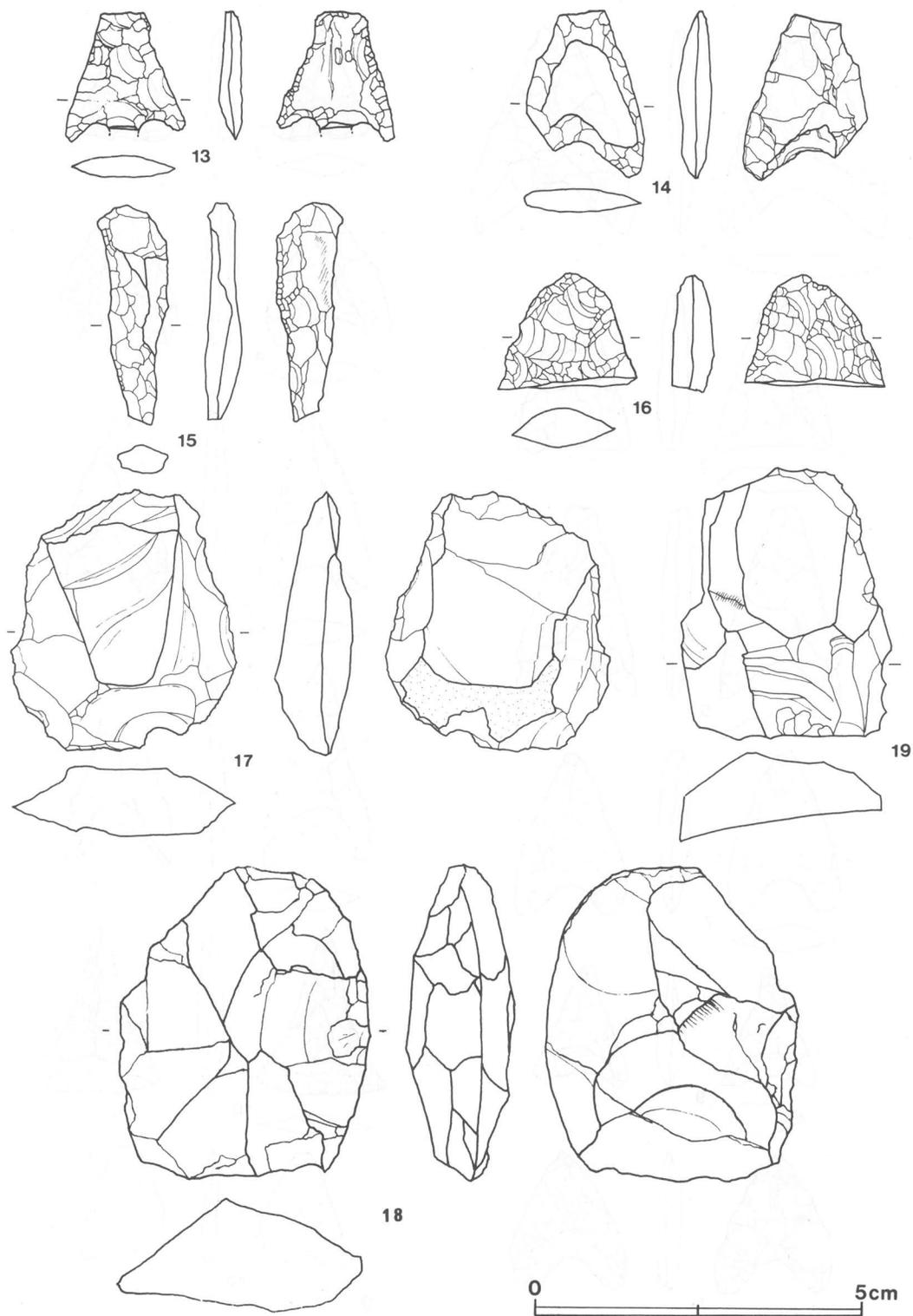
挿図 番号	写真 番号	器 種	縦	横	厚	重	出土位置	石 質	備 考	台帳 番号
第399図 63	PL69 63	磨 石	11.0	7.4	4.1	594.0	SK309	斑 糲 岩		105
第400図 64	66	〃	(8.0)	(7.5)	4.3	(336.0)	〃	安 山 岩		108
	65	〃	(9.3)	7.7	6.6	(440.0)	I4b3	〃		66
	66	〃	(8.2)	(5.4)	4.2	(216.0)	〃	砂 岩		71
	PL70 69	〃	(10.0)	8.3	5.2	(647.0)	〃	安 山 岩		79
	PL69 67	〃	5.6	3.2	2.4	66.0	〃	石英斑岩		72
	68	〃	(10.3)	6.5	5.8	(606.0)	〃	流 紋 岩		68
	PL70 70	〃	(7.4)	(7.5)	4.9	(280.0)	〃	多孔質 安 山 岩		74
	71	〃	(6.9)	5.3	4.9	(245.0)	〃	安 山 岩		76
	72	〃	6.3	(6.5)	4.2	(291.0)	〃	〃	破損面を磨面と して利用	69
	73	〃	(3.9)	(4.7)	(2.4)	(45.0)	I5d7	アブライト		84
	74	〃	(6.8)	(9.7)	4.6	(320.0)	I4b3	多孔質 安 山 岩		115
	75	〃	(8.2)	(4.8)	4.8	(216.0)	〃	安 山 岩		70
第401図 76	76	〃	13.0	6.6	3.8	460.0	表 採	〃		88
	PL71 78	〃	(5.7)	7.5	4.1	(235.0)	〃	〃		89
	PL70 77	〃	(4.9)	(4.8)	4.7	(172.0)	〃	アブライト	2次加熱	100
	PL71 80	〃	10.4	7.2	3.9	343.0	〃	安 山 岩		99
	80	〃	(6.4)	(5.7)	(3.1)	(185.0)	〃	〃		98
	81	〃	(7.6)	(3.6)	(4.7)	(129.0)	〃	〃		96
	82	〃	9.5	7.6	4.1	435.0	〃	〃		116
	83	〃	(8.5)	3.4	3.6	(145.0)	〃	砂 岩		92
	84	〃	6.9	(5.7)	4.7	(160.0)	〃	流 紋 岩		97
	85	〃	11.0	6.8	2.8	206.0	〃	安 山 岩		91
	86	〃	(8.4)	(6.5)	5.6	(422.0)	〃	流 紋 岩		95
第402図 87	87	石 皿	40.7	29.4	8.5	10100.0	SK144	安 山 岩	伏せて出土	50
	PL72 88	〃	43.1	33.3	9.5	12500.0	〃	流 紋 岩	壁面に立てかけ て出土	51
第403図 89	89	〃	40.9	26.4	20.0	19400.0	SI81・84・85	砂 岩		41
	90	〃	(7.8)	(6.2)	4.1	(150.0)	SK343	安 山 岩		107
	91	〃	(13.4)	(6.3)	(3.2)	(270.0)	F6e1	点紋粘板岩		60
	92	凹 石	(10.2)	(10.7)	5.9	(665.0)	表 採	雲母片岩		109
	93	〃	(5.2)	7.2	4.1	(105.0)	SI38	安 山 岩	2次加熱	2

(4)

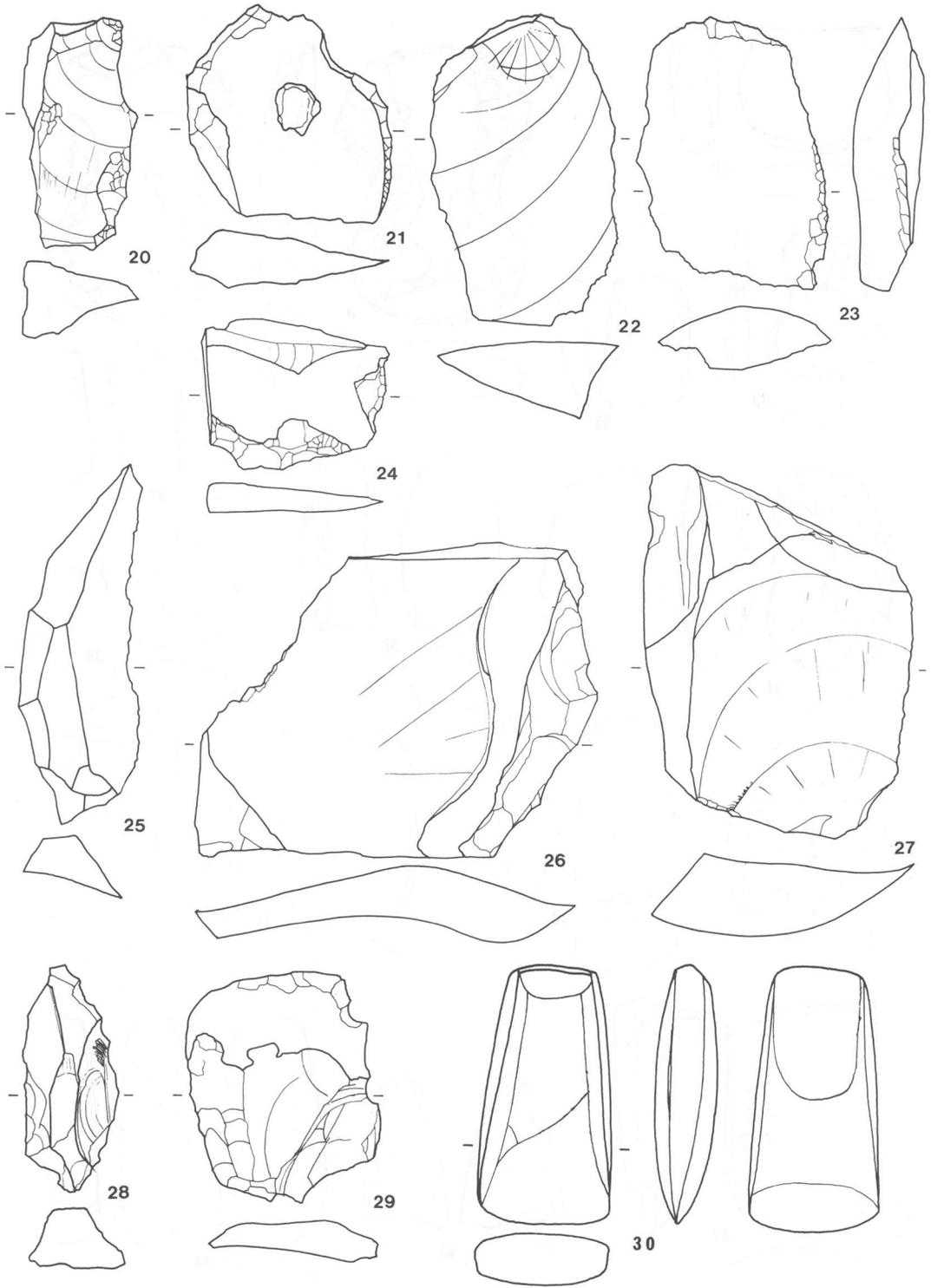
挿図 番号	写真 番号	器 種	縦	横	厚	重	出土位置	石 質	備 考	台帳 番号
第403図 94	PL73 94	敲 石	(11.0)	8.7	5.7	(610.0)	表 採	石英斑岩		117
95	95	軽石製品	(3.6)	4.8	1.6	(1.5)	SD11~13	軽 石		48
96	96	〃	(6.5)	(2.6)	2.3	(11.4)	SI64	〃		27
97	97	〃	3.9	2.9	1.4	1.4	SI55	〃		114
98	98	〃	5.9	4.9	5.1	30.6	SK309	〃		110
99		〃	2.9	4.0	2.2	6.8	SI51	〃		113
100		〃	4.3	1.8	1.4	2.0	SI49	〃		111
101	99	砥石状石器	(12.1)	(10.2)	6.3	(1100.0)	I4b3	砂 岩		73
102	100	砥 石	(5.6)	4.3	2.6	(85.0)	G6e1	凝 灰 岩		63
103	101	石	(5.8)	3.1	1.8	(46.0)	I4a7	〃		65
104	102	〃	(10.6)	4.4	3.2	(175.0)	I4b3	〃	2次加熱	80
105	103	〃	(7.2)	(9.3)	3.2	(406.0)	I5a1	斑 糲 岩		83
106		〃	(11.8)	(4.7)	2.7	(165.0)	SD12	凝 灰 岩		58
第404図 107	105	石 棒	(23.8)	9.5	9.4	(2200.0)	SI41	流 紋 岩	2次加熱	4
108	106	〃	(21.9)	10.3	9.9	(3300.0)	〃	〃		5
109	104	〃	(5.7)	(9.3)	(7.2)	(485.0)	SK336	アプライト		53
110	PL74 107	〃	(11.2)	7.6	7.5	(460.0)	I4b3	緑色凝灰岩		77
111	110	〃	(9.0)	7.3	(5.7)	(507.0)	表 採	角閃片岩	頭部上面に磨面	87
112	108	〃	(7.0)	(5.5)	4.6	(290.0)	〃	安 山 岩		94
113	111	〃	(8.5)	3.1	2.5	(82.0)	I4b3	緑泥片岩		93
114	109	〃	(14.5)	4.9	2.7	(285.0)	表 採	〃		86
		砥 石	(3.8)	(3.4)	(1.1)	(16.4)	SK57	砂 岩		49



第394图 石器实测图 (1)



第395图 石器实测图 (2)

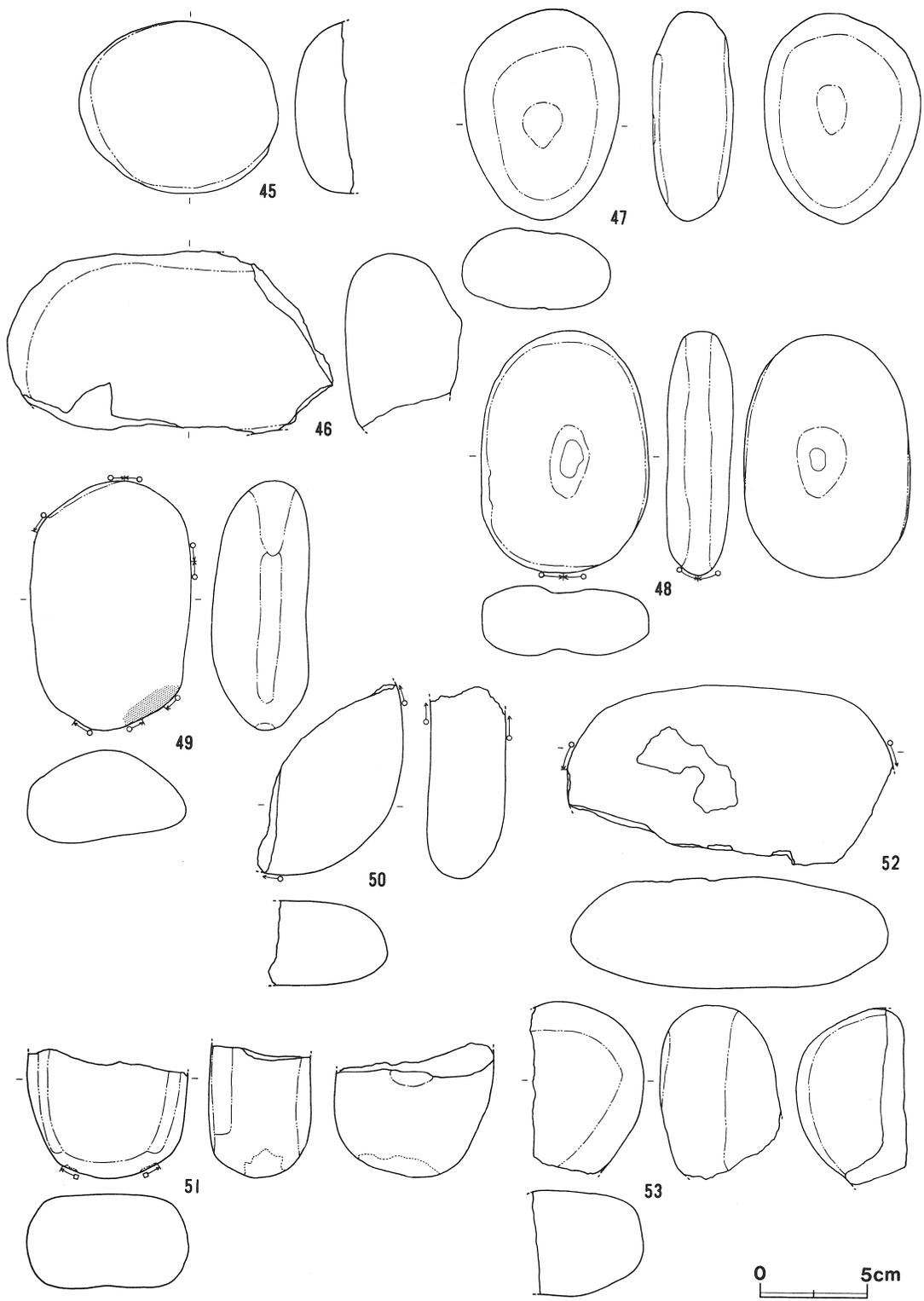


0 5cm

第396图 石器实测图 (3)



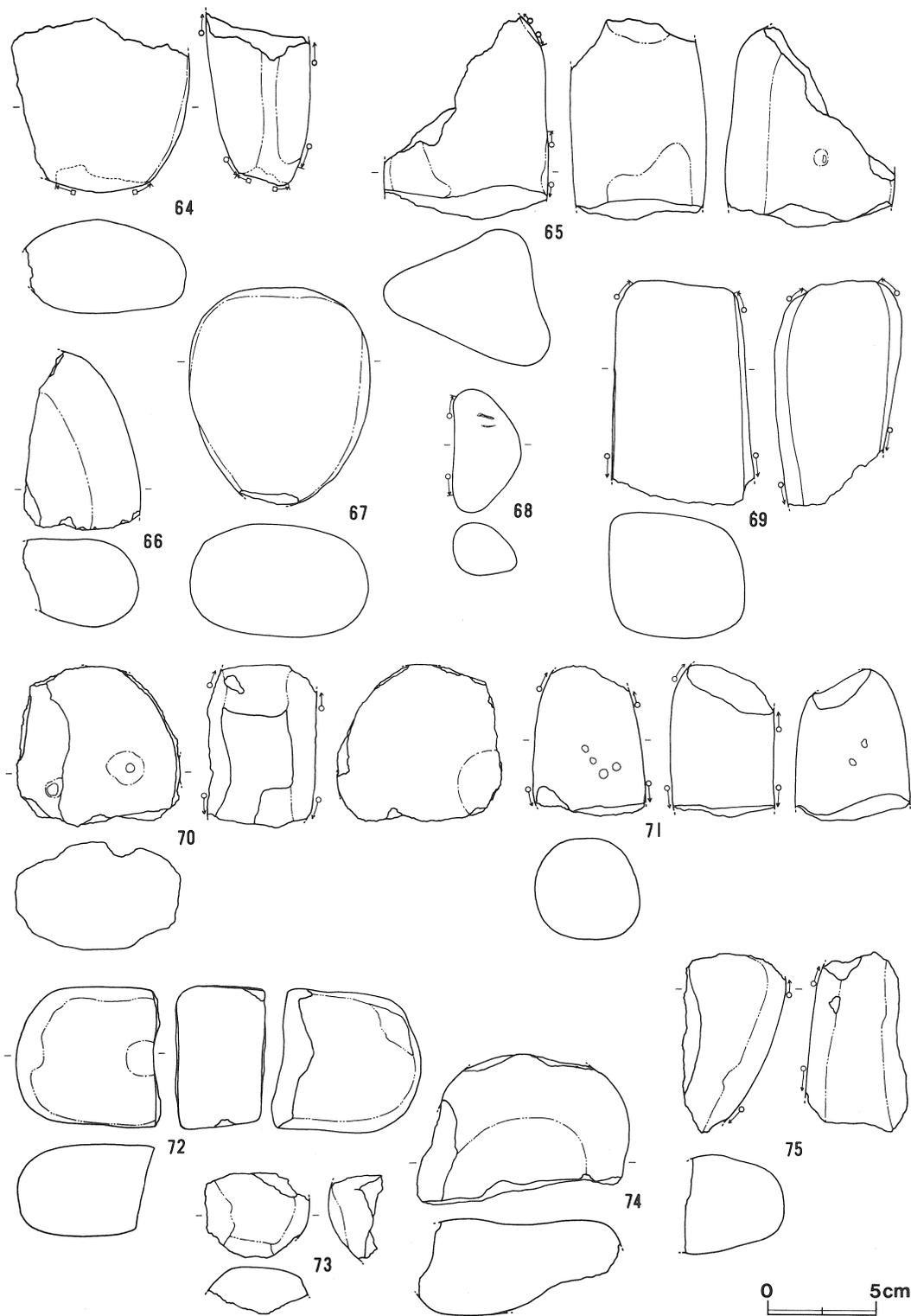
第397图 石器实测图 (4)



第398图 石器实测图 (5)



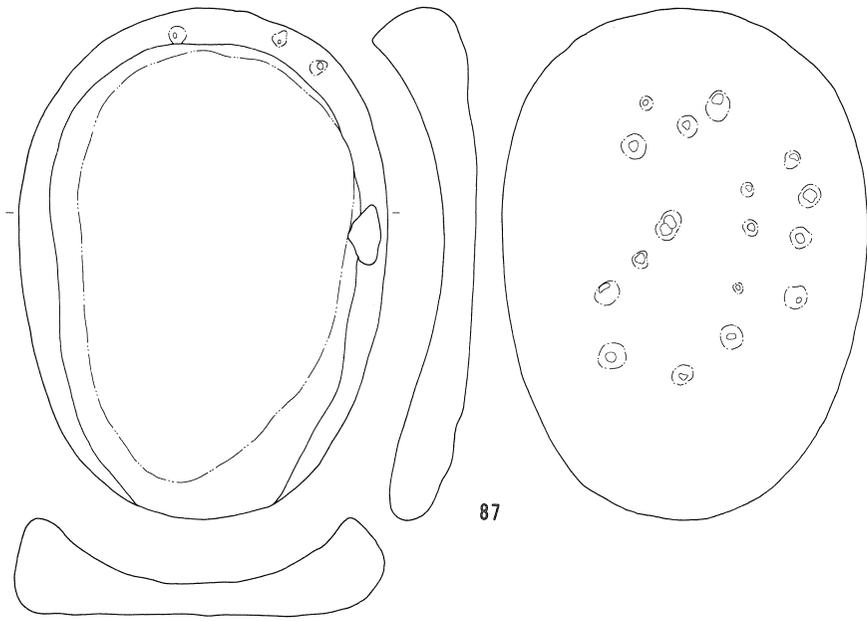
第399图 石器实测图 (6)



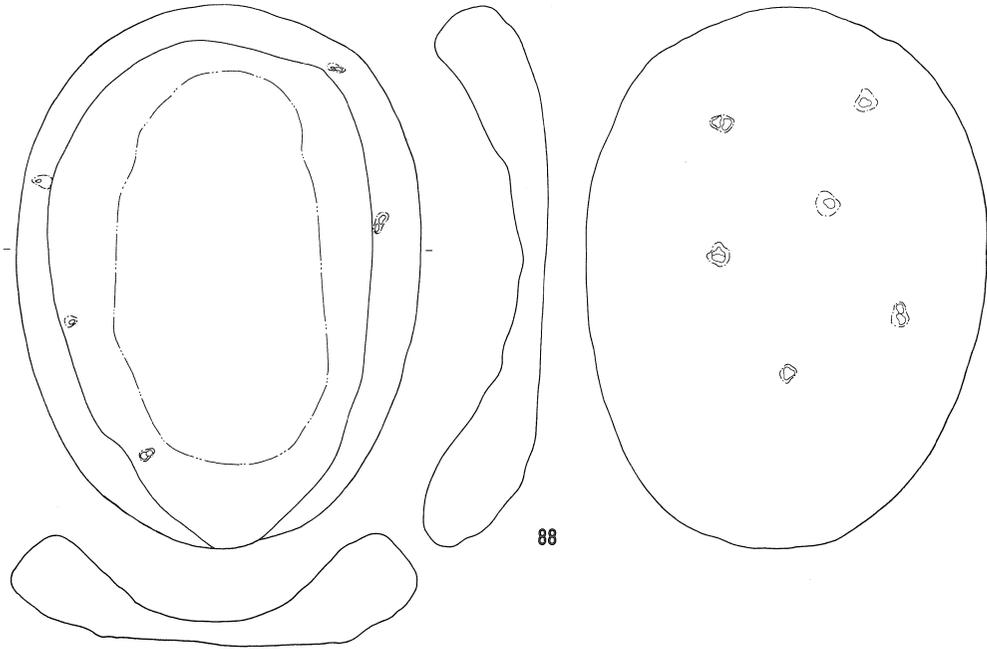
第400图 石器实测图 (7)



第401图 石器实测图 (8)



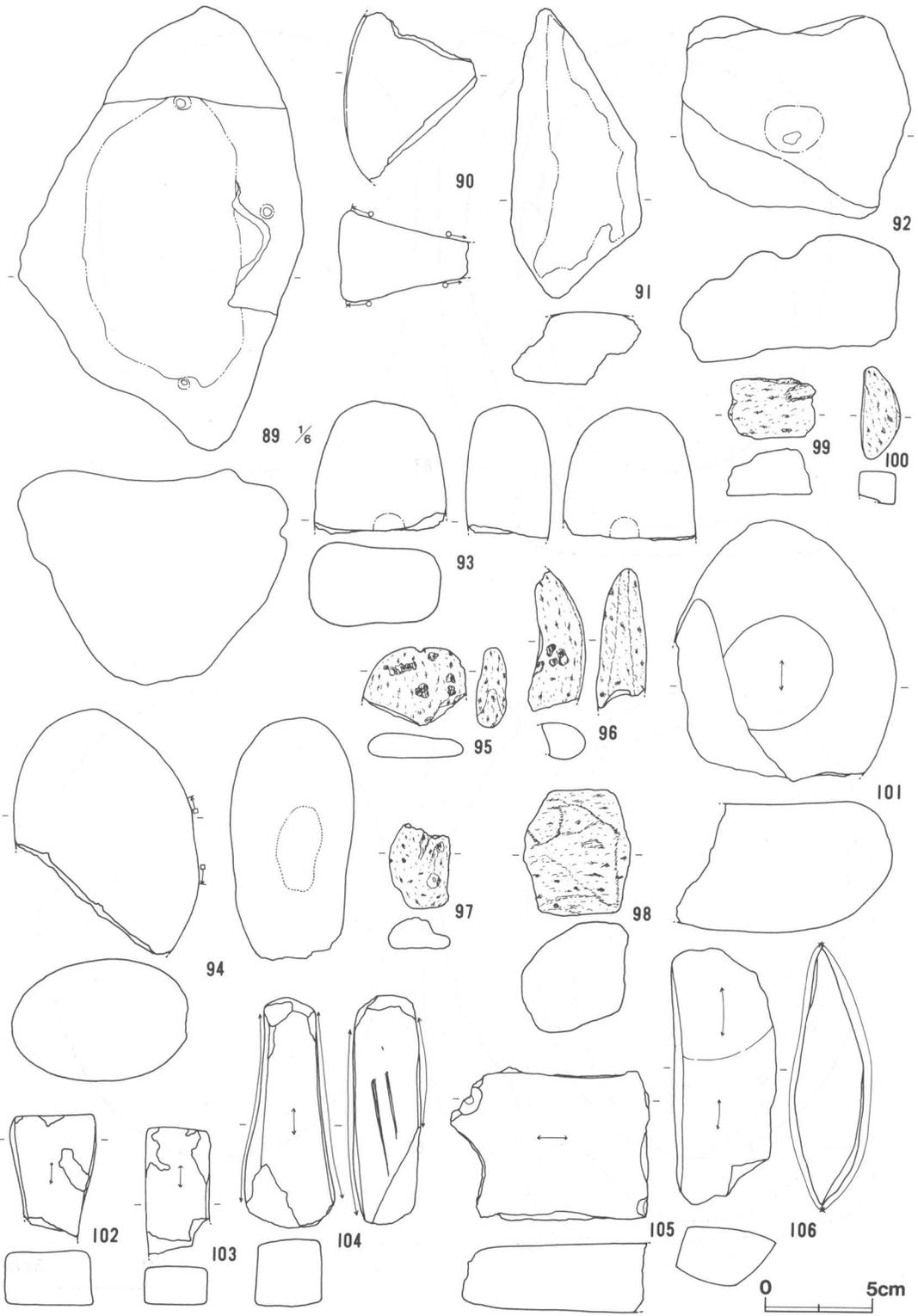
87



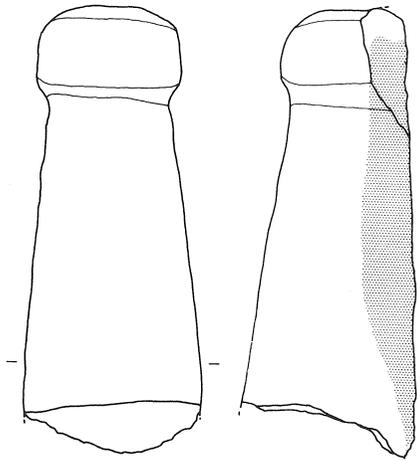
88

0 5cm

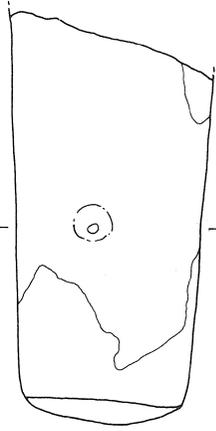
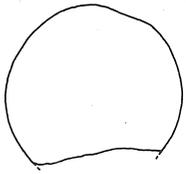
第402图 石器实测图 (9)



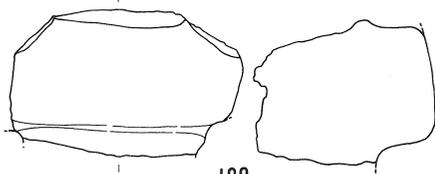
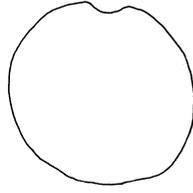
第403图 石器实测图 (10)



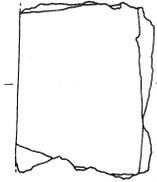
107



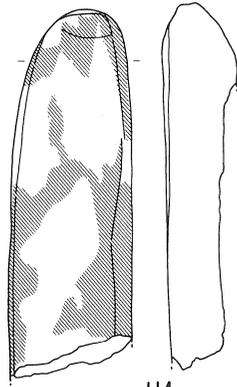
108



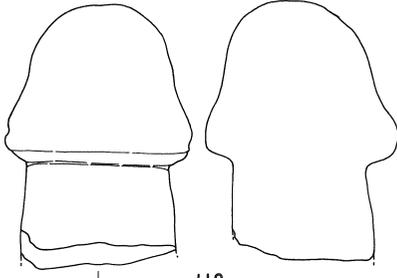
109



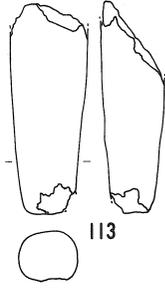
112



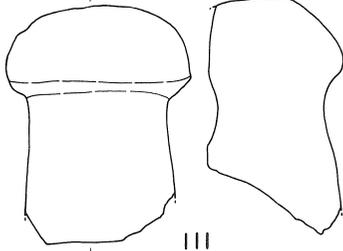
114



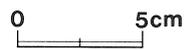
110



113



111



第404図 石器実測図 (1)

4 貝製品

貝刃（写真図版76-19）

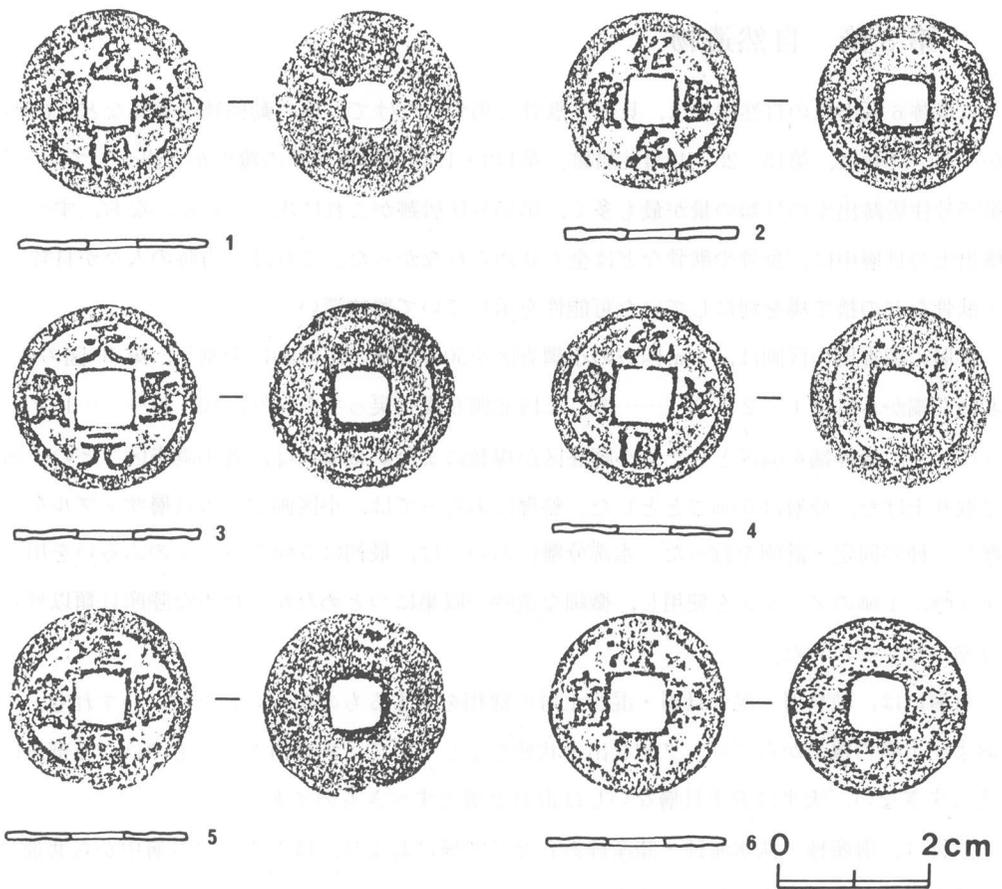
当遺跡から出土した唯一の貝製品であり、ハマグリの左殻を使用して、腹縁の中央から右側縁にかけて内面からの打ち欠きによって整形されている。細かい剝離が加えられている。殻長66mmである。本資料は、第149号土壌のG7h₈区の10層から出土した貝殻の中に混じていたものである。第149号壙からは阿玉台Ib式期の土器が出土しているため、本資料は阿玉台Ib式期の所産と考えられる。

5 古銭

当遺跡6区から出土した古銭は7点で、いずれも第2号溝が農道に接するG6g₆、G6h₆区に相当する本溝の第4・5区からまとまって出土したものである。銭貨名が判明したものは4点で、天聖元寶が1点、元祐通寶が2点、紹聖元寶が1点である。その他は、青サビが著しく判読できない。いずれも北宋銭である。

表9 古銭一覧表

挿図番号	写真番号	銭貨名	初 鑄 年	径	重	出土位置	備 考	台帳番号
第405図 1	PL77 1	元祐通寶	北宋 元祐元年 1086	2.5	2.4	S D 2		1
2	2	紹聖元寶	北宋 紹聖元年 1094	2.3	3.0	〃		2
3	3	天聖元寶	北宋 天聖元年 1023	2.4	3.0	〃		3
4	4	元祐通寶	北宋 元祐元年 1086	2.4	3.0	〃		4
5	5	□□□寶		2.4	3.0	〃	青サビあり	5
6	6	□□□寶		2.4	2.9	〃	青サビあり	6
	7	不 明		2.3	(1.9)	〃		7



第405図 古銭拓影図

第8節 自然遺物

当遺跡6区出土の自然遺物は、貝類と獣骨（馬骨）だけで、他の動植物遺存体などは出土しなかった。貝類は、第15・25・49号住居跡、第149・194・392号土壌の覆土から出土しているが、第25号住居跡出土の貝類の量が最も多く、第15号住居跡がこれに次いでいる。なお、すべての遺構出土の貝層中に、魚骨や獣骨などは全く認められなかった。これは、当時の人々が貝類と魚骨・獣骨などの捨て場を別にしていただ可能性を示して興味深い。

貝層の調査用の区画は、4m四方の小調査区を50cm方眼の小区画に分割し、第3図のように、北側左端から右へ1, 2, 3-----8, 二段北側左端へ戻って右へ9, 10, 11-----16というようにして、最終端を64区とした。小調査区が複数にまたがる場合は、各小調査区ごとの小区画名で取り上げた。分層は5cmごととした。整理にあたっては、小区画ごとの貝層サンプルを水洗分離し、種の同定・計測を行った。水洗分離においては、最初に5mmメッシュのふるいをを用い、以下3mm, 1mmのメッシュを使用し、微細な遺物の収集につとめたが、微小な陸産貝類以外の遺物は検出できなかった。

貝層には、純貝層・混土貝層・混貝土層の様相を呈するものがみられたが、いずれも、住居跡および土壌の覆土からブロック的な出土状態を示していて、純貝層としたものはごく部分的な個所にすぎない。大半は混土貝層ないしは混貝土層とすべきものである。

貝種は、海産種・淡水産種・陸産種あわせて20種におよび、ほとんどの貝層中から共通してシオフキ、ハマグリが出土している。

当遺跡から出土した貝種は、以下の示す斧足綱11種、腹足綱9種であり、そのうち陸産種が3種である。

斧足綱

サルボウ	<i>Anadara(Scapharca) subcrenata(LISCHKE)</i>
ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis(PHILIPPI)</i>
マツカサガイ	<i>Inversidens japonensis(LEA)</i>
ヤマトシジミ	<i>Corbicula (Corbiculina)leana(PRIME)</i>
アサリ	<i>Tapes(Amyodala)japonica(DESCHAYES)</i>
オキシジミ	<i>Cyclina orientis(SOWERBY)</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria(RÖDING)</i>
シオフキ	<i>Mactra veneriformis reeve(REEVE)</i>

ヒメシラトリ	<i>Macoma incougrura</i> (MARTENS)
マテガイ	<i>Solen strictus</i> (GOULD)
オオノガイ	<i>Mya</i> (<i>Arenomiya</i>) <i>arenaria oonogai</i> (MAKIYAMA)

腹足綱

カワニナ	<i>Semisulcospira libertina</i> (PHILIPPI)
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i> (LISCHKE)
アカニシ	<i>Rapana thomasiana</i> (VAIENCIENNES)
イボニシ	<i>Thaistvmulosa clavigera</i> (KÜSTER)
ムギガイ	<i>Mitrella bicincta</i> (GOULD)
アラムシロ	<i>Nassairus testivus</i> (POWYS)

腹足綱——陸産種

ナミギセル	<i>Stereophaedusa japonica</i> (CROSSE)
オカチョウジガイ	<i>Allopeas kyotoensis</i> (HIRASE)
ヒダリマキマイマイ	<i>Euhadra guesita</i> (DESHAYES)

隣接する当遺跡 1・2 区と比較すると、斧足綱で、マルサルボウ、カガミガイ、イタヤガイ、腹足綱ではカワアイが確認されなかった。マルサルボウは、サルボウとしたものの中に混入しているかもしれないが、今回は確認できなかった。

各貝種の形態の特徴や生息環境等については、当遺跡 1・2 区の報告書に記載されているので本稿では省略する。

以下、各住居跡および土壙出土の貝類とその出土状況について記述する。

住居跡覆土内貝層

第15号住居跡覆土内貝層

本貝層は、住居跡の覆土中に 2 か所に分かれて遺存していた。住居跡の北東側、炉の上面およびやや北側に不整形形状（最大径92cm，最大幅70cm）に広がっていたものを a 貝層とし、住居跡の中央部にブロック的に検出された貝層を b 貝層とした。a 貝層は、土層セクションから観察すると、上下 2 か所の貝層に分かれていたことが判断できる。より壁際に近い部分の貝層が高く、覆土の上層に存し、中央部に近い貝層の下端は、床面に密着した様子を示している。前者は凸レンズ状をなし、最大厚が 6 cm，後者は小山状に盛り上がり、最大厚が 27cm である。b 貝層は、相接

する不整楕円形をなすブロックと瓢箪形を呈するブロックとから構成されている。厚さは、土層セクションにかからなかったために正確でないが、10～15cm前後であり、b貝層の西南部では10cm前後と思われる。a・b貝層共に、暗褐色を呈する混土貝層である。

a貝層は、F6c₃グリッドの27～29・35・36区の小区画（以下区と記す）にわたって分布しているが、36区・28区が中心で、35区・29区・27区と少なくなる。a貝層の主体貝種は、シオフキで圧倒的多数を占めている。36区では、以下ハマグリが続き、その他のヤマトシジミ・オキシジミ・アサリ・サルボウ・オオノガイ・アカニシ・ウミニナは微量である。14分層から20分層（以下分層を層と記す）にわたって貝層が堆積しており、最大厚は30～35cmである。この間に主体貝種の変化はない。シオフキは殻が薄く破損しやすく計測不能の資料が多いが、殻長30～45mm程度の個体が主となっている。最大殻長は47mmである。ハマグリは殻長40～55mmの間の個体が多く、最大殻長56mmである。

28区は36区の北側にあたるが、この区の貝層は36区より5～10cm上位に堆積していて、12～18層に貝層を形成している。シオフキが主体をなし、ハマグリ、ヤマトシジミ、カワニナが微量含まれている。シオフキの殻長も36区と同様である。

35区は36区の西側にあたり、14層～18層にわたって貝層を形成している。層厚は20～25cmである。シオフキとハマグリからなる貝層である。シオフキの殻長は30～45mmの個体が多い。

27区は36区の北西側、29区は北東側に位置し、共にa貝層の末端部である。27区はシオフキが主体で、15層～18層にわたり、層厚は15～20cmである。ほかにハマグリが1点含まれている。

29区は17層の1層だけの堆積で、層厚は5cm前後と薄いのが特色がある。それは、シオフキがなく、ヤマトシジミ、ハマグリ、アカニシの構成をとることである。いずれも、計測は不能である。ヤマトシジミが多い。

これらのa貝層中からは、小片ながら刺突文・条線文・縄文を有する土器片が伴出している。a貝層の形成時期は、これらの土器片からみて加曽利EⅢ式期と考えられる。

b貝層は、42・43・50・51区にわたって分布しているが、42・43区が中心となり、50・51区は量的に少ない。b貝層の主体貝種はシオフキである。42区には以下、ハマグリ・ヤマトシジミ・アサリ・アカニシ・カワニナが微量含まれている。16層～18層にわたって貝層が堆積しており、層厚は10～15cmである。シオフキの殻長は30～45mmの個体が多く、最大殻長は45mmである。

43区は42区の東側で、シオフキが主体で、ハマグリ・ナミマガシワ?・アカニシ・ウミニナ・カワニナが微量混入している。16層～18層にわたって堆積し、層厚は10～15cmである。シオフキの最大殻長は46mmである。

50区は42区の南側にあたり、瓢箪状のブロックの南半部に相当する。シオフキが主体で、ハマグリ・アサリがわずかに含まれている。16層～17層にわたって貝層が堆積し、層厚は5～10cmで

ある。シオフキの殻長は30～40mm前後の個体が多く、最大殻長は43mmである。ハマグリ・アサリは殻長30mm程度の個体である。

51区は43区の南側で、不整楕円形ブロックの南半部に相当する。シオフキが主体で、ハマグリが微量混入している。シオフキは殻長30mm程度の個体が主となり、ハマグリは殻長34mm・55mmの個体が含まれている。16～17層にわたり堆積し、層厚は5～10cmである。

b貝層中からは、条線文・縄文が施文された土器片が出土しているので、b貝層の形成時期も加曽利EⅢ式期と考えられる。

第25号住居跡覆土内貝層

本貝層は、住居跡の覆土の上面から床面に達するような状態で堆積していたものである。東壁近くに検出された不整円形(50×42cm)のブロックをa貝層、住居跡中央部に大きく広がっているブロック(154×160cm)をb貝層と命名した。土層セクションでは、a貝層は小山状を呈し、最大厚16cm程度、b貝層は最大厚16～18cm程度の厚さを有している。a貝層は、極暗褐色を呈する混土貝層で、b貝層は褐色を主とする混土貝層である。

a貝層は、F6h₃グリッドの57区・58区とF6i₃グリッドの1区・2区にまたがって分布しているが、57区・58区が中心で、1区・2区にはわずかに広がっているだけである。この貝層の主体貝種はシオフキである。

57区では、シオフキ以外にハマグリ・アサリ・アカニシが微量混入している。13層～15層にわたり貝層が堆積し、層厚は10～15cm程度である。シオフキの殻長は35～40mm程度の個体が多く、最大殻長は40mmである。ハマグリでは22mmと48mmの殻長が計測できた。

58区は、57区の東側にあたり、シオフキが主体を占め、ハマグリ、アカニシ・ウミナが少量含まれている。貝層の堆積は13層～15層にわたり、層厚は10～15cmである。シオフキは30～40mmの間の殻長を有し、最大殻長は39mmである。ハマグリには24mm・41mmを計測したものがある。ウミナは完存している個体はないが、推定殻高24～36mmの間の個体である。

1区の貝層には、シオフキ以外は含まれていない。いずれも計測不能である。層厚は5～10cm程度である。13層から14層にわたって堆積している。

2区の貝層には、シオフキの他にハマグリ・アカニシが少量混入している。層厚は5cm程度で、13層にだけ堆積している。

a貝層中には2点の土器小片が含まれていたが、いずれも縄文だけのものであり、詳しい時期については判断できない。

b貝層は、当遺跡で検出調査された貝層の中では規模の大きいもので、F6h₂グリッドの54～56区・60区・62～64区およびF6i₂グリッドの4～8区・14区・15区の合計14区画にわたって広がっ

ている。F2h₂の62・63区、F6i₂の5～7区などが中心部で、最も貝の堆積の厚い5区では、12層から19層にわたって堆積し、35～40cmにもおよぶ層厚を有している。54～55区・60区・64区・4区・8区などでは貝層の末端部に相当し、層厚も薄い。b貝層の主体貝種はシオフキであるが、ハマグリ₁の混入率が他の貝層よりも高く特徴的である。区および層によっては、シオフキに比べハマグリが多くなる個所も認められる。

以下各区ごとに貝種構成、計測値などを記述する。

54区は13層にだけ堆積が認められ、層厚は5cm程度である。シオフキ・ハマグリが主であり、アカニシ・ウミナが混じっている。シオフキは殻長30～40mmの間の個体、ハマグリは22～23mmの殻長の個体が多い。

55区は54区の東側で、12層から13層にかけて堆積がみられ、層厚は5～10cmである。シオフキ・ハマグリ・アカニシがほぼ等量含まれており、サルボウが1個体混入している。ハマグリは殻長20mm前後の個体が目立っている。アカニシは計測不能である。

56区は55区の東側で、12層から13層にかけて堆積していて、層厚は5～10cmである。ハマグリ・シオフキが主で、アカニシが1個体ある。いずれも計測不能である。

60区はb貝層の西側の末端部で、14層から16層にかけて堆積し、層厚は10～15cmである。北側の54～56区に比較するとより下層位に位置している。シオフキが圧倒的多数を占め、15層に4個体のハマグリが認められただけである。

62区は54区の南側にあたり、12層から14層にかけて堆積し、層厚は10～15cmである。12層はシオフキ・ハマグリを主として、アカニシ・ウミナが微量混入している。13層もシオフキ・ハマグリが主体で、アカニシ・イボニシ・ウミナ・アラムシロ・サルボウが微量含まれている。シオフキの殻長は20～40mmの間の個体が多く、最大殻長は40mmである。ハマグリは、15～35mmの間の殻長を有する個体が多く、最大殻長が35mmで、比較的小形の個体が目立っている。14層は、シオフキが多く、ハマグリがこれに次いでいる。シオフキは破損した個体が多いが、25～45mm前後の殻長を有している。ハマグリは15～35mm前後の殻長の個体が多く、13層と類似している。しかし、中には殻長74mmという大形の個体もある。上記の2種以外に、アカニシ・イボニシ・ウミナが少量含まれている。

63区は55区の南側にあたり、区内全体に貝層が分布している。12層から14層にかけて堆積し、層厚は10～15cmである。12層は、シオフキ・ハマグリがほぼ等量あり、オキシジミ・アカニシが微量含まれている。シオフキは計測可能な個体が少ないが、28～40mm程度の殻長が普通である。ハマグリは、殻長15～35mm程度の個体が多くみられる。最大殻長は42mmである。アカニシで計測できた個体は殻高50mmである。13層は、12層とほぼ同様で、シオフキ・ハマグリが主となり、サルボウ・アカニシ・イボニシ・ウミナが少量含まれている。シオフキは、殻長28～42mm程度の

個体が普通である。ハマグリは、殻長15～35mm程度の個体が多くみられる。14層は、12～13層とほぼ同じ様相を示しているが、ハマグリがシオフキよりやや多くなっている。他に、サルボウ・アカニシ・イボニシ・アラムシロが微量含まれている。シオフキは、24～44mmの殻長の個体、ハマグリは、18～42mmの殻長の個体が多い。

64区は56区の南側にあたり、b貝層の東側の末端部に相当している。12層から13層にかけて堆積し、層厚は5～10cmである。12層はシオフキ・ハマグリが主体で、アカニシが1個体出土している。ハマグリがシオフキより少し多く、殻長17～27mmで小形の個体である。シオフキは計測不能である。13層はシオフキがハマグリより多く存し、アカニシ・ウミナが微量混入している。ウミナは、殻高24mmの個体である。ハマグリは、17～22mmの殻長を有する個体である。シオフキは、計測不能である。

4区は60区とともに、b貝層の西側の末端部をなす部分に相当するが、15層から19層にかけて堆積していて比較的厚く、層厚20～25cmである。下層から上層にかけてシオフキ主体の貝層が堆積していて、16層においてハマグリは混入率が高くなる。他の層では、シオフキが圧倒的多数を占めている。19層にウミナが1個体、16層でウミナとサルボウが若干、15層でアカニシ・ウミナが各1個体混入しているだけである。シオフキは計測不能の個体が多いが、下位の18・19層では35～45mm前後の個体が目立ち、中間の17層では29～42mmの間の個体のみられ、上位の15・16層では、21～30mmの間の個体が多くなり、傾向として小形化がみられる。ハマグリは、層位ごとの変化はあまり認められず、16～32mmの間の小形の個体が一般的である。ウミナは殻高20～30mm前後の個体のみられる。

5区は4区の東側にあたり、12層から19層にかけて厚く堆積し、層厚は35～40cmにもおよぶ個所がある。下位の14層から19層にかけてはシオフキが主体となり、ハマグリがこれに次いでいるが、上位の12～13層にかけては、ハマグリがシオフキより多くなり逆転している。2種以外の貝種は微量混入しているだけである。アカニシ・ウミナ・イボニシ・カワニナ・オカチョウジガイ・サルボウ・マツカサガイ?がみられる。シオフキは破損したものが多く、計測できたものは少ないが、30～45mm程度の個体が目につき、中でも35～45mmの間の個体が主となっていて、シオフキとしては大形の部類と考えられる。ハマグリは、最下位の18～19層にはほとんどなく、17層以上では増加する傾向を示している。しかし、殻長は15～35mm程度の個体が多くを占め、全体として成育不良の小形の個体が目立っている。

6区は62区の南側、5区の東側に位置し、b貝層の中心部にあたっている。12層から15層にかけて堆積し、層厚は15～20cm程度であるが、各層とも貝の混合率が高く、純貝層に近い状況を示していた。他区に比較して貝の量も多い。本区もシオフキ・ハマグリが主体となっているが、ハマグリがシオフキよりも数量的に多いことが認められる。ハマグリとシオフキでは殻の強度が異

なり、シオフキは破損しやすく数が少なく見られる傾向がある。この傾向を加味してもハマグリ
の優位は動かない。以下各層ごとに貝種の組成を記載する。最下層の15層には、2種以外にサル
ボウ・アカニシ・ウミナなどが含まれていたが、極微量である。アカニシは、殻高67mmの個体
であった。シオフキは、殻長15~49mmの間の個体がみられたが、多いのは30~40mmの間の個体で
あった。一方、ハマグリは16~36mmの間に殻長がおさまリ、20~30mmという小形の個体が目立っ
ていた。14層には、サルボウ・アサリ・オオノガイ・オキシジミ・アカニシ・イボニシ・ウミナ
などの多種が混入していたが、いずれも5点以内という微量にすぎない。シオフキの殻長は18
~46mmの間で、25~40mmの間の個体が主となっている。ハマグリは、15層に類似しているが、よ
り小形の15~20mmの間という個体が増加している。最大殻長は69mmの個体である。60mm以上の個
体は稀である。13層には、サルボウ・アサリ・オオノガイ・ヤマトシジミ・アカニシが混入して
いた。この中ではアサリが7点とやや目立つことと、ヤマトシジミが1点ながら含まれていたこと
が特色である。シオフキの殻長は18~46mmの間で、前層とほぼ傾向を同じくしている。ハマグ
リもほぼ同様な状態であるが、14層と比較すると15~20mmの小形の個体の割合が減っている。12
層には、サルボウ・アサリ・ヤマトシジミ・アカニシが含まれていた。ヤマトシジミは、19~20
mmの殻長を有する個体で3点と増えている。シオフキ・ハマグリともに計測できる個体が少ない
が、殻長の傾向は前層に類似している。

7区は6区の東側にあたり、12層から14層にかけて堆積し、層厚は10~15cm程度であるが、6
区と同様に良好な貝層をなしていた。全体の傾向としては6区に類似した状態を呈し、下位より
上位に移るにしたがい、ハマグリがシオフキより多くなる傾向がみられた。下位の14層をみると、
2種以外にアサリ・ヤマトシジミ・アカニシ・ウミナが極微量含まれている。シオフキは殻長
26~44mmの間の個体であり、35~40mmの個体が多い。ハマグリは15~35mmの間の個体が多く、最
大殻長55mm、最小殻長14mmであった。13層には、サルボウ・アサリ・オオノガイ・アカニシ・イ
ボニシ・ウミナなどが微量含まれている。アカニシには、殻高74mmの個体が2点認められた。
シオフキは殻長23~51mmの個体であったが、主体は30~45mmの個体である。ハマグリは15~35mm
の個体が多く、中でも20~30mmの殻長の個体が目についた。12層には、サルボウ・アサリ・オオ
ノガイ・ナミマガミワ・アカニシが混入していた。シオフキは23~43mmの間の個体であり、30~
40mmの間の個体が目立っている。ハマグリは殻長16~49mmの間の個体であり、特に多いのは20~
30mmの間の個体である。7区においても、6区と同様にシオフキに比較してハマグリ
の殻長が小さい点の特徴である。

8区は7区の東側にあたるが、b貝層の東側の末端部で、12層から13層にかけて堆積し、層厚
は5~10cmとうすく、混土率が高く、混貝土層といった状態を呈していた。貝も少なく、シオフ
キとハマグリが極微量含まれていた。

14区は6区の南側にあたり、12層から15層にかけて堆積し、層厚は15～20cm程度である。全体的に、6区の様相に類似しているが貝の量は少ない。最下層の15層では、シオフキよりハマグリが若干多くなっている。両者の殻長の傾向は6・7区とほぼ同じで、シオフキが大きい。この傾向は上位の12～14層においても変わらない。

15区は14区の東側、7区の南側に位置し、b貝層の南側の末端部にあたる。本区の貝層も混土率が高く、貝の量は少ない。シオフキ・ハマグリが主体となり、アサリ・アカニシが各1点ずつ含まれている。

第25号住居跡のb貝層中には、多くの土器片が含まれていたが、主体は、隆線区画によるもの、沈線による曲線の区画を有するもの、縄文だけのもの、条線文を付したもの、無文のものなどであり、加曾利EⅢ式土器と考えられる。

第49号住居跡覆土内貝層

本貝層は住居跡のほぼ中央部に2か所に分かれて遺存していた。住居跡の中央部の床面上に直径4cm程度の大きさに遺存していたものをa貝層とし、a貝層の西側、覆土下層の床面上5cmほどから検出された最大長54cm、最大幅28cmのシオフキを主とした貝層をb貝層とした。前者はアカニシの残欠3点が認められただけのもので、貝層と名づけることは不適當かもしれない。したがって層厚は計れるものではない。

b貝層は、北西側に小さな突出部をもつ長楕円形状を呈しており、層厚は4～5cm程度の薄いものであった。本住居跡の貝層の調査にあたっては、50cm方眼の小区画を設定する方法は採用せずに、平面図上に出土範囲を明示するにとどめた。b貝層も土層セクションにかからなかったことは残念である。

b貝層は、前記のようにシオフキが圧倒的多数(77個体以上)を占め、他にハマグリ・アサリ・サルボウ・ヤマトシジミ・ウミニナ・ムギガイが1～2個体含まれていたものである。シオフキは殻長28～41mmの間の個体であり、26～30mmの間の個体と36～40mmの間の個体が比較的多数であった。

第49号住居跡は、加曾利EⅣ式期の住居跡と判断されるので、本貝層の時期も加曾利EⅥ式期のものと考えられる。

土壌覆土内貝層

第149号土壌覆土内貝層

本貝層は、土壌の覆土の中位からまとまって検出されたもので、暗褐色を呈する混土貝層で、砂・土を多量に含みザラザラしている。土層セクションからみると、覆土上面から19cm下に貝層が確認され、最大厚は26cmを計測できる。平面分布図においては、G5h₈グリッドの1区および

G5h₇グリッドの8区に広がり認められ、最大長43cm、最大幅25cm程度の大きさを有しているが、これは貝層上面の広がりであり、下層に移るにしたがい最大長60cm以上、最大幅もより広がっていることが確認された。採取された貝をみると、G5h₇の15区、16区の一部にも延びていたと推定される。また、層厚も一部では35～40cmにもおよぶ部分が存在したと推測される。

G5h₈グリッドの1区は、本貝層の東側の末端部にあたり、オキシジミ・ハマグリの2種が認められているが微量である。ハマグリの殻長は、27・33mmの個体である。

G5h₇グリッド8区は、本貝層の中心部にあたると考えられ、9層から16層にかけて堆積しているが、12層には貝が含まれていない。9・10層にはオキシジミ・ハマグリの2種があり、11層はオキシジミだけである。オキシジミはハマグリより多く、殻長25～45mmの間の個体であり、この間にはほぼ平均的に分布している。ハマグリは殻長25～35mmの間の個体が主となっている。第25号住居跡のb貝層に比較すると成育は良い。なお、10層出土の殻長65mmのハマグリの左殻は貝刃として加工されていた。当遺跡出土の唯一の貝製品である。13層から16層にかけてもハマグリ・オキシジミが主であり、15層以外にはシオフキが1～2点含まれていただけである。やはりオキシジミがハマグリより多くみられる。オキシジミ・ハマグリの殻長は、上位の層とほぼ同様である。

15区は8区の南西側にあたり、13層から16層にかけて堆積し、層厚は15～20cmである。主体貝種はオキシジミ・ハマグリでほぼ等量ずつの出土量である。他にシオフキ・アカニシが若干混入している。16層は主体の2種だけである。オキシジミ・ハマグリの殻長は8区とほぼ同じである。

16区は8区の南側にあたり、ハマグリ・オキシジミが少量みられただけにすぎない。

本貝層中の9層からは阿玉台式土器片を利用した小形の土器片錘2点出土し、覆土中からは阿玉台Ib式期の土器片が出土しているため、本貝層の形成時期は、阿玉台Ib式期と考えられる。

第194号土壌覆土内貝層

本土壌は、第31号住居跡の床面中央部を切って設けられたもので、径約2.0m、深さ78cmの大形の深い円筒形の土壌である。貝層は覆土の最上層部に、2か所にわかれて出土した。両者ともにセクションベルトにかからなかった。本壌の貝層については、出土量も少なく、出土状況の記録も不十分で層厚などは明らかではない。東壁際の貝層をa貝層、中央部やや西側の貝層をb貝層として、以下記述する。本壌については、50cm方眼の方法をとらなかった。

a貝層はブロック状をなしていて、比較的多種類の貝が含まれていた。ヤマトシジミとヒメシラトリが主体を占め、サルボウ・オキシジミ・ハマグリ・シオフキ・アサリ・カワニナが若干みられた。ヤマトシジミ・ヒメシラトリの両者とも、殻長は15～30mm前後の個体が多く、ヤマトシジミの最大殻長は31mm、ヒメシラトリの最大殻長は34mmである。最小殻長はヤマトシジミが16mm、ヒメシラトリが17mmという数値である。サルボウは計測できる個体が少ないが、23～42mmの間に

分散している。オキシジミはわずかに1個体だけで計測不能である。ハマグリは36～52mmの間にまとまり、45mm前後の通常の殻長を有する個体が多い。シオフキは25～46mmの間に分散し、35～45mmの間にやや集中するが、全体量は少ない。アサリも殻長32mmと34mmの個体が各2個体ずつと少量である。カワニナは計測不能の個体が4個体ある。いずれにしても、本貝層は、主体貝種がヤマトシジミとヒメシラトリという異色の組み合わせである。

a 貝層中からは、無文・縄文と沈線の組み合わせの土器の小片が出土している。

b 貝層は、a 貝層よりも貧弱なもので、全体で40個体ぐらいしかない。その中でサルボウが最も多く、26個体と半数以上を占める。以下シオフキ・ハマグリ・オキシジミ・ヒメシラトリが少しずつ含まれている。サルボウの殻長は26～40mmの間の個体であり、40mmを計る個体が5個体と多いのが目につく。シオフキは30～42mmの個体であり、ヒメシラトリは殻長20mmの個体だけである。ハマグリ・オキシジミは計測不能の個体である。

b 貝層中からは、縄文・条線文および磨消懸垂文を有する小片が出土している。

本墳の覆土中からは、加曾利EⅢ式期の土器片が多量に出土しているので、本土墳のa・b両貝層ともに加曾利EⅢ式のものとして推定される。しかし、a 貝層の主体貝種がヤマトシジミ・ヒメシラトリの2種で、b 貝層の主体貝種がサルボウとなっている点は、他の15・25号住居跡の加曾利EⅢ式期の貝層の主体貝種がシオフキ・ハマグリであることと異なっており、注目すべき点と思われる。同一型式期における微妙な時間差をあらわすものか、あるいは採集者の嗜好を示すものかは明らかではないが、後者の可能性が高いと考えられる。

第392号土墳覆土内貝層

本貝層は、本墳の中央部やや西側に小ブロックとして確認されたもので、ほぼ円形で18～20cmの径を有し、層厚は20cmであった。土層セクションにかからずに検出されたもので、覆土上面より20cm掘り下げた部分の、黒色に近い黒褐色土層中に認められた。主体貝種は、シオフキとウミニナであり、他にハマグリ・アサリ・サルボウ・ヒメシラトリ・アカニシが少量含まれていた。シオフキは殻長16～43mmの間の個体であり、26～46mmの間の個体が目立っている。ウミニナは推定殻高25～33mmの間の個体であり、25～30mmの間の個体が主となっている。ハマグリは殻長27～39mmの間の個体であり、アサリは殻長28mmの個体1点だけである。サルボウは、殻長31mmの個体が計測できただけである。ヒメシラトリは、殻長11mmという小形のものであった。アカニシは計測不能である。他に小巻貝が破碎され塊状になった資料が1点認められた。

本貝層中からは、無文・条線文・縄文の小破片の土器片が出土したが、詳しい時期を判断できるものはなかった。しかし、本墳の覆土下部から加曾利EⅣ式期の大型破片が数点出土しており、本貝層の時期も加曾利EⅣ式期と考えられる。

茨城県教育財団文化財調査報告第30集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11

南三島遺跡6・7区(上)

昭和60年10月1日印刷

昭和60年10月8日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市南町3丁目4番57号

印刷 株式会社 きど印刷所

水戸市見川町2558-21